

# 徳島の剣道

特集：新八段誕生

第21号



徳島県剣道連盟



**表紙写真**

小手すり上げ面を決める河田先生

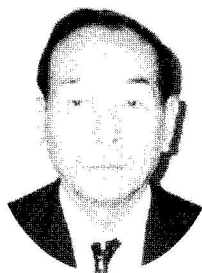
題字  
 堀江幸夫  
 さし絵  
 村嶋恒徳

# 巻頭言

## それぞれの持ち場で光輝く存在に!!

徳島県剣道連盟会長

遠藤 一美



徳島県剣道連盟に大澤孝彰先生以来、十七年ぶりに、剣道八段が誕生し、さらに、四十九歳という若さで合格されたことも、誠にうれしい限りであります。今回の「徳島の剣道」には、特集として河田先生からの寄稿もあり、昇段の秘訣も掲載されております。ぜひ、後に続けるよう参考にしていただきたいと思います。

かつて、この「徳島の剣道」へ特別寄稿いただいた全剣連常任理事の岡村忠典先生より「剣道人にはいろいろな方がおられます。剣道を高める人、剣道を広める人、剣道を伝える人、剣道を楽しむ人、それらの人々がそれぞれの働きをすることで剣道が素晴らしい文化として洗練され、後世に伝承されていくものと思います。」(十七号 P276) とのお言葉をいただきました。私たちの身の回りには、剣

道を高める人、剣道を広める人、剣道を伝える人、剣道を楽しむ人、全国的には無名であっても、それぞれの地域や持ち場において、光輝く存在の方々が多くおられます。これらの方々によって剣道が支えられ、伝えられたことにより、今回の河田八段の誕生があり、徳島県剣道連盟の発展があると思います。河田先生に限らず、昇段者の手記には、必ず、家族を含めた回りの関係者の方々へ、感謝の言葉が記載されています。自分一人ではない、多くの人たちの支えの中で、自分の剣道が立派になっていくことを示しています。さらに、また、私たち一人一人が剣道を支え、伝承する光輝く存在になっていきましよう!!

今後とも、会員の皆様の熱い思いと御支援を徳島県剣道連盟に頂きますよう心よりお願い申し上げます。挨拶と致します。

# 『徳島の剣道 第二十一号』目次

巻頭言…………… 遠藤一美 1

顕彰一覽…………… 4

剣道八段・八段審査に合格して…………… 河田清実 5

剣道有功賞・剣道に命救われて…………… 平尾勝美 8

少年剣道教育奨励賞・受賞寸感…………… 西浦 新 10

体育功労賞・賞を戴く、ということ…………… 中山啓男 11

平成十六年度徳島県中学校剣道優秀選手…………… 12

平成十六年度徳島県高等学校剣道優秀選手…………… 13

## 特別寄稿

「教育剣道」指導および指導者の在り方について…………… 佐藤成明 14

## 特集 新八段誕生

おめでとう河田八段！…………… 遠藤一美 21

おめでとう河田清実先生…………… 大澤孝彰 23

祝八段昇段…………… 大石正志 25

新八段誕生…………… 坪井さくら 27

河田清実先生プロフィール…………… 29

## 先生を偲ぶ

「乾寿夫先生」を偲ぶ…………… 三木 毅 30

乾寿夫先生を偲ぶ…………… 中村稔裕 33

浅野精一先生を偲ぶ…………… 菱田 晋 35

父と剣道…………… 浅野泰司 37

阿部三十三先生を偲んで…………… 西岡 侃 39

## 全国講習会報告

第三十九回 剣道中央講習会（西日本）…………… 北條憲治 41

居合道中央講習会に参加して…………… 前田健志 50

第四十二回 剣道中堅剣上講習会に参加して…………… 柴田宗忠 51

「松井明（教士八段）先生を招いて…………… 藤本雅史 57

徳島の剣道史…………… 坂本裕二 64

## 大会所感

四国中学総体・徳島一年生大会を開催して…………… 白木洋一 71

大学連講習会を終えて…………… 竹島佳代 72

## 各種大会に参加して

第二十六回 スポーツ少年団剣道交流大会に出場して…………… 寺西明弘 73

全国スポーツ少年団剣道交流大会に参加して…………… 川邊祐樹 76

全日本都道府県対抗剣道優勝大会に出場して…………… 福多博史 77

第二十一回 全国家庭婦人剣道大会…………… 手塚十三子 79

平成十六年 矯正武道大会を振り返って…………… 鈴木伸一 81

全国選抜大会へ出場して…………… 富岡西高校 的場大和 82

全国選抜大会に出場して…………… 富岡東高校 磯田沙希 83

インターハイに出場して…………… 富岡西高校 大石洋史 84

第五十一回 全国高等学校総合体育大会報告…………… 86

…………… 富岡東高校 吉岡 穰 86

全国教職員大会に参加して…………… 伊藤奈津子 88

第三十四回 全国剣道大会に出場して…………… 西田義玄 89

第四十二回 四国中学校総合体育大会に出場して…………… 福川敬太 91

第三十四回 全国中学校剣道大会に出場して…………… 星野知世 92

全三本女子剣道選手権大会…………… 坪井さくら 93

第五十回 全日本東西対抗剣道大会に出場して……	河田清実……………	94
「第五十回 全日本東西対抗剣道大会」に出場して……	平野誠司……………	96
第五十八回わかふじ国体に出場して……	日和田慈海……………	97
第五十九回国民体育大会に出場して……	隅田憲男……………	98
全第三十九回日本居合道大会に初参加して……	四宮博……………	100
全日本剣道選手権大会に出場して……	川添義仁……………	101
第四十六・四十七回全国日本実業団に出場して……	園田慎吾……………	102
全国警察剣道大会を終えて……	平野誠司……………	103
剣道紀行「韓国」……………	米倉滋……………	105
徳島県高齢者剣友会活動報告……………	高島稔之……………	107
二〇〇四ねんりんピック群馬大会に参加して……	南充美……………	111
随想		
遠い日の教え……………	堀江幸夫……………	114
竹刀の誕生物語……………	三木毅……………	115
私の追憶……………	勝浦守……………	118
昔の名前で出ています……………	高田豊……………	119
「剣士の碑(いしぶみ)」……………	吉田租……………	120
警察剣道師範時代……………	中尾正輝……………	122
稽古の反省……………	福井軍二……………	123
「甲手職人「夢銘」」……………	藤本雅史……………	125
飽きもせずそしてまた！……………	富田正……………	127
嗚呼 前野五郎……………	坂本憲一……………	129
称号・段位合格者		
七段に合格して……………	生田浩章……………	131
剣而縁……………	井村雅人……………	133
六段に合格できたのは……一本の電話と師の教え……	端村武……………	134

六段審査に合格して……………	富田圭介……………	136
六段に合格して……………	岩原靖人……………	137
六段に合格して……………	榊山紹生……………	138
称号・段位合格者一覽……………		139
がんばろう徳島		
部活だより……………		
川島高校……………	長井薫……………	144
美馬中学校……………	武岡美智……………	145
道場だより……………		
木頭錬心館……………	岡田豊……………	147
女子部合同稽古会……………	手塚十三子……………	149
全国少年剣道体験・実践発表……………	福居壮太……………	150
少年強化遠征……………		152
平成十六年度 大会記録……………		155
徳島新聞に見る戦いの跡……………		192
昇段審査学科問題・解答例……………		208
徳島県剣道連盟事務分掌……………		227
平成十七年度徳島県剣道連盟行事予定表……………		229
平成十七年度審査実施計画表……………		231
徳島県剣道連盟審査資格・審査科等……………		232
編集後記……………		233

# 平成十六年度 顕彰一覽

## 少年剣道指導表彰（全日本剣道連盟）

○西浦 新（丹生谷支部）

戦後、昭和二十五年に県内で初めて中学校剣道部が日野谷中学校に創設されると同時に指導に携わった。昭和二十九年には「竜虎館」が創設し、中心的な立場で指導にあたった。昭和五十七年から平成十三年の間、二代目館長として丹生谷地域の剣道隆盛の中心となり活躍した。

○笠井 恵之（麻植支部）

昭和二十七年より地元の少年を対象に剣道を指導し始め、昭和四十三年には鴨島少年剣道教室を創設し、現在に至る。その間、全国優勝二回、準優勝三回、三位二回、県内外の大会では、百回を超える優勝歴を重ね、多くの剣士を育成している。

## 剣道八段（全日本剣道連盟）

○河田 清実（昭和二十九年六月二十五日生まれ）

平成十六年五月、京都市立体育館における剣道八段審査会において難関の剣道八段に合格する。受審者一二四〇名中、合格者十四名、合格率1.1%であった。

## 剣道有功賞（全日本剣道連盟）

○平尾 勝美（大正十二年四月五日生まれ）

麻植支部長を十四年、理事を十八年、審議員を二十五年、平成十五年よりは副会長を務め、現在に至る。昭和四十三年に鴨島少年剣道教室を創設し、代表者となる。平成九年に居合道範十八段となり、本県の居合道第一人者として、居合道発展にも大きく寄与している。

## 体育功労者表彰（徳島県体育協会）

○中山 啓男（昭和五年二月二十八日生まれ）

中学校剣道部顧問として剣道指導にあたり、県中学校総体での優勝、全国中学校選手権大会ベスト8等、学校剣道および県下剣道発展に尽力している。教員退職後、私設道場「至誠館」を創設し、多くの剣士を育成している。また、徳島県剣道連盟審議員として、本県剣道に寄与した功績は顕著である。

## 八段審査に合格して

河田 清 実

平成十六年五月二日は、私にとって生涯忘れられない日になりました。平成十三年十一月の東京の審査会から数えて六度目の挑戦でした。

平成十四年三月まで、富岡東高校に十八年間勤務し、監督として女子団体会で全国優勝を目指し、生徒と共に剣道に明け暮れる日々を送っていました。十四年四月に学校現場を離れたため、全国大会優勝という、大きな目標がなくなり、張りあいのない生活になりました。



た。そこで、この物足りなさを埋めるために、とてつもない目標を掲げることにしました。それが、八段審査への挑戦でした。

最初は、「八段審査がどういふものなのか経験しておこう」という、安易な気持ちで受験しましたが、情けない結果に終わりました。当然といえば当然の結果でした。二回三回と審査を経験しましたが、その合格者の数をみて、「八段なんて合格できるものではない」と感じました、それならせめて、「一次審査だけでも合格したい」と思いました。

二十余年、引き技をはじめとして、攻めて先を懸けること、脚を使いよく動くこと等を中心に、自分の持っているすべての技を生徒に伝授し、勝つことにこだわり、生徒を鍛えてきました。しかし八段の受験のためには、構え、攻め、溜めをつくり、打ち切る剣道へと自分の剣道をもう一度鍛え直す必要がありました。

そこで、稽古で特に心がけたことは、一点目は左足・左腰・左手の左側の線を意識してどんな状態でも体勢を崩さないこと。二点目は、初太刀は攻めと溜めを効かせて面を打ち切ること。三点目は左手をしっかり効かせて右手を柔らかく使い竹刀の先を鞭のように大きく鋭く振ること。四点目は最初の二分間を審査の立ち会いと考えて集中することです。

また、勤務先が替わったために運動量が極端に減り、稽古の時間が思うように取れなくなりました。そこで、仕事場のある九階への上り下りは、必ず階段を使ったり、仕事帰りにトレーニングジムに寄ったり素振りや面打ちをして、稽古の不足を補いました。

四回目の京都の一次審査では、自分のペースで立ち会えて、合格の手応えを感じました。しかし、二次審査では一組目ということもあり異様な雰囲気にもまれてしまい、消極的になり打ち込まれてしまいました。しかし、一次合格という目標を達成できた充実感を感じることができました。また、それまでは全く出口の見えない長いトンネルに入っていたように感じていた審査でしたが、遠い先に小さな出口の光が見えたような気がしました。

それから、次の十一月の審査に向けて稽古をするのですが、なかなか思うように初太刀の面が打てません、いろいろと打ち方を考えながらやってみるのですが、自信が持てる面打ちは出来ませんでした。迷いながらの受験は、やはり一人目の二太刀目で不合格を確信しました。

五月の審査の直前まで、初太刀の面打ちにこだわり稽古していましたが、攻めが全然効いていないのでしよう、稽古では起こりを読まれよく打たれました。そこで、「こんな調子では一次も合格できない、もつと強くなってはだめだ、相手を打たなければ受からない」と考えを改めました。十五年の秋に佐藤博信先生にご来徳いただき、ご指導を仰いだ折りに、私の胴打ちを褒めていただいたことを思い出しました。そこで、五月の審査では自分の攻めをして、得意技を出し、自分の良いところを出そうと思っていました。

一次審査の一人目では、相手の流れになりかけたのですが、あわずに返し胴を決め、そこから自分の流れに持っていくことができました。二人目も集中力が切れずに自分のペースで立ち会えました。

いよいよ二次審査です。今回は三組目でした。一年前と違って気持ちに余裕がありました。このチャンスを逃したらもう二度とないだろうと思いい集中力を高めました。一人目の初太刀、面に来たら胴を返してやろうと攻め込みましたが、相手も溜めて出て来ません、それならばと相手の竹刀の上から乗って入り思いつきり面に飛びました。相手はすりあげ面で応じて来たのですが、竹刀越しに上から乗った気がしました。二太刀目は攻め込みながら溜めていると面が来るのが見えたので胴を返し自分のペースになりました。二人目も集中力が持続し、攻め合いから先に攻め込んで面に出て相打ち、面を胴を返し、小手をすりあげて面を打ち、完全に自分の流れになりました。

二次実技審査合格者の番号に自分の103Aを見たときは感無量でした。形審査の合格者の発表後、大学時代の恩師の佐藤成明先生が、私のところまでわざわざお祝いにお越しくださいって写真を撮って頂きとても感激しました。また、その夜、いっしょに三福寺に泊まっていた大澤先生・遠藤会長をはじめ多くの方々祝って頂いたときの感激が今でも強く心に残っています。その夜床についていたのですが、興奮して一晩中眠れませんでした。何度も夢に見た八段合格でした。

最後になりましたが、これまでご指導いただいた、堀江先生、大澤先生、そして来徳して熱心にご指導頂いた講師の先生方に衷心より感謝申し上げますと共に、講習会等にも温かく声をかけて頂いた遠藤会長をはじめ連盟の事務局の方々、いつも熱心に稽古をつ

けて頂いた徳島県剣道連盟の皆様方に厚くお礼を申し上げたいと思います。そして、二十年数年間共に汗を流し稽古をしてきた剣道部の生徒達に、また、剣道と仕事しか考えない私を理解してくれた家族に心から感謝したいと思います。

また、合格の祝賀会で大勢の皆様方に祝って頂きました。この機会をお借りいたしましてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

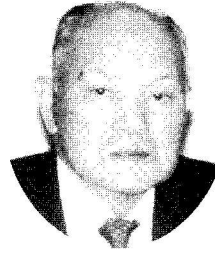
今後は、これまでお世話になった御恩をお返しするためにも、時間の許す限り稽古の機会を見つけて、多くの方々に稽古をお願いをして自分を高め、徳島県剣道連盟のために微力でもお役に立ちたいと思っています。

今後とも、御指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



# 剣道に命救われて

平 尾 勝 美



此の度、凶らずも全日本剣道連盟の理

事に於て剣道有効賞受賞が認められま  
した。誠に光栄に存じます。これ偏に

徳島県剣道連盟遠藤一美会長先生並に三  
木理事長先生の御高配と役員の先生方、

更には県内諸先生方のご指導ご支援の賜  
でありましてここに謹んで深く御厚情に感謝申し上げる次第でござ  
います。

思えば昭和十一年に県立農業学校に入学し、松尾誠一先生に基本  
を学び、勝浦守先輩からも先生の助手として懇切なご指導を頂きま  
した。松尾先生は私が入学して間もなく徳農を去られ、其の後も先  
生方が毎年の様に移動され、浜田盛雄先生、武田弥平先生、松村保  
一先生、石井隆介先生と目まぐるしい程にご指導者が変わり不安定な  
状況でしたが、稽古は部員一同一致団結して熱心に取り組みました。  
お蔭を以て何とか徳農の面目を保つことが出来ました。そして、現  
役兵として入隊する時には四段を頂いて入隊する事が出来ました。  
幹部候補生として千葉の高射学校に入学しましたが、一、二、〇〇名の  
甲幹の中でも四段は二名しか居ませんでした。卒業と同時に見習士  
官として各々任地へ赴任して参りましたが、私は武骨な剣道が認め

られたのか、剣道と観測の教官として学校に残り、次期入校の候補  
生の指導に当ることになりました。戦況も段々と緊迫の度を加え、  
内地へも敵機襲来の事態となり、空襲も益々激しく、本土防衛に必  
死に戦いましたが、物量に勝る米軍により主要都市は焼野ヶ原とな  
りました。

八月十五日終戦、九月一日には復員しましたが、留守中苦労した  
両親に少しでも楽をさせねばとの思いで農業に従事することにしま  
した。私は入隊当時両親と私の三人家族で一人息子が兵隊に行き武  
運を祈る両親の心情は痛い程良く分かって居りました。その親心が  
私をして家にあつて百姓をする決意に結びついたものと思えます。

私が剣道をしていなかったら恐らく戦友達と一緒に戦死して居た  
事でしょう。私が生涯剣の道に精進する決意を固めたのは生きてい  
られる事に感謝すると共に亡き戦友に対する報恩の気持からのもの  
でございます。「死んだ心算でやればどんな事でも出来る。」この気  
持が今日までの私の人生の支えでありました。剣道を通じ健康で明  
るく心豊かな青少年の育成を目指して、昭和二十八年剣道クラブを  
発足、当時は庭に電気を灯しての稽古で道具も数少く、終ればすぐ  
次の者に移譲しての練習でした。年とに練習生も段々増加し百四十  
名に達したこともあり少年剣道の発展とともに「鴨島少年剣道教室」  
と改名して三十二期生を迎える今日となりました。一方居合道に於  
いても昭和四十三年に「徹心道場」を創設して県内愛好家が参集熱  
心に稽古した結果、十五年後には、道場生の総段位が百段を数え、「百  
段祭」の開催が囁かれる様になりました。此の様に剣居両道に精進



してこられたのも諸先生方のご指導御鞭撻のお蔭と申あることに対  
する報恩感謝の念に基づくものでございます。

剣道居合道は我が国の誇る伝統文化であります。之を正しくしつ  
かりと受継いで次代へと伝えて参ることが我が身に課せられた責務  
であることを自覚し、剣道、居合道発展のため渾身の努力を続けて  
参る決意でございます。今後とも、層の御指導御鞭撻を賜ります  
様お願い申し上げます。

合掌



# 少年剣道教育奨励賞

## 受賞寸感

相生町西浦新



本誌二十号をお借りして、「現役引退」

のご挨拶を申し述べた次第ですが、昨年末、思いがけ無く連盟本部より「少年剣道指導教育奨励賞」の栄を頂きました。

これは恐らく県本部有志諸賢のご高配が背後に在った筈であり、再びここに粗墨を開陳して満腔の謝意を表する次第であります。

扱て卒寿の愚老は、昭和年代初期、生家在所に起こした「竜虎館」に参画して以来、今日に至った次第であり、戦中の応召による中断の後は、戦後いち早く復興を志し、ひそかに少年たちを誘引して今日に至り、僻村ながら三百余名の男女少年たちを送り出すことができました。この間、中学校への出張指導は僅かに八年間の実践でしたが相生中学校剣道部の只今はその殆どが竜虎館の愛弟子によって占められ、栃木県で行われた全国大会出場の榮譽を担ったことは既にご承知のことと思います。

以上のように書き綴りつつも竹刀を仕舞いこんだ只今はすでにすべて回想の世界であります、その後は敢て蛮勇を奮って「写経」

を志し、昨夏を貫いて百二十五巻の清書を全うしたことは、ささやかながら片隅の自負ではあります。

このように最晩年に対処する愚老であります、私は年々再々の連綿を、子供たちを孫と思ひ尽くし、気嫌をとりつつ可愛がつてきたと白負いたしております。これらにかかわる出費の儀も決して馬鹿にならぬことではあります。指導の根幹に据えたものが、「日本剣道形」だったことは申すまでもありません。

幸い、地域父兄の応援を得たこと、就中過ぐる日の学校長先生より正科でもない剣道を運動会に出演するよう迫られたことは忘れたい出来ごとでした。学年を異にする部員が夫々稽古衣姿に木刀を携えて入場した時、観衆を沈黙が襲い、終了の拍子木を消し去るような拍手が、銜した光景は思い起こすに涙が走るものであります。

終りにのぞんで敢て一言申し添えたいことは試合が多岐に亘る昨今であり喜ばしい限りであります、再々見学しての感想は「面の防御に対し竹刀を面上に横たえる軽業師然とした姿が見られることなど、日本剣道形の体現を斯く実態であります。これらは、丸っぽい竹刀のみにては悟りは困難でしょうから、木刀による鐺の存在を常々認知させることが肝要であろうと思っております。

出来得べくは年間二回程度の剣道形大会の現出を希うわけですが愚かしい提言なのでしょう。

前号「受賞維感」として、笠井選先生が徒然草を引用されて、卓抜な一文を書かれているのを思い出し、「お恥ずかしい」と自戒をとり戻り駄文を擲筆いたす次第であります。

頓首

## 賞を戴く、とびうさぎと…

阿南支部 中山 啓 男

私はこの度体育功労賞という過分の賞を戴くことになりました。

剣道歴も浅く、剣道界への貢献度も胸を張って披露できるものは何も持ち合わせていません。ただ晩年に覚えた剣道ではありますが誰よりも稽古が好きで好きで今日に至っていることは自慢できる一つです。この賞は剣道を愛好する者へのご褒美だと受け止め更なる精進を決意しています。

私は中学の教師になって七年目の夏、語学研修のために単身アメリカに渡りました。昭和三十七〜三十九年四月までの間、妻と五才・七才の子供を残してのことでした。当時のアメリカは戦勝国の誇りも高く、物はあふれ、自由を謳歌し、見るもの聞くものすべてが田舎者の私にとっては、おとぎの世界でありカルチャーショックの連続でありました。

その中で、日本人として胸を張れることが一つありました。それは日本人が長い時間をかけて築いてきた礼儀作法でありました。戦後の混乱期ではあったがそれだけは民族の誇りの一つであったと私は信じています。

『物で栄えて心で滅ぶ』というか、その頃アメリカでは青少年の異性交友が低年齢化し犯罪の増加など多民族国家としての問題点を露呈しておりました。

特に教育現場では生徒指導の問題点が多く、こんな風潮が太平洋を越えて日本に上陸したらどうしよう、どうやって食い止めるべきかなど真剣に考えた当時が非常に懐かしくよみがえってきます。

私の不安は的中し、間もなく日本にもアメリカの自由主義が上陸して我が国の過去はすべて否定されました。家族制度や村社会の絆を否定する風潮が蔓延し、学校でもいろんな問題が起りました。例えば、校内暴力・いじめ・家庭内暴力など学校現場にとって始めて経験する事件でありました。

私は三十代半ばで剣道と出会いました。そして日々の稽古の中で、これは自分との闘いであり精神修養の一つだと判断し、日本の若者の教育は剣道以外にはないと判断してこの道を選びました。あれからもう四十年があつという間に経過したように思います。この間私の生徒指導の核心は武士道の精神教育に大きな比重をかけてきたことは事実です。

暦年令は致し方なく学校現場を去る六十歳を迎えました。現場で果し得なかつた日本人教育の延長として、退職と同時に私設剣道場徳島至誠館を開きました。指導方針は終始一貫、バックボーンのしっかりした日本人の育成であります。保護者も指導の先生方も共通の目標を持って熱く燃える日々であります。終りになりましたが受賞に当たりご推薦を頂いた会長さんをはじめ諸先生方に感謝の誠を捧げ拙文を閉じます。

## 平成 16 年度 徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男 子	学校名	No.	女 子	学校名
1	松 本 明 真	文 理	1	平 野 千 尋	鳴門一
2	谷 澤 勇	相 生	2	星 野 知 世	那賀川
3	元 木 龍 太	相 生	3	奥 村 仁 規	那賀川
4	井 内 陽 平	相 生	4	市 瀬 綾 香	那賀川
5	西 田 義 玄	相 生	5	中 野 由 貴	那賀川
6	土 屋 祐 太	文 理	6	横 山 依 利 加	那賀川
7	鎌 田 憲 資	文 理	7	佐 藤 美 香	鳴門一
8	川 人 広 平	文 理	8	徳 永 美 月	鳴門一
9	久 保 宏 和	文 理	9	岩 本 美 帆	坂 野
10	鈴 木 達 也	加 茂 名	10	松 本 桜 香	坂 野
11	山 本 敬 太	鳴門一	11	河 井 優 里	阿南一
12	上 田 祥 平	小松島	12	曾 根 惠	阿南一
13	岡 田 直 樹	坂 野	13	笠 井 友 貴	阿南一
14	船 越 裕 真	坂 野	14	藤 井 玲 名	牟 岐
15	岩 佐 勇 希	阿南一	15	戎 谷 麻 里	牟 岐
16	大 宗 純	阿 南	16	大 西 里 沙	土 成
17	谷 口 真 央	那賀川	17	新 居 春 菜	石 井
18	濱 航 介	藍住東	18	鴻 野 賀 穂 里	鴨島一
19	中 山 大 地	鴨島一	19	藤 本 理 恵 子	池田一
20	林 明 史	石 井			
21	峰 本 直 季	池田一			

## 平成 16 年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男 子	学校名	No.	女 子	学校名
1	大 石 洋 史	富岡西	1	吉 岡 穰	富岡東
2	京 小 晋 平	富岡西	2	谷 澤 鮎 美	富岡東
3	佐 川 洋 介	富岡西	3	宮 崎 のどか	富岡東
4	立 岩 春 樹	富岡西	4	磯 田 沙 希	富岡東
5	的 場 大 和	富岡西	5	森 由 伊	富岡東
6	福 永 晃 久	富岡西	6	近 藤 三 菜 子	川 島
7	本 田 章 訓	富岡西	7	武 知 真 理	川 島
8	玉 田 康 朗	徳島文理	8	小 笠 亜 季	川 島
9	花 房 祐 希	徳島文理	9	塩 田 美 雪	川 島
10	中 村 文 人	徳島文理	10	本 浄 清 佳	川 島
11	樫 谷 伸 男	阿南工	11	中 島 悠 紀	城 西
12	川 口 了 意	阿南工	12	石 井 由 美	城 西
13	坂 本 和 人	阿南工	13	富 浦 友 美 子	徳島市立
14	小 西 航	阿南工	14	加 戸 紗 智 子	徳島市立
15	橋 本 将 大	阿南工	15	新 居 見 綾	徳島市立
16	白 木 健 一 郎	川 島	16	武 内 恵	城 北
17	笠 井 優 利	川 島	17	米 倉 みゆき	池 田
18	宮 本 慎 也	川 島	18	崎 川 礼 菜	池 田
19	浅 井 敬 博	城 北	19	北 野 由 梨	鳴 門
20	西 條 正 晃	徳島市立			
21	山 本 義 裕	鳴 門			
22	西 宇 真 之	鳴 門			
23	三 木 一 馬	阿 波			
24	三 木 良 太	阿 波			
25	須 見 政 弘	阿 波			
26	岡 田 貴 志	阿 波			
27	株 田 巧	徳島東工			
28	岩 田 純 一	徳島東工			
29	三 木 良 平	徳島東工			
30	谷 内 良 也	阿波西			
31	山 崎 真 司	海 南			
32	川 口 雄 大	城 東			
33	高 橋 晃	城 西			

# 特別寄稿

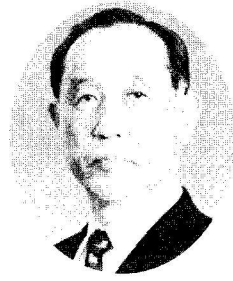
## 「教育剣道」指導および

### 指導者の在り方について

筑波大学名誉教授

佐藤成明

#### はじめに



私の子供の頃から心に描かれていた徳島県とは、小学校時代に知り合った海部郡生まれの友人との会話や文通、小説「鳴門秘帳」を手掛りにとしたもので「徳島

は南国の美しいところ、自分にとつては非常に遠隔の地である」というものでした。後年、文部省学校体育実技指導者講習会や台風の真つ只中で開催された全国教職員剣道大会などで実際に御地を訪れる機会を得て、歴史と伝統に育まれた風光明媚な素晴らしいところである事が実証されました。

新構想のもとに昭和四十八年十月に開学した筑波大学の第一期生である河田清実先生が難関の剣道八段に合格されましたことは当時の若手教官で共に励んだ仲間として大変嬉しく思います。

河田先生達第一期生の在学した当時は、東京教育大学から筑波大

学への移行期であり激動の時期でもありました。今でこそ筑波研究学園都市の中核として、素晴らしい発展を遂げつつありますが、当時は建設途上であり大学周辺の道路事情も悪く、雨が降れば長靴なしには通学が不能といった状況でした。大学には専用の剣道場もなく、ダンス場を拝借しての稽古が続けられました。そのような不十分な環境の中で懸命な修行が続けられました。この学年からは河田先生を含めて三人の八段が生まれています。また、今日、剣道界以外にも教育界その他の分野で中心的な存在として活躍している学年でもあります。

河田先生の大学卒業後の県立富岡東高校を率いての高校剣道界での素晴らしい実績、生徒指導と共に剣道八段への修行の実践は後輩たちへの素晴らしい生きたお手本であり、大きな励みと目標になることと思えます。

徳島県には河田先生のほかに筑波大学の卒業生である木原資裕(鳴門教育大学)・加藤哲裕(城南高校)・本田敦彦(徳島市立高校)・竹内佳代子(鳴門第一中学)・飯田栄一(富岡東高校)・坪井さくら(結婚のため静岡県教員として転出)の皆さんが徳島県剣道界のご支援を受けて「教育剣道」を支える人材として活躍されていることを大変嬉しく、また心強く思っております。

#### 私の剣道事始め

ここで、本論に入ります前に少々私の剣道に関わる「自分史」を申し上げてみたいと思います。

私が剣道を、ある意味で本格的に始めたのは高等学校の一年生の二学期も終わろうとする時期でした。昭和二十九年（一九五〇）のことです。この年の八月に今日の高校総体の剣道部門の第一回大会が栃木県の日光において開催されました。「しない（撓）競技」と「剣道」の二本立てで、当時は「しない競技」がメインの大会であったようです。

さかのぼって私が剣道の基本的な手ほどきを受けたのは、小学校に入学する以前のことでした。（と申しましても今日の少年剣道と言ったものではありません。）物心がついた頃は、日本は戦時体制下で学校では教練や体錬科武道が華やかな時代であり、いわゆる「戦技」として三尺六寸の短い竹刀を用い白兵戦を想定した実戦剣道が提唱され実施されている時代でもありました。小学校に入学前の私ですが、子供用の木刀を用いての今で言う基本動作（姿勢・構え・特に足さばき・振り方など）を時々父から教わりました。ほんの時々のことでした。竹刀で打ち込むと言うことは習った経験がありません。もちろん道具を着けての試合とか打ち込み稽古などと言ったことは一切やったことがありません。素面・素小手での、いわゆる空間打突の練習が中心でした。

## 武道禁止としない競技

昭和二十年（一九四五）八月、第二次世界大戦は日本の無条件降伏、即ち敗戦ということと終結致しました。その時、私は小学校の一年生だったので。

終戦後、御承知のように、我が国の教育は昭和二十一年（一九四六）三月に來日した、アメリカからの教育視察団のGHQへの報告に基づき、軍国主義の排除、民主主義の確立などを含む大々的な教育の改革がなされました。実は、その報告よりも少々早く「武道」は「教練」と共に学校教育の中で全面的に禁止とされていきました。「教練」が禁止されたことは当然としても、「武道」もGHQの指令に基づいて一括禁止になったと一般的な武道の戦後史には記述されていません。

戦後の剣道を含む武道禁止という現実には剣道にとって、プラスとマイナスの結果をもたらしました。一つは、この禁止によって剣道関係者が改めて、過去の剣道について反省して今後の剣道の進むべき方向を真剣に模索、研究したプラスの面です。また、武道（特に剣道なのですが）のみが数あるスポーツの中で軍国主義的、マキャベリズム的国家主義に連動しやすい性格のものであるかの如き印象を心なき人々に与えたことはマイナスの面として考えられます。こうした偏見はやがて武道が盛んになり、学校での教科活動として台頭しようとする際に、折に触れて故なき批判の対象になっていったことも事実のように思われます。

私の小学・中学校時代はこうした剣道禁止の時代でありましたが、昭和二十五年（一九五〇）に「しない（撓）競技」ができました。剣道が永久に全面禁止になるのではないかという当時の状況下で、特に学校関係の指導者を中心にして、従来の剣道ではないが剣道の歴史と伝統を備えた新しい対人的な競技としての「しない（撓）競

技」が工夫開発され学校教育の中に「格技」として採用されることになりました。

ある人々は「しない競技は邪道である。しない競技があったから今日の剣道が悪くなったのだ」との意見を述べられますが、剣道が禁止されており現実には出来ないと言う状況下にあった中で、何とか日本文化としての剣道を残そうとする先輩方の情熱の産物が「しない競技」であったと思うのです。剣道復活の大きなきっかけとなった功績は見過ごすことはできないと思います。

## 剣道復活

昭和二十七年（一九五二）に剣道は新しく学校剣道として再出発し、全日本剣道連盟が組織されました。しかし、当時の私共の周囲を振り返ってみますと、剣道をやる環境と申しましようか、周りの剣道に対する目は、必ずしも好意的なものではなく、むしろ否定的、冷やかなものでした。やれ「軍国主義の復活だ」、「封建主義」、「復古調」、「右翼」、「野蛮」などの罵声を浴びることすらありました。今の学生諸君には想像もできないことでしょうが、学校の部活動などでも小さくなって周りに遠慮をしながら練習場を貸してもらおうといった状態で、時には校庭の土の上で練習をしたなどという経験もありました。

しかし、多くの批判や中傷があるなかで、別の方向からは「やっぱり剣道だ、剣道をやる人は素晴らしい」、「日本の心だ」、「姿勢が正しい」、「節度があり、折り目正しくて礼儀正しい」などとの剣道

肯定論あるいは剣道礼讃論、剣道待望論も耳にしたものでした。当時の私の日記帳にそんなことが記されてあります。

## 私の大学時代

高校から大学へと進み本格的に剣道を修行することになります。当時の東京教育大学剣道部の指導陣であられた、中野八十二先生・橋本明雄先生・清野武治先生をはじめ訪れる在京の大先輩方である佐藤卯吉・森田文十郎・小沢 丘・本間七郎・鈴木幾雄・渡邊敏雄・湯野正憲先生や大阪でお目にかかる井上正孝・和崎嘉之・古賀恒彦先生など多くの先生方から「君たちは将来、剣道の指導者、特に高野佐三郎先生の意を体した『教育剣道』の担い手にならないといけない。それが教育の総本山ともいえるべき本学で学ぶ者の責務でもある」とか「こせこせとした勝負本意の小さな剣道をやってどうするのか!」、「高野先生の理合いの剣道、正しい剣道を修行せよ!」と、ことのある毎に諭されました。

「教育原理」の授業で冒頭で担当の教授から教育基本法の第一条「教育は人格の完成を目指し、平和的な国家及び社会の形成者として真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任とを重んじ、自主的精神に充ちた、心身ともに健全な国民の育成を期して行なわれなければならない」を暗記するように言われました。大学一年生のこととて何の事かも深く理解もせずに覚えたことが、私のこれまでの教師生活のバックボーンになっていることは確かです。「教育とは、成長しつつある者の人格に有益な影響を与え、教育される者

の人格の改良、完成、あるいは価値的上昇を達成すべきものである」との表現もあります。

日本では古くから剣道が人間教育のために資するものとして取り上げられてきた歴史的な経緯があります。今日の全剣連が示している「剣の理法の修練による人間形成の道である」とする剣道の理念がそれです。この一私論で掲げた「教育剣道」とは剣道を「教育目的に資する剣道」として捉えて論じてみようとするものなのです。

## 教育剣道の父

「教育剣道の父」として敬われている東京高等師範学校の初代剣道科主任教授佐野佐三郎先生(当時の東京高師の校長であった柔道の嘉納治五郎先生の招聘に応じて着任されました)の教えを受けた高師剣道科卒業生は、それぞれに全国の教育現場で優れた教育者、特に剣道を通しての教育者として高野先生の唱える「教育剣道」を推進し培って参りました。

高野先生のお人柄、学識、技前その他については先生の後を継がれて高師の教授となられた佐藤卯吉先生の著された「永遠なる剣道」(講談社)に詳細に紹介されています。また、教えを受けた教え子の先生の方からも縷々お話を伺う中から高野先生像をうかがい知ることが出来ます。

先生のお弟子さんの剣道は一見してそれと分かるように、高野先生の姿勢や構え、理になつた技をお手本とされてきました。当然、ものの考え方や行動の様式といったものまですべてのものをお手本

としたはずですが。

先生の教えを受けたお弟子さんたちが、優れた教師として全国において剣道を通して人間教育をしたわけです。先輩方の薫陶を受けて各界の中心的な存在になつた多くの人々の「剣道の指導を受けた恩師の影響が今日の自分をあらしめている」とする内容の回顧録を見る事ができます。教え子達のその後の姿を見ればその教育効果は歴然とするわけです。結果がすべてを物語っていると思うのです。

剣道の指導が、単に剣技の指導や一握りのエリート選手の養成に片寄ることなく、多くの生徒に剣道をやる喜びや剣道の楽しみ方を教え、剣道を通して「人生のあり方やその方向づけ」を示し感銘を与えていったのだと思います。具体的な指導法についてはそれぞれいろいろあるうかと思えますが、「実践の学」と言われる剣道ですから当然実技が中心です。理に適つた正しい剣道、美しい剣道、そして強い剣道の剣技を指導するなかで、有形無形の内に、いわゆる「剣の徳」を身を以て示していったものと思われれます。

## 指導者の在り方

剣道に限らず学問でも何でも、ただ与えられるものを待っているだけでは進歩はありません。自ら積極的に求めて行かなければなりません。しかし、「守・破・離」という訓えもあります。基礎的なこと、心理は先ず先人の訓えを謙虚に学ぶことから始まります。「まねぶ↓まなぶ」と言うことになります。個性尊重の名の下に行われ勝ちな「独りよがりの自己流」では進歩がありません。個性的が「個

癖」になる可能性が多いからです。紙・重のことはありますが、そのためにも指導者として、また、修行者として地道な学習が必要になります。数々の文献を読むことをお勧めします。全部を読めなくても「積んどく」だけでもいいのです。せめて目次にだけでも目を通してあれば必要な時に改めて役に立つはずです。今日では剣道の科学的、学問的な研究とその結果についての理解も必要です。そのための基礎的な学習は欠くことができません。「文武不岐」の訓えがあります。「修文練武」の訓えもあります。加えて「百錬自得」の精神も忘れずに精進したいものです。

剣道の世界は御承知のように実戦を尊びます。いくら高邁な理論を振り回しても実践が伴わないと見向かれない事があります。努めて道場にて己の剣技を磨くことです。また、勝負があるからには勝たねばなりません。矛盾をした事を申すかもしれませんが、勝つて初めて物が申せるという世界でもあるのです。

やや表題とかけ離れ焦点の定まらないことを書き連ねて参りました。つまるところ、剣道の修行に指導者がいかに重要であるか、特に、「幼少年の剣道」や「初心者の剣道」の指導においては優秀な指導者が居るか居ないか、適切な指導がなされるか否かが、将来の技術的、人格的成長のすべてを決定すると言っても過言ではないでしょう。教育は模倣（真似）から始まると申しましたが、剣道においては、特に、指導者と指導を受ける者が互いに身体をぶつけ合って修練することが多いので、指導者の全人格（人格と技能）が指導を受ける者に肌を通して受け入れられ影響を及ぼすことが大きい

です。したがって優秀な指導者の存在は重要な意義を持つことになるのです。

最後（財）全日本剣道連盟が刊行しています「改訂版 幼少年剣道指導要領」に示されています。「初心者指導の在り方」の項目を取り上げて改訂作業に関わった者として、皆様と共に改めて「剣道指導の在り方」について振り返り己の修行上の再確認をしてみたいと思います。

### 剣道指導の目標

剣道の指導は、正しい剣道の技術を修得させ、心身共に健全な人間を育成することを目標としています。以下、具体的にその目標が述べられています。

剣道初心者指導上心得ておきたい一般的な指導の目標

- 一、基本的な動作や作法を正しく身につけさせて技能の向上をはかること。
- 二、健康の増進や体力の向上をはかること。
- 三、生涯を通して剣道に親しみ、明朗で豊かな生活を作り出すための基礎的な態度をつくること。
- 四、自己の確立をはかること。
- 五、社会的態度の向上をはかること。
- 六、安全に対する態度の向上をはかること。
- 七、我が国固有の伝統的な剣道を現代において正しく捉え、将来に正しく伝達させること。

### 剣道の指導者について

剣道の指導者として心がけたい日常の基本的な心構えが述べられています。

- 一、 確固たる信念と情熱の持ち主であること。
- 二、 愛情を持って誠心誠意指導にあたること。
- 三、 教えることに喜びを持つこと。
- 四、 人格を養い、技能の向上に努力すること。
- 五、 能率的、合理的な指導法の研究を常に心がけること。
- 六、 指導を受ける者とともに修練すること。
- 七、 審判技術に熟達すること。
- 八、 自分の教えをうまく表現する能力を養うこと。
- 九、 指導を受ける者の持つ個々の優れた才能を見つけることのできる指導者としての目を養うこと。
- 十、 指導のし過ぎにならぬよう留意すること。

### 初心者に対する剣道指導上の留意点

初心の段階における指導の在り方がその後の発展に大きな影響を及ぼすことは言うまでもないことです。初心者指導にあたって心がけておきたい指導上の留意点が示されています。

- 一、 技術の指導について  
常に基本を重んじて指導すること。

- (一) 攻撃技（しかけていく技）を主に指導すること。
- (二) 剣道の稽古のねらいを試合中心に置き過ぎないように指導すること。
- (三) 稽古のねらいをいたづらに鍛錬中心に置き過ぎないように指導すること。

二、 礼儀の指導について

三、 健康、安全についての指導

- (一) 自他の安全について注意して稽古するように指導すること。
- (二) 衛生に注意して稽古をするように指導すること。
- (三) 無理をせずに稽古をするように指導すること。
- (四) 準備運動・整理運動を必ず実施させるように指導すること。

### 幼少年に対する剣道指導上の留意点

心身共に発達途上に児童生徒を指導するに際しての留意点が示されています。

- 一、 発達段階に応じた指導
- 二、 基本重視の指導
- 三、 礼儀の指導
- 四、 基本的なしつけの指導
- 五、 学業と剣道の両立についての留意点
- 六、 自立心、独立心の養成
- 七、 社会性の養成

徳島県剣道連盟のますますの発展を祈念して拙稿の結びと致します。

### 佐藤成明先生の略歴

昭和十二年栃木県宇都宮市生まれる。東京教育大学(現在の筑波大学)卒業同専攻科および大学院修了。筑波大学教授。退官後、名誉教授となる。國士館大学客員教授、全日本剣道連盟常任理事、全日本学生剣道連盟評議員等の要職を歴任。世界選手権、全日本選手権、国体、全日本東西対抗、明治村等、各種剣道大会に選手及び審判員として参加。剣道範十八段。



## 特集 新八段誕生

### おめでとう河田八段！

会長 遠藤 一美



徳島県にも大澤先生以来、十七年ぶりの新八段が誕生した。徳島県剣道連盟において、これ以上の喜びはない。昨年の京都大会の折、私が「剣道日本」の記者より、インタビューを受け、その内容が「思い出の一本」として掲載された。「思い出の一本」というよりも「河田先生との思い出」といった内容であるので、ここに転載させていただくこととした。

平成十六年五月二日、京都大会。武道センターの玄関には八段審査合格者の一覧が張り出されていた。それを眺める遠藤一美の胸には万感の思いが去来していた。遠藤の視線の先には河

田清実の名があつた。

徳島県剣道連盟会長を務める遠藤は、娘が徳島県の剣道強豪校である富岡東高校へと進学したのをきっかけに、それ以来、自身も剣道部へと稽古に通うことを日課としていた。

昭和六十年四月、富岡東剣道部には新しい顧問が赴任することとなった。その新顧問こそが筑波大学を卒業したばかりの河田であった。もともと徳島県出身の河田は高校時代から実力のある選手として有名であった。河田に任せれば富岡東のレベルアップにもつながると、遠藤は考えていたという。

河田が赴任してきて間もなく、遠藤は富岡東へと稽古に出向いた。部員たちと一通り稽古をしたあと、河田とも剣を交えることとなった。

スツと立ち上がった両者は、剣先で互いの胸の内を探り合い、ともに鋭い気合を発する。この時、遠藤は、

「基本に徹したい構えだ。一瞬でも気を抜けば必ずとらえられてしまうだろう」

と感じていたようだ。

河田は竹刀で遠藤の剣先を押さえ、足さばきも滑らかに遠藤の間に攻め入る。上からのしかかられるような威圧感を感じた遠藤は、思わずその場に居着いてしまう。河田の竹刀はそのまま遠藤の突きを攻め込みつつ、伸びやかに面をとられた。遠藤

自身も、竹刀を押さえられた時点で、「これは乗られる」と予感したほどの見事な技だった。この鮮やかな技と河田の剣風に、遠藤は心惹かれるものがあった。

この日から遠藤と河田の交流が始まる。

「話をしてみると、当時でも珍しいくらい真っ正直な人間でした。彼も初めての赴任先ということでも心細かったんでしよう。どんなことでも相談してくれましたし、私にしてみれば、それが嬉しくて自分の子どものようにかわいがってきました」

遠藤は河田の指導法にも感心させられた。生徒を叱責するだけで終わりがちな指導が多い中、河田は部員の一人ひとりに手取り足取り、その技術が生徒自身のものになるまで丁寧な教え込む。その情熱的な指導に、富岡東の生徒たちが信頼を寄せるようになるのに、そう時間はかからなかった。

その後の富岡東の躍進は見事なものだった。とくに女子においてはインターハイの徳島県代表として連続出場を果たし、上位進出も遂げるようになる。

遠藤と河田の稽古の日々はつづく。ほぼ毎日、富岡東で剣を交えるのはもちろん、近所の道場にも誘い合わせて稽古に出掛けた。遠藤にとっても充実した日々だった。いつの日からか、河田は遠藤のことを「親父」と呼び、慕ってくれるようになった。遠藤もこれを嬉しく思い、河田のことを盟友だと感じていた。

長い間、富岡東を指導してきた河田だが、一昨年、教育委員会へと異動となった。この異動により、遠藤と河田が稽古をする機会は激減し、顔をあわせる機会すらもなくなってしまったという。

今年、京都大会へと向かう準備をする遠藤の自宅に一本の電話があった。河田からだった。

「親父、京都に行くんだったら、俺が車を運転するから一緒にいかなかね」

遠藤が見守る中、河田は八段の二次審査に臨んだ。立合の中で、あの面打ちが何度も相手をとらえていた。それを見ていた遠藤は、河田の合格を確信したという。

「我がことのように嬉しいですね。これからはこっちが稽古をお願いしなければならなくなりました(笑)打たれんようにならんと」

と微笑みを見せた。

(文中敬称略)

「剣道日本二〇〇四・七月号」より

## おめでとう河田清実先生

副会長 大澤孝彰



河田先生の見事な剣道八段合格で私自身の八段受審時の事を色々思い出しましたので我田引水ですが、少し書かして頂きます。

私は四十八才から第一回の受審を始めました。当時は五月に京都で年一回だけの審査会でした。七段の受審で隻腕の受審者との組合せとなり情け容赦無く叩き失敗しているにもかかわらず、やはり八段は強ければ（相手を叩けば）合格するのだと云う考えで立ち向い二回、三回と不合格が続きました。まだまだ強く無いのだと思い徳島県の先輩の先生方には勿論、たくさん御指導を賜りました。また、全国のあらゆる講習会、武者修業、各種大会の試合等と自分でもびっくりする位、朝から晩まで一日も休まず頑張りました。しかし四回、五回、六回、七回と不合格が続きました。

この間、たくさんの先生方に御指導受けた事が数え切れ無い程ありますが、香川県の植田一先生（九段）にある講習会で、「大澤君タオルは白がいいですよ」と云われました。当時私は緑のタオルを着けていましたがすぐ白に変えました。が、「タオルの色白である方が黒であろうか」と云う気持ちがあったように思います。

堀江先生には「これだけ稽古するんだからもう少し考えていたらどうか」と云われ「ハイ」と答えましたが、「死にものぐるいでやれば強くなる」と心のどこかにありました。

故松本一城先生には「大澤は相手を叩き伏せて合格しようと思っ  
ているのか、それとも理合の剣道をして合格しようとしているのか」と聞かれ「とても故中倉清九段先生の様に相手を叩き伏せる事なんか出来ません」と答えました。「そうであれば理合の剣道を修業しなさい」と云われました。

また講習会等で馴染みの九州の先生（私より若干年長者ですが四回目で八段合格）に「どんな稽古をされたのですか」とお聞きしたところ「一回目不合格だったので少年との剣道を三年間止めました」と云われました。

また逆に九州に遠征に行った時、或る県の武道館で少年を教えられていた先生が居られ、その先生は「少年の指導稽古を中心にされて八段合格された先生だ」と聞かされ稽古のやり方をお聞きしたら、「少年と一緒に一生涯懸命基本を中心に稽古しました」と云われました。

また或る先生は、「好きなお酒を断って稽古された」と聞き、私も「マネ」をしました。が駄目でした。

この時、堀江先生に「人それぞれであって、酒を無理してやめるのではなく、適量を自然に嗜めば良いのではないか」と指導されました。

たくさんの先生方の御指導を書きましたが、心のどこかに「何を」

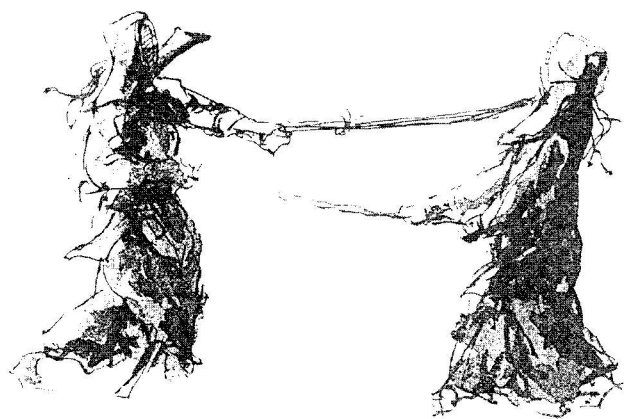
と云う反発があつては駄目、心の底から素直に教えを守ると云う心情が「剣の心」を作り上げるのだと思います。

滋賀県の故八木謙一先生に「大澤は背が低いからどうしても面を打った時、顎が上がる、上がらない様に。もう一つ、左足は絶対撞木にならないように。」と教えられました。もうこの時になると素直に懸命に教えを守りました。八月日に一次は合格しましたが二次は不合格でした。その後すぐ堀江先生の御指導を守り、九年目に五十六才で合格しました。

劍聖持田盛二先生は「五十才にして基本を体で修得された」とあります。愛媛県の故作道圭二先生は「八段は基本の完成である」と云われました。

河田先生は長年高校の先生をなさり乍ら教え子と一緒に基本稽古に集中され、素直な、そして強い剣と心を作り上げ、四十九才と云う若さで栄冠を獲得されました。まさに「すばらしい」の一言に尽きます。

どうかお体に気をつけられ徳島県の後輩の為、益々の御指導と御精励をお願いします。



# 祝八段昇段

副理事長 大石 正志

河田先生とは富岡西高校剣道部の同窓生で、彼は海部郡海南中学から、私は那賀郡宮浜中学から、共に剣道上達を目指して同校剣道部に入部しました。恩師、松本一城先生に御指導いただくなど大変恵まれた環境のもと、剣道に打ち込むことが出来た高校時代でした。当時、徳島県では、地元開催の全国高校総合体育大会(四十六総体)を一年後に控え、富岡西・阿南工業・新野・徳島農業を中心に各高校が鎗を削っていました。

そんな中で互いに良きライバルとして日々稽古に打ち込んでいたことを思い出します。稽古が待ち遠しく、放課後になると授業中は別人のように生き生きと覚醒し、道場へ向かいました。稽古が終わり「今日は打たれたな」と思うと下宿に帰り、夜、素振りやイメージトレーニングで明日の戦い方を研究しました。おそらく二人共同じことをしていたに違いありません。そんな日々の繰り返し、昭和四十六年の徳島、四十七年の山形で開催されたインターハイに二年連続出場するという成果に繋がったと信じています。現在、私が剣道に携わることができているのも、富岡西高校剣道部で、すばらしい先生・先輩そして、彼との出会いがあったことが、大きいウエイトを占めています。彼の剣道は、高校時代から基本に忠実で、立ち姿・足さばきが良く「鋭く切れる」剣道をしていました。体力や運

動、運命をこまわること、今の自分に決して満足しない。負けない」向上心とまことに心を持っていました。その点で周りの者より優れていたと、思います。

筑波大学に進学し、最終学年には選手として活躍、教職に就いて富岡東高校剣道部の指導、全国にその名をとどろかせたことは言うまでもありません。指導者として常に師弟同行の精神を忘れることなく、時間の許す限り常に面を付け、直接指導することを通して生徒を育ててきました。

教員にとつて「やる気を引き出す指導・自尊感情・自己指導力の育成」など生徒の感情に訴える指導は非常に難しいとされていますが、その部分を引き出すことが非常に上手かったと思います。実践と理論の両輪がしっかりとかみ合い、生徒・保護者に信頼される指導があつて、すばらしい生徒が育つたのであり、高い技術を持つ生徒が多く集まったから成功したのではなく、理にかなった地道な指導が生徒を育て、監督としての実績を作り上げたのだと信じます。彼自身も生徒との稽古を通じて、剣道の実力が自然に備わってきたのでしょう。平成十六年五月、京都で八段審査に見事合格されました。

八段の条件を文章で表現することは難しいですが、八段にふさわしい実力が自然と備わっていること、観る人を引きつけ、感動できる剣道が出来ることだと考えます。何十年という長い稽古の中から考えると、一瞬でしかない数分の立ち会いの中に、八段に必要な条件を自然に表現できた、それ故に与えられた段位ではないでしょう

か。

八段合格は我々の喜びであると共に、後進の大きな目標となり、徳島県の剣道界に新風を吹き込んでくれました。十月には東西大会での西軍優勝に貢献するなど相変わらずの活躍は、私にとっても喜ばしい限りです。

今後、県の代表として、全国での講習会に体調管理を万全に、のびのびと自然体で臨んでくれることを期待し、慶びとさせていただきます。



富岡西高校 卒業アルバムより

## 新八段誕生

坪井 さくら



河田先生が教育委員会に勤務された当初は、仕事が多忙なため、大好きな剣道をする機会が減り、元気をなくされていらしやるように見受けられました。時には、八段は一生かかっても無理だろうといった、弱気な言葉を耳にしたこともありました。あの河田先生がそんなことを言うくらいだから、八段とは並の人間ではとても手の届かないものであるのかな、と思っていました。

しかし、職場の県庁九階まで駆け上がる、時間を見つけては、ジムでトレーニング、審査のビデオを何度もチェックする、少しでも稽古をする時間をつくって稽古会に参加する、といった努力をされていました。とても負けず嫌いで、剣道が大好きな先生らしい話だと思いました。

平成十六年五月二日、私は都道府県大会に出場するため、大阪にいました。ちょうど夕食のとき、試合に出場される先生方と、八段合格の連絡を聞き、みんなで喜び合っていたのを覚えています。鳥肌が立つくらいうれしい知らせでした。

その翌日、河田先生は大阪市中央立体体育館まで応援に来てくださっ

たのですが、周囲は先生のことを祝福し、審査はどうでした、といったことで話題は持ちきりでした。一次審査、二次審査の様子をまわりの選手や先生方にお話ししてください、今までに見たことのないようなうれしきでいっぱいの表情でした。私も、自分の試合内容(あまり良くなかったのですが...)よりも、八段合格のことで「すごいなあ!すごいなあ!」と思うばかりでした。

その後、合格されたときのビデオを見せていただきました。八段審査を初めて日にしましたが、会場の何ともいえない緊張感が画面を通じてよく伝わってきました。

「審査員にじっと見られようし、二分もないぐらいの時間にどんなことしたんだろうか...」

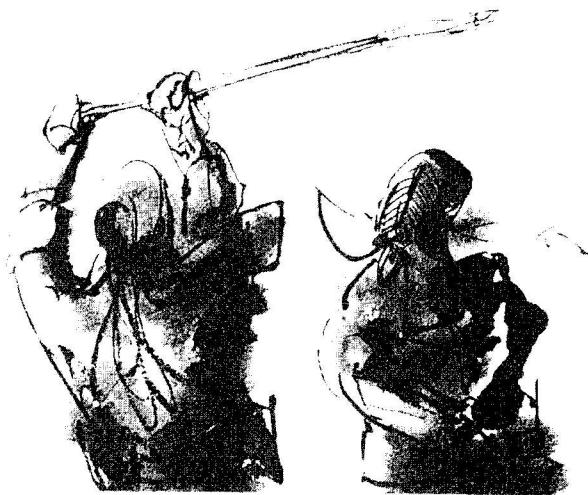
そう思いながら画面に向かっていましたが、河田先生の姿勢、間合い、攻め、技、残心、すべて一致した技が完璧に決まった瞬間、画面に映った審査員の先生の手が動いていました。しかも、一次審査、二次審査ともそういった場面があり、完全に打ち切らないと審査員の目に止まらず、まぐれではとても合格できる世界ではないことがわかりました。

熱心な剣道部の保護者の方々と、河田先生が、十八年間富岡東で活躍された記録をまとめた冊子を作られていました。それを見せていただいたとき、改めて河田先生のすごさを目の当たりにしました。毎年毎年、四国大会、全国大会上位の成績を残し、とてもまねできることではありません。八段合格の知らせを聞いたとき、(私はこんなことを言うのはとても失礼であることはわかっていますが)長

年の指導者としての努力が報われたのだと思いました。生徒として三年間毎日指導していただき、大学卒業後も一年間、先生の側で、生徒の指導や稽古をさせていただいた自分はとても幸せ者です。

今でも自分の剣道の課題は、と聞かれたら、「左手で竹刀を振り、強く打突すること」と答えます。新野高校剣道部にも、ほぼ毎日、このことを言っています。大学時代、竹刀の持ち方や振り方など、高校時代に教わったことに対して、否定したり、珍しがられたりしたことがあります。でも、自分には富東で教わった剣道が一番合っている」と自身を持っていたので、誰に言われても直す気はありませんでした。しかし、これが正しいと信じてやってきたことを「間違っている」というふうに言われると、多少不安になるときもありました。けれども、河田先生がこのたび合格されたことで、大学時代の自分に間違いはなかったと確信がもてました。これからも、さっき述べた課題を克服すべく、稽古に励もうと思えます。

河田先生が八段に昇段されたことは、すごく喜ばしいことであり、私自身の励みになりました。どんな環境や状況にも、決してあきらめず、努力と工夫を凝らし、少しでも先生に近づけられるよう精進していきたいです。このたび、本当におめでとうございました。



## 河田清実先生プロフィール

昭和二十九年六月二十五日海南町に生まれる。海南中学校一年生より若松修作先生の影響を受け、剣道を始める。中学卒業後、富岡西高等学校に進学し、二、三年生とインターハイ団体出場を果たす。高等学校卒業後、浅川漁業組合に就職。その翌年（昭和四十九年）筑波大学に進学し、四年生では全日本学生剣道優勝大会ベスト8という成績を修めた。

大学卒業後、教育者として、高校剣道の指導にあたり那賀高等学校・富岡西高等学校の講師を務め、昭和五十四年、新任採用で新野高等学校へ赴任。昭和五十七年、結婚。昭和五十八年、富岡東高等学校へ赴任。平成十三年まで十八年間勤務。

富岡東高等学校監督時代にはインターハイ（女子団体）三位・三回、ベスト8・五回。全国高等学校剣道選抜大会（女子団体）三位・三回、ベスト8・一回。国民体育大会（少年女子）三位・一回、五位三回。四国総体（女子団体）優勝十回など、つねに全国上位で活躍。

現在は県立総合教育センター学校支援課で勤務。  
平成十六年五月二日、京都で行われた八段審査会に合格。

# 先生を偲ぶ

## 「乾 壽夫先生」を偲ぶ

理事長 三木 毅



剣道教士七段の乾壽夫先生は大正十一年九月に生を受けられ、本年八十二歳で天に召されました。

亡くなられる丁度一ヶ月前に入院先の病院を訪ねまして約一時間ほど話をいたしました。先生は私の剣道連盟理事長という立場を非常に喜んでくれ又強い期待をも示されました。

それは、約一時間の話の中で「剣道連盟を頼むぞ。」「子供に剣道の指導をやってくれよ。」という言葉を何回も口にされたからであります。

先生は、ご自分の剣道歴を回顧され「剣道を習ってよかった。剣道って何でこんなによいものか。」「退院できれば皆さんと剣道やりたい。」という喜びの言葉も連発されておりました。

乾先生を偲ぶには、戦後剣道の復活直後という時代に情熱を傾注されていたことを述べなければなりません。剣道は戦後進駐して来た連合司令官によって禁止され、復活再開されたのは昭和二十四年十月であります。が、中学校での剣道は、体育・スポーツという観念

で剣道の位置付けがなされ、剣道に似たスポーツとして「撓競技」というものを生み出しました。そこで昭和二十七年二月に文部省次官通達で全国の中学校で撓競技が開始されるという経緯があります。乾先生はこの頃二十八歳位であったと思います。この通達にいち早く呼応し、撓競技部の設置に心を動かされ、策を練られたと思います。先生は昭和二十八、九、九年頃に、柿島中学から鴨島第一中学校に転任され、そして早い時期に撓競技部を立ち上げるために非常な努力をされ、部発足となったものと思います。私は、先生が撓競技部を立ち上げた直後の、昭和三十二年四月、中学二年生になって、撓競技部に入部したことで乾先生との出会いがあったのです。

鴨島第一中学校の撓競技部には私の先輩が二人、同級生が三人、後輩が三人おりましたものの、それより以前の先輩のことは耳にしませんでしたので、乾先生が鴨島第一中学校で部を立ち上げ生徒が数名揃った頃かと思えます。

先生が部を立ち上げたこの頃は撓競技というスポーツが、その後において我が国が誇る真の剣道に結実して行くというような発想も期待もなかったという時期だけに、おそらく剣道に似た撓競技だからとにかく立ち上げようという情熱が強く推察されます。それが乾先生の剣道に対する熱い心の表れであると思うのであります。

そこで撓競技のことに触れさせてもらいますが、防具などの様子は写真のとおりでありました。

上は白シャツ、下は白いトレパン姿で、防具は白色が基調で面は前面が金網で覆われおり肩垂れがなく、フェンシング面に似たも



ので、顔に被るようなものであり、胴は野球のキャッチャーが胸腹部に装着しているプロテクターの様なものに左右の脇下に楕円形の鉄板を縫い付けてあり、小手は今のようなものでありました。竹刀は、竹を十六割にしたものを白色の布袋に入れて鏝を付けてありました。「撓」とは、漢字で読むと「シナヒ」であり「たわむ」「しんなりと曲がる」という意味になり、十日も使えばシナイの竹が柔らかくなり、狙ったところに当たらないという悩み多い柄物でありました。三年生になってやっと剣道部という名に変更され現在同様の胴着や防具、竹刀となりました。

当時は道場という場所はなく、教室の椅子、机を隅に積み上げ稽

古をし、終ると椅子・机をもとの状態に戻し稽古終了となります。乾先生は今思えば当時三十五歳ということになります。気迫のある声で、容赦無く得意の面打ち、早い小手打ちで攻めたてられました。私は同級生より一年遅れの入部でしたので、相手をうち負かすというようなことが出来ない時代でありました。

先生はとても稽古熱心でありまして、力強く指導に当たってくれました。生徒は先生の指導に応え稽古に励んでおり、当時の強敵は鶯敷中学校であったのですが、撓競技時代そして剣道時代を通じ鴨島第一中学校は団体優勝や個人優勝の回数是他校より勝っておりまして。先生は毎回の県下大会が楽しみであり、毎回の上位入賞の結果を痛快に感じておられたことと思います。

先生はその後、名西高校、富岡東高校、川島高校で奉職され、多くの生徒を世に送り出し、中でも剣道のご功績は誠に多大なものであることは皆さまが認めるところであります。

今振り返れば先生の剣道の場における指導は誠実そのものであり、真摯な振るまいがとても印象的であります。天に召される一ヶ月前に発言された剣道に対する思いは情熱そのものであると深く感銘するとともに剣道人たるは、そうありたいと自分に言い聞かせた次第であります。

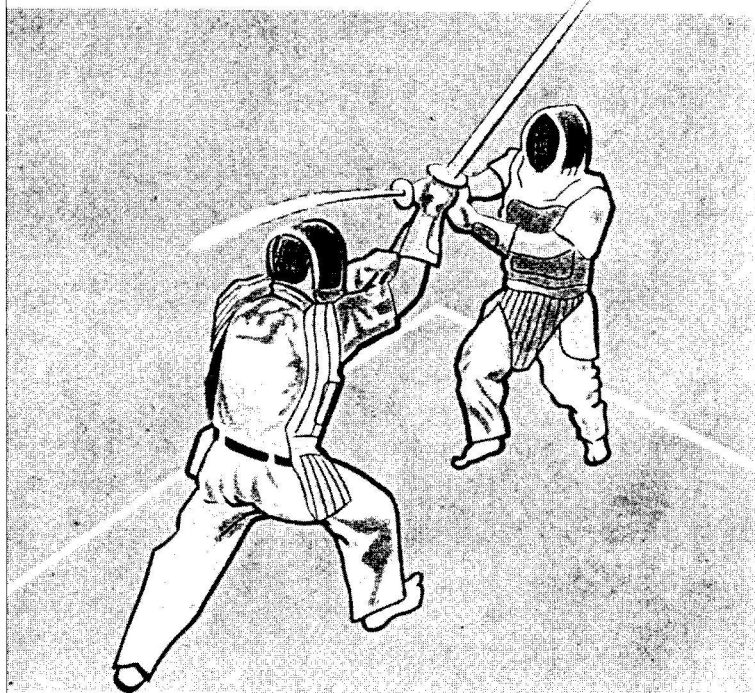
先生に剣道を教わり、現に今剣道に汗を流し続けている者が県内外に存在しています。先生が教えた全てのこと誰かに伝承されていると思う時、剣道そのもの善さ、その値、その魅力というもの、そして剣道家という人の偉業が胸中深部の大切なところに重く鎮座

するような気持ちにさせられるのであります。

私どもが次代に伝えようとしている大切な剣道、乾先生の剣道への情熱を落とさずに伝承して行くことが大きな義務と心得ていることを改めてお誓いしながら先生を偲びご冥福をお祈りいたしたいと存じます。

# 技 競 しない 撓

## 規程の解説と基本



### 全日本撓競技連盟編

当 時 の 撓 競 技 の 解 説 書

# 乾 寿夫先生を偲ぶ

中 村 稔 裕

先生と永遠のお別れをして早や六ヶ月が過ぎた。先生は八十二才の御生涯でしたが、心からご冥福をお祈り致します。

さて、私と先生との出会いは昭和三十四年四月でありました。私が名西高等学校二年に進級した時でした。先生は鴨島第一中学校から名西高等学校に転勤され、数学を担当されることになりました。私にとって二年、三年と二年連続して担任して頂き、加えてクラブ活動の剣道部でもご指導を頂くこととなりました。

先生の授業はおだやかに熱心に指導されることから生徒間に大変好評であり、特に大学進学希望者から個別指導を願う者も多く、休息時間、放課後を問わず、教室、職員室では常に生徒が取り囲む状態でありました。

一方クラブ活動においては、高瀬嘉十郎先生を補佐し、剣道部を指導され、クラブ活動でも二年連続してお世話になりました。

先生の剣風は、高瀬先生の剛に対し、軽妙な剣さばきをされ柔そのものでした。ただ、面金の奥に光る眼光は恐ろしく今もはっきり覚えております。

「ホイサツサ、ホイサツサ」と声を掛けながら軽妙な剣道をされましたが、稽古の打止めはニコッと笑われ

「いっちょいこうか。」

と一本勝負の試合で締められました。

この「いっちょいこうか。」は私の社会人となった後に稽古をお願いした時も健在であり、「いっちょいこうか。」の声を聞くとほっとする温かみと気持の引き締まる思いがしております。

また、私がインターハイに出場した時は部員と共に道場の真中で車座に座り、試合の内容を目を輝かせて細かく問われ、自らがインターハイに出場した選手のように喜んでおられました。

又先生は教員で編成するソフトボール部に入っておられ、先生方とよく試合をしておられましたし、文化祭には先生方のコーラス部員として生徒の前で美声を披露してくれました。

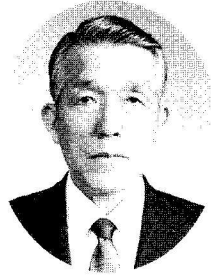
先生は名西高等学校に十六年間に在職された後、川島高等学校に転出されました。卒業後四十年目に同級生六名と先生のお宅を訪ねた時、「初めて担任した生徒の事ははっきり覚えてる。面白かったなあ。」と今も担任されているようにニコニコと嬉しそうに話され、時のたつのを忘れた一日の思い出があります。

私達教え子も徐々に先生の年令に近づいておりますが、青春時代に楽しい思い出を多く作っていただいた先生を偲びながら追悼のことばとします。



# 浅野精一先生を偲ぶ

鳴門支部 菱田 晋



剣道を心から愛した、浅野精一先生を  
偲び先生の足跡を辿り、略歴と残された  
ご功績の一端をご紹介します。

先生は、昭和十四年十月一日、鳴門市  
撫養町斉田字浜端南で誕生され、戦中戦

後の混乱期にもかかわらず、ご両親の深い愛情を受けて、成長されました。鳴門高等学校に入学、憧れの剣道部に入り、河野照雄、山田武雄、両先生のご指導を受け稽古に励み、剣の道へ進まれました。

昭和三十二年、魚市場を経営する父親の後を継いで、鳴門海産市場へ入社されました。

昭和三十五年、寺西慶裕先生、山田富康先生のお二人が、青少年の非行防止と健全育成を目的に、鳴門警察署道場で少年剣道教室を開設されました。浅野先生も、早朝よりの激務に従事しながら、余暇をみては道場に通い、少年の指導に協力すると共に、両先生に師事し修練に汗を流されました。

昭和四十年、大麻町板東の近藤智恵子さんと結婚、二男一女に恵まれました。（現在、お孫さん六人）

昭和五十五年、完成した市立武道場で、寺西慶裕先生が光武館を

創立され、浅野先生も参加し自己の錬磨に努めると共に、少年の指導に情熱を燃やされました。「親の背を見て子は育つ。」諺通り、当時小学校一年二男泰司君、続いて幼稚園の晃子ちゃんも入門し一生懸命稽古に励み、県大会で優勝を含む、好成績を収め両親を喜ばせました。

何事にも労を惜しまぬ先生は、鳴門市スポーツ振興後援会理事、鳴門市剣道協会副会長等に就任され、鳴門市の剣道界は勿論、スポーツ界の発展に尽くされた数々のご功績が認められ、昭和五十五年、鳴門市体育功労賞を授与されました。

昭和六十二年、取締役として発展に貢献された鳴門海産市場の席を、長男恭史氏に譲り勇退されました。悠々自適の身となられ益々剣道の錬磨に励まれ、平成五年、五段に合格されました。

すでに、鳴門武道館で昭和五十七年より開かれていた、鳴門運動公園少年剣道教室（主任講師・堤茂先生、平成七年より主任講師・佐藤勇先生）にも参加し、子供の目線に立った献身的な指導で、子供たちからも慕われ、保護者からも喜ばれました。平成九年、同教室の講師を委嘱され、指導に一層の情熱を注がれました。その頃から体調を崩されたのか時々入院される事がありました。病気の事は一切口にせず、講師の責任を果していました。今思えば我慢して無理をされていたのでは、と心が痛みます。

先生は、徳島県高齢剣友会理事としても活躍され、また、徳島県剣道連盟評議員を三期六年勤められました。平成十三年、推されて徳島県剣道連盟鳴門支部長に就任され、会員の結束をはかり、率先

して会の発展に尽力されましたが、今後の抱負をもちながら、二期  
目半はの、平成十六年八月二十一日、逝去されました。高齢化時代、  
六十四歳はあまりにも若い、これからの人に先立たれました。惜し  
みても余りあるものがあります。

浅野精一先生のご冥福を、心からお祈り致します。



ありし日の浅野精一先生



鳴門運動公園少年剣道教室  
平成11年度修了式

## 父と剣道

次男 浅野泰司

父と剣道の初めての出会いは、年の離れた父の兄からであったと聞いています。兄の剣道をする姿がとても格好良く、幼いながらも憧れを抱いたそうです。その後その兄も亡くなり、自分自身が剣道をするようになったのは鳴門高校に入学してからだだったそうです。それから約五十年、剣道と共に歩んできた人生であったと思います。

高校時代の学生生活は、剣道一色であったと聞いています。顧問の山田先生の下、昼夜稽古に明け暮れていたそうです。「昔の練習は本当に厳しかった。」と、嬉しそうに語っていた父の顔を思い出します。まさに青春という充実した時間を過ごしたようでした。この頃から剣友・親友との結びつきはとて強く、最後までその関係が崩れることはなかったと思います。

高校卒業後に家業を継いでからも剣道に対する情熱は衰えることなく、仕事に剣道に忙しい日々を過ごしたようです。その後結婚して、二人の息子と一人の娘の父となりました。

その三人の子供の中で、次男の私と妹の二人が剣道をするようになりました。今から、約二十五年前のことです。

道場に通い始めた当初は父から直接教えを受けるのではなく、遠くから稽古を見守っているような感じでした。子供自身で、剣道を続けるかどうかを判断させようとしていたようです。父から「剣道

に行け。」といわれたことは、一度もありませんでした。

防具をつけて稽古をするようになってから初めて、父から教えを受けるようになりました。初めて父に稽古をつけてもらった時の嬉しさや恥ずかしさが、いまでも忘れられません。

父の教え方はとても単純で、上手な所を褒めるというものでした。下手でもその中で良くできた所を褒め、出来ない所を責めるようなことはありませんでした。真面目に稽古をしていて、父に怒られたことは一度もありませんでした。ただ、悪ふざけをしているとすぐ怒られました。

特に試合のときなどは、勝敗よりも内容を重視していました。試合の負けは「残念だったな」の一言だけでそれ以上言うことはなく、負けた中でも良かった所を褒めてくれたことを今でも覚えています。

「剣道は一生続けられる。」というのが、父の口癖でした。子供に対しては、剣道の楽しさを伝えることを第一に考え教えていたのだと思います。この教え方は、生涯変わることはなかったと思います。

私や妹が剣道をしなくなった後も、剣道への情熱は冷めることはありませんでした。常に道場に通い、主に子供たちの指導に熱心に取り組んでいたと思います。定年後はさらに剣道に没頭し、「生きがい」という言葉では表しきれないほどの存在になっていったと思います。

亡くなる半年前まで、病魔に言われながらも体の動く限り道場に通い続けました。今でも、良くあそびまで動くことができたなど驚

いています。それは父自身の剣道というものの存在の大きさを現し  
ており、「父と剣道」の集大成といえる姿であったと思います。

私は人生と剣道の師である父と、父に力を与え続けてくれた剣道  
に心より感謝したいと思います。ありがとうございます。

葬儀の際には多数の御心を賜り、ありがとうございます。文  
末ではございますが、この場をお借りして心より御礼申し上げます。  
本当にありがとうございます。



# 阿部三十三先生を偲んで

阿南支部 西岡 侃



平成十六年六月十五日、私達が尊敬する阿部三十三先生が逝去の連絡を受けました、享年七十九才でございました。翌々日十七日にご葬

儀が、しめやかに執り行われ先生のお人柄の良さを示すが如く、多数の方々がお別れに参列されました。徳島県高齢剣友会の先生方も遠路からお越し下さいました。

私と阿部先生の出会いは、確かに私が大野小学校剣道部の指導をしているとき、阿部先生の孫さん(和也君)が小学校三年生で剣道部に入部して来たときでした、今は亡き清原栄先生が「西岡は知らないだろう、和也君のお祖父さん、三十三さんは、段等はずもっていないけど戦前(小学校四年生〜高等二年まで)剣道を習い、よく試合に出場して強かったな」と教えて下さいました。それから数年後、阿部三十三先生の息子さん達が先生の還暦を記念に剣道具一式をそろえて、「最後の健康作りに役立て下さい」と剣の道への再起を作ってくれたそうです。

そこで、阿部先生は、剣道範士七段・清原栄先生に従事し、阿南少年剣道教室で錬成に励み「段を受けるのなら二級から」との決まりで還暦の歳に二級の審査に合格。昭和六十年には初段に合格されました。その年の十一月に奥さん(大野農協職員)を惜しくも亡くされました。しかし、悲しさにも崩れず、剣の修行に努め審査の資格が出来るごとに昇段に挑戦し、合格されました。平成十年五月、七十四才で京都の審査で見事に六段合格されました。阿部三十三先生は還暦から本格的に剣道を再開されたが、少年の頃に今は亡き、浅井先生、小延先生に教えられた基本を守り、剣道に対する心構えと努力が昇段された源でしょう。

剣道六段に合格された記念に「己克」とのタオルを作り「わしの一番好きな言葉じゃ」と言ってタオルを下さいました。(おのれにかつ、私心を抑へる、がまんする、自制する)等の意味があり、まさに剣の道にふさわしい言葉だと思えます。

阿部三十三先生の得意な技は、大きな面と小手抜き面でした。徳島県高齢剣友会の交流大会でも団体戦で阿南支部で出場し、幾度も優勝されました。全国高齢者武道大会へ参加することによって、東京へ行き、野間道場、西山道場などへ錬成に出かけることが楽しいと言っておられました。平成四年の第五回全国健康福祉祭(ねんりんピック)山梨大会と平成九年の(ねんりんピック)山形大会と二度にわたり徳島県代表として出場され、活躍されました。

又剣道の合間を利用して、神伝流居合も修行され、錬士六段を取得されております。

地元大野小学校剣道部の課長が、何かとお忙しい中を繰りかえして指導において下さいました。特に夏休みの早朝稽古には「自宅が学校に近いので」と言ってよく来て下さいました。その上、六年生を送るお別れ会には指導者の先生方と一緒にするからと言って気持ちよく物心両面にわたりご協力して下さい、又阿南支部主催の清原杯争奪県下剣道大会にもいろいろとご支援を賜りました。

地元の大野地域の人々からもお人柄に親しまれ「三十三さん」と気安く呼ばれ、神社総代、寺総代、民生委員等を永年努められ、人々の福祉の向上に協力されてきました。「剣は人なり」「剣は心なり」との諺の如く、地域の人々から好意を持たれ尊敬されてきました。剣道七段受験を目標に努力されていた矢先、難病にかかり、闘病生活をなされていましたが、今年六月に急に容体が悪くなり、惜しまれながら他界いたしました。

ご遺族の方々より「故人が最後の人生を剣道に打ち込むことで、より高い志を得、充実したものにすることができました。最期まで剣士として生きようとする心が伺えました。これも剣道を通した皆様方の温かいお心があつたからと遺族一同心より感謝致しております。」とお話しをいただきました。また、県高齢剣友会に金一封が寄贈されましたことをご報告いたします。

最後になりましたが、阿部三十三先生のご偉徳を偲びその一端を記し、子弟一同心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

さらにまた、ご遺族が経営される株式会社阿部鉄工所のご繁栄と、ご遺族の皆様のご健勝を心からお祈り致します

合 掌



大野小学校剣道部  
六年生を送るお別れ会で  
前列中央が故阿部三十三先生  
前列左が筆者西岡侃



ねんりんピック山梨大会にも  
阿部三十三先生出場

## 第三十九回 剣道中央講習会（西日本）

阿南支部 北 條 憲 治

日 時 平成十六年四月一日～三日  
場 所 神戸市立体育館

- 一、受講者は、七段以上である事。
- 一、受講者は、帰県した後は、伝達講習を行う義務がある事。
- 一、講習会は、三日間の日程で実施される事。

此の度、私と松村和宏先生と二人、県連より推薦され受講して参りました。充分内容が伝達できるか、質疑に応答できるか不安な気持ちでの参加でありました。

受講者五十四名、内八段十七名、凜とした引締った開講式から始まり、講師先生の解り易い講話の中にも、「厳しく」「又」「和やかに」、内容の濃い三日間でした。受講内容は、受講資料、受講日程に添って、私を感じた事も含めて報告致します。

### 一、講話 講師 奥島快男

#### 剣の理念

剣の理法の修練ということがある。これが剣道の基本的な考え方である。ところが一番大事な身体の構え、足の踏み方から基本が出

来ていない人がある。はなはだしい人は一本足で立っている。極端なことを云えば、左足はただ申訳に付いているだけ。

従つて、いい機会に出ようとしても、左の足があそんでいるために、打って出ても遅くなる。

竹刀の持ち方、これも基本的なことです。これが非常に悪い人が多い。左手を横から握る、あるいは斜めに持つ、従つて体の大きな人は懐が狭くなる。右手を上からもつように云われるから入りすぎて持つひとが目立つ。だから右の手首が不自由になる、肘が自由にならない、ところが本人はそれでいいと思つている。

ちよつと直すと、非常に楽になる。楽に関節が動くものを、わざわざ不自由にして動きにくくしている。竹刀の持ち方を注意してほしい。いい機会に打とうとするけれど、それを打ちにつなげる、根本的なところが出来ていない。

初歩的なことだけれど、剣道をやる以上は、最後までついてくる問題です。切り返しが基本であるから初段の審査に入れてあるので。竹刀の持ち方が悪いと、左手が中心からはずれ、はなはだしいのは、下から上に行く、**基本的な正しい切り返しをやる**と、**左手は中心からはずれない**。剣道はこれが一番大事です。また、一足一刀の間合いから歩いてやる人がいる、竹刀の中心から鰐に近いところに当たる。こういう人は、自分の間合いが分かっていないのではないか。

攻め合い、攻めて、崩して、崩されたら苦しくなつて、下がるか、出るか、する。その端を打つ、そういうのを理にかなつた打ち方と

いう。理合になかった打突がなければ、ただ打つて当たったとか、運が悪く当たらなかったとか、ということになる。

**剣道は、攻めて崩して、相手の崩れを打つ。**これが一番いい技である。高段者が心がける大事なことです。

普段の稽古のとき、間合いを考えないで、近くにいつて打ち合う、審査のときに緊張すると間合いが遠くなる。普段やっていないから、無理に出てゆくと、そこを打たれる。いろんな所に連鎖反応が出てくるから、そこを考えて稽古してください。

仕かけて行く技が単調になる人が多い。基本通りに真直ぐ前に出ているだけでは、高段者としてはどうかと思う。

せっかく稽古するので、気を付けて実りの有る稽古をお願いします。

### どうしたら立派な剣道ができるか

稽古を行う時、その質、内容、方向を誤って解釈した場合、いくら稽古の数をかけてもその努力が報われない時もある。また、頭で考えただけでは、上達につながらない。

#### 三磨之位 習（しゅう）師を選べ（師から学）

工（く）工夫する（見取り稽古を含む）

稽（けい）数を重ねる（修練を通して考える）

理法を聞く―理法をこなす―理法を実践する。この流れを大切にす。

稽古で、自分が日頃、考え理解してきた理法を相手との関係のなかで実行すると云うことが大切。

**構えの原点**、一眼（姿勢、目付）、二足（体捌）三胆（胆力）、四力（技・力量）

**間合** 間における攻め合いを大切にし、そこからの技の出し方を考える。

#### 技

刀の法則に従わなければよい技は出ない。刀には切り込んで行く道筋がある。竹刀であっても刃筋をしっかりと立てなければ、そのためには、竹刀の持ち方、打突前後の体勢、手の内を正しくする、左手を真中にもつていく等に留意すること。

#### 応じ

相手の攻め、動き、技に応ずるように心がける。しのぎをいかに利用して技を出すか、竹刀さばきと体さばきの一致をしっかりとする。

**持田 盛二―技と構えは、気から出るのだから、気から入れ。**

**小川忠太郎―荒れた心（二念、連想する）でいい剣道はできない。**

呼吸が乱れるから真の技がでない。二念をつぐな。

・理合に対して忠実な稽古をする。切る気持ちで、しっかりと打つ。

・基本の中で、切り返しの場合、左手を中心からはずさないで行う。

・剣道の一番大事なことは気力であり、技前ではない。打つまでの過程における気力と気力の戦いが大切。これが結果的には、良い

技を引き出すと同時に、稽古をする本人が心身ともに鍛えられる。

これが剣道の習いである。

- ・ 中心をとり、先をかけること。
  - ・ 最初の礼から最後の礼まで気を抜かない稽古を。
  - ・ 左手が動く構えはいけない。
  - ・ 先をかけ打ち切る稽古を。相手の打ちに対し、突っかけたから剣先が効いていると思うことは間違いないである、**本当に効いているのであれば、その前に技を出せばよい。**
  - ・ 左手のおさまらない打突はいけない。
  - ・ 切り返しの最後の面は飽くまで中心をはずさずに打たせ、真直ぐに出るようにさせる。
  - ・ 立会の気迫と間合、そこからの攻め方について工夫すべきである。立会から、緩みない状態で間をとり、攻め、先の技へとつながっていく稽古をする。
  - ・ 攻めて打つ、応じて技を出すようにする。
  - ・ 受けの気を無くし、自分のテクニクだけでなく中心を攻め、合気になった稽古をすると、稽古にゆるみがないものになる。
- 「百錬自得という言葉をお忘れずに、自らつかむ事ができるように、**絶えず修練する**」
- 「気を溜めて座る」、「刺激の無い所にいい剣道・技は生まれない」
- 「理から入った剣道は一生修行できる」

## 稽古する心得

世間で一般に剣道といえは、竹刀を持つてただ打合いをする事のようにみている人がほとんどであろう。しかし、実際には剣道といえる段階にまでいくには幾多の難関ありかなりの時間をかける必要がある。

そのためには、まず正しい基本動作さらに技が重要である。これによつて合理的な姿勢、身体の線にそつた方法技法を十分に教えることであろう。習う方はこれに求める必要がある。

剣道の修業によつて悟ろう得ようという目的を持つことは楽しいことである。そこでやろう、頑張ろうという言葉は簡単にだせるが、いざ実行となるといろいろ障害が生じやすいものである。

剣道が始めるに際し、よき指導者が必要なのは当然であるが学ぶ人の心構えが最も大切である。このようにお互い条件と目的が同じ場合はどこで折り合ふかということになる。即ち、我を殺すということが修業上の重要な問題となつてくる。両者剣をもつて立ちあがつたとき我を通せるか、妥協か、また、どこで和するか、まず大きな問題が出てくる。ここで研究工夫ということにつきあたる。人間が生きているうちは考える。そして実行、これを離れての生活はない。

前記の問題も各人の修行による立場立場により、多少の変化はあるが適度にとつて以上の言葉はない。しかし、我を通すことは善いとはいえない。

だが、妥協も度を超すと、卑屈になる。私も同様の内容を持つている。例えば剣道の稽古にしても打たれても仕方がない。相手は強いだから打たれるのは当たり前と考えるようになると、剣道にならなくなってしまう。ここで、根性をもっている者は、今に見ておれと口には出さないが、いつの日にかと思うものでこれこそ、我慢、忍耐の勉強が始まる。

古い言葉に体力、気力、人にすぐれた者は、武術など学ばなくとも、戦場のものの役にたつといい、非力で精神の弱いものは、武術を学ぶことによつて弱さを補い、そして第二の天性をつくる。この重大なことを武術即ち剣道に求めたといわれている。このように修行によつて第二の天性をつくることこそ人間でなければできないことである。

人を相手の剣道において、日々新たな気持ち死ぬまで精進しても、これでよかつたと思つて死んでいける人が世の中に幾人いるであろうか。学ぶ求める悟るといふことは、真に難かしいことである。しかし、なんとかこの第二の天性を自己のものにしなければならぬ。

## 二、日本剣道形 講師 熊本 正 範士

### 「日本剣道形」作成の大綱

1、日本剣道形の修練を通じて、剣道の原点である剣の理法を学び、剣道の正しい普及発展に役立てることを目的とした。

2、『大日本帝國剣道形 増補加註寫眞説明(原本)』

昭和八年五月大日本武徳會本部

### 『日本剣道形解説書』

昭和五十六年十二月七日 全日本剣道連盟

### 『剣道講習会資料「日本剣道形」平成十四年度版』

平成十四年四月 全日本剣道連盟

等の資料に基づいて全剣連が指導する日本剣道形について十分理解できるように集約した内容の『講習会資料「日本剣道形」』を作成した。

3、これまで実施してきた日本剣道形の内容を変更することなく、上記の資料にできる限り忠実に記述し、また明確にされていない点について、新たに剣道形部会で合意が得られたものについて明記した。

4、手順及び補足説明の記述については、以下のようにした。

(1) 学ぶ者が理解し易いように打太刀と仕太刀それぞれの動作を

- 分けて記述し、同じ動作のところについては共通記述とした。
- (2) 学ぶ者にわかり易く、基本的な手順を□の枠内に入れて記述した。
- (3) 習熟度に応じて、より高度な内容を修得できるように、打太刀と仕太刀の動作を分けて補足説明とした。
- (4) 体をさばく方向、刃先の方向などの前後左右については、動作するものを基準として記述した。
- (5) 打突、足さばきなどの動作については、すべてその表記方法を統一して記述し、補足説明のなかでは従来行われていた表記方法を原則とした。
- (6) 常用漢字に使われていない漢字は剣道用語として学ぶために振り仮名をつけて残し、間違え易い用語についても振り仮名を付けた。
- (7) 掛声の時機を明記した。
- (8) 打太刀・仕太刀の動作について、○数字(例えば①、③など)は時間の流れを示した。
- 5、今後、この剣道講習会資料「日本剣道形」は、更に研究した結果、問題点があれば修正することもあり得る。

## 日本剣道形講習における

### 「重点事項」

日本剣道形を正しく継承し、次代に伝えることは大きな意義がある。「講習会資料「日本剣道形」作成の大綱」の目的を十分に理解し、平素から日本剣道形の修練に努める必要がある。

左記に留意し、習熟度に応じて、より深く高度な形を修得し、指導することが大切である。

### 記

- 一、立会前後の作法、立会の所作、刀の取り扱い。
- 二、正しい刀(木刀)の操作(刃筋、手の内、鐺の使い方、一拍子の打突など)や体さばき。
- 三、打太刀、仕太刀の関係を理解し、呼吸を合わせ、原則として仕太刀が打太刀より先に動作を起こさないこと。
- 四、打太刀は開合に接したとき、機を捉えて打突部位を正しく打突し、仕太刀は勝機を逃がすことなく打突部で打突部位を正確に打突すること。
- 五、形の実施中は、目付け、呼吸法、残心などを心得て、気分を緩めることなく終始充実した気迫で行うこと

※発達の順…あわす↓打つ↓切る

(繰返し、実践することが大切)

※全て剣道につなげて考える。

### 三、指導法 講師 島野 大洋 範士 指導法「重点事項」

「剣道の理念」をより深く認識し、高い水準の剣道を目指すため、左記事項を指導法の重点事項とする。

記

- 1 講習の実施にあたっては、対象者の特性に応じ指導内容を精選して効果の上がるように留意する。
- 2 技術以前の所作、礼法、着装について徹底指導させる。
- 3 竹刀の操作について、刃筋・手の内・刃え・鎬を意識した使い方を徹底指導させる。
- 4 一足一刀の間合から、一拍子で正しく打ち切る技能を中心課題とするとともに、それぞれの技量に応じて理に適った応用技の習得を図る。
- 5 正しい攻防の指導を徹底させる。
  - (1) 氣勢の充実しないままの打ち合いを是正させ、気構えを強くして中心を外さない攻め合いを重視させる。
  - (2) 安易に左拳を中心線から外す防御体勢を厳しく是正する。
- 6 正しい鍔ぜり合いからの技の理解・実践を徹底させる。
  - (1) 鍔と鍔が接する構えをとらせる。
  - (2) 分かれる際、相手の身体に竹刀をかけたたり、当てたりさせない。

(分かれる方法としては、技を出すか、瞬間に間を切るかの二通りがある)

7 剣道の理解を深めさせるため、講話を積極的に取り入れ、心の問題について認識を深め、修練を通して道徳的価値観の育成を図る。

#### ◎ セクシャルハラスメント

バスタオルを巻いた程度でうろろう歩くことはあってはならない。湯茶の接待している近くで着替をしてはいけない。老若男女が剣道に親む以上、マナーを考えねばならない。今後老人が増えるのでなおさらである。

#### 四、救急法実演 神戸市消防局 救命士

とっさの時の応急手当を！

心肺蘇生法を一人一人が実施し指導を受けた。

## 五、竹刀による基本技稽古法

講師 島野 大洋 範士

### 1、制定の趣旨

剣道の基本技術を習得させるため、「竹刀は日本刀」であるとの観念を基とし、木刀を使用して「刀法の原理・理合」「作法の規範」を理解させるとともに、適正な対人的技能を中心に技を精選し指導するものとした。

### 2、構成

この解説書での技およびその構成は、次のとおりである。

基本一 一本打ちの技

「正面」「小手」「胴（右胴）」「突き」

基本二 二・三段の技（連続技）

「小手↓面」

基本三 払い技

「払い面（表）」

基本四 引き技（鏝ぜり合い）

「引き胴（右胴）」

基本五 抜き技

「面抜き胴（右胴）」

基本六 すり上げ技

「小手すり上げ面（裏）」

基本七 出ばな技

「出ばな小手」

基本八 返し技

「面返し胴（右胴）」

基本九 打ち落とし技

「胴（右胴）打ち落とし面」

### 3、基本指針

(1) 所作事は、「日本剣道形」に準拠するものとする。

(2) 習技者に対し、木刀を使用し剣道を正しく体得させる。

(3) 使用する木刀は基本的には日本剣道形で用いるものとするが、幼少年にあつては発育段階に応じて適切な木刀を使用する。

(4) 基本動作については、「幼少年剣道指導要領」に則つて指導する。

(5) 習技は基本的には集団指導によるもので、「元立ち」「掛り手」の呼称は相互に平等の立場で行うという観点から用いた。

(6) 集団指導を効果的に進めるために、指導者による随時適切な指揮の下に行うとする。

ア、前記基本技の選別は、指導者が習技者の錬度に合わせ行う。

イ、適宜、指揮者の号令を導入するほか、錬度を高めるため「掛り手」だけの要領を繰返し行う等の具体的内容や進め

方について創意工夫を凝らす。

#### 4、指導上の留意事項

##### (1) 構え

ア、構え方はすべて「中段の構え」とする。

「中段の構え」は右足をやや前に出し、左こぶしは臍前約ひと握り、左手親指の付け根の関節を臍の高さで正中線に置く。剣先は「一足一刀の間合」においてその延長が相手の両眼の中央または左目の方向とする。

イ、構えの解き方は、剣先を自然に相手の膝頭から三〜六センチメートル下で下段の構えの程度に右斜めに下げ、この時の剣先は相手の体からややはずれ、刃先は左斜め下に向くようにする。

##### (2) 目付け

目付けは、相手の顔を中心に全体を見ることとし、ここでお互いに相手の目を見る。

##### (3) 間合

ア、立会の間合はおよそ九歩の距離とし、三步前進後における蹲踞しながらの木刀の抜き合せと、技の終了した時点の間合は「横手あたりを交差させる間合」とする。

イ、打突の間合は「一足一刀の間合」とし、この間合は個人の体格、筋力、技倆の程度などにより若干の差があることを指導する。

##### (4) 打突

ア、打突は、充実した氣勢で手の内を絞り刃筋正しく「物打

を用い、後足の引き付けを伴って「一拍子」で行わせる。

イ、打突は、常に打突部位の寸前で止める空間打突となるが、刀で「切る・突く」という意味を理解させる。

ウ、「掛り手」打突動作は「元立ち」が気合になって与える機会を逃すことのないように的確に捉え、「掛け声」とともに気合をこめて行わせる。

##### (5) 足さばき

足さばきは、送り足を原則とし「すり足」で行わせる。

##### (6) 掛け声（発声）

打突時に、「面（メン）、小手（コテ）、胴（ドウ）、突き（ツキ）」と打突部位の称呼を明確に発声させる。

##### (7) 残心

打突後は、油断することなく相手に正対し、間合を考慮しながら「中段の構え」となって残心を示させる。

六、審判法含む審判実技 講師 奥島 快男

審判法「重点事項」

審判員は、剣道試合・審判規則の理解のもとに、左記の事項に留意して、適正な試合運営に努め、試合の活性化を図る。

記

1、試合内容を正しく判定する。

○規則の正しい理解

○対象に適した審判（子供大切）

○一本を見極める力

○動きにきちつと対応が出来る事

○決断をもった行動

○三人の協調性、動きやすい様に動いてあげる。

2、有効打突を正しく見極める能力を養う。

(1) 有効打突の条件と諸要素の理解

(2) 技の違いと錬度に応じた打突の見極め

○相打ちの見極め

3、禁止行為の厳正な判断と処置をする。

(1) 行為の原因と結果の正しい見極め

(2) 禁止行為に対する適確な処置

◎注意事項：時間と打突との関係（足が上がって、体が伸びている時の鈴）の見極めを行う。

自分の得意技には旗を上がりやすい。  
上げた一本に気が残って、次が見えない。



# 居合道中央講習会に参加して

前田 健 志



全日本剣道連盟主催の第三十一回居合道中央講習会が、平成十六年九月十八日・十九日の二日間、京都市武道センターで開催され、本県からは、原田先生と私の二名が派遣されました。

この講習会は、各都道府県剣道連盟で指導的立場の者を対象に全剣連居合と審判実技の講習を行って技能の向上を図ることを目的としたもので、各都道府県で伝達講習を実施することが義務づけられています。

第一日目は開講式のあと上野貞紀先生の講話に続いて、池田晃雄先生から、日本刀の事故防止についての説明と川口俊彦先生の模範演武で、全剣連居合の作法及び実技十二本が、解説書にそって進められました。

続いては、受講者を六班に分けての実技講習が行われました。講師は、八段範士の先生方で、班の編成は、次の通りでした。

- |    |        |    |        |
|----|--------|----|--------|
| 一班 | 上野貞紀先生 | 二班 | 池田晃雄先生 |
| 三班 | 岸本千尋先生 | 四班 | 武田清房先生 |
| 五班 | 山崎正博先生 | 六班 | 河口俊彦先生 |

私は、第四班に所属し、講師の武田清房先生からは、繰り返し行う稽古の中で、特に二本目「後」の足の運び方、三本目「受流し」の手の内、五本目「袈裟切り」の刀の返し方など、実に詳しい指導をうけました。後、質疑応答に移りましたが、交わされる内容からは、各都道府県から参加の先生方の熱心な取り組みを実感することができました。

二日目の午前中は、審判講習です。受講者が、審判員と演武者に別れて模擬試合形式で進められました。開始線への立ち方、発声、合議の宣告など、熱のこもった講習となりました。

午後からは各流派に別れての古流の講習会です。無双直伝英信流では、池田先生・武田先生・山崎先生の三範士から指導を受けました。同じ流派でも、それぞれの流れによって理合の違いがあり、この講習会は、古流の奥の深さを改めて考え直す機会となりました。最後に、「居合道に対する正しい理解と自覚をさらに深めるように」との言葉をいただき、二日間にわたる講習会の全日程が終了いたしました。

講習後の九月二十六日、県立鳴門武道館に於いて原田勝先生の解説で実技が担当して伝達講習会を実施させていただきました。派遣していただいた徳島剣道連盟に感謝申し上げます、中央講習会の報告と致します。

## 第四十二回剣道中堅剣士

### 講習会に参加して

柴田宗忠

まずはじめに、この講習会参加推薦していただいた剣道連盟に感謝しますとともに、参加に当りご配慮をいただいた諸先生、先輩方に心からお礼を申し上げます。

今年で四十二回をむかえた伝統ある中堅剣士講習会の様子を日を追って報告させていただきます。

第一日目、(六月九日水曜日)午後三時より奈良県中央武道場にて開講式が行われた。全剣連常任理事・松永政美先生より本講習会の趣旨説明があった。内容の一つは、講習会のあり方についてである。

①剣道形、②審判法、③指導法、この三点セットはいつも同じで進歩がない、これからは受講生の要望を聞いた上で、ワンポイントで講習を行う方向に持つて行くべきだ。また、講義や指導法は時間がかかることが目的ではない。その真意を理解することで能率を上げることができる。従って本講習会もその例外ではない。他には、  
◇強くなるにはどうすればよいか。

◇時代に即した指導法。

◇これからの剣道のあり方「段位が上だと人間も上だ」と思うと大

間違い」



と先生明茂上

以上のような興味ある講話をいただき関心や、共感しきりであった。引き続き、全剣連副会長・奥園國義先生より剣道指導法の講話をいただいた。剣道の勝利至上主義について先生の考えを述べられた。日本のすばらしい剣道を守るために、さらに進歩させるために、昨今の試合に勝つための剣道は、目的をはずれているのご指摘があった。まさにその通りであると改めて考えを正す思いであった。

四時三十分より全体稽古、稽古は奈良県の地元講師・上垣功先生

をお願いした。日頃の一週間分の汗をかいたようであった。

宿舎は武道場より徒歩六分程度の所にある奈良ユースホテルである。同部屋は鳥取県の警察官・中野厚志先生、香川県の教員、香西新五先生、愛媛県の教員・管幹博先生、高知県の警察官・川村慎一先生の四名であった。今回の講習会の参加者は教員二十四名(39%)、警察官十八名(30%)、会社員六名(10%)、刑務官五名(8%)、



島野大洋先生と

公務員三名(5%)、自営業二名(3%)、消防官一名(2%)、団体職員一名(2%)、法務教官一名(2%)、計六十一名であり、やはり四泊五日の日程では参加できる職種が限られるのではないかと考えた。さらに、会社や職場を五日も空ければ首を覚悟しなければならぬという声も聞こえた。松永先生の言われた二泊三日の日程もうなづけるところである。

第二日目(十日木曜日)朝稽古は七時からだが、六時過ぎには講師の先生がおいでになり、受講生も準備に追われていた。稽古は京都府の剣道範士・奥島快男先生をお願いした。受講生六十名余りが一斉に移動するので、要領よく並ばないと先生方に稽古をつけてただけない場合もある。まさに、学生時代の合宿を思い出す心境であった。

午前中は、広島県の剣道範士・熊本正先生、神戸市の剣道教士・阿部尚志先生による剣道形の講義があった。両先生によるきめ細やかな指導が、四時間にわたり行なわれた。「正しい構えに正しい打が生まれる」「理合にあった打ちの習得」についてが中心の内容であった。特に所作について剣道形中の移動はすり足の上、両手は振らないよう心がけること。また、木刀の扱いが竹刀に通ずる事など細部にわたり指導いただいた。剣道形における心構えが大切であることを再確認にした。

午後三時より、剣道範士・鹿児島県の有満政明先生による指導法についての講義があった。私達受講生、つまり、剣道教士七段でかつ剣道指導者における必要不可欠な条件を教えてください。

一、誠実であること

二、謙虚な態度

三、質素な生活

四、礼儀を重んじること

五、品位ある振る舞い

以上の五つであるが、はたして自分にはいくつ当てはまっているのであろうか。当日、消灯時間を過ぎても考えたが、不誠実、高慢、華美、不作法、下品等の熟語が浮かんでは消え、前記の五つ全てにおいて反対の行動に近いことに改めて気づかされた。

午後四時からは、剣道教士・大阪府の小坂達明先生による実技指導および、お互いによる基本・互格稽古であった。特筆すべき内容は「厳しい切り返し」の連続であった。講師の先生全員が道場に出られ、近距離で指導していただいたため、緊張の連続で、私得意の手抜き稽古ができず、さすがに息が上がった。

第三日目(十一日金曜日)本日は熊本先生の世話係となる。朝稽古は全剣連副会長・大阪の奥園國義範上にお願した。

午前の部、松永政美先生の講義、まず一声、「眠ってもよろしい。」「朝稽古も熱心に取り組まれておられる先生方、疲れもそろそろピークにきているようですので、どうぞお休みください。」と意外な滑り出し。受講を聞き始め、メモを取り始めた。すると、「書くような内容ではありませんので、メモ等とらなくてもよろしい」と意表をつく導人、引きつけられる話術にいつの間にか時間のたつのも忘れてしまった。さらに、思い切った発言、例えば「剣道界の常識は

世間の非常識」とのお話、ユーモアあふれる逸話の数々に聞き入った。

講義の内容の一つは、「剣道の社会的評価について」に触れ、全日本剣道選手権で連覇した宮崎選手は国民栄誉賞に値するのになぜして受賞できなかったのか。それは、剣道に対する社会の評価が十分ではない。要するに評価の対象になっていないのではないか。松永先生の個人的な考えでは、歌手や芸人、柔道家よりは評価があると思うと言われた。また、全剣連では「剣道を通じて教育をどのよ



有満政明先生と



うに行うか」について、常に論議されているとのことであった。  
 午前十時三十分より、常任理事・大阪府の島野大洋先生による「木  
 刀による剣道基本技稽古法」の講習を四時間みっちり指導してい  
 だいた。

午後三時三十分より、受講生お互いに基本稽古、切り返し、打ち  
 込み、かかり稽古と盛りだくさんの大変ハードな内容であった。講  
 師の先生方が「この講習は伝達講習ではなく強化です。」と言われ



たのを思い出した。

稽古は世話をさせていただいた熊本正先生、地元講師の井上茂  
 明先生にお願いした。この日から筋肉痛が続いたのを思い出した。

第四日目（十二月土曜日）朝稽古は大阪の島野大洋先生、奈良の  
 井上茂明先生にお願いした。

午前九時三十分からは、剣道教士・神戸市の小坂達明先生による  
 技の指導がおこなわれた。奈良の上垣先生が本講習会、常時私のそ  
 ばにおられ、「なれましたか？」と何回も声をかけていただいた。  
 また、全ての講義において優しく指導していただき、心強い思いが

した。引き続き、地元救急救命士による心肺蘇生法が行われ午前  
部が終了した。

午後十三時三十分より、宝蔵院流槍術の演武が行われた。槍術を  
見たのは初めてだったので大変興味深く拝見した。午後の二部、京  
都府の剣道範士・奥島快男先生により審判法の講義「適切な審判」  
について。その内容は、審判法において「試合内容を正しく判定す  
る」ことを重点事項として掲げ、留意事項として

◇動きある対応

◇試合を読む



◇三者の協調性

の三つを常に念頭に置き審判するよう指導があった。

講義の後は全講師の指導による審判実技に移った。私は熊本先生、  
安部先生、小坂先生の指導のもと厳しい指導をしていただいた。特  
に熊本先生には手取り足取り、きめ細やかな指導していただいた。  
この実技の時間が今回の講習では最も長く感じられた。稽古と同じ  
ぐらい汗が出たが、冷たい汗だったのを思い出した。

稽古は大阪の小坂達明先生、神戸の阿部尚志先生にお願いした。

午後六時より懇親会、他の受講生と交友を深めた。

第五日目(十三日曜日)午前の部は京都の西本孝医師による講  
義「スポーツ医学から見たドロップアウト」、内容の一部は、「私た  
ち受講生が今まで剣道を続けられているのは、止めていった人々の  
上にある事を忘れてはいけない。」「怒るよりほめよ」「無理をせず  
スキルと頭脳でカバーせよ」であった。また、稽古の後や睡眠中に  
「足がつる」「ふくらはぎが痙攣する」「こむら返り」等の症状には  
漢方薬【芍薬甘草湯】が有効であるとのこと。漢方薬は名前は難し  
くて覚えられないが、番号を表示して薬局で売られており手軽に手  
に入れることができる。番号は【六十八番】か【二〇六八番】、価  
格は八包みで九〇〇円から二〇〇円程度である。私もツムラの漢  
方製剤【二〇六八番】を試してみたが効き目があったのか、夜中に  
痛みで目が覚め、一人で壁を押さなくても良い日々が続いている。  
西本先生のアドバイスは的確であった。

午前中に終了証をいただき同部屋の受講生と柳生の郷へ行き、芳

徳禪寺へ参詣した。柳生家の墓を見学後、正木坂道場へ行った。そこで、偶然にも熊本の有満政明先生にお会いし、先生のお計らいで道場の中を見学できるといふ幸運にめぐまれた。以上、長々と書いてしまいました。次回参加される先生方や稽古の上で少しでも参考になれば幸いです。これで中堅剣士講習会の報告を終わります。



## 平成十六年度徳島県剣道連盟後期講習会

平成十六年九月五日（日） 鳴門武道館

### 松井明（教士八段）先生を招いて

事務局長 藤本雅史

残暑も過ぎ、少し涼ぎやすくなった早秋、岡山県から昨年引き続き、松井明先生をお招きしての後期講習会が鳴門武道館に於いて開催されました。今回は主として少年剣道の指導者を対象に七十名弱の受講生がありました。以下簡単にまとめてみました。

（講話）アテネオリンピックの余韻が残る中、優勝者の指導者としての言葉を引用して剣道にも基礎、基本の重要性を説かれました。又落ちこぼれを作らない指導者の使命を力説されていました。

#### 資料 1・2・3

（日本剣道形）審査の着眼点に基づいた解説があり、呼吸法、理合等剣道に結びついた説明の後、実技が行われた。実際の演舞に準じて、座礼から九分間の立ち合い、お互いに気を合わせた真剣な受講生の姿が目に移りました。

#### 資料 4

（指導法）面を着けての基本、指導者として示範できるように一挙手一投足、掏摸足からの基本打突を確認しながらの実技指導でありました。ゆっくり、確実な打突動作を心掛けると受講生も汗がびっしり、息も上がっていました。その後講師先生による指導稽古が

熱心に掛かる受講生全てにご指導いただきました。

先生の熱意愛情溢れる御指導で予定より三十分もオーバーして午後三時三十分講習会も無事終了しました。講師先生の話にもありました少年後の剣道を見据えた指導を肝に命じ、各道場に帰って指導してくれるものと信じて徳島県の剣道が十年、二十年先に見事な花を咲かせてくれることを期待して報告とします。

岡山国体を控え、又全剣連講師として超多忙な中、故郷徳島の為に微に入り細に入りくわしい指導者の指針としての資料を作ってくださいましたので、付記致します。



## 剣道指導者に求められるもの

剣道教士 8 段 松 井 明

とんでもない台風が次から次へと来て大変な被害をもたらしました。先生方の所はいかがでしたか。お見舞申し上げます。岡山も大変でした。高潮で床上浸水、バス 50 台が浸かり 15 億円の損害だっただけでなげている岡山県の体育協会副会長の知人がいます。

一方、アテネ五輪、さわやかなオリンピックでしたね。

(第 28 会夏季オリンピックが 8 月 13 日夜 (日本時間 14 日未明) アテネの五輪スタジアムで開催式が行われ、史上最多の 202 ヲ国・地域が参加する祭典は、108 年ぶりに戻った生誕の地で 21 世紀の第 1 歩を踏み出した。開催式はアトラクションで幕を開け、役員ら 513 人の選手団を編成した日本は、57 番目に入場行進。女子選手は 171 人で男子 (141 人) を初めて上回った)

もう死に絶えたと思っていた競技、水泳、アーチェリー、ヨットでメダルを獲得しました。今頃の若い人の資質が落ちているとよく聞いていましたが、どうしてどうして、若い選手は、渾身の努力をし、渾身の戦いをして、必死に戦う姿は、日本人、日本国民に純粋な感動をもたらして、多くの人に元気をもちました。

若い人の活躍が時代を担っていくものです。指導者の力というものがかいかに大切かと言うことが確認できたと思います。

アテネ五輪は、列島寝不足になりましたが、日本人の根性を見せつけた五輪でした。元来不得意とする競技でメダルになりました。ドーピングの問題もありました。女性の活躍が目を引きました。

8 月 21 日国体の中国ブロック大会 (鳥取県内) の激励に県体育協会の理事として回っていた時、バドミントン競技会場入口で、日本海新聞の号外がくばられておりました。「徳島県脇町出身の柴田選手、800 自由形で金メダル獲得しました。」と大きな声で、号外を配っていました。すごいことだと血が騒ぎました。本当におめでとうございました。うれしかったですよ。ここにその号外をもってきました。

さて、本題に入らないと……。

現在の剣道は、国際化、競技化、スポーツ化が進み競技成績や勝敗が目立っていますが、21 世紀は、今こそ剣道の原点に立ち返り人間教育を重視した事業を展開していかなければなりません。

21 世紀を迎えて、剣道の競技スポーツ化がより進行し、ますますその国際的広がりを見せています。先のイギリスのグラスゴーで開催された「第 12 回世界剣道大会」では、優勝戦で韓国と同点となり代表決定戦となり、時間内に勝負がつかず延長戦で「突き一本」でかろうじて日本が優勝することができました。

我が国、発祥の剣道は、国際化スポーツとしてその地歩を固めて、もはや、ある特定の国々のみが高い競技力を誇るという時代は過去のものとなりつつあります。

剣道がこのように普及してきた理由は、競技としての魅力だけでなく、剣道修行の究極の目的である「人間形成」人間としての理想を完成する「己の完成」という教育面が世界の人々に受け入れられたことに尽きます。

今の剣道のあり方を憂慮し、理想とした人間教育を目指し、剣道の総合的普及発展を図って行かなければなりません。

## 指導者として何を考えるか

教士8段 松 井 明

アテネの空気が日本人にはよほど合うのか、五輪での活躍ぶりには目を見張るばかりである。しかも、メダリストや共に歩んできた人たちの言葉には、人生万般に通じる含蓄に富んだものが多い。

「大切なのは基本をしっかり作ること。難しい技を小さな時から習得する必要はない」体操男子団体の米田功、富田洋之、鹿島文博の三選手をジュニア時代に教えた城間晃氏の、これが教育方針だったという。

五輪三連覇の偉業を成し遂げた柔道の野村忠宏選手も、父親の基次さんから「小細工を覚える必要はない。正攻法できちんと組め」と言われて育った。

確かな土台作りの時間があつたからこそ、世界の頂点に立てたのだろう。

やはり、柔道でオール一本勝ちだった谷本歩実さんの「勝っても負けても一本、思い切った柔道をしないと自分である意味がない」もよかった。この気迫に相手もまいったに違いない。心技体の充実の証しだ。

競泳自由形で女子初の金メダルに輝いた柴田亜衣さんは、コーチの教え通り、「あせらず、あわてず、あきらめない。」と言いつつ聞きながら泳いだという。なんとすばらしいアドバイスだったことか。

「銅から20年かかって銀。後20年かけて金だね」とアーチェリーの山本博選手。本気のほどはともかく、41歳になる人の、この心意気にも感心した。

このようにトップアスリートたちを指導している指導者のほとんどが基本の習得に渾身の力をそそいでいる。

基本指導は大切であると誰もが知っている。基本指導には、根気と勇気がいる。辛抱がいる。

生徒に飽きない、メンタル指導、ここで工夫の楽しさが生まれる。生徒も辛抱を覚える。小細工には限界がある、基本には限界がない。あわてず、一つ一つ基礎を積み重ねることだ。

人を育てることに失敗は許されない。指導は、命がけでないとできない。

## これからの剣道人

### 1. 正しい時代認識

- 学校教育・家庭教育・社会教育の現状……有史以来最悪
- これからの社会……不透明な時代、変化の多い世界、多様化、情報化、国際化、高齢化、少子化、生涯学習化。
- これからの人間……豊かな心、個性を尊重、変化への対応力、自己教育力文化、伝統の尊重。

### 2. 指導者であり学習者・修練者であること。……「師弟同行」

- ① すばらしい剣道を求め創造し伝承する。……「これからの剣道」
- 剣道のすばらしさ……高齢者になっても上達する可能性を持って継続できる。
    - ・生涯学習の基礎から作られ、健康な心身が育成される。
    - ・自ら変化に対応できる心豊かな人間が育成される。
    - ・自己の人生を創造し「生き生きと生きる力」が育成される。
- ② 剣道を通して自ら学習、指導に当たる。
- 人間としてのあるべき姿……「指導者のあるべき姿」
    - ・文武両道……知のなき剣道は暴力である。
    - ・生涯学習の基礎……自己教育力
    - ・社会性……忍耐力、自他共栄
    - ・真の礼儀……子弟同行
    - ・文化・伝統の尊重……国際人としての基礎
- ③ 共に健康を求め合う姿勢を持ち続ける
- ・身体的……総合的にバランスのとれた身体・体力
  - ・精神的……個性的で想像力に富む精神力
  - ・社会的……他を大事にし、協力し合う心（※特に努力したい）

### 3. 生涯剣道の実践者であること

- ・剣道を高める人……
  - ・剣道を広める人……
  - ・剣道を楽しむ人……
- | 共に剣道を支え  
| 共に剣道で人生を充実したものにする。

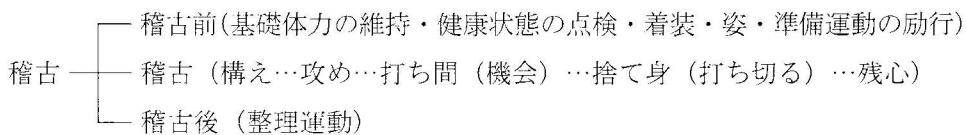
#### 4 上達しつつ生涯剣道

剣道は、競技年齢が高まっても楽しく続けることができる。また、向上し続ける可能性を持っている。

##### (1) 上達し続けるために

- ① 師そして仲間を尊重する
- ② 稽古の数（時間よりは回数）
- ③ 技の選択とその洗練
- ④ 健康の維持……運動・休養・栄養
- ⑤ トレーニング（生涯予防と補強）重視
- ⑥ 見取り稽古重視
- ⑦ 読書と他文化の理解
- ⑧ ストレスに勝つ剣道

##### (2) 上達するための稽古法



- ① すばらしい一本を求め続ける
- ② 常に基本を復習し続ける
- ③ 「打ち間(間合・攻め・機会)」の研究……「懸待一致」を理想として
- ④ 「退かないこと」の妙味
- ⑤ 五角稽古の心得…まず初太刀を大切に、対々の稽古、先の技での稽古(掛かりの稽古)
- ⑥ 自分の目標を追う稽古(勝利至上主義からの脱却)
- ⑦ 呼吸法

剣道はすばらしい……みんな仲良く楽しく剣道をしましょう。

## 日本剣道形の審査上の着眼点について

教士8段 松井 明

全剣連の日本剣道形解説書(昭和56年12月7日制定)の中程に「日本剣道形審査上の着眼点」が(昭和60年6月26日)示されています。

この着眼点は、10項目からなっています。

これを自分の剣道に取り入れることが大切です。

スポーツ的剣道、競技としての剣道ではなく、警察剣道は、武道である。との信念の元に指導してきました。つまり、打つことは、切ることは、みごとに切ること、刃こぼれせずにみごとに切れることであります。剣の技は、その相手と協力して決めていく、対立と調和であると、師匠の石原先生から教わりました。

1週間前まで、世界を感動の渦に巻き込んだアテネ五輪、日本の活躍はすばらしく、大層の団体競技をテレビで見ている、剣道で使う「瞬間善処」でみごと金メダルを獲得しました。

審査上の着眼点をご覧ください。

- 1, 立ち会い前後の作法、立ち合いの所作、刀の取り扱いを適切に行っているか。……皆様おわかりですので省略します。
- 2, 5つの構え、小太刀の形における半身の構え、入り身の所作を正しく行っているか。……構えは、大切です。入り身は形でなく動作です。諸手左上段などあとで1本づつ練習をしましょう。
- 3, 目付、呼吸法など心得、終始充実した氣勢、気迫をもって合気でを行い、段位にふさわしい迫真性、重厚性が見受けられるか。……目付の問題ですが、非常に大切です、相手に対する目付、自分に対する目付、があります。第三の目付を発見しました。徳島県剣道連盟の機関紙にも書かせていただいたことがあります。私にとっては、非常に役に立っている。剣道の歴史が長い。第三の目付を発見したと思ったら、すでに先人が言っていた。世阿弥が花鏡の中で「離見の見」と言っている。自分の剣道を角度を変えて見る目付です。どのような基準で見ると言いますと、
  - ① 審査員・審判員が目で見える目付。
  - ② 自分に厳しく相手に寛大な目付。
  - ③ 相手よりハンデーをつける目付。将棋で言えば、飛車角落ち、囲碁で言えば、一目を置かせるとか

呼吸法ですが、これは非常に奥が深く修行中です。兵庫県の松本敏夫先生の呼吸法、石原先生の呼吸法などを参考に勉強中ですが、剣道形の呼吸法が良いように思いますし、腹式の自然呼吸、楽な呼吸であり、呼吸法が楽でないと思われています。段位にふさわしい迫真性、重厚性については、真剣勝負のような迫真性、只早いばかりでなく、重厚性が備わってこなければなりません。重厚性は、剣道で言うと「ため」があり、どしりとした態度姿勢というものが求められます。呼吸法は、技を決める。崩れがなくなる。終始充実した氣勢、十分な気、攻め勝った時その内容に含まれてきます。

4、打太刀、仕太刀の関係を理解し、原則として仕太刀は打太刀に従って始動しているか……打太刀、師の位、師の姿。仕太刀は、弟子の位、弟子の姿。原則として打太刀が始動してから、仕太刀は遅からず早やからず、打太刀と仕太刀は目に見えない糸につながれているように始動します。品位のある形を打つためには必要不可欠なことであり、大切なことです。合気になる事と思います。

5、太刀の形においては、「機を見て」小太刀の形においては、「入り身になろうとするところを」とある打突の時機は適切であるか。……仕太刀の十分になったところを切り込んでいく。充実する時、隙ができる時、絶えず入れ替わります。機が見えている時は遅い。剣道の虚実、実の終わり際を打つと虚になったところを打てることとなります。心眼で見えた時を打つ。関東の高野孫次郎先生は「見えた時、出ていなければならぬ。」堀口清先生は、「見えた時は遅い、気配を打つ。」中野八十二先生は「未発を未発の発で打て、未発の発とは、未だ発せざる所」と言っています。その前の攻めが利いていなければなりません。3つの気、気は、心から発動したものが気である。

① 溢れる気 ② 澄む気 ③ さえる気

6、各本ごとの理合を熟知し、技に応じた打突の度合い、緩急強弱を心得一拍子で行っているか。……ここが大切です。一拍子で打つ。

スポーツ（遅速中心）と武道（心気中心）との解釈に差があります。低段者から高段者まで幅が広い。「このままにしておこう。」我々以上の人が出たら直す、それまで手をつけません。

4本日の理合が変わる。勝つ気、勝機が変わってくる。従って内容が変わってきます。

緩急強弱を知る。特に3本目、早からず強からず弱からず丁度よいところ。相手により緩急強弱を使い分ける。初心者に対する時、5段の人、6段7段8段の人、相手によって変わってくる。それぞれの緩急強弱を使い分ける。

7、打太刀は、一足一刀の合間から打突部位を打突し、仕太刀は物打ちで打突部位を確実に打突しているか……切る。物打ちで切れているか。1本になるかどうか。よく切れるところは1点、反動が手にこない。鏢は釣り合いをとるためにある。小手を防ぐためでない。

8、太刀を振りかぶる度合を心得、振りかぶりすぎて剣先が両拳の高さより下ってはいないか。……剣先が下がる。

9、足捌きはすり足で行い、打突した時、後ろ足を残さず前足に伴って引きつけているか。

10、仕太刀は打突後、十分な気位で、残心を示しているか。打太刀は仕太刀の十分な残心を見届けてから始動しているか……残心が大切である。

# 徳島の剣道史

## 阿波の直指流剣術の

### 系譜と関連資料

剣道史担当理事 坂本裕二

はじめに



直指流剣術の創始者は山中平内重政である。重政は長谷川十郎左衛門紀隆に伝授したが、重政並びに紀隆に関する資料が無い為、詳細不明である。ただ蜂須賀家が寛政元年（一七八九）幕府に報告した「書き上げ」と称する文書の中に、その道系があるので、それに基づいてこの文章を作成した。

紀隆は藩上二百石浅野家四世浅野金右衛門喜任に伝授する。浅野家初代玄碩は医術を以て蓬庵公に仕え、以後三代医家として出仕するが、四世喜任は長谷川紀隆に直指流剣術を教導され、藩内で有名な剣士となり、指南者に取り立てられた。

喜任は百石藩士荒木清太郎長之に伝授し、長之は二百石藩士穂積家五世門太清雪へ、清雪は二百石佐々家四世佐々小惣治長美に伝授した。長美は蜂須賀家文書によると阿波国直指流剣術の師家として

幕府に報告された。この長美は嫡子猶蔵直幸に伝えた。直幸は浅野家二百石八世猪一郎尚前（号桃軒）に伝え、尚前は浅野家九世辰太郎尚明（号準水）に伝授す。辰太郎は子無く藩士黒部久哉の二子恵三郎準水を迎え嗣として育成する。

辰太郎は恵三郎を教育するに、「獅子有り、兎を深溪に投ず」の概で厳格に行つた。恵三郎はよく耐え忍び勉強した。その結果、同門中誰よりも早く奥義を極めた。これが浅野家十世恵三郎幸尚である。幸尚は長じて慶応三年（一八六七）同門中の高井克二郎、渡辺賤夫、滝直太郎等とともに藩より選出され、西国十一藩の治政の得失、文武の弛張等の視察に行き、明治二年（一八六五）藩は徳島城西の丸に長久館を設立した。この時父尚明は当館の頭取に、幸尚は助教に任命された。

世は変わり明治四年は廢藩置県、脱刀令、同九年には廢刀令、その前、明治六年には秩禄処分により武士階級は消滅し、いよいよ生計が立たなくなった。その上剣術は公的教育の場から姿を消し、政治的・思想的・世間の風潮にも逆境に立たされた。

前述の同門の高井・渡辺は出仕して後日陸軍の将官になり、武田長平は撫養中学校の剣術教師となり、各々の道を歩んだが幸尚は家から出ず、祖父・父の志を継ぎ、剣を修行する者があれば教えた。教導を受けた者五六百人と言う。その中で優秀な剣士、十余名を育成した。徳島工業学校武道教師塩田嘉太郎・同小松和平・同越久田繁次は彼の門弟である。

明治廿八年（一八九五）武徳会支部創立の機運おこる時、欣然と

して「時来る」と馳せ参じ設立委員となり、同志と相計り、明治三十二年（一八九九）二月二十六日、支部の開会式を盛大に行つた。明治三十九年（一九〇六）四月十五日、天命は如何とも為し難く六十四歳で没した。茲に門弟相計り幸尚の頌徳碑を建立して功績を讃えた。

一方浅野家九世辰二郎尚明の門人十八名は、池田土井口長次兵衛が願主となり、嘉永二年（一八四九）二月吉日三好郡加茂八幡神社に武道額を奉納した。

また長谷川十郎右衛門紀隆は、藩士正木権左衛門に、正木は藩士二百石伴所右衛門に、伴は藩士二百石奈良井嘉平治へ、奈良井は藩士八石加納文十郎へ、加納は藩士十一石是安恵九郎へそれぞれ伝授した。是安恵九郎は寛政元年には幕府へ徳島藩の師家として報告された。

以上が阿波国に於ける直指流の略系譜である、是をわかり易くすれば左の如くなる。

### 阿波に於ける直指流剣術の略系譜

元祖

四世二百石

山中平内重政

浅野金右衛門喜任

没年不詳

没年不詳

元文元年十月廿五日

没

正木権右衛門

没年不詳

高百石

高三百石

高八石

高十一石

伴所右衛門—奈良井嘉平治—加納文十郎—是安恵九郎—

天明五年六月 文化九年七月

四日没

廿九日没

一七八五

一八一二

高百石

高二百石

佐々家四世高二百石

新井清太郎長之

穂積門太清雪—佐々英水無別（小惣治）

没年不詳

明和八年七月

文化三年七月十七日没

三日没

一八〇六

一七七—

佐々家五代

高二百石 八世高二百石 九世高二百石

佐々猶藏直幸 浅野猪一郎尚前 浅野辰太郎尚明準水

文政十一年 嘉永六年四月 明治六年没

七月没 十一日没 一八七三

一八三八 一八五三

徳島工業学校剣道

十世高二百石 教師 々 々

浅野恵三郎幸尚 塩田嘉太郎 小松和平 越久田繁次

明治三十九年四月

十五日没

一九〇四

撫養中学校剣道教師

武田長年

高井克二郎後将官となる

渡辺賤夫 々

滝直太郎 庚午事変に連座、切腹を命られ明治三年九月三日

城下住吉町の蓮華寺で白刃、十八才

「三好郡三加茂八幡神社の武道額」

三好郡三加茂町中庄、一一八七 宮司 柏木友之

この武道額は旧村社八幡神社の拜殿内に掲げられている。従って風化も破損もなく、保存状態は良好で墨書も肉眼で明瞭に判読出来る。構造は檜の枠、縦八〇センチ、横一八〇センチ、枠の幅は十五センチ、枠内に杉板を縦に張られ、この板に墨書で中央に向かって右隅に「奉」と大書し、左隅に「納」、右の奉の下に「直指流」左の納の下に「嘉永二年二月吉日」、この下に井口長次兵衛、左側の枠の下方に世話人□□と書かれている。中央に三本の武器掛けがあり、奉納当時は直指流武器三振りであったと思われるが現在は紛失して日本剣道形の木刀一振り揚げている。この木刀掛けの下段に右より浅野辰太郎門人、山下源兵衛、武重権次郎、川原清兵衛、木藤儀兵衛、嶋田岩喜知、林徳蔵、高橋右満津、田中弁助、国安木郎兵衛、山下安右衛門、武藤富三郎、大塚半太郎、国安善兵衛、武重富太郎、田中岩太郎、伊澤玄由、曾我部多三郎、高橋森蔵、井口鹿太郎、井口長左衛門、井口保次郎、井口吉太郎、

己

嘉永二年二月吉日 井口長次兵衛

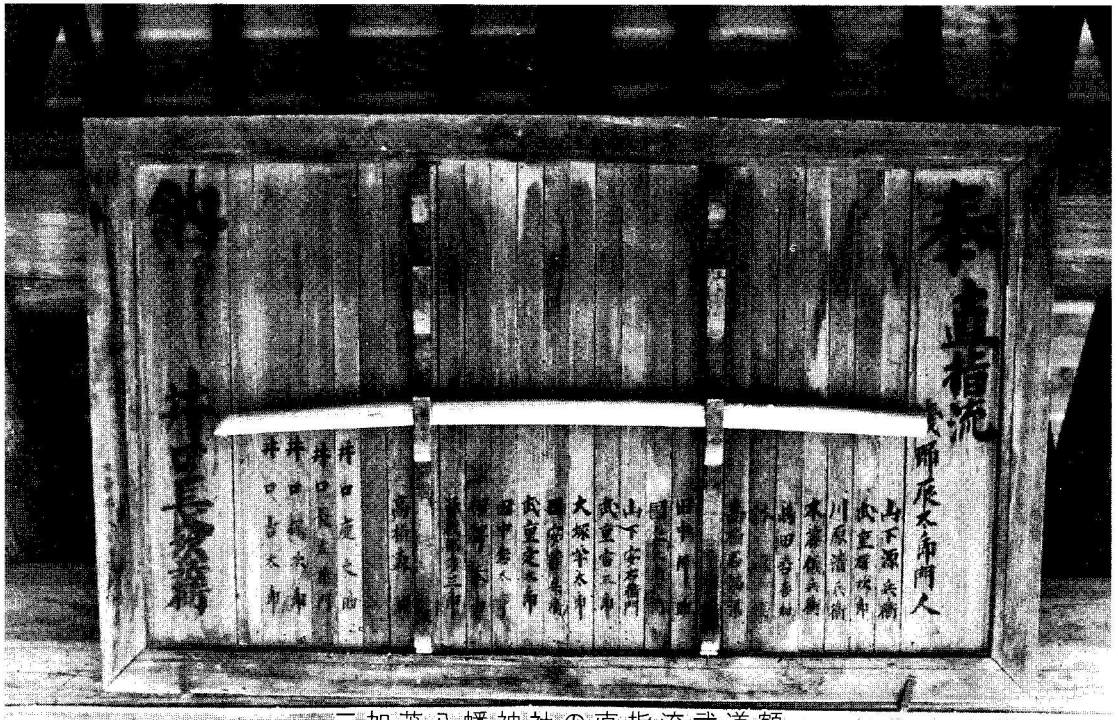
西

と墨書されている。この十八名の「身居」を調べてみると

頭入百姓 山下源兵衛、川原清兵衛、木藤兵衛、山下安右衛門

頭入庄屋二男武重権次郎、同三男武重富太郎

頭入庄屋 武藤富三郎



額 直指流 武道 三加茂八幡神社

頭入五人組 国安太郎兵衛

頭入奉公人 高橋左満津 高橋森蔵

御蔵百姓 田中弁助 国安善兵衛

来り人 林徳蔵(菓種業)、伊澤玄由(医師、私塾経営)

郷付浪人 田中岩太郎

稲田家家中 大塚半太郎

井口家家来 庄右衛門三男島田岩喜知

池田大隈家来 曾我部多三郎 以上十八名

池田士二百五十石井口辰次兵衛の二男井口鹿之助 同長男長左衛門

三男保次郎 同四男吉太郎 以上井口家四名

己

嘉永二年(一八四九)二月吉日に、願主井口長次兵衛

西

によって当神社に奉納したものである。

亦加茂の庄屋控帳を見ると、池田地方は伊予・讃岐・土佐三藩に接する重要な土地であるので幕末の動乱期に武芸を盛んに奨励した。

文久二年(一八六二)にはこの地方の帯刀の剣術者を調査し、翌三年(一八六三)に稽古会が行われた。

この時は稽古勸請方、才判方、小頭四名の各役を設置し、池田陣屋で郡代見分の本格的稽古会を行った。元治元年(一八六四)には百姓・町人総ての剣術を嗜む者を集めて行った。此等池田士、井口家が陣頭に立ち、行ったものと思われる。この一枚の武道額をみれば、その時代の剣術の趨勢が分かる。

直指流免許状

解説

直指流兵法の表裏を累年、怠り無き之条

先師相伝の目録通り伝授之訖。

自今執心之輩之在る者に於ては、当流の法則に違はず、之を存じ、長く相伝せらるべき者也

依て一書件の如し

倭朝 直指発頭（創始者）

山中平内重政―長谷川十郎右衛門紀隆

浅野金右衛門喜任―荒木清太郎長之 穂積門太清雪

佐々無別長幸―佐々猶蔵直幸―浅野猪一郎尚前

浅野辰太郎―浅野幸尚 徳島県立工業学校武道教師

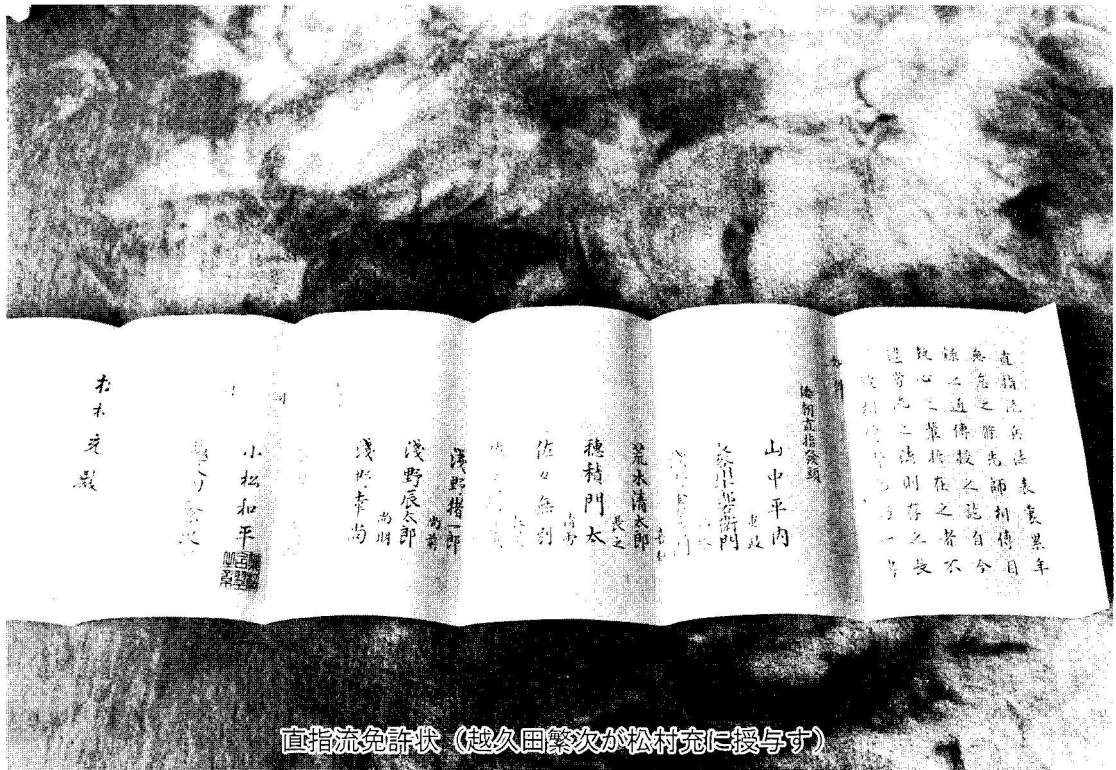
塩田嘉太郎

小松和平 越久田繁次

明治四十二年三月二十三日

松村充殿

この免許状は徳島県立工業学校武道教師越久田繁次が明治四十三年三月二十三日に同校卒業式に於いて卒業生松村充に授与したものである。明治三十二年に武徳会が創立されたが、未だこの様な免許状を卒業式に授与されていた。



直指流免許状（越久田繁次が松村充に授与す）

「浅野恵三郎幸尚頌徳碑」

浅野先生碑銘

明治三十九年（一九〇六）四月十五日徳島藩師範浅野先生享年六十有余で没す。大雄山興源寺の先塋の側に葬る。浮屠に口して曰く轍道一旨居士と諱は幸尚、初は雄亮と称す。後恵三郎と改める。藩士黒部君久哉第二子なり、年甫九才、浅野準水翁に贄を執り単り伝舎に入り剣術を修す。始め某侯に故ありて藩祖蓬庵公客食す。医碩者を養いて嗣と為し医を以て仕う。以下中略

末尾の句に

嶄然頭角 命名夙馳す 善は祖業に継ぐ 規矩自持し妙技絶倫

世英姿を仰ぐ 志行高尚 人清儀を慕う

其徳巨口 闔藩宗師 爰に貞氓に勸し 百代に継垂す

大正元年八月 陸軍大将男爵上田有澤

題額

門人矢田徳太郎 謹撰

富田伊介刻

大正元年八月に門人達が相計り陸軍大將の上田有澤が「振武」の題額を揮毫し、門人矢田徳太郎の撰文により、徳島助任興源寺山門右側西向きに頌徳碑を建立した。尚工人は富田伊介である。

おわりに

直指流剣術の師範は代々徳島藩の藩士

が継承したので藩士間では多く普及されたが、庶民は少ない。

一方池田地方は池田土二百五十石井口家が当流を行い、普及したので、この地方では多数行われ、遠く徳島城下まで来て、浅野辰太郎の門に入り修行したのもいる。しかし阿波国全体から見れば貫心流武術が第一位で、直指流剣術は僅少である

世変り維新後、剣術は衰微し、剣術家は無用となったが幸尚は祖父・父の遺志を継ぎ、指導を二途に行い、特に剣の修行を通じ人材育成に留意したので優秀な人物が輩出し、その門弟たちが大正元年に、幸尚の頌徳碑が建立されたのも敢て過言ではなからう。

末尾になるが、堺市の浅野恵三郎の後裔浅野吉夫、三加茂、郷土史家田中合の両先生資料御提供並びに御教示により記述した。深甚なる謝意を表します。



浅野恵三郎幸尚の頌徳碑

註一  
書き上げ

峰須賀家文書の中にある控書、寛政元年幕府は武芸指南者の氏名、流派の来歴等各藩に命じ報告させた。この控を「書き上げ」と言い東京国立文書館に保管されている。

註二

池田士 大西侍とも言う、三好郡池田方面に居た藩士で、高二五〇く

一〇〇石の知行を有した。大西城代中村氏の有力な与力であった。大西代官の支配になり、寛政十二年（一八〇〇）には平士に昇格しそれより郷仕置の支配下になった。始め六人あったが橋本家断絶、中庄井口家、池田町馬宮家、同長浜家、同武川家、谷家の五家となる。

図版一 浅野恵三郎幸尚の頌徳碑

図版二 三加茂八幡神社の直指流武道額

図版三 越久田繁次が松村充に授与した直指流免許状

参考文献

峰須賀家文書

「寛政元年諸芸指南仕面々并芸方名目伝来書共」

「寛政元年原土諸浪人無格者陪臣武芸指南仕候者共芸方名

目伝来書共」

国史大辞典 吉川弘文館

日本剣道史 山田次郎吉著

日本武道大系 同朋会



# 大会所感

## 四国中学校総体・

## 一年生大会を開催して

中体連剣道専門部 白木洋一

平成十六年八月八日に、鳴門武道館を会場として四国中学校総体が開催された。中学校の四国総体は、四国四県を順番に持ち回り開催となっている。個人的なことであるが、十七年ぐらい前に徳島で四国大会が開催された時に、元専門部長である富田先生より前日の懇親会に呼んで頂き、当時の香川県専門部長「都倉先生」・愛媛県専門部長「光宗先生」方に紹介されたことを昨日のように思い出す。

今年の四国大会では、男子文理中学校が優勝、女子阿南第一中学校が準優勝、那賀川中学校が第三位、個人戦においても、女子「平野千尋」選手が準優勝、「河田紋」が第三位、というすばらしい結果をあげている。

今回の四国大会では、地元開催でもあるので昨を上回る結果をあげたいと考えていた。結果は男子が徳島県勢同士の決勝戦と

なり、文理中学校が僅差で相生中学校を敗り、県予選の雪辱を果たすかたちとなり見事二連覇を果たした。

女子団体戦も那賀川中学校が予選リーグで高知中学校に敗れると不安なスタートとなったが、予選二位で決勝トーナメントにコマを進めた。昨年準優勝の阿南第一中学校も予選リーグ香川県の土庄中学校に敗れ、二位で決勝トーナメントに進出した。準決勝の高知戦では、一対〇わずか一本の差で決勝進出はならなかった。那賀川中学校は決勝で高知中学校に四対一で勝ち、予選リーグでの雪辱を果たし見事優勝した。

個人戦でも、男子は文理中学校の鎌田憲資選手が自分の剣道を發揮し準優勝。女子では、県大会三連覇という偉業を成し遂げている平野千尋選手が、昨年の準優勝の悔しさをはらすべく見事優勝。大会を通じて徳島県選手団は、正々堂々としかも正しい剣道で活躍できたように思う。また、男子の個人優勝した愛媛の天下選手も基本的に忠実でしっかりとした剣道で優勝を果たした。全国大会に行っても思うことだが、やはり正しい剣道で勝つと

いうことが大切であると考える。

平成十八年徳島開催の全国大会に向け、十月二日に松茂町総合体育館で一年生大会を初めて開催した。団体戦は三人制で行い、個人戦も各校二名で実施した。男子団体は文理中学校A・Bチームが決勝戦を行いAチームが優勝。女子は阿南第一中学校Aと北井上中学校Aが決勝戦を行い、代表戦にもつれ込む熱戦になり阿南第一中学校が優勝。北井上中学校は敗れはしたもののBチームも三位に入賞し層の厚さをみせた。

個人戦も一年生らしく元気のある試合が多く見られた。試合の中で感じたことは、小学校時代から中学生の剣道にいかにスムーズに進歩させていくかが大切であるということだ。中学生は身体的な発達にも個人差が大きく、竹刀の長さが変わることに対応することが大切な要素である。試合運びを学ぶことと、基本を再度練り直していくことを両輪としていかなければならないと考える。この大会に出場した中から来るべき全国大会に出場し、正しい剣道で活躍する選手が一人でも多く出ることを願っている。

# 大学連講習会を終えて

徳島大学医療実剣道部

竹 島 佳 代

もとは違う「からだ・心」の疲れを感じる  
ことができ、とても充実するものになると  
実感しました。

大阪体育大学の神崎先生をお迎えした二  
日間（三月五、六日）の講習会が終わりま  
した。この講習会で、わたしは新発見と再  
発見の連続でした。自分では出来ているつ

次に「間合い」特に「形」のときですが、  
礼のときの「九歩の間合い」、横手あたり  
の間合い」、そして「一足一刀の間合い」の  
それぞれの違いを教えていただきました。

もりでも実際は大きく違っていたり、普通  
の大学の部活動では考えていないようなこ  
とがたくさんありました。先生に教えてい  
ただいたことはどれも基本的なことでした  
が、自分を見直す良い機会だったと思いま

同じ三歩入るといふ動きでも、打ち間に入  
るときとそうでないときがある。というこ  
とは今まで考えたことがなく、とても驚き  
でした。また、説明を聞くとその一つ一つ  
に意味があり、なるほどと納得しました。

す。まず、剣道に対する「気持ち・気構え」  
について。「素振り」や「切り返し」は普段  
は準備運動程度で考えがちですが、その一  
つ一つに深い意味がありました。また、「形  
稽古」も段審査のためだけのものではなく、

このように「形」におけるすべての動作を  
考えながら行うと、とても緊張感のある稽  
古ができたように思います。間合いに関し  
て今まであまりしつかりと考えていなかっ  
たのですが、とても奥が深くて難しいです。

剣道におけるすべての基本要素を含んだも  
のです。そして「打ち込み」と「掛かり稽  
古」も大学の稽古では同じようになりがち  
ですが大きく違うものです。このように、  
稽古に対する気持ちを変えるだけで、いつ

そして「息繋ぎ・継ぎ」。切り返しするとき  
はまず遠間で気を充実させ、打ち間（一足  
一刀）に入って面を打つまで息をつなげる。  
そして九本目の左右面を打ったあと、その  
気持ちをつなげたまま次の打突に入る。最  
後と同じようにつなげる。たったこれだけ

のことと思うのですが、一度の切り返しだ  
けで息が上がりました。切り返しという一  
連の動きの中で気持ちを切らないというこ  
とを、呼吸の使い方ひとつで大きく変わっ  
てくるものだと実感しました。声を出すタ  
イミング、出し方で気持ちもずいぶん変わっ  
てくるものだと感じました。

このように、多くの新発見・再発見をし  
て講習会を終えましたが、今回教えていた  
だいたことをこれから生かしていかなけ  
れば意味がないと思います。そしてまた自  
分ではやっているつもりにならないように、  
ときどき鏡で見たり、人に見てもらったり  
して意識を続けていきたいです。むずかし  
いこともたくさん考えましたが、今回の講  
習会でたくさん先生方と稽古させてもらっ  
て、たくさん教えていただいて、本当に楽  
しかったです。私はこの夏で大学の部活動  
としての剣道は引退となりますが、これか  
らの剣道人生に向けてとてもいいスタート  
になりました。これからこのような機会が  
あるたび、ぜひ参加したいと思います。本  
当にありがとうございます。

# 各種大会に参加して

## 第二十六回スポーツ少年団

### 剣道交流大会に出場して

監督 寺西明弘



平成十六年三月二十六日、待ちに待った、第二十六回スポーツ少年団剣道交流大会が福岡県

立スポーツ科学情報センター、アクシオン福岡で開催されることになりました。

私にとっては、全国スポーツ少年団の監督は今回が二回目の大役でありました。ありがたい気持ちと前回(第二十二回北海道大会)ベスト8より、上をめざすという気持ちでいっぱいになり、勝負へのこだわりをぬぐいきれず、大会に臨むことになりました。

全国大会への県予選は、平成十五年十二月七日行われ、その結果、

#### 団体戦(小学校)

監督 寺西明弘(鳴門市光武館)

先鋒 岡内拓末(小松島少剣クラブ)

次鋒 櫻木舞(坂野少年剣道クラブ)

中堅 川邊祐樹(鳴門市光武館)

副将 岩原沙也香(徳島至誠館)

大将 原悠介(蔵本少年剣道クラブ)

#### 個人戦(中学校)

男子 鎌田憲資(徳島至誠館)

女子 横山依利加(那賀川少年剣道クラブ)

以上の皆さんが代表選手として選出されました。

代表選手が決まってからは、中学生については、各個人に調整方法をまかせ、主に小学生を中心に合同練習、県内外の強豪チームとの練習試合を行ってきました。

団体戦に出場するメンバーは非常にほとんど話することがなく、お互いがほとんど話をすることがなく、チームとしての行く先を心配しました。

そんな心配をよそに福岡に向け出発することとなりました。

前日福岡入りをした私たちは、チームを

一つにする目的で市内を観光することになりました。観光中、中学生の鎌田、横山両選手が小学生の面倒をよく見てくれて、あれほどぎこちなかったチームを一つにまとめてくれ、逆に、仲が良すぎて今晩寝なくなるんじゃないかと心配するぐらい仲良しチームに変身してくれました。

これでチームワークは心配ない、目標三位以内をめざして頑張るぞと言う気持ちで大会当日を迎えることとなりました。

第一日目、監督会議、団員研修、オリエンテーション、開会式、日本剣道形、基本錬成、指導者研修、交換交流会の日程で行われました。開会式には、さすがに全国からより抜きの選手が集まっています。各種大会で好成績を残している顔見知りの選手も多数出場していたため、選手達も緊張の色が伺えました。

第二日目、さていよいよ大会本番、予選リーグを迎えることとなりました。団体戦の予選リーグの対戦相手は、愛知、神奈川の両県で最初に愛知と神奈川が対戦する為、相手の戦力を分析することができると思い

ましたが、選手達には、対戦相手を見せてプレッシャーになってはいけないと思い、鎌田、横山両選手に選手達の練習を頼み、私が対戦相手の試合を観戦しました。愛知対神奈川戦は二対一で愛知県が勝利を収めました。内容からして愛知の副将の強さが目立った試合でした。しかし、それ以外は、我がチームが勝っていると思えました。

予選リーグ一回戦、先に勝利している愛知県との対戦だが、選手達には対戦相手のことは何も言わず、ただ、「いつもの通りの試合をすれば勝てる相手である。」と一言だけ言って選手達を送り出しました。先鋒岡内選手、試合開始後、気合いを入れるが声がかうわずり、緊張しているのか、いつもの岡内選手の気迫と全く違う様子で、引き分けてしまいました。同様に櫻木、川邊選手も普段の剣道ができず引き分け、愛知の副将は本大会ナンバーワンと思われる強さであり、岩原選手善戦するも二本負け、大将が二本取りしない限り我がチームの予選突破はないので、原選手に二本取るように指示して送り出しました。原選手は、期待通

りの動きを見せ、つばぜり合いから相手が場外に吹っ飛ぶほどの引き胴を打突し、完全に一本と思われたが旗は上がらず、しかし、気迫で相手を場外に出し、反則で一本、

後一本と思った瞬間、原選手の見事な飛び込み面これは完全に決まったと思ったが、旗は一本しか上がらず不十分。残り時間は後わずか、原選手は一か八かの捨て身で面に飛び込みましたが相手もそこは、読んでいて小手を決められてしまい引き分けました。この時点で予選リーグを突破することはできませんでした。これは、全て私の責任で私が子供達に三位以内を目標に頑張ろうと意気込んだ為、それが子供達にも影響し普段の実力が出せなかったと思います。

予選リーグ二回戦、神奈川戦では子供達に「もう気負うこともない、全国大会を思い切り楽しんでこい」と送り出したところ、先鋒岡内選手は他のチームが振り向くような気迫を発し一本勝ち、後に続けと櫻木、川邊、岩原、原全選手が勝利を収め、神奈川に五〇の大差で圧勝しました。試合終了後、審判長である甲斐先生から川邊選手に

「予選リーグ突破したんだらう。」と尋ねられ、「いいえ」と返答すると信じられない顔をし、甲斐先生が大会本部に確認する一幕もありました。

男子個人戦予選リーグ一回戦、鎌田選手は岐阜の加藤選手と引き分け、二回戦栃木の横山選手に二―で勝利し、勝者数とともに加藤選手と同数になり、代表決定戦となりました。決定戦では、互いにけん制しあい勝負が着かず延長戦となり、鎌田選手がつばぜり合いから相手の竹刀を打ち落しての引き面が見事に決まり、予選リーグを突破しました。

女子個人戦予選リーグ一回戦、横山選手は千葉の神作選手との対戦、つばぜり合いから横山選手の動きが止まった瞬間、引き胴を決められたが、決して焦ることなく攻め続け、逆胴を決め、更に出ばな面を決め勝利する。二回戦、富山の柿谷選手との対戦では、一回戦同様、動きが止まったところを飛び込まれ面を先取されるが、時間すれすれで面に飛び込み引き分け、勝者数で横山選手が予選リーグを突破しました。

大会最終日、男子個人戦決勝トーナメント一回戦、鎌田選手対和歌山の前選手、互いに責め合うもなかなか決め手がなかったが、試合巧者の鎌田選手が引き面を決め、このまま逃げきるかに思われたが、時間すれすれに鎌田選手が小手にいったところを面を取られ、延長戦となり、健闘むなしく、引き面を取られ敗戦しました。前選手は、その後決勝まで進み準優勝となりました。

女子個人戦決勝トーナメント一回戦、横山選手対北海道の長内選手、前半、横山選手が小手、面の連続技を仕掛け、有利に試合運びをしていましたが、一瞬のスキをつかれ、相手に引き胴を決められ一本負けとなりました。

鎌田、横山両選手は県代表の面目を保ち、見事、敢闘賞を受賞しました。

閉会式では、入賞選手に対する表彰式が行われた後、最後に審判長である甲斐先生より、講評がありました。講評では、一般的に気迫がないことを指摘されましたが、「全国代表選手が集まる中、この中でただ一人、気迫のこもった声を発していた人がいます。

それは、徳島の岡内選手です。」と褒め称えてくれたとき、背筋に寒気がするほど震えました。試合では、予選リーグを突破することはできませんでしたが、全国大会の閉会式で、徳島県の名を言って頂き、本当に自分のことのようにうれしい気持ちでいっぱいでした。

このチームは、これで解散となりますが、この大会の思い出を心に刻み、これで終わるのではなく、いつまでもつながりを大切に、互いに励まし合い、常に大きな目標に向けてさらなる飛躍をめざして欲しいと思います。

最後になりましたが、大会出場準備にあたって遠藤会長を初め、剣道連盟の諸先生方、出場選手が所属する各道場、各中学校の先生方、並びに、合同練習試合では、早朝から会場準備、弁当の手配等でお世話になった光武館保護者の方々、本当にありがとうございました。

また、選手の保護者の皆さんには、金銭的な面でご苦労かけたと思います。大事な選手を預かり、気の行き届かないことばかりで、本当にすみませんでした。その上、

私自身のわがままも通して頂きありがとうございました。これら全ての事に対して、書面をもってお礼の言葉と代えさせて頂きます。

**試合結果**

予選リーグ一回戦

徳島県	〇—	愛知県
先鋒 岡内	引き分け	高山
次鋒 櫻木	引き分け	江原
中堅 川邊	引き分け	鯉江
副将 岩原	—	メコ 牧野
大将 原	② 引き分け	コ 渡部

予選リーグ二回戦

徳島県	五—〇	神奈川県
先鋒 岡内	コ—	岩崎
次鋒 櫻木	メメ—	平田
中堅 川邊	メメ—	コ 明石
副将 岩原	コ—	田中
大将 原	メメ—	守屋

男子個人戦予選リーグ

鎌田(徳島)	引き分け	加藤(岐阜)
鎌田(徳島)	ドド—	メ 横山(栃木)

◆代表戦

鎌田（徳島）メー 加藤（岐阜）

女子個人戦予選リーグ

横山（徳島）ドメー 神作（千葉）

横山（徳島）メ× メ柿谷（富山）

男子個人戦決勝トーナメント一回戦

鎌田（徳島）コーメメ 前（和歌山）

女子個人戦決勝トーナメント一回戦

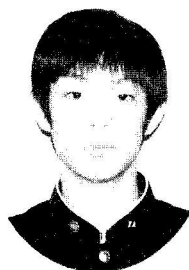
横山（徳島） ド 長内（北海道）

全国スポーツ少年団

剣道交流大会に参加して

鳴門市光武館

川 邊 祐 樹



平成十六年三月二十五日、僕は光武館の仲間に見送られ、徳島空港を出発して福岡に向って

いざ福岡へ。他の道場の選手と試合に行くのは初めての経験だったけど、福岡についた途端、みんな仲良くなって今までの不安は跡形もなく消えました。

いざ試合場へ。開会式、ずらりと並んだ他県の選手を見て、「わっ強そうな人ばっかり」と圧倒されそうになりました。けれど気を取り直し、「みんな僕と同じ小学生なんだから」と気持ちを落ち着かせました。リレーシヨンの時は他県の友達とも混じって楽しい時間を過ごし、会場の雰囲気にも少しは慣れました。

いました。スポーツ少年団の県予選で思いもかけず優勝し、県の代表選手として全国大会に出場できるようになったからです。「がんばって来いよ」とか「いい試合して来てね」とかみんなに励まされて、緊張する中にあっても心は喜びでいっぱいでした。

代表になってからは、寺西先生のご指導のもと、選抜メンバーが何回か集まり光武館で練習したり、香川県や他の道場と練習試合をしたけれど、何かチームワークがびつたりしないところがあったのでうすればみんなととけあえるか不安でいっぱいになりました。

いざ試合。予選リーグは愛知県と神奈川県、最初の愛知との試合では、僕は、徳島県の代表選手として恥ずかしくない試合をしなければと思い、肩に力が入りいつもの試合ができませんでした。神奈川との試合は、寺西先生から「負けても勝っても、これ一試合だけだ、全国大会を楽しんでこい」と言われ、緊張がとけチーム全員が勝つことができました。しかし、一回戦、もう少し僕が頑張っていたら決勝トーナメントに上がっていたのと思った時、ふと、弱気



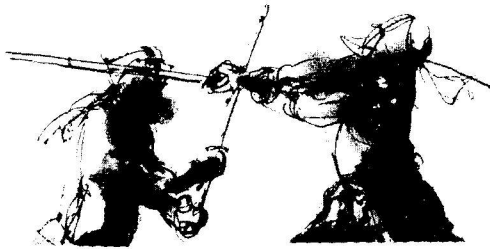
な自分に後悔しました。本来、僕は県で優勝しているのに、大将を努めなければいけないのですが、先生から「祐樹、大将と中堅どっちがいい」と言われたとき、迷わず「中堅」と言いました。それは、大将は強い人が出てくるし、今まで大将で試合に出ると負けてばかりで、気持ちも弱気になっていたからです。試合後、先生から「祐樹、おまえから大将をさせてくださいと言って欲しかった。おまえには、初心の時の気迫が感じられない、中学校に行ったら積極的に強い気持ちを持って」と言われたとき、自分の弱気がチームに迷惑をかけ、みんなにすまない気持ちでいっぱいになりました。けれども、この三日間での経験は忘れる事のできない思い出となりました。試合には負けたけれど、中学校の先輩や同級生、後輩と三日間生活をともにしたことは楽しかったです。特に中学校の先輩は、僕たちの面倒をよく見てくれて、剣道もいろんなことを教えてくれ仲間の大切さが十分わかりました。

せっかくできたチームメイトだからみんな

などはいつまでもつきあっていきたいと考えています。

貴重な経験を生かし基本を大切に剣道を続け、今の目標である全国中学校総体に出場できるようにがんばります。

最後に、ご指導して頂いた先生方、本当にありがとうございました。



## 全日本都道府県対抗剣道

### 優勝大会に出場して

阿南第二中学校教諭 福多博史

五月三日、大阪市中央体育館において第五十二回全日本都道府県対抗剣道優勝大会が盛大に開催された。

本大会への出場は私自身はじめてであり、選手決定以降、大会に備えて稽古に励んできた。徳島県代表ということで、「自分の力がどこまで通用するのか試してみたい」と、出場に際して楽しみでもあった。しかし、「みんなに迷惑にならないように」「内容のある試合ができるのだろうか。」など不安や消極的な気持ちの方が心の中で大きかった。大会前、対戦相手が福島県とわかり、何とか一勝を、そして昨年度のベスト十六を上回るうとチームの士気も高まってきた。奈良県との練習試合を通して、試合観や動きも徐々にではあるがよくなってきたように思う。

大会当日、全国大会に出場できた喜びを感じながら開会式を迎えた。後で思い返し

てみると、大会の雰囲気は飲まれてしまい、

緊張していたように思う。試合は先鋒・坪

### 試合結果

徳島県 1(2) 2(5) 福島県

井選手が引き分け、次鋒・日和田選手が見

「もつと……をしておけば」と後悔の言葉

先鋒 坪井 × 小野

事な面を決めて一本勝ち、五将・竹内選手

が何回も頭の中を駆けめぐった。強い相手

次鋒 日和田 × 齊藤

が引き分け、ここまで一勝二引き分けで中

だを意識しすぎるあまり、自分の力を出す

五将 竹内 × 佐藤

堅である私に回ってきた。相手は一昨年の

ことに集中することができなかったなど反

中堅 福多 × 菅藤

全日本選手権大会第三位の田崎選手であり、

てから当分の間、力のない自分が嫌になっ

三将 川添 × 菅藤

全国教職員大会個人優勝の経験もある強豪

た。もつと稽古をしなければと感じた。そ

副将 白木 × 鈴木

である。柔らかな攻めから、どんどん間合

れから半年、稽古不足の私がいる。この原

大将 平野 × 土屋

に攻め込んできた。自分の気持ち、構えを

稿を書きながら、あの悔しい気持ちはどこ

整えるまもなく、相手のペースで試合が進

へ行ったのだろうか、己に勝つことの難し

んだ。田崎選手の上の攻めに気をとられ、

さを感じながら、今日から稽古をがんばら

手元があがってしまい小手を打たれた。結

う。

局何もできないまま二本負けを喫してしまっ

最後に、応援にきてくださった遠藤先生

た。勝ち星が先行してただけに私の二本

はじめ剣道連盟の先生方、そして監督の木

負けはチームの勢いを止めてしまった。そ

原先生にはたいへんお世話になりました。

の後、三将・川添選手、副将・白木選手が

ありがとうございます。

引き分けとなり、大将戦となった。大将・

平野選手は一本勝ち以上しなければチーム

の負けが決まってしまうという厳しい試合

展開の中で積極的に勝負を仕掛けていった

が、残念ながら負けとなった。私の二本負

けが最後までチームに重くのしかかった団

体が最後までチームに重くのしかかった団



## 第二十一回

# 全国家庭婦人剣道大会

平成十六年八月三日(火)  
於・日本武道館

監督 手塚 十三子

一年ぶりの再開を祝し、笑顔で握手。大会のレベルは年々上昇する中であって「今年こそは」と意気盛んな選手たち。

先鋒 阿井 恵子 (阿南支部)  
次鋒 玉田 真理 (徳島支部)  
中堅 平野 悦子 (鳴門支部)  
副将 坪井 竹子 (徳島支部)  
大将 竹内佳代子 (鳴門支部)  
監督 手塚十三子

本県選手もやる気満々で準備運動を開始。

学生時代、また社会人となってから全国大会に出場し活躍するなど、試合経験も豊富、何よりも稽古熱心な代表選手である。一戦一戦を慎重かつ時に大胆に、集中して機会をとらえながらの試合運びに心地良い緊張



が走る。

緒戦の対鳥取戦では五分と五分の引分け。トーナメント戦進出への願いを賭けて、続く第二戦は強豪九州宮崎戦。先鋒戦で引き分け、後に勝利を託すも厳しい攻めと思いきりの良い打突に機会を奪われてしまう。

本県チームの要である大将の活躍は一際冴えており、トーナメント進出はならずとも、一同は反省の中に新たな課題を感じ取ったと思われる闘いの跡のさわやかな礼であった。

家庭婦人大会に与えられた試合時間は「五分」。その中に織りなされるドラマは実に感慨が深い。学生たちのスピードとパワーにあふれた剣風と異なり、女性特有の柔軟性から醸し出される、軽やかでしなやかな小気味よい多彩な技。『主婦業』がさらに磨きをかけている。

次年度の全国大会の日程は恒例の八月から七月十八日(海の日)に早まった。予選会も五月八日(日)に実施される。本県は平成十一年、第十六回大会において、あれよあれよの勢いに乗り、堂々第三位の喜びを持ち帰っている。女性剣士の皆さんの胸の内には、「来年こそ」の思いが日毎に高まっていることだろう。一人でも多くの方に予選会に参加していただき、日本武道館の晴れ舞台上で最高の汗と感激をぜひ味わっていただきたいと切に願う。

県名	順位	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数
鳥取		久坂	竹中	池口	宿見	門脇	2	(3)
			一本勝					
徳島		一本勝				一本勝	2	(3)
		阿井	玉田	平野	坪井	竹内		

県名	順位	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数
宮崎		落合	増田	木宮	竹元	甲斐	3	(5)
徳島							1	(3)
		阿井	玉田	平野	坪井	竹内		



# 平成十六年

## 矯正武道大会を振り返って

刑務所支部長 鈴木伸一



今年も「目指せ、全国大会へ」悲願の目標に選手一丸となって大会に臨んだ。

一、平成十六年四月二十三日（金）愛媛県立武道館において管内矯正職員武道施設對抗大会（団体戦）が開催された。

- 先鋒 金野 卓司
- 次鋒 前田 秀一
- 中堅 猪野 和男
- 副将 鳴川 善人
- 大将 北村 仁志
- 補欠 片山 尊史

徳島の列強  
結果は第三位ではあったが、優勝までもう一步のところまで一本、一勝に泣いた試合であった。

### 管内矯正施設對抗武道大会（団体）

#### 一試合目 対松山戦

先鋒	金野	○	川上
次鋒	前田	×	白石
中堅	猪野	○	片上
副将	鳴川	×	乗松
大将	北村	×	山崎

#### 二試合目 対高知戦

金野	○	山下
前田	×	川島
猪野	○	山下晃
鳴川	×	宮本
北村	○	米澤

#### 三試合目 対高松戦

金野	×	小野
前田	○	岡西
猪野	×	矢野
鳴川	○	松下
北村	×	井口

#### 優勝

松山刑務所

#### 準優勝

高松刑務所

#### 三位

徳島刑務所

#### 四位 高知刑務所

二、平成十六年九月十日（金）高知県立武道館において、管内矯正職員武道選手権大会が開催された。選手は、金野卓司、前田秀一、鳴川善人、北村仁志の四名が出場した。結果は前田選手が、第二次リーグに進出し六名の選手が、第三位まで全国大会（大阪）出場というキツプをつかむため、熱い戦いの展開であったが、一勝一敗と本数差で惜しくも全国大会のキツプを逃したが、技術優秀賞を獲得した。

### 管内矯正職員武道選手権大会（個人）

#### 第二次リーグ

##### 第一組

○片上	○	宮本
宮本	×	白石
片上	×	白石

##### 第二組

○前田	○	川上
○山崎	×	川上

### 三位決定戦

白石 メ 川上

### 優勝戦

片上 メ 山崎

三、平成十六年十一月五日（金）香川県立武道館において管内矯正職員武道奨励大会（新人）が開催された。（団体、個人）

### 団体 準優勝（徳島）

個人 有段の部

準優勝 吉野 剛弘（徳島）

無段の部

優勝 河上 公平（〃）

準優勝 八木 靖晶（〃）

今年、全国大会出場が出来なかったものの、新人大会では起死回生となる素晴らしい活躍となり、何とか汚名返上となった。今年を振り返って、勤務内容が複雑多岐で毎日の練習も充分とは言えなかったが、その様な環境の中でもベストを尽くしてくれたと思う。来期こそ悲願の全国大会出場に向けて選手一丸となって稽古に取り組み頑張っていきたいと思う。

## 全国選抜大会へ出場して

富岡西高校

的 場 大 和



三月二十七日、二十八日に、第十三回全国選抜大会が愛知県春日井市で行われました。僕にとつ

て高校に入ってから初めての全国大会でしたが、不思議と緊張はしませんでした。むしろ自分の力を試したい気持ちや、こんな大舞台で試合のできる喜びでいっぱいでした。腰痛がひどく、寝るのも苦しい状態でしたが、試合が始まると痛みは感じなくなっていました。

予選リーグ緒戦の相手は、沖縄県の興南高校でした。一年生を主力としており、基本もしっかりとしたチームでした。試合前、チームのみんなでミーティングをして、気持ちを一つにして試合に臨みました。先鋒の二本負けで次鋒の僕にまわってきました。

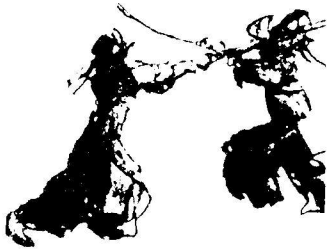
最低でも引き分けという気持ちで粘り強く試合をするように心懸け、小手にかけて面を決めることができました。うまく流れを中堅につなぐことができ、あとは富西ペー

スで試合をすることができました。三二というスコアで勝ち、よいスタートをきることができました。

続いて、二回戦日の神奈川桐蔭学園高校との試合を迎えました。神奈川桐蔭学園高校は去年の優勝校であり、今大会の優勝候補でもあって注目されていました。日本の学校相手にどこまでやれるか自分達を試そう、そして試合を楽しもうという事をミーティングで話をして再び気持ちを一つにしました。やはりレベルは高く、先鋒戦を取られたものの、次鋒戦では時間終了間際に一本取り流れを呼び込み、僕にまわしてくれました。実際、相手と竹刀を交えると凄い威圧感で、技のキレには驚きました。少しでも竹刀が触れると決められる不安もありましたが、勝負を楽しもうという気持ちを持つことができ、最高の精神状態で集中力を発揮することができました。相手の小

手を紙一重ではらい面を取ることができま  
した。しかし、このまま一本勝ちにもちこ  
もうという僕の弱さにつけこむかのように  
引き胴を決められてしまいました。いつの  
まにか自分が挑戦者であるという気持ち  
忘れていたことに気づき、再び立ち向かっ  
て行く勇気がでて、出小手を決めることが  
できました。この時の感覚は、相手の動き  
がスローモーションに見える感覚で出ばな  
をとらえることができました。この時点で  
二二で、富西のリードという状況でした。  
会場は異様な雰囲気でした。試合は進行し  
ました。勝負どころでの桐蔭学園高校の戦いはずば  
らしく、副将戦で一本取っても二本取り返  
され、大將戦では二本負けとなりました。  
大接戦の末負けてしまったのですが、試合  
終了時に会場から贈られた拍手や歓声は一  
生忘れることができません。勝って得るも  
のより負けて得るものの方が大きいと言  
いますが、まさしくその通りで、今振り返  
ってみてもあの負けがあるから……という想  
いがたくさんあります。もちろん悔しさもあ  
りましたが、負けることにより、全国選抜

大会終了後も、より一層、剣道に一生懸命  
取り込むことができ、チーム一丸となれた  
気がします。勝負事では、どうしても勝つ  
ことにとらわれがちですが、負けることか  
ら得るもの大切さを学ぶことができた気  
がします。このことを自分の胸に秘め、こ  
れからの人生の糧にしていきたいです。ま  
た、後輩のみなさんも目先の勝負にこだわ  
りすぎて、自分を見失うことのないよう日々  
がんばってもらいたいです。期待していま  
す。



## 全国選抜大会に出場して

富岡東高校三年

磯田沙希



チームは誇  
りにのつて、  
具大会で優勝、  
四国新人大会で  
は、みんなの気  
持ちが一つにな

り、順調に勝ち進み準優勝。これが選手一  
人ひとりの自信につながっていた。全国大  
会でもこの調子でいけば予選リーグは突破  
できるのではないかとこの勢いだった。

平成十六年三月二十七、二十八日愛知県  
春日井市総合体育館で全国高等学校剣道選  
抜大会が行われた。私にとって初めての全  
国大会出場であった。私たちの目標は、予  
選リーグを突破することだった。

一試合目は石川県の金沢桜丘高校と対決。  
先鋒一本負け、次鋒引き分け、私はチーム  
を良い流れにもっていきけるような試合をし  
ようと思った。しかし、相手のペースに持

ち込まれ、小手を打たれ、相小手面を決められてしまった。チームも三対一で敗れた。

二試合日は青森県の青森商業高校と対戦。

一勝一敗で中堅に回ってきた。この試合はチームの勝敗を左右する大事な一戦となった。積極的に攻めていったが、技が尽きたところを引き技を決められてしまった。二

試合とも気持ちがあ回りして、思うように体が動かず完敗。大将までつなぐことができず、中堅としての役割を果たすことができなかつた。チームのみんなに申し訳ない

気持ちでいっぱいだった。結果は二戦二敗で予選落ち。このような結果になることは予想もしていなかつた。私は、この大会で

全国の壁の厚さを感じた。会場の空気にもまれて、本来の力を発揮することができなかつたというのもあるが、目標を達成できなかったのは、自分の力不足と経験の少なさと感じた。

この敗戦で学んだことを、これからの稽古や試合で活かしていくことが大切だと思つた。そして、日々努力を積み重ねていかなければならないと感じた。

今まで熱心に指導して下さいました監督や先生方、また、応援やいろいろお世話して下さいました保護者の方々、本当にありがとうございます。

合つた仲間、ありがとう。これからもよろしく☆☆☆

金沢桜丘 3 1 富岡東

○牛尾 コ 宮崎

森 × 谷澤

○諸江 コメ 磯田

○山路 メ 森

宇波 メ 吉岡○

青森商 3 1 富岡東

○笹原 メメ 村瀬

奥瀬 ーメ 谷澤○

○木村 メド 磯田

○上野 メメ 森

若山 × 吉岡

## インターハイに出場して

富岡西高校

大石 洋史



平成十六年八月九日から十一日まで鳥根でインターハイが行われた。県予選では大逆転で優

勝を勝ち取り、僕たちにとって初めてであり、目標としていたインターハイの会場に立つことができた。

この場所で日本一になるチームが決まる。そして僕たち三年生にとって最後の試合になるとプレッシャーや緊張感の中、全員で悔いの残らない、三年間で一番良い試合をしようと気持ちを高め大会に臨んだ。

大会一日目、僕が出場する個人戦が始まった。相手は福大大濠高校の大亀選手だった。先日の玉竜旗でも優勝しており、今大会優勝候補でもある大亀選手に、自分のすべての力をぶつけようと気合を入れ、試合に

臨んだ。立ち上がり面に思い切り跳んだ。蹲居が不十分だったのか旗は上がらず、逆にコテを奪われ、そのまま時間切れとなった。明日の団体戦にこの負けを生かそうと、さらに闘志を燃やした。

二日目、団体戦一試合目は大阪府代表PL学園である。近畿チャンピオンだけに穴がなく強豪チームだ。先鋒の福永は惜しい技を出すも二本奪われ負け。次鋒・立岩は一本ずつ取り合うも、一瞬のスキに引き面を奪われた。中堅・佐川も相手の勢いを止める事はできず二本負け、副将・的場も相手のペースで流れを変える事はできず一本負け。大将で一矢報りたいが、四対一と完敗した。

第二試合、次に勝てば臨みがあったので気持ちを切りかえ、富山県代表高岡工芸戦にかけて。先鋒の京小がねばり、延長の末出小手を決め一本勝ち。この流れでと思っただが、次鋒から大将までがその勢いに乗れず完敗となった。予選リーグ二敗が決まり、僕たちの熱い夏が終わった。

インターハイを振り返って、全国の壁は

厚く強いものだった。だが決して乗り越えられないわけではないと思った。同じ高校生で何が違うか、それは日々の努力、剣道にかける思い気持ちではないのかと思った。徳島県の後輩の皆さんには、この壁を越えるよう頑張ってもらいたい。

僕たちが三年間目標に向かい挑戦し続けることができたのも、日々熱心に御指導して下さいました山田先生、小延先生、他の先生

方、いつも応援して下さいました保護者の方々や沢山のOBの先輩方のお陰である。そしてどんな時も共に辛さや喜びを分かち合った仲間感謝したい。この沢山の経験や学んだ事を今後を生かし、輝いた人生になるよう突き進んでいきたい。



# 第五十一回全国高等学校

## 総合体育大会報告

富岡東高校三年 吉岡 稔



平成十六年八

月九日から十一

日の三日間、島

根県出雲市で、

「君の輝く一瞬  
が今伝説となる」

をスローガンに、第五十一回全国高等学校  
総合体育大会が開催された。

県総体から従来のオーダーを大きく変更  
した。思い切りのいい剣道をする一年生を  
先鋒に置き、一年生コンビが活躍し、三年  
生がしのいで、インターハイへの切符を手  
にすることができた。

インターハイ当日、三年生はこれが高校  
最後の大会となる。全国の大舞台で、私た  
ちの目標は「一試合でも多くこのチームで  
試合をすること」。

予選リーグの対戦チームは、長野県代表  
下伊那高校と卓球の福原愛ちゃんが在学し

ている青森県代表青森山田高校。一戦目は、  
下伊那高校であった。初戦であったためか  
全体的に動きが硬く、本校に流れがあるも  
のの一本が遠かった。次鋒が終わって00。

前試合で青森山田高校が下伊那高校を10  
で破っており、二戦目の青森山田戦を何と  
しても対以上で戦いたい。中堅、副将、大  
将は春の選抜の悔しさも経験している三年  
生、「一試合でも多く試合をしたい」という  
気持ちが終わってみれば310。二戦目の青  
森山田高校戦を引き分ければ予選リーグを  
突破できる。

試合前の最終ミーティングで、「焦らずに  
落ち着いて行こう」そう言って試合に臨ん  
だ。先鋒戦、初戦の緊張がとけたのか持ち  
前の思い切りの良さとお勘が戻り、先に一本  
先取した。これで波に乗れる！そう思った  
が取り返され、延長戦に。両者譲らず引き  
分け。次鋒戦、下がらず果敢に攻めていつ  
たが面を打たれ一本負けを喫した。形勢が  
逆転し焦ってはいけなさと頭の中でわかっ  
ているものの、冷静さを欠き、中堅、大  
将と負け、結果は一人も返すことができず、

ずるずると離され310。

試合後、飯田先生から「負ければ悔いは  
残る」という言葉を頂いた。確かにその通  
りである。相手に思いつきりぶつかっても、  
今まで一生懸命練習してきていても、負け  
れば悔いは残る。その負けた悔しさを今後  
どれだけばねにして努力できるかだと思っ  
う。三年生は富岡東高校として闘うことはこれ  
で最後になってしまったが、ここが最終点  
ではなく、次へのステップとして、この貴  
重な経験を自分たちの財産として大切にし  
ていきたい。

私たちがこうして全国の舞台を踏めたの  
も、熱心に指導して下さった先生方、OB・  
OGの先輩方、そして心の支えとなって下  
さった保護者の皆様のお陰である。心から  
深く感謝したい。後輩の皆様には、私たち  
の分も全国大会で活躍してくれることを心  
から期待している。

# 平成 16 年度 全国高等学校総合体育大会 剣道競技

## 女子団体予選リーグ

## Aブロック

## 〔第一試合場〕

チーム名	青森山田	下伊那農業	富岡東	勝点	勝者数	取得本数	順位
青森山田 (青森)		$\frac{1}{1}$	$\frac{4}{3}$	2	4	5	1
下伊那農業 (長野)	$\frac{0}{0}$		$\frac{0}{0}$	0	0	0	3
富岡東 (徳島)	$\frac{1}{0}$	$\frac{3}{3}$		1	3	4	2

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数/勝者数	勝敗
青森山田 (青森)	沖田	安田	佐々木	櫻井	青木	$\frac{1}{1}$	○
	▲	$\frac{\otimes}{\ominus}$					
下伊那農業 (長野)	引き分け	延長	引き分け	引き分け	引き分け	$\frac{0}{0}$	×
	▲		▲				
	池田	東原	菅沼	原	岩佐		
試合時間	6分00秒	4分42秒	6分00秒	6分00秒	6分00秒		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数/勝者数	勝敗
下伊那農業 (長野)	池田	東原	菅沼	原	岩佐	$\frac{0}{0}$	×
富岡東 (徳島)	引き分け	引き分け	延長	1本勝ち	1本勝ち	$\frac{3}{3}$	○
			$\frac{\otimes}{\ominus}$	$\frac{\otimes}{\ominus}$	$\frac{\otimes}{\ominus}$		
	河田	細川	磯田	森	吉岡		
試合時間	6分00秒	6分00秒	5分18秒	4分00秒	4分00秒		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数/勝者数	勝敗
青森山田 (青森)	沖田	安田	佐々木	櫻井	青木	$\frac{4}{3}$	○
	×	$\frac{\otimes}{\ominus}$	$\frac{\ominus}{\oplus}$		$\frac{\otimes}{\ominus}$		
富岡東 (徳島)	引き分け	1本勝ち	延長	引き分け	1本勝ち	$\frac{1}{0}$	×
	$\frac{\otimes}{\ominus}$				▲		
	河田	細川	磯田	森	吉岡		
試合時間	6分00秒	4分00秒	4分20秒	6分00秒	4分00秒		

# 全国教職員大会に参加して

伊藤 奈津子

## (試合結果)

- 一回戦 伊藤 <sup>本物</sup>② — 中村 (秋田)  
二回戦 伊藤 — ②メ杉本 (京都)

八月三日広島市廿日市市(廿日市スポーツセンター)で全国教職員大会が行われました。昨年は、相次ぐ台風襲来で各地に多大な被害をもたらしましたが、前々日に必勝祈願で訪れた、日本三景の一つ厳島神社の境内にもあちらこちらで台風による損傷がみうけられました。試合当日は晴天に恵まれ、久しぶりの試合、それも全国大会ということもあり、少し緊張もありましたが、一緒に出場した坪井先生や他の先生方にも励まされながら上位進出を目標に試合に臨みました。

一試合目、秋田代表の中村選手との対戦。とにかく元気をだして、どんどん打ちこんでいこうと考えました。しかし、学生の大会とはまた違った、一般の試合の雰囲気

感じ、前半はペースをつかめずにいたので、次第に体も自由になり、相手が出ようとしたところに飛びこみ面を打ち一本となりました。無意識に反応したところだったので、得意技でもあったので、納得のいく一本でした。やはり、各都道府県代表の力ある選手でしたので、後半は相手の攻撃をしのぐことで精一杯でしたが、そのまま時間となり一本勝ちを収めました。

二試合目は京都府代表の杉本選手との対戦でした。杉本選手とは稽古では何度も手合わせしたことがありましたが、試合では初めてでした。全日本学生の優勝者として強さはよくわかっていましたが、積極的にしかけて一本取るつもりで臨みました。試合では前半から飛びこみ面、また引き技と早め早めに技を出しました。そして相手面を攻めて手元が少し上がったところを、抜き胸にできました。機会は良かったと思うのですが打突が弱かったのか有効打突にはなりません。その後、一旦間合いが切れてお互い面を打とうとして私が出遅れたところを面、小手にしずんだところを面

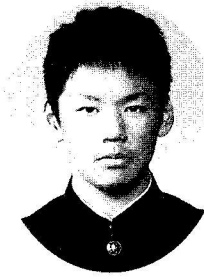
と打たれました。二本とも打たれた感触はしなかったのですが、体の出が大変良く、攻めから打突まで無駄がないところに改めて強さを感じました。前半優勢に感じても一瞬の気の緩みがあだとなるというところに勝負の厳しさを痛感しました。

公式戦としては約半年ぶりでしたが、試合の緊張感というものを十分楽しめたと思います。負けるということはいつになっても悔しいものですが、その反省を生かして更に精進しなければならぬと感じました。この大会は幅広い年齢の方が出場しましたが、女子の試合についてもしっかりとした構えや打突、足さばきなど目を見張るものがありました。また、教職員大会とあって、指導者として模範となる様々な所作や試合展開などが多く見受けられました。剣道の指導に携わる者として、また、これからの自分の剣道を考えて行く上で非常に有意義な大会でありました。結果は揮(とま)いませんでしたが、鍛錬を重ねて機会があればまた挑戦したいと考えています。

## 第三十四回全国中学校

### 剣道大会に出場して

相生中学校三年 西 田 義 玄



全国大会出場  
をかけた県総体、  
その大舞台で僕  
たち相生中学校  
剣道部は見事優  
勝を成し遂げた。

それから約一ヶ月後の平成十六年八月二十日、二十一日に、栃木県小山市で「関東の大地にきざめこの熱意」というスローガンを元に全国中学校剣道大会は幕を開けた。何もかもが僕たちにとって初めての経験だった。会場を見たとき「僕はここで試合ができる」と思い、ワクワクした。あの興奮は今も忘れない。

徳島の剣道  
試合初日は、個人戦だった。僕は個人戦、団体戦とも参加することができた。そして迎えた一回戦、相手は千葉県代表の選手だった。僕はガチガチに固まってしまい動けなかった。案の定、相手に引き出され出小手

を取られてしまった。時間は無常にも過ぎていき、結局一本負けであった。だからといって、翌日に控えている団体戦のメンバーに迷惑をかける訳にはいかないと思い、気持ちを入れ替えた。

そして迎えた団体戦。三校リーグで一位になった学校だけが決勝トーナメントに勝ち上がれるという厳しい状況の中、僕たち相生中学校は、稲枝中（滋賀県）と城東中（大分県）と戦った。稲枝中は先鋒の僕が負けてしまったけれど、後ろのみんながポイントを取ってくれ、なんとか勝つことができた。続く二回戦、相手は小柄な選手が多く、みんな思い通りの試合ができずに僅差で負けてしまった。しかし、稲枝中が城東中に大差で勝ったので、僕たちは決勝トーナメントに出られることになった。みんな本当に喜んでいた。

そして、決勝トーナメント一回戦、相手は全国大会常連、開催県の一位でもある小山第三中学校だった。「悔いが残らんように思い切りやって来い」という先生の言葉を覚えている。しかし、相手も強く簡単には

勝たせてくれなかった。結局惜しくも負けてしまったが、僕は精一杯戦ったので悔いは残らなかった。しかし、メンバーの目には涙が浮かんでいた。それを見たとき、もう一試合したかったという思いがこみ上げてきた。僕たちの夏は終わった。

全国大会に出場して本当に良かったと思う。あんな貴重な体験は一生に一度できるかどうかである。これも一重に、今まで指導してくださった先生方、保護者のおかげだと思う。本当に感謝の気持ちでいっぱい。全国大会に出場したことを自信にし、これからも剣道が続けていきたい。最初で最後の中学校全国大会、この経験は一生の思い出になるだろう。

# 試合結果（予選リーグ）

一回戦 相生4—1稲枝（滋賀）

西田 メ メメ堀田

前川 コ 門

福川 メ 堀

谷澤 メ— 竹中

元木 メ— 近藤

二回戦 相生0—1城東（大分）

西田 メ×メ 足立

前川 × 梶木

福川 ド×メ 阿部

谷澤 × 渡邊

元木 —メ 三重野

## 決勝トーナメント

一回戦 相生2—3小山第三（栃木）

西田 メ— 北條

前川 —コ 石塚

福川 メ— 萩原

谷澤 —メメ 中山

元木 —メ 野中

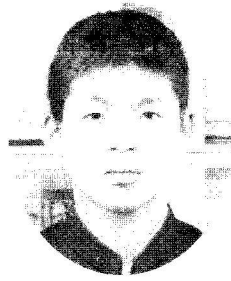


県総体での優勝

## 第四十二回四国中学校総合

### 体育大会に出場して

相生中学校二年 福川 敬 太

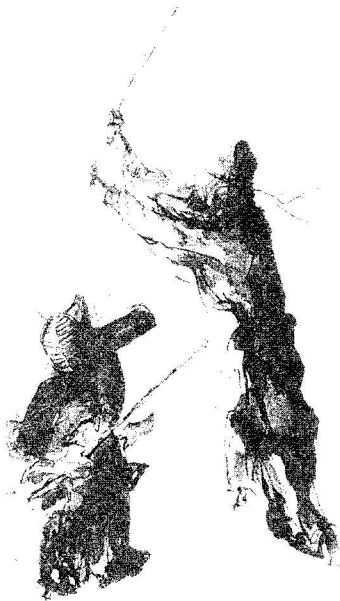


平成十六年八月八日、四国中学校総合体育大会が徳島で行われました。さすがに四国の強豪校だけあって練習の時から迫力が違っていたので、僕たちも負けじと声をいつも以上に上げて、練習しました。予選一試合目は高知県明德義塾中学校と対戦し、二対〇で勝利しましたが、初めての四国大会なので、みんな初戦は緊張していました。予選二日目の愛媛県重信中との対戦は、みんないつも通りの動きになって二対二で勝ちました。決勝トーナメント進出は決まっていたのですが、気持ちを切らさず予選リーグ三試合目の香川県山田中にも二対二で勝ち、全勝で決勝トーナメントに進出することができました。決勝トーナメント一回戦（準決勝）

は、香川県仲南中でした。仲南中は個々の剣道の基本ができていて、強いチームでした。しかし、僕たちは全勝していて波に乗っていたので、三対一で勝ちました。決勝は徳島文理中でした。二対二で負けましたが、気迫では上回っていたと思います。

僕は個人戦にも出場しました。一回戦は何とか一本を取り、一本勝ち。二回戦の相手は香川県、位の人でしたが、一本取ることができ一本勝ち。三回戦の相手は同じ二年生の人でしたが、一本取られ負けてしまいました。とても悔しかったです。大会を

振り返ってみると、団体準優勝、個人ベスト8という結果でした。このような結果を残すことができたのも、先生方や応援してくださった保護者の方々、そして仲間たちのお陰だと思っています。本当にありがとうございます。来年もがんばってすばらしい結果を残したいと思います。



## 第三十四回全国中学校

### 剣道大会に出場して

那賀川中学校三年

星野 知世



『関東の大地に  
きざめ この熱  
意』のスローガ  
ンのもと、第三  
十四回全国中学  
校剣道大会が平

成十六年八月二十日と二十二日、栃木県立  
県南体育館で開催されました。

私たちは県総体だけが人の多い中、決勝  
戦を二(二)対一(一)で競り勝ちました。  
続く四国大会でもチーム一丸となることが  
でき、決勝戦では四(五)対一(二)とい  
う結果で五年ぶり四度目の優勝に輝くこと  
ができました。この調子で全国大会も勢い  
に乗って、去年のベスト8を上回ろうと日々  
厳しい稽古をみんなで励まし合いながら頑  
張ってきました。

そして、本番当日、アップの時から体の  
動きもよく、チームも良い雰囲気でした。

しかし、全国大会はそんなに甘くはありま  
せんでした。予選リーグ第一試合目は愛知  
県の名経大附属市邨中学校との対戦でした。

東海大会の準優勝チームで練習試合でも対  
戦している相手でした。緊張していたのか  
先鋒から大将まで試合の流れを自分たちの  
ペースにすることができず、惜しい打突も  
一本に決めることができないまま試合が進  
みました。終わってみれば〇対二となって  
いました。その後、市邨中学校は優勝した  
阿蘇中学校に大将戦で敗れてベスト8に入  
賞したことから、結果的にはこの一戦が勝  
負の分かれ日となってしまいました。

続く予選リーグ第二試合目は神奈川県  
光丘中学校との対戦でした。この試合の前  
に市邨中学校が光丘中学校に勝っていたの  
で、すでに予選リーグ敗退が決定してい  
た中での試合でしたが、チームのみんなは  
互いに励まし合いながら「悔いのない試合  
をしよう」と決意し試合に臨みました。し  
かし、結果は二(三)対二(二)の本数勝  
ちという苦しい試合でした。

私たちにとって夢の舞台だった全国大会

は二試合で終わってしまいました。みんな  
で気持ちを一つにして精一杯頑張った結  
果です。この大会までの三年間、剣道を通  
して仲間と協力することの大切さや、厳し  
い稽古で汗を流したこと、そしてそれによ  
つてみんなで勝利をする多くの喜びや感動を  
得ることができました。引退して振り返っ  
てみると、勝利したことと同じだけ負けた  
ことよつていふんなことを学んだようにな  
気もします。そして、それら一つ一つが全  
て私にとつてかけがえのない宝物のよう  
に思います。私は那賀川中学校で剣道するこ  
とができ、大変嬉しくまた誇りに思います。  
最後になりましたが、今まで熱心にご指  
導してくださった、斎先生、松葉先生、山  
田浩司先生、山田耕司先生、いつもお世話  
をしてくださった保護者の方々、剣道連盟  
をはじめ中体連の先生方、心から感謝いた  
しております。そして、ともに練習し、苦  
しさや喜びを分かち合ったチームのみんな、  
本当にありがとうございます。

# 全日本剣道女子選手権大会

坪井 さくら



九月五日、名

古屋市中村ス

ポーツセンター

で開催されまし

た。前年度優勝

者を含め、高校

生、大学生、教員、会社員、警察官、主婦

など、各都道府県の予選を勝ち抜いた選手

六十四名が出場しました。今回は最年少十

八歳、最年長三十三歳でした。

前日、大会の選手打合せがありますが、

右を見ても左を見ても、強い選手ばかりで

す。いつも、この大会に出場させてもらう

ことが自分への刺激となり、勉強になりま

す。

## 一回戦

坪井 コー 有 富（愛知）

緊張はしませんでした。初戦というこ  
とで、じっくり攻めることができず、体も

心も少し浮いてしまっていました。それで、試合開始三分ぐらいいばな小手が決まり、ちょっと安心してしまいました。そのすぐ後、一本取れた気のゆるみから、中途半端に出した飛び込み面に小手をあわせられ、ひやっとする場面がありました。

この大会に出場される選手は、一瞬の気のゆるみも逃さない集中力と最後までとぎれない気迫を持った、非常にレベルの高い人たちがばかりです。そのことを忘れ、一本取った後、安易に技を出してしまったりと

ろが自分の甘さだと思いました。

## 二回戦

坪井 コ菅 原（北海道）

相手は最年少十八歳、高校三年生の選手でした。対戦前は、「背が高く、しっかりした剣道をするなあ」という印象でした。実

際試合をしてみると、体がよく動き、元気があり、身長差があったせいか、懐も深く感じました。とにかく、つかみどころがなく、攻めにくかったです。とにかく一本取ること集中したつもりでしたが、百七十

センチ近い長身だったため、面ばかり警戒していたら、手元が上がったところに小手を決められました。

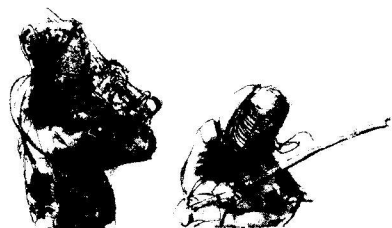
正直、私は拳を打たれたように思ったので、相手が小手を打った直後に面を打ち残心を取っていました。会場がざわついたので、「決まった」と思ったら、小手の方に旗が揚がっていました。あとから打った技に賭けたのですが、やはりダメでした。

しかし、判定どうのこうのでなく相手の勢いと気迫に押され、手元が浮いてしまったりことには変わりありません。拳だろうと、鏢だろうと、先に打たれてしまったら勝負ありです。まだまだ十代の選手には負けなという気持ちで臨んだだけに、悔しさが残った試合でしたが、これもまた勉強です。また、がんばればいいことだと自分に言い聞かせました。

その後、菅原選手は準々決勝まで進み、優秀選手に選ばれました。負けた悔しさはありましたが、どんな相手にも果敢に挑戦し、自分の剣道を貫く姿勢に頭が下がる思いでした。

今回で、大阪から名古屋開催に移って十年経ちました。来年は静岡県で開催されることになったそうです。この大会に出場することを目標とし、日々稽古を重ねていましたが、開催地が変わるとなると、改めて時間が経つのが早いと感じました。けれども、今回も自分の納得いく試合ができなかつたので、再び初心に返り、満足いく試合ができるようになるまで、何歳になろうとも、この大会に挑戦したいです。

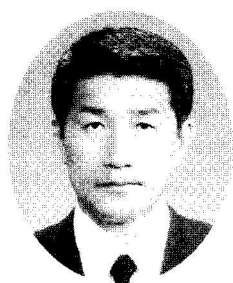
今後もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



## 第五十回全日本東西対抗

### 剣道大会に出場して

河田 清実



「東西対抗出場  
おめでとうござ  
います」という  
事務局の長谷川  
さんからの電話  
を頂いたとき、

一瞬戸惑ってしまいました。生徒の指導に明け暮れて、長い間試合から遠ざかっていた私にとって久しぶりの大会出場だったからです。それも、東西対抗という大舞台です。不安と喜びが交錯していました。対戦相手は、全日本選手権を上段で制した実績を持つ、愛知県警の東一良選手です。「出場するからには、恥ずかしくない試合をしよう」と覚悟を決めました。

五月に八段に合格してから、時間の許す限り稽古をしてきましたが、出場が決まってから、勤務の関係上稽古時間が取れませんでした。大会まであと二週間となったと

き、やっと集中した稽古をすることができ、八日間で六日稽古しました。さすがに疲れましたが、充実感がありました。

大会前日、武道館の二つの立派なサブ道場で、西軍と東軍に分かれて、合同稽古がありました。稽古の前に西軍監督の熊本正範士から試合に臨むにあたってのお話を聞き、「負けるわけにはいかない」と思いました。

その夜、全剣連の役員の方や出場選手・関係者の懇親会があり、多くの選手の方々と交友を深める機会を得ることが出来ました。その時に東選手に「明日は上段を取られますか」と躊躇しながら尋ねたところ、「中段でお願いします」と答えてくれました。中段同士で立ち合いたかったので内心ほっとしました。

開会式の挨拶で愛媛県の加渡知事が「二百五十年後もこの武道館で東西対抗をしていただきたい」と自慢するだけのことのある、すばらしい武道館で、この大会の八段戦の緒戦・十七将で出場できる事の喜びを改めて感じました。また、徳島からたくさ

んの方々が大会を見学に来られていて、応援をしていただいているという幸せを感じていました。

監督として生徒が試合に臨む前にはいつも、「自信を持っていつもの稽古のとおりに戦ってこい」と言って送り出していました。が、今度は自分自身に「よい試合をしよう」と意識せずに、自分の剣道をするんだ」と言い聞かせて試合場に立ちました。

立会いから二・三相合つて後、東選手が私が出がしらに合わせるように面にきたところを抜いて面に乗りました。十分な手ぶえがあり副審の旗が上がるのが見えたので、打ち抜けて残心をとると旗が一本しか上がっていませんでした。「なぜ一本にならなかったのだろう」と集中力が切れましたが、気持ちを入れ直して攻め入ると小手がきたので、裏ですりあげて面を打ちました。「一本を守ろうかな」と一瞬迷ったのですが、残り時間かなり有ったので、「消極的になつて受けになると取り返される」と思い、思い切つて攻め入っていきましました。しかし強い切った出端を面に乗せられました。「ま

いった」と思い、審判を見ると旗が上がっていませんでした。「打たれたな」と思いながら構え直して攻め込むと小手に来たのでそれを抜いて面を打ちました。結果的に面の二本勝ちを収める事が出来ました。試合結果も西軍が二十勝十五敗で勝利することが出来ました。

この大会は、私の剣道人生の新たな旅立ちでもありました。しかしなんとと言っても、たくさんの皆様方に支えられての自分であつ

たことを実感した大会でありました。この経験を生かし、今後更に稽古を重ね、皆様方のご恩に報いていこうと思つています。最後になりましたが、このような素晴らしい大会に出場する機会を与えていただきました県剣道連盟の方々や、応援していただいた方々に、衷心より厚くお礼を申し上げます。ありがとうございます。



# 「第五十回全日本東西対抗 剣道大会」に出場して

警察支部 平野 誠 司

昭和十五年、第一回大会が宮崎市で開催されたのを発祥として以来、全国各地を巡り巡って行われてきた伝統あるこの大会。今年第五十回の節目として、九月二十六日、愛媛県松山市の真新しい県立武道館で行われました。

今年のこの大会から東西の選手構成が一部変更し、先鋒から三十三将までの三名を六段、三十二将から十八将までの十五名を七段、十七将から三将までの十五名を八段、そして副将、大将を範士がつとめるという、東西三十五名の選手が選考されての試合となりました。

私自身は四度目の出場であり、東西対抗の雰囲気は大体の予想がつかまりましたが、何せ今年の対戦相手は母校大阪体育大学の一年後輩である秋田県の湯沢寛選手（秋田南高教諭）と決まっております、まさしく同門対決でやりにくいという感じをもっています。

した。

彼とは学年時代に三年間共に在籍し厳しい稽古に明け暮れた仲間であり、卒業後彼は教員、私は警察官という違った環境で剣道に携わってきました。卒業してから二十年近くが過ぎますが、今回が初めての対戦でもあり、確かにいつもの大会とは何かが違うような心持ちで大会を迎えたのです。

試合は、二十五将戦として延長を含め十分十五秒の戦いを繰り広げましたが、有効打突にしきれなかった技が幾度もあり、自分としては中だるみのある不甲斐ない試合であったと反省しています。互いに思うところもあり、意地の張り合う場面が交錯しながら、最後は私が放った「小手に応じての面」で勝負は決しましたが、時間内に決められたはずの二度の機会を逃したことが非常に悔やまれます。立ち上がり初太刀の返し胴と時間終了間際の諸手突きのどちらかが決まっていれば、引き締まった試合展開になっていたと反省をしました。結果として今回は勝てたものの、こうした有効打突になる機会を二度も逃すということは、

本来は負けに繋がります。自分の限られた機会を如何に一本にしきるか、勝負強さの心髄はここにあると思われれます。

また、東西対抗のもうひとつの醍醐味は格式高い大会運営の中で観客と試合者が一体となるくらいの内容があり、その質も非常に高い試合が見られるところにあると思います。試合者が単に勝敗だけに拘る事なく、勝負という抜き差しならない場面において如何に互いの剣心を表現し合うのか、選手一人一人の息づかいを感じながら自分の剣道に重ねていくことで、その一つ一つの勝負に引き込まれていくのです。

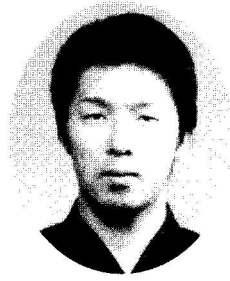
「剣は人なり」、太刀の一振り一振りがまさしく自己表現であります。私自身も昨年から最も大事とされる四十の修行に入っておりますが、まさしく自分の剣道を耕しながら自らの人生を創造している、そんな感覚を持つようになってきました。

「自分が、自分で、自分する」といった心境を大切にして三昧になる。そんな剣道人でありたいと大会を振り返りながら感じている次第であります。

## 第五十八回わかふじ

### 国体に出場して

麻植支部 日和田 慈 海



平成十五年十

月二十六日から

二十九日の四日

間、静岡県藤枝

市の静岡県武道

館にて第五十八

回国民体育大会（わかふじ国体）剣道競技  
が開催されました。

徳島県は、監督・中尾正輝先生、先鋒・  
日和田慈海、次鋒・富田圭介、中堅・平野  
誠司、副将・米倉滋、大将・北條憲治とい  
うメンバーで出場しました。

私は、社会人になって初めての全国大会  
出場であり、国体は、初出場ということで  
本当にうれしく、楽しみにしていました。

徳島県の一回戦は、青森県。試合は接戦に  
なり大将戦にもつれ込みました。その大将戦  
を制し、徳島が一回戦突破を果たしました。  
そして、二回戦。相手は、鳥取県です。

これに勝てば、二日目に残り、ベスト一六。  
選手全員気合いを入れ直し鳥取戦に臨みま  
した。この試合も接戦となりましたが、今  
度は鳥取県に軍配が上がり、惜しくも二回  
戦で敗れてしまいました。

やはり、どの県も代表選手が出場してい  
るので、レベルが高く、僅差の試合がほと  
んどでした。日頃このような場所で剣道が  
できる機会が少ない私にとっては、貴重な  
経験となり、また自分自身の剣道を知るこ  
とのできるよい機会となりました。

この国体では、二試合とも敗れてしま  
い、徳島県の勝利に貢献することができま  
せんでした。結果的には、悔しいデビュー  
戦となったわけですが、それ以上に得たも  
のは数多く、これからの課題や目標をつく  
ることができました。

社会人になってからは、学生時代に比べ  
ると、稽古のできる機会は少なくなりまし  
たが、剣道を続けてよかったなと思える機  
会は増えました。

今回、国体に出場できたのも、日頃ご指  
導いただいている先生方やご支援していた

、だいている方々、また、たくさんの方々の  
間達のお陰であり、心から感謝しています。  
今後も、この大会で感じ、経験したことを  
生かしていきたい、今まで以上に剣道を楽しんで  
いきたいと思えます。そしてその剣の道が人  
の道においても活かされていくように精進し  
う、一人でも多くの人に剣道のすばらしさや  
楽しさを伝えていきたいと思えます。

（前号に掲載予定でありましたが、編集  
作業の手違いで今回の掲載となりました。）



## 第五十九回

### 国民体育大会に出場して

隅 田 憲 男



平成十六年十月二十四日(日)  
から二十七日(水)  
の三日間、「とど  
け」この夢「この  
歓声」のスロー

ガンの下、彩のまごころ国体(第五十九回国民体育大会)剣道競技が、埼玉県秩父市文化体育センターにおいて行われました。

中尾正輝先生を監督に

大將 北條 憲治 (会社員)  
副將 近藤 亘 (警察官)  
中堅 白木 洋一 (教員)  
次鋒 山名 信行 (警察官)  
先鋒 隅田 憲男 (警察官)

の五名が本県の選手として、私は先鋒として出場させていただきました。

私は、国民体育大会に出場するのは初め

てのことで、こんなにすばらしい先生方と、それに恩師である白木洋一先生と一緒に出場でき、本当に幸せな気持ちと感謝の気持ちでいっぱい臨ませていただきました。

大会一回戦は、優勝候補の一角である愛知県とでした。愛知県とは、遠征の練習試合で僅差の試合をしたことがあり、勝てない相手ではないと思いました。私は、その練習試合で二本負けをしてしまい、足を引っぱったことが悔しく、とにかくこの本戦では何が何でも勝つという気持ちで試合に挑みました。

しかし、試合では気持ちばかりが先走り、相手の技を見過ぎてしまうという場面が多く、小手先だけの小さな剣道になってしまいました。一本も思い切った技が出せず、悔しくも引き面を取られてしまいました。チームとしては、次鋒の山名選手が昨年の全日本選手権覇者である近本巧選手に面を二本決めて勝ち、会場も湧きあがり、中堅戦、副將戦、大將戦と目を離せない試合となりましたが、惜しくも負けてしまいました。

この試合で私は、「先の気持ち」というところに課題を残し、自分自身の剣道の修行だけでなく、人間としての心の修行が足りないということを感じました。剣の弱さは心の弱さであると思いました。

試合終了後には、大学でお世話になった先輩方から、「今の自分に何が足りないか、とにかく必死で稽古を積めば必ず分かる」ときが来る。「頑張れよ。」という言葉がいただきました。これもまた自分の課題として残しました。

私にとってこの大会での経験は、大切な宝物となりました。素晴らしい先生方に囲まれた幸せな環境の中で、剣道を通して、人的に勉強させていただき、己の力の無さ、未熟さを痛感し、初心に戻る良い機会を与えていただきました。

この大会で学んだことをこれからの剣道人生の糧として、「臥薪嘗胆、捲土重来を期す。」を心に刻み、剣の道の上で技術を磨くと共に心を磨き、精進していきたいと思えます。

末筆ながら「第五十九回国民体育大会」

に出場させていただいたことを幸せに思い、心からお礼申し上げます。

(試合結果)

一回戦 徳島県 一対三 愛知県

先鋒	隅田	一	メ	東	(県警)
次鋒	山名	メ	メ	ツ	近本 (県警)
中堅	白木	一	コ	山下	(県警)
副将	近藤	一	反	東	(県警)
大将	北條	メ	一	コ	神成 (県警)



## 第三十九回全国居合道

### 大会に初参加して

四 宮 博



平成十六年十

月十六日、宮崎

県武道館におい

て第三十九回全

国居合道大会が

開催されました。

会場は巨人軍がキャンプをしている球場のある運動公園の中にあり、全国的にもまれに見る立派な建物でした。

本県からは、監督に前田健志先生、七段の部に吉岡修一選手、六段の部に福井勝選手、そして五段の部に私が選手として参加させていただきました。

平尾先生から今大会出場を聞かされたとき、高野先輩が出場と思っていた私は、喜びの反面、不安と責任の重さを感じたのが正直なところです。しかし、全国から選ばれた名選手の演武をたくさん見ることは、自分自身の勉強にもなると言われ、経験不

足は重々わかっていましたが、参加する決意をいたしました。

それからの日々、練習に、または強化練習にと諸先生方の指導をいただきながら精進してきました。

試合当日には、宿舎までの十数時間の車での移動、ミーティング等慌ただしく過ぎましたが、緊張とともに試合への期待が高まるのを感じていました。

いよいよ当日。開会式終了後、相互の礼、そして各段階同時に試合開始となりました。私の一回戦は第一試合。対戦相手は鹿児島西田選手でした。無我夢中での演武でしたが、監督の前田先生には、良くできていたとお褒めの言葉をいただきました。しかし、後一歩及ばず結果を出すことはできませんでした。

六段の部の福井選手も善戦むなしく惜敗。七段の部では吉岡選手が三回戦まで進みましたが惜しくも敗退となってしまいました。今大会では、地元宮崎が団体優勝し、個人の部においても宮崎の選手が多数上位を占めていました。

地元選手の今大会の意気込みは大変なもので、職場のことも後回しに、中には会社を退職せざるをえない状態にまでなった方もいたという話も聞いたように思います。頭が下がる思いです。

今後は、今大会で経験したこと、学んだことを生かし、勝てる居合を目指していきたいと思っています。私も五十代後半となり、体のあちこちに痛みを感じます。しかし、九十歳をこえる先生方の力強く品位に満ちた演武を目の当たりにするにつれ、健康を維持するためにも居合道は続けていきたいと思う昨今です。

最後に、今大会に出場させていただいたこと、強化練習において貴重な時間を割いてご指導くださいました平尾先生を始め、多くの先生方や関係各位の皆様様に心より厚くお礼申し上げます。

# 全日本選手権に出場して

審判支部 川 添 義 仁

毎年、テレビの前に釘付けになる自分がある。十一月三日、文化の日。目当ては剣道日本一を決める全日本選手権大会だ。今年、どんな剣道をする人がいるのだろうか。誰が優勝するのだろうか。などと期待に夢を膨らませ、少し緊張しながらブラウン管を眺めていた。

しかし、今年はいつもと違う。自分がこの大会に出場するのだ。七月十一日に徳島県剣道選手権大会が開催され、そこで優勝したため、全日本選手権大会の切符を手に入れることができたからだ。

今の職に就き、必ず出場したい大会だった。稽古もそのつもりで取り組んできた。そのつもりだったが、いざ出場することになると、なかなか実感が湧かない。実感は湧かないが大会は近づけばいい。焦りさえ出てきた。そんな時、職場の近藤師範、平野監督に稽古をつけて頂き、疲労から余計なことを考える余裕がなくなり、心身の状

態は日常と変わらない状態に戻っていった。そして、平成十六年十一月三日。日本武道館に熱戦を繰り広げるべく、各県の代表が集まった。開会式が終わり、二試合場が試合は行われた。自分の試合が始まるのは、そう時間は掛からなかった。自分の試合が近づくとつれ、気持ちを高ぶらせ試合に集中していった。

対戦相手は、石川県の星野選手。星野選手は今大会の最年少剣士三名の中の一人。主審の「始め」の合図の瞬間、星野選手が技を繰り出して来る。つばぜり合いから竹刀、足を使い崩しに掛かれる。相手が先々に技を仕掛けてくるタイプだというのはすぐに感じと取れた。そこから、いつもなら相手が仕掛けてくることに即座に反応し、相手の先手を潰しに掛かり、自分のペースにしていくのだが、今回はそれをしなかった。いや、できなかった。そして、星野選手が竹刀点検で試合を中断し、再度再開になった瞬間、相手が面にくることが感じ取れたので、私も面に飛んだ。が、審判の旗は星野選手方に挙げられた。その後、気持ち

を切り替え一本を取り返す最善の策を講じなければならぬ。なのに、頭の中には雑念がよぎる。なぜ、自分のペースにしてから技を仕掛けなかったのか。面にくると判つたなら、面で合わせる必要があったのか(違う技で応戦できたのではないか?) 技を出すほんの一瞬、躊躇したのではないか?

そんなことを考えながら、集中力は低下していった。そして五分が経過し、勝負あり。自分の剣道ができず最低の内容であった。

これが、現時点、私が大きな大会に出場した場合の実力である。技術的なことはもちろん、それ以外の多くのところが欠如していた。

このままでは終わりにたくない。今回経験したことを忘れず、稽古時に思い出し、稽古に取り組んでいきたい。そして、全国大会等大舞台で活躍できる選手になる。

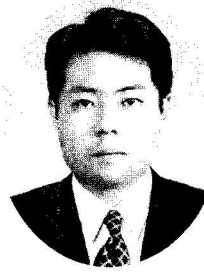
最後に、大会に向け温かいご支援を頂きました皆様方に心からお礼申し上げますと共に、「次回こそ」を誓って大会結果報告といたします。

# 第四十六・四十七回

## 全国実業団大会に出場して

日亜化学工業

園 田 慎 吾



毎年、九月の  
敬老の日に全国  
実業団体大会が  
日本武道館で開  
催され、今年も  
日亜化学チーム

が四回目の出場を果たしました。今回は、  
四十六・四十七回大会とあわせて報告させ  
て頂きます。

### 出場メンバー

- 先鋒 仁木隆夫 (四十六回大会)  
谷口智映 (四十七回大会)  
次鋒 谷口智映 (四十六回大会)  
木里健一 (四十七回大会)  
中堅 前田悟志 (四十六・四十七回大会)  
副将 山本泰史 (四十六・四十七回大会)  
大将 園田慎吾 (四十六・四十七回大会)

### 結果

四十六回大会 (出場二九七チーム)

一回戦

日亜化学 3 - 1 豊田合成

二回戦

日亜化学 1 (代表勝ち) 1 日本生命

三回戦

日亜化学 3 - 0 日本航空

四回戦

日亜化学 2 - 1 住友生命

五回戦

日亜化学 2 (采教勝ち) 2 豊田自動織機

六回戦

日通商事 2 (采教勝ち) 2 日亜化学

四十六回大会では、六回戦まで勝ち進み  
ベスト16入りを果たしました。日通商事戦  
でも、後半日亜化学が追い上げ、押し気味  
に試合を進めていきましたが、最終的には本  
数差一本で敗退しました。しかし、この大  
会で全国の強豪チーム・大企業から選抜さ  
れて来ている選手とも互角に試合ができた  
ことは、私たち日亜化学剣道部にとって大

きな経験と自信になりました。

四十七回大会 (二九三チーム)

一回戦

日亜化学 3 - 0 住友生命

二回戦

新日本製鐵 2 - 1 日亜化学

前年のベスト16という成績を上回るうと  
望んだ四十七回大会でありましたが、気負  
いなどもあり、二回戦の新日本製鐵で敗退  
する結果となりました。新日本製鐵は若手  
を中心としたチームで、相手の勢いに押さ  
れてしまった結果、波に乗りきれなかった  
ように思います。この経験を生かし、今後  
も全日本実業団大会ベスト8を目標にチー  
ム一丸となり、稽古に励んで参りたいと思っ  
ておりますので、今後ともご指導の程よろ  
しくお願いいたします。

最後になりましたが、ご指導ご支援を頂  
きました県剣道連盟の諸先生方に心からお  
礼を申し上げ、大会の報告とします。

# 全国警察剣道大会を終えて

剣道監督 平野誠司

徳島県警は、三部制になった平成九年以降、三部に陥落したのは十三年の一度だけでありましたが、その年の大会では見事優勝し二部復帰を果たしております。また、ここ二年間においても僅差ながら今一步、一部昇格への扉を開けることができず二部残留が続いております。

今年の大会は、昨年一部であった福岡と三重の両県が対戦相手となり、どちらも実力のあるチームで非常に厳しい組合わせでありました。こちらとしては「先手必勝」、流れをこちらに引き寄せて優位に立ちたいところ、選手の気持ちを一つにして初戦に臨みました。

## 一次リーグ、対福岡戦。

徳島の剣道  
（先鋒・佐藤が粘るも延長で面を奪われ一本負け。次鋒・川添も機先を制し面を先取するがこれまた逆転を許し敗退する。二ポイントのリードを許すが、ここで中堅・山

名が流れを変えるような面を二本連取し勝ちを収める。ここは副将・山室の踏ん張りどころ、勇敢に攻め続けるが逆に小手を奪われ万事休す。大将・富田選手も負け、結局四対一の大差で敗れるが、内容は十分ある展開であった。）

やはり、先手が取れなければ実力があるチームから挽回するのは非常に厳しくなります。敗戦により沈みかけていた気持ちに檄を飛ばし、自分の剣を信じて力を出し切ることに気持ちを集中させ、いよいよ天王山となる一戦が始まりました。

## 一次リーグ、対三重戦。

（一試合目の名誉挽回とばかりに粘った末、先鋒・佐藤が面を決める。次鋒・川添はまたもや一本一本となるが、今度は自らの剣心を誇示するかの如く豪快な面を放って勝ちを収める。二ポイントのリードとなった中堅・山名は、これまた他を寄せ付けない強さを発揮、面二本で三重の心髄をうち砕いた。続く副将・山室は、面を先取されるも豪快な諸手突きと面で連勝する。大将・

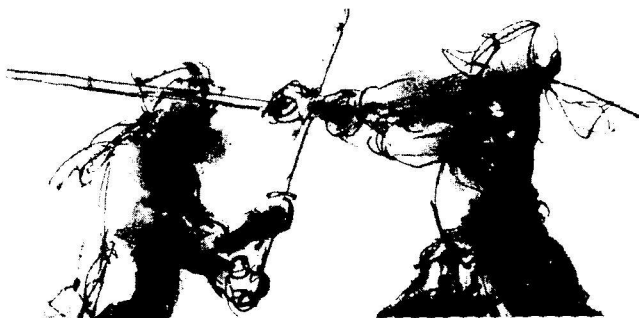
富沢は負けはしたものの四対一で快勝した。）  
挑戦する、先をとりきることができれば一部で十分に戦える自信がついた一戦でありました。個々の剣心が鋭刺され、胸躍するような心地よい勝利であり、来期へ向け一部への照準が現実を帯びてきた試合内容でありました。

来年こそは夢の実現に向け大きな一歩を踏み出すことが出来るように、また、警察剣道が時代に即した形で剣道界に刺激を与えることの出来る存在であり続けるように、鍛錬していききたいと思っています。

〈試合結果〉

チーム名	先	次	中	副	大	合計
福岡	森	松岡	嶺	久保田	本多	$\frac{6}{4}$
	⊗	⊗⊗		⊙	⊗⊗	
徳島	佐藤	川添	山名	山室	富田	$\frac{3}{1}$
		⊗	⊗⊗			

チーム名	先	次	中	副	大	合計
三重	寺嶋	唐川	渡辺	稲辺	国武	$\frac{4}{1}$
		⊗		⊗	⊗⊗	
徳島	佐藤	川添	山名	山室	富沢	$\frac{7}{4}$
	⊗	⊗⊗	⊗⊗	⊗⊗		



# 剣道紀行「韓国」

国際社会人剣道クラブ

米倉

滋

剣道を通じて国際親善に寄与することを

目的として昭和四十年九月、国際社会人剣

道クラブが結成され、剣道を通じた国際交

流がスタートしました。その後、一九九

年五月特定非営利活動法人（NPO）の認

定を受け、現在、全国六地区に会員五〇〇

名を擁するクラブとして活動しています。

私達、国際社会人剣道クラブの会員十二

名は、平成十六年七月十日・十一日の二日

間、ソウル市内のオリンピック記念体育館

で行われた第十七回韓国社会人剣道大会に、

社団法人大韓剣道会の傘下にある韓国社会

人剣道連盟の招待を受け、参加することと

なりました。今回の招待は剣道を通じて日

本と韓国の国際交流を図るとともに、高齢

者の日本選手に剣道に取り組む姿勢や技術

を学ぼうという意図であるとお聞きしまし

た。その理由は、韓国では、日本のように

高齢者で剣道を続ける人が多くないので、

多数の高齢者が剣道を続けている日本に学  
ぶため、五十歳以上の選手を限定して招待  
したとのことでした。

本大会は、韓国内最大の大会で七月十日

に個人試合、同十一日に団体試合が行なわ

れ、韓国全土約六五〇の道場（実業団道場

含む）から約二三〇〇名が参加しました。

個人試合は五部門に分けられ、出場選手

数は、

三十歳未満の部

二八〇名

三十歳～四十歳未満の部

四九一名

四十歳～五十歳未満の部

二五三名

五十歳以上の部

一四六名

女子の部

一九七名

団体試合は四部門に分けられ、出場チー

ム数は、

三十歳未満の部

一一一チーム（五人制）

三十歳～四十歳未満の部

一四五チーム（五人制）

四十歳～五十歳未満の部

四十七チーム（五人制）

五十歳以上の部

五十二チーム（五人制）  
三十三チーム（三人制）

という膨大な剣道人が体育館を占め、午

前八時から午後七時までの間、十二コート

で試合が展開されました。

昨今、韓国における剣道の普及発展ぶり

は目覚ましく、剣道人口の増加に伴い道場

の数も急増しているとのことでした。

ソウル市内に一〇〇以上あるという剣道

道場の中の一つ

洗劍館館長 李 漢植（錬士六段）

に話をうかがってみると、

「個人で道場を経営するためには、剣道四

段以上で社会体育学・心理学・トレーニン

グ法等八科目を政府指定の体育大学で十日

間受講、その後、試験を受け『生活体育指

導者資格証』に合格しなければ公認されな

いという厳しいシステムになっている。

現在、自営道場をもち早朝七時から午後

九時まで指導を行ない、時間単位で受講料

をとり経営している。各道場とも入門希望

者があとをたたず、道場が増加しつつづけて  
いる。また、新たに大韓剣道会のマークを  
制定し、さらに『剣道を習いましょう』と  
いうシールを作り、一致団結して日本を追  
い越そうと国を挙げて必死で取り組み、燃  
えている。」  
とのことでした。

さて、大会の結果は  
**個人試合** 五十歳以上の部

優勝 米倉 滋 (徳島)

**団体試合** 五十歳以上の部

優勝 日本 A 椎名・眞谷・山田

準優勝 日本 B 松村(徳島)・米田・伊澤

第三位 日本 C 米倉・中島・北

となりましたが、試合内容は決して楽勝と  
いうわけではなく、韓国選手も随所で旺盛  
な気力を見せ大接戦を展開しました。

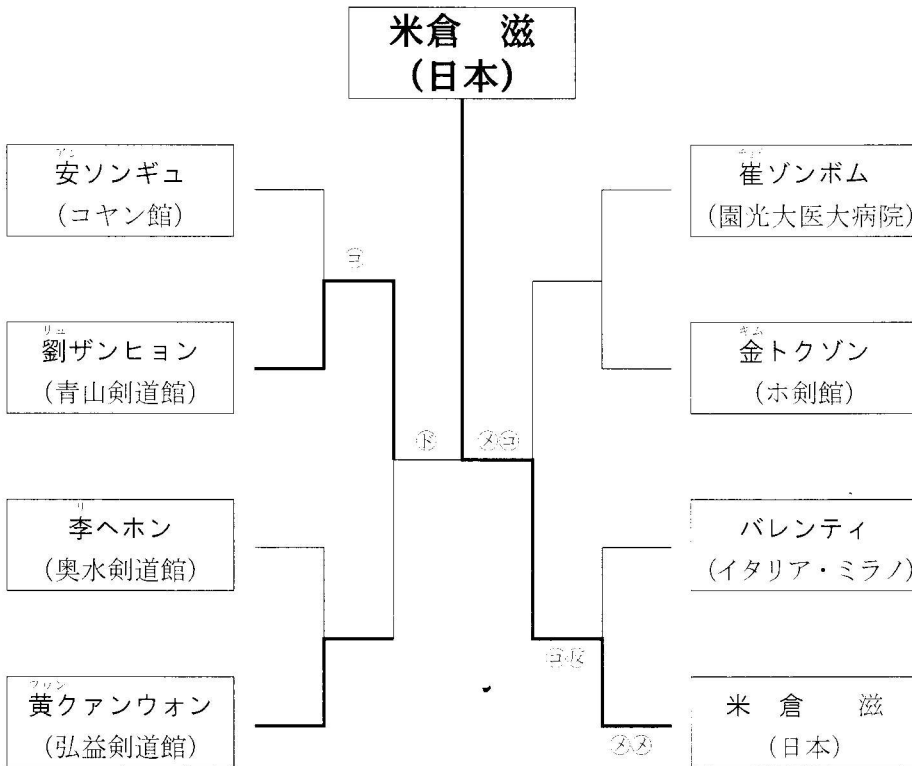
とくに、日本 B チームの大将として出場  
し、六十八歳と本大会最高齢であった伊澤  
章教士七段(徳島県出身で兵庫県在住)の  
敢闘ぶりに大観衆から分け隔てのない声援  
や拍手が贈られたことには感動致しました。  
大会の様子は韓国中央放映テレビでも中継

## 第 17 回 韓国社会人 剣道大会

個人戦 老壮部 8 強 (50 歳以上)

優勝	米倉 滋	3 位	黄クァンウォン (弘益剣道館)
準優勝	劉ザンヒョン (青山剣道館)	3 位	金トクゾン (ホ剣館)

され、日本と同じく招待を受けたイタリア  
チームとともにインタビュアーを受けました。  
剣道を愛し志す人々が国境を越え一堂に  
会し、技を競り合い親睦交流をはかり、そ  
して観客の分け隔てのない声援や拍手に私  
達も感激しました。



# 徳島県高齢者剣友会活動報告

徳島県高齢剣友会事務局長

高 島 稔 之



徳島県高齢剣友会では例年の各種行事活動の上に、本年度から、次の二つのことを新たな取り組みとして加え、実施している。

その一つは、毎月・第二土曜日の午後二時から、県立中央武道館で定例の稽古会を計画し、毎回二十名弱程度の参加者により継続実施していることである。（全会員数八十四名、遠藤一美会長）

もう一つは、西岡金若先生（広報担当理事）が中心となって、当剣友会の広報誌「剣友徳島」の創刊号が発刊されたことである。

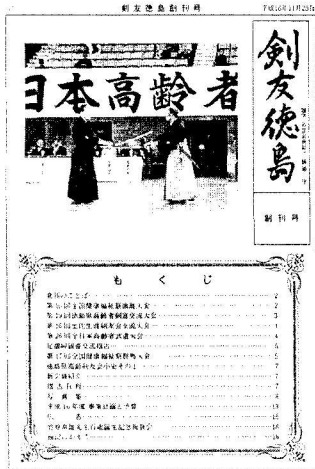
その広報誌「剣友徳島」の記事の中から

（四月）徳島県高齢剣友剣道交流大会

（五月）土佐生涯剣友交流大会

（六月）全日本高齢者武道大会

（七月）足摺岬親善交流稽古会について、ページを改めて紹介したい。  
 なお、十月に実施された全国健康福祉祭群馬大会（ねんりんピック群馬剣道大会）については、これもページを改めて監督の南充美先生にご報告いただくこととし、十一月の徳島県健康福祉祭剣道交流大会について、事務局の方から簡単に報告しておきたい。



## 第十回徳島県健康福祉祭 剣道交流大会

（二〇〇四）とくしまねんりんピック

本大会は、平成十六年十一月二十七日（土）、午前十時から県立中央武道館で実施された。開会式の後、日本剣道形が打太刀 教士七段 中尾正輝先生、仕太刀 教士七段 高島稔之で行われた。

続いて、居合の演武が、抜刀術神伝流 近藤康次先生により行われた。

その後、会員選手三十五名の出場による交流試合が、団体戦、個人戦の順に展開された。

団体戦は、十一チームによりトーナメント戦を行った。その結果は次の通りである。

・優勝：徳島C（先） 中村稔、裕

（中） 端村 武（大） 西岡金若

・二位：徳島A（先） 中尾正輝

（中） 坂下彦之（大） 近藤康次

・三位：阿南A（先） 福井軍二

（中） 有賀秀敏（大） 遠藤一美

## 第十九回徳島県高齢者剣道大会

### 剣道交流会大会

平成十六年四月十八日  
県立徳島中央武道館

三位（西岡 侃、勝沼信彦）

（B 組）

優勝（川田武志）、二位（東内 勉）

三位（張西正晴、松村克隆）

（C 組）

優勝（中村稔裕）、二位（沢井勝之）

三位（中尾正輝、加納忠義）

大会終了後、有志による合同稽古会を行い、全日程を無事終了した。



阿南B（先）西岡 侃

（中）中山啓男（大）濱田逸郎）

個人戦は、三十名の選手が、年齢別に四グループに別れてトーナメント戦を行った。その結果は次の通りである。

（特 組）

優勝（遠藤一美）、二位（南 充美）

三位（濱田逸郎、高田 豊）

（A 組）

優勝（中山啓男）、二位（西岡金若）



午前中県内選手による団体戦と個人戦が行われ、午後は剣友会本部東京から五名、高知から十名の選手団を迎えて恒例の親善交流会を行った。特に高崎八段には一般選手と同じく対抗試合に三回も出場され、その正しく模範的な剣道は観戦者に深い感銘を与えた、交流会の最終を締めくくる合同稽古も最後まで元立ちとして指導に徹せられたことは誠にありがたいことであった。

互いに相手を求めている合同稽古は激しい気迫の中にも「和」の心を忘れず時の経つのも忘れて攻防熱戦を展開した。午後六時から会場を厚生年金会館に移しての懇親会、一年振りの再会を喜び合い剣談に花を咲かせ交流会は本年も盛況のうちに無事終了した。

第一試合、土佐生涯剣友会対徳島は双方二勝二敗六引き分け、第二試合、土佐対全日本高齢剣友会も双方三勝三敗四引き分け、第三試合全日本対徳島は全日本が三勝二引き分けで辛勝した。

親善交流試合

	団体	個人・特	個人 A	個人 B	個人 C
優勝	徳島 A	早川一也	遠藤一美	松村克隆	中尾正輝
準優勝	阿南 A	糸谷文雄	中山啓男	川田武志	端村 武
三位	徳島 C	美馬正雄	南 充美	福井軍二	三木 毅
三位	阿南 B		西岡金若	有賀秀敏	沢井勝之

第十六回土佐生涯剣友会交流大会

みだしの大会が平成十六年五月十五日、高知県立武道館で開催され本県から南監督兼選手ほか別記計十名の選手団が参加した。

大会は午前中は高知県内選手団同志で行われたが、当方一同は昼食の後午後一時から参加し、先づはじめに両県選手十名が二コートで計五試合立合いとして二分行った。次に交流試合(三分引き分け)を中央コートで元気よく展開、白熱した攻防の連続で会場を湧かせた。結果は先鋒・中村鋭く二本勝ち、次鋒・沢井③、八将・端村②それぞれ一本勝ちで大いに氣勢を上げたが七将・四将が引き分け、三将・副大將は相手側の一本勝ちとなり結局勝者同数の引き分けとなった。

しかし、各選手とも「和」の中に闘志をみながらせ気力、迫力充分の試合をし合同稽古も約一時間相手を代えて行い、快よい汗を流すことができたことは有意義であった。

夜は常宿の土佐荘で一風呂浴び、午後六時から恒例の懇親会。

本県南代表からご当地の橋本八段のご指

導のおかげで若手新八段が徳島にできたことのお礼をふくめて挨拶、地元公文会長のユーモアこもる挨拶の後、新鮮な土佐料理を味わいつつ、飲みかつ食う程に例年どおり十年の知己そのままに剣談、歓談に時を忘れ、再会を約束してめでたくお開きとなった。

徳島県高齢剣友会剣友会選手団(敬称略)  
糸谷文雄、南 充美、近藤康次、佐藤 勇、西岡金若、有賀秀敏、川田武志、端村 武、沢井勝之、中村稔裕



## 第二十六回全日本高齢者武道大会

六月六日恒例の日本武道館で開催され、本県から別記七名が参加し、四回戦進出一名、三回戦二名、二回戦同二名等の成績でしたが全員元気一杯奮闘して無事帰りました。



西山道場にて

なお、南、近藤、西岡の三名は四泊五日（東内三泊四日）の行程でおなじみの三菱、

野間、西山三道場の稽古に参加し、事前準備とともに交流親善を深めた。

**参加者** 南 充実、近藤康次、中山啓男、

西岡金若、東内 勉、福井軍二、

高島稔之（敬称略）

参上しました三菱道場の福田先生、野正先生はじめ各先生方、野間道場の宮先生、下野先生、山本先生ほか、西山道場の西山先生ほかご門弟の皆様、その節は御懇篤なご指導をいただき誠に有難うございました。厚くお礼を申し上げます。

## 足摺岬親善交流稽古

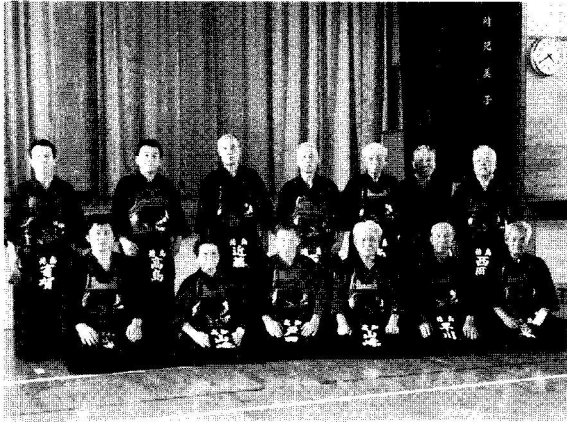
五月十五日高知大会の懇親会で山崎先生ご夫婦から足摺岬での合同稽古のご案内を受け、その後日程等を検討した結果、いよいよ七月二十九、三十日に実施のこととなった。

七月二十九日（木）別記参加者は糸谷先生のお手配による貸切りバスで午前七時徳島駅ポツポ街前から勇躍一路足摺岬へと向かった。

猛暑の中、途中早明浦ダムを見学し、午後三時頃無事現地到着、先生経営の温泉ホテルで小休憩の後、岬の小学校校体育館で約一時間合同稽古を行った。

温泉で快く汗を流し、夜は懇親会で楽しいひとときとなった。また、黒潮踊る足摺岬の新鮮な食材をふんだんに使ったホテルのご自慢の料理に舌づつみとともに活力を覚え、宴たけなわともなればカラオケ大会で彼我入り乱れて時を忘れるばかりであった。

なお、山崎先生にはご夫人ともども心づくしの接待に尽くされ、極上の見事な鯛の



足摺岬小学校体育館にて

活け造りや皿鉢料理の数々を用意され、私  
たちはただ感じ入るばかりであった。

山崎先生ご夫妻、まことに有難うござい  
ました。ここに紙上をもつて厚く御礼申し  
上げます。

翌日は本州最南端の岬に立ち日の出を拝  
観し、爽快な気分になり無事帰着した。

参加者 早川一也、糸谷文雄、糸田川美千男、

南 充美、近藤康次、佐藤 勇、

西岡金若、西岡 侃、有賀秀敏、

高島稔之 以上十名(敬称略)

## 二〇〇四ねんりんピック

### 群馬大会に参加して

監督 高齢剣友会理事

南 充美



選手団百八十九名が参加致しました。

十月十五日、徳島県庁講堂に於て、結団  
式が行われた後、直ちにバス四台に分乗し  
て出発、航空便で羽田空港へ空港から貸切  
バスで宿泊地伊香保へ午後五時三十分頃到着  
しました。

翌日十六日は午前十一時三十分から群馬  
県立敷島公園陸上競技場で総合開会式が行  
われ参加致しました。晴れ上がった秋空の  
下メインアトラクション「ぐんま発の応援  
歌」というテーマを掲げて第一部・冬から  
春へ「元氣いきいき」第二部・夏「自  
由のびのび」第三部・秋「交流ふれ

あい」第四部・新しい四季へ「未来き  
らめき」という新しい春夏秋冬を迎える喜  
び、きらめきに満ちた未来を表現し、全国  
へ「元氣」を発信しますというものでした。

十七日からは、各地に分かれての種目別  
交歓試合が開始となり、剣道は、榛名富士  
の姿を映す榛名湖畔の榛名湖温泉ゆうすげ  
元湯に宿舍をとり、剣道交流大会々場の榛  
名町総合体育館へ、梨・梅・桃・プラム等  
果物の産地らしく道の両側に果物の木をみ  
ながら約一時間かけて参加した。参加チー  
ムは、全国都道府県、及び政令指定都市併  
せて六十チームの多くを数えて、試合の方  
法は、例年の通り、全参加チームを三また  
は四の組み分けとして、リーグ戦を行い、  
その組の一位チームが決勝トーナメントに  
進み勝敗を決する方式でした。

本県は昨年優勝及び第三位と優秀な成績  
を収めたので、今年も優秀な成績をと選手  
は全力を尽くして戦いました。

予選リーグは第四試合場で本県と神戸市・  
佐賀県・広島市の四チームで行い、本県は  
見事一位で決勝トーナメントへ進みました。

決勝トーナメントでは地元の群馬県Bチームと対戦、勝者数・総本数共同して代表戦となりました。代表戦は最初に引き分けた者によって勝敗を決するという規定に従い、先鋒の中尾先生が出るようになりました。私の心にやった勝てると思ったのですが、中尾先生の健闘にもかかわらず、地元の利で惜しくも面をとられ敗れました。

例年の記録では、大方は地元チームが優勝することが多いのですが、本年は、山形県が副将・大将と二刀流の使い手で、地元群馬県B・群馬県Aを敗り優勝しました。

- 優勝 山形県
- 準優勝 群馬県A
- 第三位 愛媛県
- 第三位 群馬県B

ちなみに群馬県は榛名山東麓は剣道中興の祖と言われる新陰流の祖、上泉伊勢守秀綱（信綱）が活躍した戦国時代の山城、箕輪城址があり、県都前橋は、昭和の剣聖持田盛二範士の生誕地であります。又東方古井町は馬庭念流道場があり、全国に知られ

引き継がれています。榛名町の里見に寛政年間に新陰流の達人富岡大八郎という剣豪の他、剣豪が数多く生まれており、剣道はたいへん盛んな県であると云われています。



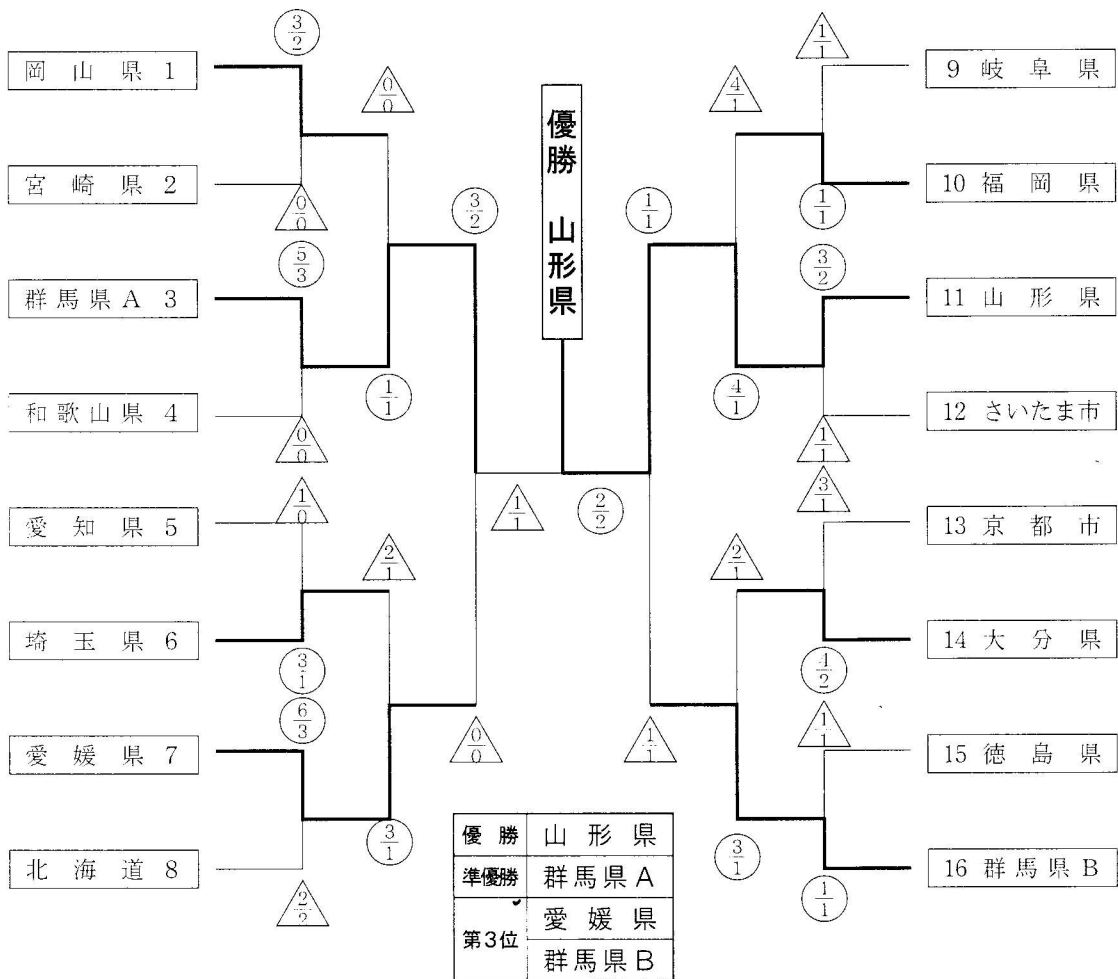
### 予選リーグ戦 成績表

15ブロック	徳島県	神戸市	佐賀県	広島市	勝数	敗数	勝者数	総本数	順位
徳島県		2/2		3/2	2	0	4	5	1
神戸市	2/1		4/2			1	3	6	3
佐賀県		4/2		2/1	1		3	6	2
広島市	2/1		0/0		0	2	1	2	4

## 決勝トーナメント

団体名	順	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	総本数	勝敗
徳島県	氏名	中尾	中村	沢井	川田	遠藤	中尾	1	1	×
	試合経過	×	一本勝 ⊗	×	×	一本勝 ⊕				
群馬県B	氏名	宮本	藤岡	窪田	渋谷	小柳	宮本	1	1	○ (代)
	試合経過						⊗			

## 決勝トーナメント表 (上位入賞記録)



# 随想

## 遠い日の教え

堀江幸夫

老来日増しに、記憶力が減ると愚痴をこぼす私に、老妻は「八十年以上生きてその想い出をそっくりそのまま、机の引き出しに詰め込んでいたのでは新しい知識も思い出も入りませんよ。忘れるから新しいものが吸収できる、それでよいのでしよう。」と言う。なるほど、理屈だ。

さて、本題に入るとしよう。私が、京都大会に初めて参加したのは、昭和十六年鎌土受審であった。その頃は大阪に住んでいたもので、京都に行くのは専ら大阪天満橋から京都三条の京阪電鉄本線であった。戦後、京都大会に参加したのは、第二回大会からで、大阪の実家から同様、京阪電車で京都に向かった車窓から右手に遙か伏見の城が見え、左手には水量豊かな淀川の流れ桂川、

宇治川、木津川の合流点、橋本は昔の栄えた宿場、ここから旅人は大阪への船便に身を託したのだ。電車は、橋本・八幡・中書島と京都の中心へと向かう。八幡は有名な松花堂弁当の発祥の地でもあるし、私の生涯、忘れようとしても忘れえぬ思い出がある地。八幡駅で電車を降りて朴歯の下駄履きで約一時間（4キロ）の処に禅宗の名刹円福時がある。

ふとした奇縁で、若き管主神月徹宗老師の知遇を得て、参禅を許され、土曜日の午後から日曜日の夕方まで、雲水と共に起居して禅の第一歩を踏み出す。僅か二カ年で太平洋戦争のため学徒動員される。短い間であり以来六十余年、記憶も又遠く薄れたが、雲水に指導され部屋の掃除、境内の清掃、箒の使い方、雑巾掛け、食事作法は又難中の難、堅い沢庵は噛んで音を立ててはならず、舌と上あごで塩分を押し出し、おかゆをすすり沢庵は丸々飲み込んでしまう。座禅は太くて短い足では、実に座りにくく正座すれば三十分もたず苦勞の末、半跏趺坐で座れるようになれて何とか座禅の格

好になり、一安心したのは本人より指導の若き雲水だった様に思う。

一日中多忙な作務に追われたが時に神月老師から部屋にくる様に呼ばれる。破格のことだ。難しい禅話より何気ない世間話の中で剣道についての話題あれこれと、「私は剣道のことは何一つわかりませんが」と言いつつ「堀江さん」、「はい。」と答えた私に「それがいい。素直に応じればよいのでしよう。」

今に思えば、国師三喚の教えであり、達磨西來の意の教えであったことに気づき、徹宗老師の遠大な愛情、いずれ心法進めはこの言葉の意味のわかる日も来るだろうと、老師の深い思いやり。半世紀を経て私の剣に表れる。劍の師も心法の師も共に若くして世を去る、愚鈍な私が残って八十路半、真に惜しんでも余りある人生の皮肉。

# 竹刀の誕生物語

麻植支部

三木

毅



江戸中期に防具剣道への変革があり、当然の姿として竹刀も変化するようになった。現在私

どもが使用している竹刀が定着したのは明治時代になってと思われる。

私の剣道を振り返ると、父親の剣道そして私夫婦と子供三人が剣道にたずさわったことでなんとも言えない剣道への思い入れがある。

数年まえのこと、倅が剣道月刊誌を購入してきたので目をやると、竹刀作りの竹刀師さんの記事に接することとなった。ちらつとサブタイトルを見ると、剣道を修業している者として竹刀のことについて全くの無知であることに気付き一気に目を通した。連載記事であったためその後の月刊誌を購

入して一応目を通し、竹刀作りの大変さと竹刀の大事さを痛感した次第であった。今我が家には連載記事だけを綴じた「竹刀作り」のファイルがある。

何故かという竹刀作りの竹刀師さんの情熱と気配り、そして職人氣質に触れることができ、竹刀の大事さが日本と同等の位置づけや竹刀扱いの思いやりなど多くのことを痛感し、自分の知識のなさを知ったからである。

このとき竹刀作りの竹刀師さんの大変さや職人技を体験してみたいという気分に駆られることになってしまったから、記事をファイルする気になったのである。

平成十二年のこと、阿南市での勤務になり、四国でただお一人という竹刀師さんである「高橋国保」という方の存在を知り訪問した。何回か訪問するうち竹刀つくりを教示してくれることになり、一応の作り方の手順を覚えることとなり、革製品を装着して体裁を整えたが、人様の前で構えるには素人丸出しの観があり、我が家に作成第一号記念品として眠っている。

私が高橋さんから耳にしたことや自分が竹を削った体験などを交え、竹刀作りの大変さをここにご披露して竹刀の誕生を知っていただければ、竹刀師さんに敬意の念が自然と沸き上がり、そして竹刀の扱いや竹刀への思いが新たになるのではないかと思われる。

## (1) 竹の吟味と切り出しなど

まず、竹林での竹の吟味である。竹刀用の竹は真竹であり、選び方を誤ると厚みが無く、又すぐにはつれたり、割れたりして使用に耐えないことになるため、竹の吟味は竹刀作りの第一歩であり最大の重要さである。竹は生育場所の年間気温や降雨、湿度などによって良否が決まるようである。三年を過ぎた竹の中から太さと節の長さを見て切り出すこととなる。竹の太さによるが、一本の竹から作れる竹刀は二本が最大である。切り出した竹は四本割り、八本割りなど太さに応じて割られ、一本の竹を割ったという印をつけ一ヶ月ほど天日干しにする。そして防虫処理をして強度を高めるた

めに約三年間納屋の中で寝かされ、自然乾燥させる。

## (2) 割り竹の矯め

約三年間納屋で寝ていた竹を膝の上のせることから竹刀への変身が開始される。その先ずの工程は竹を眺めることからである。割り竹は乾燥すると節目を境に「くの字」形に曲がっている。これを直線化することが「矯め」ということであり、矯める理由は大きく二つの理由がある。一つは竹刀になった時に柄部から剣先までの間の竹の繊維を直線にしておくためである。そうすることによって、繰り返しなされる打突による繊維の損壊を食い止めようという知恵である。すなわち長持ちする竹刀という評価を得るためである。

二つには、竹刀を作り上げてゆく課程で、竹の側面を四十五度の角度に削り込む作業を容易にしようという知恵である。竹刀は四枚の割り竹であり、その側面は全て四十五度の角度で作られ完全に密着していないと握りが固定しないし、また、打突部の一

枚が捻り込むことになるからである。

矯めをするためには火力が必要である。

竹を火に炙り柔らかくした上で「矯め木」という道具を用いて直線化してゆくのである。結構根気と力のいる作業である。特に柄部の矯めは竹の肉の厚さと堅さで、尋常な力では自由にするにはできず厄介な作業となる。兎に角まっすぐ、まっすぐの気持ちで竹に挑まなければならないのである。

## (3) 削り込み

青竹であった竹は割られて印を付けられ、離ればなれにならないように四枚一組にされて干され、葉を塗られ、三年間も無理矢理寝かされ、火に掛けられて無理矢理、力任せにまっすぐにされてやつのこと、四枚四兄弟が一面に並べられ、三年前に割られた隣り同志が再会の前段を迎えるのである。並べられた四兄弟の竹は、どのような竹刀に加工しようかと思案される。

長時間かけて思案され、大人用の竹刀で「胴張り」と決断されると削り込みの作業が開始される。削り込みは大きく三つの道

具が用いられる。一つは削り出し用の小刀、二つにはカンナ、三つには柄削りの丸形刃物である。

削り出し小刀で左右の側面を四十五度の角度と竹刀の外観を整えるためにひたすら削り込まれる。次いでカンナで四十五度同志が密着するように少しずつ少しずつ削られる。四兄弟が完全に密着できれば、竹刀全体の使い良さのためのバランス調整をしながら微調整の削り込みをする。今度は柄部の内側に「ちぎり」（契りという意味である）と思われるという四角の金具を打ち込む。その後、糸で数カ所を結び長さを決めて切る。次いで柄部の表面部をひたすらカンナで削り込む。一応の削り込みが終わると丸形刃物の上に乗せ、柄部がまん丸になるように回して回して、突いたり引いたり作業がはじまる。やがてノギスという物差しで柄部の計測をしながら既製の柄革がうまく入るように微調整される。

ようやく竹刀の体裁が整い、全体的に目配せしてお化粧する如く仕上げの研磨を完了。それが終わると油を塗り乾燥させて完

成となる。

#### (4) むすび

竹刀の製造方法は昔ながらの手作りと機械による大量生産、更には近代文明が生んだ合成化学製品を用いた大量生産に大別されるであろう。

竹刀の良し悪しは、バランス、打突の際の強さ、しなやかさ、関節に負担がかからない、長持ちなどの条件をみたすものが良品であろうと思われる。手作り竹刀は永い時間と竹刀師による気配り、情熱、思いやり、最高の剣道がなされる念願などのために、自然界から選りすぐられた真竹という素材に、竹刀師は幅広い思いが見事に刷り込まれた芸術的な作品であると確信する次第である。

竹刀師による竹刀作りは一つ一つの工程に竹刀師の知恵と技術が込められている。

四国でただお一人の竹刀師高橋さんの職場には、ご自身が製作した竹刀を使って、試合で好成績を収めた人、見事昇段された人などの現物竹刀を記念品として保管してい

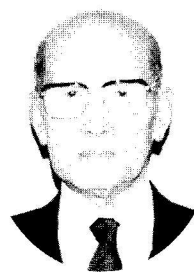
る。これは竹刀師としての職人氣質の表れである。この数が増えることが職人としての誇りとなり、次の製作への活力になっていくのである。

一本一本に知恵と技術と根気を込めて作り上げる竹刀師さんに今一度敬意の念を表さなければならぬ。またその竹刀で剣道が出来ていることに感謝し、竹刀の取り扱いに剣道人としての自分の気持ちを込めておくことが大切なことである。



# 私の追憶

範士 勝 浦 守



私は大正に生まれ、続く昭和、平成の三時代を生き、平和と戦争を体験し、更に戦勝と敗戦を以って経験し、乍ら尚永生への道を進行中と云う幸せ者である。

顧みると随分と永い戦争と受け止めてはいたが実戦は四年足らず、出征も四年余であった。しかし、戦時下の時代は二十五年余りになるとされ、人生の三分の一は軍籍に身を置き、生死の境を生き抜いた事になり、戦死、戦傷、病死者と比べありがたい極みである。

このような環境の中で剣道と云う道を歩んでこれたことを考えてみると、人生幸せの最高の道であったと確信している。

剣道を一時的趣味や道楽として考えるところの一つの苦業かも知れないが、修行として積

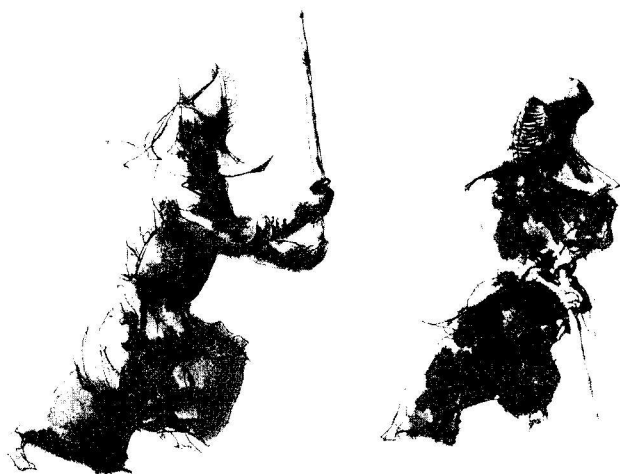
み重ね継続して実行すれば必ず成果は上がると思う。

恩師高島永吉先生晩年に曰く「範士は半死半生だよ」と。然し、若かりし日の先生を拝見致す限り、あの均斉のとれたお体から醸し出される心技の捌きは、神業の感じでした。訓えを乞うと「観て習え」に終始されたと記憶している。今日、その昔を想起すると、大先生の何時も謙虚な中に素晴らしい指導力が温存されて居られたように思う。それ等の訓えを実現された竹原常雄先生や石井克太郎先生の力説された「範士の稽古」とはその真髄であったと回顧している。ビルマ作戦部隊の戦友であった東京三菱道場室井範士よりご紹介いただいた、昭和天覧試合優勝の望月正房範士からも「百練自得」を教訓に永くご指導を戴いた。

思うに私達の時代は勿論、永い剣道史の中で一世を風靡された先輩、剣豪の先生方のご遺訓や主眼は共通し、総て修練の賜と痛感している。

私の人生でその三分の二、即ち五十年の剣歴で現況の剣道界を直視する時、期待さ

れることは剣道人口の減少や少子化を防ぎ、国益に貢献する真の剣道人の育成ではなからうかと思う今日この頃である。



## 昔の名前で出ています

高田 豊

胃癌の告知を受けたのは平成十五年四月三日の夕刻でした。処置としては胃の全摘

出手術が最適とのこと、強いショックを受けましたが観念して同月十五日入院ということになりました。そこで入院迄の間に県剣連の稽古会二回と審査員講習会が有るのを利用してこれに参加して、「五体満足での稽古納め」と諸先生へのお礼とお別れの心で合掌しつつ稽古を致しました。満足感をもって予定通り十五日に入院し諸検査を経て四月二十日に手術を受けました。正午過ぎ、麻酔の注射をうけ手術室へ寝台車で運ばれる途中、「このままあの世に行けたら楽だろうなア」と思ったのはどうしてなのか？今でも判りません。

幸い他臓器への転移も無く順調に快方にむかい県剣連諸先生のご激励を頂いて五月二十二日に無事退院することが出来ました。ここまではまず順風満帆、この調子だと十月の「ねんりんピック」参加も夢ではな

いと期待して、療養と体力増強に励んでいたのですが、不覚にも「腸閉塞」となり六月二十五日再入院したのを皮切りに、以後原因不明の高熱などで入院院を繰り返す破目となりました。

そして九月八日からの入院治療では一ヶ月に及ぶ絶食点滴ということになり更に再開腹手術をも検討中ときかされて、この頃から「死」と直面していることを認識しました。体力の衰えと精神的打撃で終日「死ぬということ」への恐怖心に責められつづきました。

ところが有難いことに「お前は永い間剣道に打ち込んで当然、生と死について考えたことが多いではないか。忘れたのか？」という天の声をきいたのです。そうでした。殺すか殺されるか、生と死をかけて闘う剣道の道に励んできたのに今更アタフタとしてどうする！という勇気が湧いてきたのでした。

考えることも必要だがもう一度竹刀を握って実践で死の問題を解いてみたい、という欲望にとりつかれてしまったのです。精神

的な処理がついた一方、幸運にも投薬療法が成功して十月二十九日無事退院することが出来ました。その時点から慎重で大胆な療法を創り出し、徐々に体力も回復し平成十六年九月十五日、実に十七ヶ月ぶりに竹刀を再び握ることが出来たのです。諸先生のご激励のおかげと心から感謝しています。

竹刀を握った実感、面金を通して見る先生方の姿、そして交剣知愛の境地にしびれて、目頭が熱くなるのを我慢出来ませんでした。

大病前の私の剣道と再出発の私の剣道には必ず変化が出ていると思います。

新しい剣道への脱皮にどうかよろしくご支援を賜りたいと存じます。

平成十七年一月二十三日 記

# 「剣士の碑（いしづみ）」

丹生谷支部 教士

吉田 租



「丹生谷は徳島  
県の柳生谷だ。」  
と言う人がある。  
少ない人口の割  
にたくさんの目  
覚ましい剣士を  
輩出しているからだろう。その源流となっ  
たのが故範士山家雪藏先生その人である。  
山家先生の功績を称え、少しでも先生のご  
人格に近づこうと、先生ご在世中の昭和五  
十一年から毎年四月に一泊二日の日程で、  
山家旗剣道大会を催しているのはご承知の  
通りである。ご参加下さっている先生方ま  
た中学校、高等学校の方々には深く感謝し  
ている。

昭和五十五年に逝去された先生のお墓は、  
鷲敷町百合字石橋の国道沿いのお屋敷の奥  
まった所にあつたが、平成十六年七月三日、  
先生の長男山家啓助ご夫妻、お孫さん、親

戚の方々によつて法要が営まれ、兵庫県伊  
丹市へ移葬された。県剣連丹生谷支部長助  
岡克則氏と、振武館長の私が参列して丁重  
にお別れの手向けをした。その日は、ひぐ  
らし蝉がカナカナ鳴き、汐の引くような淋  
しさを憶え、思わず涙が出た。しかし、思  
いを巡らせてみると、幸いなことに屋敷入  
口には丹生谷支部員の手によつて建立され  
た山家先生の碑があり、先生の剣魂はこち  
らに残つて頂くのがよいと思い、再び、そ  
のように墓前に向かつて祈念した。

数少ない剣道人の碑の中、山家先生の碑  
は、上那賀町東尾の山中から採つて来た自  
然石に、徳島県武市恭信知事の筆で「山家  
雪藏翁碑」大書してあり、裏面には、おそ  
らく県内ただ一つであろう範士高島永吉先  
生の「讚」が刻まれている。そこで賛辞を  
読みながら大先達、二人の範士の風格に接  
してみよう。

## 讚

剣道範士 高島永吉 記

山家雪齋氏は生涯をかけての清友にし  
て今般氏の生存中に血の通う子弟より建  
碑の話聞き欣快この上なきを覚え賛辞  
をおくるものである。氏は彫刻家を本業  
とするも傍ら県立徳島商業学校剣道教師  
として多忙の身をおくつた。氏又幼少よ  
り貫心流山根正雄先生に師事し、近江佐  
久郎先生、吉本彦吉両範士を援け徳島県  
剣道研究会を組織し、その主幹として剣  
道発展の礎を築いて来た。故キクエ夫人  
は剣道研究会婦人部を結成して夫君を助  
けた事を特記する。

戦後は丹生谷に振武館を起し剣道振興  
に余生を没頭したことは周知の事実であ  
る。

氏は又屢々剣道発展の功により県知事  
より表彰された。又今回の建碑に際しワ  
サ夫人の内助の功の多大である事を後世  
に遺すものである。

昭和四十九年四月吉日

何と簡潔にして言うべき事を言い尽くし、  
気品に満ちた文章だろう。まさに、剣を正  
眼に構え一本の無駄打ちも無い高島範士の  
構えと、品格高き剣風が目に見えるよう  
ではないか。また歴史上の大先生に囲まれ、  
風雪に耐えた山家先生の温顔が目につぶ。  
そしてこの一つの碑に大正と昭和前半期  
の時代をそれぞれ支えた「名剣士」五名の  
名が、奇しくも彫り刻まれているのが嬉しい。  
「剣道家の柳生谷」といわれる驚敷に、珍  
しくも貴重な碑がそつと建ち、本県の剣道  
の発展をいつまでも見守っているのである。



山家雪藏先生の碑

## 警察剣道師範時代

中尾 正 輝



平成九年（一九九七年）四月一日、堀江先生はじめ県警幹部等皆様方のご推挙により、栄え

ある徳島県警察術科指導官に任命された。自身かねてから強く希望していた事柄だけに本当に恐懼感激した。

昭和三十七年（一九六二年）四月、本県警察官を拝命以後、二十年間に亘りいわゆる県警察剣道特別訓練生として、選手、監督生活を送ってきた。しかし、途中勤務の都合で、約十年間に亘り剣道から離れていた関係上、指導者としてやっていけるのか少々不安であった。

術科指導官の任務は、県下全警察官に対する、剣道・逮捕術・救急法・走訓練等術科全般に亘り指導教養する任務を負っているところであるが、私としては、本県警察

剣道が、四国管区内警察剣道大会や全国警察剣道大会において立派な成績を挙げることが目的であった。従って、特別訓練指導に専従できる時間を多く割り、この目標達成のために選手等と共に日々努力した。

全国警察大会は、平成八年度（一九九六年）まで一・二部制（入替え制）を採用していたものが、就任した年度から一・二・三部制が採用（入替え制）されるようになった。そのころ私の剣道生活は、県剣道連盟の役職もなく、なにか寂しい気持ちであったことが忘れられない。

平成十一年（一九九九年）三月、県剣道連盟審議員に推薦され、連盟行事等にも参加させていただくようになった頃から、剣道に対する取り組み等その有様が少しずつ変化してきた。仕事のやり方等がわかってくると、心にも余裕ができるようになり、特練の朝稽古等も取り入れやと選手達を引っ張っていくことができるようになった。

平成十三年度（二〇〇一年）には、念願であった剣道術科指導者採用選考試験も実施されるようになって、続々と将来性のあ

る選手達が採用されるようになった。うれしいことに、彼らは、剣道だけでなく警察本来の業務においても、その持ち場持ち場で立派に任務を果たしてくれていることである。

この年には、四国管区内警察剣道大会と全国警察剣道大会（第三部）において優勝したことである。日本武道館の片隅で、選手達とうれし涙を流したのがつい最近のようない気がしてならない。選手達は、第二部の全国制覇を目標に日々稽古に努め頼もしい限りである。

剣道を通じ組織に役立つ警察官の育成に努めたのであるが、平成十六年（二〇〇四年）三月、七年間の任務を終え定年退官、近藤巨師範に後をお願いした次第である。「才能有限努力無限」今、剣道八段を目標に日夜努力しているところである。

# 稽古の反省

福井軍二



劍聖として有名な持田盛二先生の「遺訓」の中で「剣道は五十歳までは基礎を一生懸命に勉

強して、自分のものになくしてはならない。

普通基礎という、初心者うちに習得してしまっただと思っているが、これは大変な間違いであって、そのため基礎を頭の中にしまい込んだままの人が非常に多い。私は剣道の基礎を体で覚えるのに五十年かかった。」等々と述べられています。この「遺訓」を何度も読み返してみると、剣道の修行のあり方について、これほど分かりやすく述べられているものはないと思えますと共に、修行の厳しさ、奥の深さ、重さがあり剣道修業に対する考え方の指針となる大切な教えだと思えます。特に「剣道の基礎を体で覚えるのに五十年かかった。」と言わ

れていることに「ハッ」として、自分の行っている未熟な剣道をよくよく反省しなければなりません。

今自分が行っている剣道は、剣の道を修行するための基本の段階ではなかるうかと思えます。持田盛二先生の述べられている剣道の基礎とは、相手と礼を交わし、蹲踞して立ち上がるまでに備えていなければならぬ竹刀の手入れ方法を始め、剣道具の補修、管理の方法、着装法、礼法、刀法、体捌き、バランスのとれた構え、気構え、心構え、気剣体の一致した打突、公平無私な考え方、交剣知愛の精神、指導法、人間力、剣道即生活に密着した生き方等剣道に関するすべてを「行」によって自然に体得することが大切であると言われているのではないのでしょうか。

私は、六十歳を過ぎて、アキレス筋を痛めたり、足腕腰の関節痛に悩まされることがあり剣道に行きづまりを感じ、ジレンマに陥るときもあります。自分の稽古は、三十代では懸命に取り組んだこともありましたが、体力と気力だけの剣道で思念工夫も

せず浅学で単純な稽古であました。四十代になると仕事が繁雑になり、仕事に追われて、剣道の目標もなくマンネリ化し、その時、その場限りのような練習をしてきました。

「剣道」という「道」の入門はしたが「門」で止まり、さまよっていて、自己の高揚をはかる精神に欠けていたとしみじみ反省しています。

思えば「大澤善二郎先生」に剣道の手ほどきを受けて以来五十年の歳月が過ぎ、多くの先生方に稽古をつけて戴き、ご指導賜り、大変お世話になりましたが、自己の向上心の不足で剣道の基礎を体で覚えていないように思います。

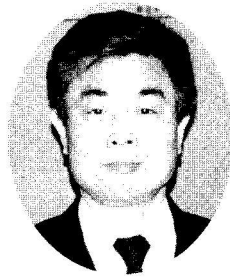
子供たちや生徒と練習中にも時々「アツ」とさせられ、自分は「初心者ではないか」と思うことがあります。幾度かの講習会で研修も重ねてきたが研修後、暫くは新鮮な心で充実した稽古が続くが、次第に希薄になって忘れてしまい自分のものとなっていない。このような稽古のあり方では、生涯剣道を継続しても剣道の基礎を体で覚

えることはできないと思います。しかし、これからは、自己管理に努め「行」を中枢に精神の修養を心がけ、稽古をお願いするすべての人々に尊敬と感謝の念を持ちつつ「剣道の基礎を体で覚える」ことに精進していきたいと思います。また、剣道の指導に関しても、自分自身を錬り鍛えることを常のころとし、「剣は語らず」、「師弟同行・同汗」を旨とし、稽古を続けて剣道を自分のものにならしたいと思っています。



甲手、籠手、小手こて、コテ：  
『甲手職人「夢銘」』

事務局長 藤本雅史



井秀喜選手が小  
学校の教科書道  
徳副読本に掲載  
された、という  
ニュースが流れ

てきた。石川県根上中学三年時、地区大会  
一回戦、初回の先制機に敬遠された秀喜少  
年がバットを放り投げ、不服そうに一塁に  
歩き出した瞬間、コーチが「何だ、その態  
度は！」と顔面に平手打ち。試合後「道具  
を粗末にするヤツに野球をやる資格はない。  
それに敬遠は立派な作戦、ふてくされた態  
度をとったお前の方がルール違反」と説明、  
秀喜少年も「僕が間違っていました」と素  
直に謝罪したのだった。という内容である。  
同じく巨人の清原選手も西武での新人時  
代凡打にバットを叩きつけ、不満を表した  
態度に先輩から「バットを大事にしない

奴は一流選手になれない！」と諭されたそ  
うである。では、我々剣道の世界に目を向  
けてみると、どうであろうか。

最近は何れも、お目にかかった事はないが、  
かつて試合に負けた選手が腹いせに竹刀を  
折ったり、放り投げたりしていた光景を目  
にしたことがあった。最近はそのままでな  
いにしる、竹刀、防具、稽古着、袴等剣道  
具を粗末に取り扱ってはいないだろうか。

使ったら使い放し、壊れ、破損すれば、即  
新品に買い換える。稽古前の手入れ、稽古  
後の手入れ、乾燥等所謂剣道具の技前から  
残心までを大事にしているか、もう一度考  
えてみよう。

今回、徳島に在住している甲手作りの名  
人にお話を伺う機会があった。ここに紹介  
して作る側の気持ちを識り、今後の剣道に  
生かして欲しいと思ひ、ペンを執ってみた。

「夢銘」で知られる甲手職人は、阿南市  
羽ノ浦町にお住まいの野村昇氏、大正十四  
年生まれの七十九歳。知る人ぞ知る甲手の  
名人、伊丹善蔵（且善）氏の直弟子、弘照  
氏に影響を受けたという。その弘照氏も、

また徳島生まれで徳島城堀川前にあった高  
橋剣道具店に勤めた後、店の主人からの推  
めで且善氏に弟子入り、そして同じ弟子の  
且名氏と共に日本一の甲手職人と評される  
までになったそうである。

「夢銘」の野村氏が甲手作り職人として色々  
と文章を書かれているので、その一部を紹  
介してみよう。

「矛盾」、「甲手の話」より

今年七十歳で現役職人の私は、今尚、  
矛盾を追い求め迷い続けているのです。  
矛であり盾であるKOTEという名の  
道具、辞典には籠手とあり、体育本に  
は小手とあり、業者は甲手という字を  
使っています。

甲手は道具であつても、防具では無  
いと言ひのが私の持論です。甲手の場  
合、耐えず攻撃に備えていなければなら  
ないので、出来る限り軽く作り、相  
手に目立たないように小さく作り、大  
きな手でも入るようになり、打たれて  
痛く無いように作ります。使つて、使つ

て、使い抜いて、その大部分が擦り切れた後も、尚原型を失わない甲手でなければならぬのです。

甲手の肘の部分は盾であり、甲の部分は矛であると私なりに判断しているのです。甲手そのものが直接ではありませんが、竹刀を握り一体となって攻撃に臨まなければならぬ。甲が肘に負け肘が甲に負ける事は許されぬのです。剣士が試合で竹刀を取り落とす事は甲手職人の最も恥とされている所なのです。

何時が来ても思ったモノが出来ず苦しんでいます。一人分でもマトモなモノを作って見たいが、そんな事の望めるべくもなく叶えられる筈も無い。イエそれは有って成らない事。

モノを作ると言う事は、こんなにも厳しいものなのか：其んな時に私は唯、念ずる外に何の術も持たない自分を知るのです。其れは、きっと私の中に居

る私の能力限界への願いに違いありません。そんな事を何度繰り返して来たのだろう、此れからもまだずっと続くだろうと思います。

職人という種族には自己妥協などは断じて許される事ではなく有ってはならない。自己を苛め抜くこと、其れだけが私の人生なのかも知れません。

夢 銘

私達が日頃、何気なく使っている剣道具、でも剣道具無しでは剣道は出来ないし成り立たない。その剣道具の一部である甲手一つを取ってみても、人生をかけて、命をかけて作ってくれている人がいる。そんな職人さん達の気持ちを想い、感謝をし、大事に使って、日々剣道、稽古に真剣に精進することが、私達剣道人の務めであり、恩返しではないだろうか。

なお、夢銘の詳しい事については美馬徳子氏（夢銘の娘さん）が作成しておられるHPを覗いてみて下さい。

## 夢銘のひとりごと

一つの仕事を貫くと言う事は

凡ての人間に通じる道を

その仕事教えて呉れるものです

最も幸福な人間と言うのは

他人の幸せを自分の幸福と感づられる人である

最も哀れな人間と言うのは

他人を不幸にしようとして自らも不幸

に成って行く人である

涙ちゅうモンはな

悲しい時や苦しい時に流すモンでない

そんな涙はソーツと貯えて置いてな

何かをやり遂げた喜びで体が震える

ほど感動した時に出してやれ

それが涙ちゅうモンじゃわい

# 飽きもせずそしてまた!

丹生谷支部

富田 正



「十数回?」

これは、私の平成十年度の稽古回数である。

初めて竹刀を握ってから約四

十年、かつてこれだけの回数しか防具を付かなかつた年があつただろうか。少なくとも、在学中は、卒業時を除いてほとんど、稽古に明け暮れていたし、また社会人になつても、教員一年目こそ他の部活動を持つていた関係上、あまりできなかったが、それでも年間三十〜四十回は実施、その後は剣道部顧問としてほぼ毎日のように剣道に携わつてきた。それなのになぜ月一回程度のペースなのか、「たぶんこれは、仕事が忙しいとか、病気や怪我をしたためだろう。」と誰もがそう思うのが常である。しかし、実のところは、「ただ、する気がおこらなかつた」だけである。それというのも、いまま

で約二十五年余り勤務していた学校現場から離れ、他の職場への異動を命じられたためであつた。毎年のように繰り返される始業式や夏季休業日等を当たり前のように入力、そのペースに慣れてしまつていた自分がそこにあつた。今までと勝手の違うことへの戸惑い、新しい経験、いろいろなことから心に余裕もなく「今年あまり剣道をするようにならないな」と自分に思い、徐々に稽古回数が減つていったのである。そうなるとたまに稽古をすると、まず胸が苦しい。足が動かない。手の内が締まらない。体の切れが悪い。肘や膝は痛くなる。自分の体が宙に浮いたようになる。気剣体の不一致等々。稽古回数が減れば減るほど、剣道から遠ざかれば遠ざかるほど、悪い状態が続く。そして、デスクワークが増えてくると逆に運動不足も手伝い、更に意欲がなくなるなど悪環境であつた。その極めつけは、平成十五年八月の稽古会の時であつた。例年のような充実感や集中力がないのは感じていたが、それでもその一回の稽古を大切にしたいと考え、数名の先生方に稽

古をお願いした。四十分あまりの稽古ではあつたが、その内容たるものは散々であつた。終始先を取られ、打とうとすれば先に打たれ、打つていけば返され、挙げ句の果てには、竹刀を三回も打ち落とされた。「今年には剣道をあまりしない。」と割り切つていたものの、そのときほど稽古不足を痛感したことはなく、反省しきりであつた。そしてそれと並行して、お腹の脂肪や筋力の低下も何となく感じ始めていた。時に「何か運動を始めなければ」と思い、軽いランニングや素振り等をはじめたものの、たいした効果もなく、結局それらのいろいろな状況にも懲りず、約一年間が過ぎてしまつたのである。

そして、年度が変わり二年目の春を迎え、職場や仕事にも少し慣れ一応の流れが見えてきた。昨年の反省を踏まえ、やはり自分には剣道をするのが一番の安定感に繋がることだと考え、徐々に稽古を開始するようになった。そしてまた、この数年間ほとんど顔を出すことがなかつた地元少年剣道教室にも時々参加するようになった。そ

れというのも、今年度は例年以上に部員数が増え、複数の指導者が必要になったからである。小学生が前向きに素直な気持ちで一生涯命に取り組んでいる姿を見てみると、次はどんな練習メニューでやろうか、効果的な練習方法はないかとか、いろいろと考えさせられるのである。が、これがまた楽しいのである。そんな小学生を見るにつけ、私自身が剣道をやらなければという意欲を掻き立てられるのである。さらに、保護者の中には、防具を付けて練習するのが中学高校生以来という方もおり、その熱心さにも感心させられる想いである。

さて、話は少し変わるが、昨年の夏、六十歳近くになる先輩との話の中で、とても印象深かったことがある。それはある方が先輩に「貴方は今まで剣道をやってきて、実力的に一番強いと感じたのはいつ頃ですか。」と尋ねられたそうです。そこでその先輩は即座に「今が一番強いと思います。」と応えたそうです。意外な答えが返ってきたので、その方は大変びっくりされたようです。なぜかと言うと、剣道も柔道や相撲と

同じように、ほとんどの方は年齢的には二十〜三十五歳ぐらい、段位だと五段〜六段ぐらいの時が最高である思っていたらしいのです。確かに筋力や瞬発力等の体力面だけを考えた時、ほとんどのスポーツは二十歳前後が練習量も多く、一番力が発揮でき充実しているからです。しかし、実際に長く剣道を続けている方は感じていると思

いますが、剣道とは不思議なもので、竹刀を媒介としたところに妙があるのです。この妙こそが、体力だけでは計りきれない何かがあるのです。つまりこれが「心」なのです。竹刀を交えながら相手の気持ちを探り合う、心と心の修練なのです。剣の道を志している方は、その段階や年齢に応じて体力重視から心重視へと移行していくのです、ここが剣道と他のスポーツとの違いであり、真に生涯剣道と言われるゆえんなのです。体力と心のバランスが調和した時、その人にとって最高の強さなのです。もし私自身が、先のような質問をされたらどのように応えたでしょうか。迷わずに「今が一番強いと思います。」と、言いきれたらどう

か。：いや、その時どきに応えられるようになりたいと心から思う。これから先、仕事と両立させながら、どれだけ稽古量が増えるかかわからないが、年間百回の練習を一つの目標に、多くの先輩や仲間達のご指導を受けながら、長く剣道が楽しめるように取り組んでいきたいと思う。

剣道一筋 我 この道をゆく・・・

# 嗚呼 前野五郎

居合道部 坂本憲一

司馬遼太郎の『新選組血風録燃えよ剣』

に心ひかれ、新選組に興味をもったのは、  
大学一年の時だった。住まいが武蔵野の国

立だったことから周辺の新選組ゆかりの史  
跡をくまなく見て回った。郷里に帰ってか

らも関係書物や新聞記事に目を止め、新聞  
の記事はその都度切り抜き、スクラップブツ

クに納めた。そうした切り抜きの一つに「新  
選組隊士前野五郎は阿波藩士の二男、札幌

に墓があった」で始まる北海道の研究家か  
らの投稿記事があった。この時、初めて徳

島出身の新選組隊士前野五郎の存在を知り、  
大いに興味をそそられた。その後、新選組

研究者らの発表等を通じて前野五郎の他に  
何人かの徳島出身者がいることもわかって

きた。馬越大太郎・柳田三次郎・神崎一二  
三、清川八郎の片腕で、山岡鉄舟の四天皇

の一人と言われた村上俊五郎（旧三好郡貞  
光町）等である。また、隊士ではないが、

本県出身で前野五郎に深く関わりをもった

人物に岡本監輔がいる。

岡本監輔（一八三九〜一九〇四）は、旧  
美馬郡穴吹町三谷生まれ、漢学者で勤王家、

北方領土の先覚者として活躍した人物だが、  
維新後、五郎が北海道でその生を終えるま

で多くの示唆を与えた人物である。

前野五郎は、弘化元年（一八四三）、阿波  
徳島城下福島町中ノ丁、徳島藩士前野健太

郎（廃藩置後は名東県士族）の二男（前野  
家成立書には五郎の名がないことから出生

は妾腹か）、として生まれている。文久三年  
（一八六三）年頃、藩を脱して新選組に加

わる。脱藩の理由は定かでないが、兄安之  
助が家禄を継いだので部屋住みをきらって

か、あるいは妾腹故の鬱積が脱藩に駆り立  
てたものかとも考えられる。

新選組の数々の事績の中で前野五郎の名  
が出るのは、慶応三年（一八六八）の天満

屋騒動である。この事件は紀州藩の明光丸  
と坂本龍馬率いる海援隊の伊呂波丸の衝突

に端を発し、その賠償問題から、龍馬暗殺  
の首謀者を紀州藩の三浦久太郎と盲信した

海援隊士が、三浦の宿舍を襲撃、新選組の

斎藤一・大石敏次郎・梅戸勝之進・蟻通勘  
吾・中条常八郎・前野五郎らが、三浦の護  
衛役として動員されていたことから、新選  
組隊士と海援隊隊士が切り結び、双方に死  
傷者が出た事件である。

前野五郎は、この事件を契機に凄腕の劍

士として知られるようになり、伍長の重責  
を担う。以後、鳥羽・伏見・上野の戦いに

新選組隊士として参戦するが、慶応四年三  
月、江戸で近藤勇らと決別。新選組副長助

永倉新八が組織した靖共隊に属し、取締役  
となり、関東各地を転戦する。さらに戊辰

戦争の最激戦地・会津若松城下へと向かい、  
この年の十二月、ついに薩摩軍に投降する

が、同軍に属していた元新選組隊士伍長加  
納道之助の計らいで運良く薩摩軍附属の身

分を得る。もと新選組隊士だけにこの変身  
ぶりは、実に幸運という他ない。

世は明治となるが、多くの敗軍の将兵が  
北をめざしたように五郎もまた北海道を目

指す。この時点で、先述の岡本監輔と運命  
的な出会いをするのである。

岡本監輔は、天保十年（一八三九）生ま

れ、五郎より四歳違い、名は監輔、韋庵と号した。嘉永六年岩本齋庵に学び、讃岐の藤川三溪（幕府奥州觀察使）の門に入る。韋庵は慶応元年（一八六五）樺太全島の海岸を踏査し、ガオート岬に「大日本国領岡本文平建之」の標柱を建ててゐる。これが今日監輔が北方問題の先覚者と言われる所以である。

明治三年（一八七〇）、五郎は、樺太開拓使付属として公式に判官岡本監輔に従うようになるが、同四年、官を辞して札幌薄野で遊女相手の貸座敷業を営む。また、このころ、本道の基幹産業の一つ北海道製麻会社（後の帝國製麻会社）の株券を持つなど商いの道に才能を発揮、函館市内に多くの土地を所有するなどして、同六年の所得番付には上位にランクされるまでになる。

明治六年（一八七三）、ロシア進出に伴う国策変更により監輔の北辺開拓の夢は大きく挫折する。が、明治二十四年（一八九一）、監輔は夢を捨てずに一民間人として同志を集めて「千島會議」をおこし千島に向う。

このとき、五郎も資材を擲つて、「千島救済

會」を設立、監輔に従い千島の択捉島に向かう。そして、翌明治二十五年四月十九日、ついに五郎に運命の時が訪れる。千島探査の帰途、オホーツク海に浮かぶエトロフ島（旧沙那郡磯谷山中）で丸太橋から転落、手にしていた銃が暴発、事故死する。一説には、暗殺（永倉新八遺筆「年月不詳、北海道千島殺害、前野五郎」）とも伝えられ、葬列も少なかったであろう寂しい生の終焉である。時に五郎四十八歳。岡本監輔は、その死を悼み、自ら前野の半生を綴った一文を書いた。そして追悼の漢詩文を撰した。

阿波の徳島に生まれ、京都、江戸、甲州、会津、北海道、そして千島、択捉と動乱の維新を飛鳥のように駆け抜けた前野五郎。北海道時代の五郎の足跡を最もよく知るの

は紛れもない岡本監輔である。監輔は、『岡本氏自伝』の他、『窮北日記』等、五十余冊もの著述を残した。未整理の著述も少なく無い。能筆で明治期の五郎に一番近い位置にいた人物だけに五郎の足跡に関わる何かを書き残しているはずである。残された著述を丹念に調べることによって、新しい事

実が分かるかもしれない。また、北海道大学付属図書館には「哭前野五郎」（岡本監輔遺稿集）なる一文があることもわかった。未だ見る機会を得ない資料だが、これも是非経眼してみたいものである。

剣術の達人、刀劍鑑定の名人、鉄砲の名手と伝えられる前野五郎。若き血潮を幕末維新に燃やし、そして昇華させた前野五郎。今その御霊は、札幌市郊外の里塚公園の一角に富久子夫人とともに静かに眠っている。

# 称号・段位合格者

## 七段に合格して

徳島支部 生田 浩 章



私自身、七段  
と言う段位は夢  
だと思ってお  
りましたが、平成  
十六年五月三日、  
京都審査に於い

て合格することが出来ましたことをご報告  
すると共に、ご指導いただきました諸先生  
方のお陰であると心から感謝しております。  
本当にありがとうございます。

当たり前ですが、七段審査を受審するに  
は、六段を合格しなくてはなりません。ま  
た、合格してから六年の修行を経てから受  
審資格ができます。私、六段合格は非常に  
苦勞しました。がむしゃらに稽古して合格  
したときは本当に嬉しかったです。それと  
同時に七段審査のときはという思いで、そ

の時から七段を意識して稽古をしました。  
ある先生から「六段合格は、六段の入口に  
立ったのであり、六段になったのではない  
よ。本当に六段になって次の七段合格があ  
るから」と言われたことを思い出します。

六段合格と同時に少年指導に携わり、子  
供たちを指導しながら自分の剣道を見直し、  
また、子供たちといっしょに稽古をしてき  
ました。また、県外に稽古をしに行くとい  
う先生がいれば、あつかましく連れて行っ  
てもらいました。この六年間は本当に七段  
を意識して稽古をしたと思います。

ある稽古会るとき、先輩のアドバイスが  
七段合格のための稽古に影響したと思いま  
す。そのアドバイスとは、「遠間から打つ基  
本的稽古をしたほうがいい、遠間からでも  
絶対に当たるから」ということでした。

最初は、遠間からは届かないし、そんな  
に跳べないと思っていました。跳ぶとい  
う意識ではなく遠間から自分の打間までが  
攻め、そのとき中心を取り、打突という一  
連の動作を、一足で行うという意識に変える  
ことによって、遠間の打ちが百パーセント

ではありませんができるようになりました。  
その打ちができるという自信をもって審査  
にチャレンジしました。

審査当日、その自信からかわかりません  
が、いやな緊張感はありませんでした。何  
か、わくわくした気持ちで順番を待つこと  
ができ、どんな人とできるのかなという楽  
しみに変わっていました。合格したいとい  
う気持ちはどこかにいき、会場の隅でアッ  
プをしていると私と当たる相手も素振り、  
面打ちとアツプをしていました。それを見  
て、早くこの相手と稽古をしたい……私は  
稽古をしに来ている感覚になっていたので  
す。

さて立会いです。遠間でブーンと張った  
気持ちの中で剣先から相手の気迫が伝わっ  
てきます。スツと先を取られました。私  
も無心の面が出ました。これが切り落とし  
面となり、後は心地よく稽古をすることが  
できました。二人目は、強引に間合に入っ  
て来ようとしていたので、間合に入る瞬間、  
稽古した面打ちが決まりました。

二回の立会いは心地よく、清々しい気持

ちで発表を待ち、駄目でも次に繋がる立会いができたと思っておりますが、運良く合格することができました。

この合格は、ご指導くださった諸先生、諸先輩方、また徳島少年剣道教室の指導者、保護者の支援、子供たちの応援があったお陰だと感謝するしだいです。この時の気持ちをお忘れずに「一心一刀」、剣道七段に恥じぬ人間として精進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



# 剣而縁

驚敷町 井村雅人

平成十六年五月三日、京都において七段に合格することができました。これも一重に私を指導して下さいました先生方のお陰であると感謝いたしております。

この審査は私にとって二回目であり、合格するとは夢にも思っておりませんでした。それは先の十一月審査、東京で七段審査の難しさを思い知らされたからです。東京会場（日本武道館）で審査が始まり多くの受験者を見て「なんだ、皆初心者のようだなあ」と審査を甘く考えていました。慢心した心で審査に挑んでも良い結果が出るはずはありません。案の定不合格となり自分の心の甘さを痛感しました。徳島に帰りながら「七段合格は長い道程になる」と覚悟しました。私は剣道を始めた頃から心の弱さが欠点で、これを克服しなければと剣道を継続してきたつもりなのに、大事な審査に出してしまうとは……心を新たに再出発です。幸い、私の住む驚敷町には振武館長吉田

租先生が在任し、又大石正志先生が那賀高校剣道部監督として就任されており、稽古をお願いする事ができます。那賀高校では基本を生徒といっしょに行い、後で大石先生に地稽古をお願いします。吉田先生には心の部分を鍛えていただく稽古をお願いします。

東京審査の前、吉田先生に審査の心得を聞いた所「無心になる事」と教えて頂きましたが、どうしても無心の境地に達する事ができません。先生は「稽古しかない」と言います。無心とは何か？ただ何も考えず稽古あるのみ！その後両先生と稽古するうち、何本かに一本、自然に技が出るようになっていました。三月二十三日、中学の恩師である徳島至誠館館長中山啓男先生に稽古をお願いし、くたくたになるまで掛かり稽古をして頂き、慢心を打ち砕いて頂きました。各先生方も「今度は合格するよ」とおっしゃって下さいました。そして審査当日、相手に礼を尽くし蹲踞立会いの「始め！」で中心を取りに面に出たままでは覚えているのですが、その後自分

が何をしたのか憶えていません。これが「無心の境地」なのかも知れません。立会いが終わり、応援に来ていただいた福井軍二先生、大石正志先生がまだ結果発表していないのに「合格したぞ」と自分の事の様に喜んでくれたのを覚えています。

私が七段まで剣道を継続してこられたのも素晴らしい指導者に恵まれたこと、共に稽古した振武館の方々、又徳島県内外の先輩同期後輩の励ましがあつたからだと思っております。私には、剣道によりいろいろな人との出会いがあります。また、出会う人皆素晴らしい人達であり、その縁により私の人生が成り立っています。剣道により、剣道と関係のない人達との交友も高めることができているし、それが家庭、仕事、社会生活にも役立っていることは間違いないと思えます。

「剣而して縁」これからも剣道を通して多くの出合いを大切に継続し、そして剣道の普及と発展に寄与することが今後の私に与えられた課題と思っております。

## 六段に合格できたのは

一本の電話と師の教え

徳島支部 端村 武



眼が醒めて、カーテンを開けると、眼下に霞に包まれた「誓願寺」が見えた。「アレッ」ホテ

ルの部屋は、偶然にも去年と同じだったのかと気が付いた。そのせいか、前回不合格の原因であった諸々のことを思い出してしまった。「こうして面を打とう、このように小手を打ちたい」と、自ら焦りのイメージを募らせていた審査前の心境や、本番で立会人から、出番を指摘されてから、慌てて相互の礼にかけつけたことなど、平常心を失っていた自分の姿を、まざまざと思い出してしまい、少し暗い気持ちになった。それを振り払うため、ベッドに大の字になって、暫時、沈黙考した。

そして、出した結論は「会場では、事前

の準備体操や素振りなどをしない、相手の様子も見ない、ぶっつけ本番で行く」と腹を決めた。これは、「努力に裏付けられた自信」というものを持たない私にとっては、開き直りの心境に他ならない。それで気分が楽になり、朝食までの時間、懐かしい「誓願寺」と、その周辺を散歩する気になった。街や、そのたたずまいは、四十年前とあまり変わっていないかった。こんなところにも京都の伝統を感じた。

ゆっくりと朝の準備を済ませた後、入念にストレッチをして、念のため竹刀の感触を確かめ、テレビをOFFにして、さあ出掛けようと立ち上がった時に、携帯が鳴った。その電話から「ここなら届く、この機会なら打てる、と感じる瞬間まで打ってはダメですよ、打たれへんけん、攻めて、間合を詰めて、届くところまで入ってから、ここと感じた瞬間にだけ、打つように……」言葉の記憶は、正確ではないが、このようなことを繰り返して言ってくれた。かねてから、彼は時々、私の稽古を見てくれていて、そして、何故か数日後に、事務所談

笑中、私からの質問に応える形で、真に的を射たアドバイスをしてくれる好漢である。「ありがとう」と思わず大声で礼を言った。「よし」と気合いを声に出し乍ら、私は、込み上げてくる充実感に大いに満足していた。

そして同時に、いつか我師が「打つべき時に打てない、打つべきでない時に打ってしまう、これが一番いけない。相手との攻防の中で攻めて、打つべき機会を作り出し、また守って打つべき機会を作り出し、かつ溜めて打つ、それが出来るように稽古を重ねるのだ。」と指導してくれていたのを思い出していて、さらに確信を深めた。(これは、私なりの解釈で、理解に若干の浅さがあるかも知れません。)

会場へ向かうタクシーの中で、相手に対し、「剣を使う(遣)う・操る」こと、それが表現出来ない立会いは、ダメなのだ、と気付いていた。審査から、一ヶ月経った今になって、考えてみると好漢の先生は、それを私に分かりやすく教えてくれたのだと思う。両先生の言葉の奥にある意味は、密

度が高く、私には、文章にする能力はない。そして、前からずっと気になっていた「自分の間合い」への迷い・不安が、この二つのことで解消されたのだと思う。

受験する者として、これらの当然とも言えることを、何故忘れていたのか、不思議でならない。

それは、「打ちたい」「受かりたい」との浅はかな一心が、平常心を失わせていた、そのこと（前回の私の姿）を見抜いていたのであろう、電話をくれた方は、まことに心憎い好漢である。（繰り返し多くなり申し訳ないが、その時の心情です。）

審査場では、決めた通りにした。少しだけ誘惑にかられた、相手の立会いも眼をつむって見ないでいた。本番は鏡の前でするイメージ稽古のようにはいかなかったが、ほぼ満足の出来るものであった。これは、直前の一本の電話と、平素の師の教えのままものと感謝しております。「本当にありがとうございました。どうぞございました」我師と好漢の先生、そして剣友の皆様。言うまでもなく、まだまだ未熟な私ですが、これからも「剣道」と

いう、同じ志を持つ、心ゆしき剣友諸兄と共に、老いと余生を全うしたい。と考えている次第であります。皆様今後ともよろしくお願い申し上げます。（平成十六年六月二日、合格に感謝した夜の日記から）



## 六段審査に合格して

警察支部 富田圭介

平成十六年六月、名古屋において六段審査に合格することが出来ました。誌面をお借りしまして日頃からご指導いただいております。先生方に心より御礼申し上げます。

前回不合格に終わった十一月の名古屋審査以降、多くの先生方から審査に関するアドバイスをいただき、また自分自身どこが悪かったのか、何が足りなかったのかと横索しながらの稽古が続きました。

今回の審査を前に自分自身の課題として挙げたことはただ一つ、「自分の納得する技を一本だけ決めよう。」ということでした。

いよいよ審査が始まりその初太刀、私がいつになく充実して攻め入ると、相手がやや下がって剣先を下げました。いい感じで攻め入ることができたと感じていた私は、相手の剣先が自分の喉元に向かってくる気配を感じながらも、かまわず面に飛びました。相手の剣先は、私の肩越しに外れ、面

が決まりました。二度の立ち会いを終え、自分の印象に残っているのはこの初太刀の面だけでしたが、何となく心地よい感触が残っていました。結果は合格。

この時はじめて、前回の審査で自分に何が足りなかったのかという疑問に対し、自分なりに答えを出すことができました。正直言つて前回の審査の方がポイントという点においては、今回よりもずっと良かったと思います。自分で言うのも変ですが、試合ならば完全に勝っていたと思います。しかしその時の自分の心理状態、打突にける自分の思い等を客観的に思い返してみると、打った打たれたというような相手との差し引き算の結果、上手にポイントを取って相手に勝ったというような何の魅力もない小さな戦いをしていたように思います。つまり前回の審査において、私が打った技の一本一本に重みがなかったということです。重みというのは打突の軽重、技の切れといったことだけでなく、限られた時間の中で一本の技に今の自分をどのように凝縮し、それを表すことができるかだと思います。

高段者になる程、その技の重みや所作を含めた品格が求められます。いずれも一朝一夕に身に付くものではなく、日々の鍛錬、人生の経験等を積み重ねることにより、人格の成長と共に成り立っていくものであると思います。この度の昇段によってこれらの自分の剣道はどう進んでゆくべきかを考える機会を与えられたような気がします。これまで以上に様々な模索へのスタートです。

今後とも変わらぬご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 六段に合格して

徳島支部 岩原靖人

平成十六年五月の名古屋審査会において、幸運にも六段に合格することができました。この場をお借りしまして、ご指導くださいました皆様に心より御礼申し上げます。

私が剣道を初めてはや二十七年が経ちました。中学時代富浦廣志、佐々木和人両先生、高校時代鎌田恵、福井軍二両先生、大学時代谷籙吉郎、渡邊香両先生、社会人になつてからは学剣連の先生方、と多くの先生方にご指導頂きここまで続けてこられたことに感謝いたしております。

思えば五段に合格してから六段受験までの間は、私にとって最悪の年月でした。鳴門工業高校勤務の時に腰の痛みが激しくなり、検査の結果椎間板ヘルニアと診断され、約三ヶ月間の入院生活。退院後も剣道の練習は全くできず、二年が過ぎました。その後、徳島東工業高校へ転勤し、腰の痛みも徐々に和らぎ、少し練習してみようと思ひ、開始した矢先に腰の激痛により二度目の入

院となりました。手術も勧められましたが、安静により無事回復したものの、思うような練習ができない日々が続き、「今度入院すれば手術やなあ」とばかり思い続け、剣道に対する情熱が冷めた状態で三年が過ぎました。そんな私が六段を受験するきっかけを作ってくれたのが、「一緒に六段を受験しにいこう」と同級生である富田圭介君の誘いでした。五年のブランクがある私にとつて、六段を受験することなど到底無理な話であつたのですが、もう一度剣道を頑張つて六段が受験できるように練習しようと思へた一言でした。

初めての審査は平成十五年十一月に名古屋で受験しました。納得のいく初太刀であつたものの、その後は明らかに練習不足という一面が露呈してしまい、五年間の剣道に対する自分の取り組みの甘さを痛感する惨めな結果となりました。

二回目の受験は、もう少しつめて稽古をしてからと思つたのですが、間をあけると気持ちも切れてしまうと思ひ、半年後の名古屋で受験することにしました。この半年

間は思つたより体調が良く、福井軍二先生や佐伯守夫先生、また徳島東工業高校の生徒の皆さんと納得のいく稽古ができたので、今まで練習してきたことを全部出し切ろうと思ひ審査に臨みました。審査当日は、二回目という事で思つた程緊張もなく自然に立ち会いができました。審査終了後、ひよつとしたらという手応えはあつたのですが、合格発表で自分の番号が確認できたときは嬉しい反面、私みたいなものが合格しているのだろうかと思ひ複雑な心境でした。

今回六段を受験することにより、自分の剣道に対しての取り組みがいかに甘かつたかということが再認識できました。しかし、この合格を機にもう一度初心に戻り、「これから六段の稽古」と気持ちを引き締め、さらに努力・精進を重ねたいと思ひます。

## 六段に合格して

阿南支部

榊山 紹生



平成十六年十一月十四日に愛知審査会において剣道六段に合格することができました。多く

の先生方にご指導頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

小学生の頃より、阿南少年剣道教室で剣道を学び始め、現在まで、続けてきていたが、社会人になってからは、仕事の合間の余暇を活用して、稽古を行う生活になり、「今日は忙しい」と、自分で決めつけ稽古を休んだりしていたこともあった。試合前に軽い気持ちで稽古してただけで、昇段審査も、そのうち受かるだろうと安易な気持ちで望んだ前回、剣道に対する甘い考え、稽古不足等から、気持ちが浮き足立ち、中途半端な内容で終わってしまった。このままでは、いつになっても合格しない、もっと

稽古をしなくてはと反省した。稽古時間は、人から与えられるものではなく、自分で時間を見つけ、作り出すものだと考えを改め、質のある仕事、質のある生活を行い、家族の協力を得ながら時間を作り出した。また、稽古の機会を増やせた一つに、一昨年より阿南支部内で同級生が五人揃ったことにより、昭和四十年生まれにちなんで、阿南支部四十年会を発足し、同級生で稽古に励み、お互いに刺激し合いながら、稽古や試合に取り組んで行くことができました。

真剣に稽古を積むにつれ、剣道というのは、そう簡単に、上達していくものではないと改めて感じました。特に審査となれば、短い時間内に、審査員の先生方に自分の剣道を見て頂き、それを評価される。いかに自分をアピールできるかである。大野小学校で一分間稽古をして頂き、考えたことは、この時間内で、良い姿勢・構え・攻めをし、有効打突を決めなければならぬ、と気持ちは焦るばかりで、悩みの多い日々が続きました。その中でも、「初太刀をとる」の、意味や意義についても考えました。いつも

は、先に仕掛けて行って不十分な打ちをしたり、捨て身で技を出しても、出鼻を打たれたり悩んでいました。阿南支部の稽古会で、北條憲治先生に、「先に打つだけが攻めではなく、気持ちで攻めて、相手を誘い出し、来たら返す、来なければ打つ」とご指導頂きました。今までの悩みを捨て、再び稽古に精進しました。

審査当日は、「気で攻めて、来れば返すぞ、来なければ打つぞ」を肝に銘じ、挑みまじめた。「始め」の宣告後、一呼吸置き、一歩攻め込み、発声と同時にさらに気合を充実させ、ジリジリと攻め込み一足一刀の間、相手がたまたま面に来たところを、返して面に応じることができ、後は、自分のペースで、審査を終わることができました。

最後に、精神面は自分ひとりでも磨くことはできるが、技を磨くには、やはり良い相手がいてこそ磨かれるもの。ご指導頂いた阿南支部の先生方、また、四十年会の剣友に感謝し、今後も稽古を怠らず、前進して行こうと思っております。

平成十六年度

称号・段位合格者一覧

— 剣道 —

【錬士】

【教士】

五月七日

臼木 崇

十一月二十六日  
佐藤 佳宏

五月七日

鳴川 善人  
北村 仁志

十一月二十六日

二反田 和則  
池田 洋一

【八段】

五月二日  
河田 清実

【七段】

五月三日  
生田 浩章  
井村 雅人

【六段】

五月七日  
久次米 繁興  
端村 武  
五月十六日  
岩原 靖人  
富田 圭介  
十一月十四日  
榊山 紹生

【五段】

六月六日  
原 芳弘  
拙友 敏明  
元木 健吉  
九月十九日  
鈴木 啓三  
住友 久夫  
十一月二十八日  
川添 義仁  
森 晋作  
月岡 陽市  
藤本 常己  
平成十七年  
二月二十日  
福永 康浩  
森本 武夫  
島尾 眞且  
三木 弘子

【四段】

六月六日  
小柏 祐三  
六條 洋二  
長谷川 普紀  
武蔵 純郎  
九月十九日  
中西 実  
杉 一  
十一月二十八日  
岩永 崇  
大前 智仁  
荻田 裕博  
上田 裕則  
桑原 啓治  
矢部 智子  
平成十七年  
二月二十日  
中川 達彦  
下藤 仁  
小川 大造  
蘆田 裕彦



【三段】

六月六日

久米勘四郎 岩野修治 市原裕之 金田秀夫 河野昌紀 細井明彦 谷澤鮎美 宮崎のどか 磯田沙希 仁科由希 小菅由美 加藤まゆみ 元山淳子

九月十九日

寺野和也 大西佑弥 峰本博彰 久保智司 河田真吾 戎敬太郎 藤本次朗 三木理恵

十一月二十八日

鎌田崇佐 石川裕介 岸野哲也 奥山翔太 近藤雅規 太田宏生 米澤弘朗 岩本達也 坪井翔太 大野祐資 新田裕資 森友志 岩見恭輔 板東潤 小西朝陽 吉田光佑 西田太一 阿部高大 岡田大資 瀬部克好 橋本将太 藤原秀行 近藤雅也 宮本慎也 榎谷伸男 谷内良也 豊田修三

長尾仁資

長尾仁資 服部将史 庄嶋亮 榎原遥 山下純子 井口あすか 山田佳奈 吉川美子 吉岡美菜子 竹島佳代 朝田百合奈 北井実香 市原典子 田栗恵美子 平成二十七年二月二十日 後藤裕二 宮本貴人 高橋晃 住友莊司 緒方健作 トウフリニイ プ 竹部真知 竹部久代 新居見久綾 稻原慶子 丸本薫

【三段】

四月二十九日

榎本敬美

六月六日

高松朋輝 久田有輔 藤井理 林明史 平山大地 西浦大地 松浦一真 高島祐介 西條敏浩 西谷将太 大谷恭輔 久次米亮 吉田亮太 赤川健太 赤川季太 峰本直季 島田晃郎 喜多翔太 喜岡洋平 金岡英平 山邨俊英 岩佐希 鈴木達也 鈴木玄也 西田義玄 谷澤義勇 元澤龍太 山川宰 奥村将行 鈴木紀博 岡田直樹 井内修司 要川幸男

九月十九日

新居春菜 佐野久美子 藤井玲名 大西里沙 石川七菜子 田原由梨佳 平野千尋 藤本理恵子 芝生麻由 古住千尋 岩本美帆 井上さゆり 坂本奈美子 和田文恵 湯谷あき

鎌田憲資 西川友久 安福仁志 大滝真弘 妹尾拓也 久米田明宏 那佐翔太 阿部憲資 先山憲翔 佐竹恭兵 風将吾

山本敬太

山本敬太 谷口真央 滝本耕造 井内陽平 松本明真 仁井恒介 加藤秀章 川人広平 伊勢忠浩 抽友勝也 上屋祐太 野田祥希 米山慎太郎 山本慎也 菱本慎也 須藤健太 大磯元 岩雲大樹 林義真 三木翔太 前田恭平 牧本崇志 大塚康弘 多田卓司 市瀬卓司 河井優里 橋本ゆい 曾根恵

中野由貴 笠井友貴 横山依利加 鴻野賀穂里 星野知世 西田弥生 前浦志津代 枘木智美

十一月二十八日 須賀惇介 下内幸一 中西純一 岡田望 白石磨也 井上勝耶 岸下智哉 中島健太 櫻井春矢 細川智也 高橋陽介 岡田泰造 藤原啓吾 葛原正明 延谷龍之介 小西克徳 塩田伯大 西村卓矢 柴田祐二 西尾洋祐 藤本健太郎 勢井海人 柿平幸大 下川雄矢 新田浩人 新居由啓 吉田雅彦

三木良太 佐藤太 三好正希 朝風仁貴 宮内恵 国貞奈津美 戎谷麻里 竹内由香 崎川藍 佐藤友香 宮下朋子 上田沙耶 高島沙也加 片岡奈穂 安藤静華 近藤恵美 島藤麻美子 佐藤由佳 湯浅克奈子 山下千昭 東村幸子 森本かおる 窪本実架 岩河早保 鎌田昌美 中川千緒恵

二月二十日 竹本正洋 四宮雄介 富永浩嗣 丸尾龍二 國行一磨 板東竜太 池田翔 中張卓也 服部英史 佐藤陽子 中堀千嘉子 清海和歌子

【初段】 四月二十九日 山川則幸 田村嘉崇 津山拓也 喜多隆文 木馬正裕 向原紳悟 深田良平 福井一馬 宇津恭輔 岡田大樹 井上貴仁 株木拓也 鈴木健太郎 武市修蔵 正村良太 前川淳史 松本凜太郎 岩永凛 小西直衛 助田直紀 藤本健登 杉谷玄矢 湯浅彰義 板東裕紀 大森駿斗

一楽好 後藤正志 高島健 大黒将幸 佐藤裕 中本恵矢 土山康平 大塚亮太 櫻木鉄也 河野稔之 庄地康太 西山拓志 前川航 平井悠基 三木亮二 木村直哉 坂本真太郎 坂本真太郎 木村直哉 湯浅純平 岡田義志 三木直晴 松本直 大西梓 西田奈央 細川美波 井上奈津実 黒川ふとみ 磯部つかさ 中川知香 原井美佳 村田奈津季

大塚勇気 光地勇司 谷口政嗣 佐藤謙太 羽田遼一 磯部洋一 森本真浩 沼田真佑 松村陵 京野司 平野俊 福井秀和 近藤圭一 園藤一 川本翔太郎 川本純平 湯浅純平 岡田義志 三木直晴 松本直 大西梓 西田奈央 細川美波 井上奈津実 黒川ふとみ 磯部つかさ 中川知香 原井美佳 村田奈津季

高岡晶美 高橋理恵 吉岡夏美 賀上由里奈 菅野和美 申川綾那 永浦瞳 鶴岡明美 西川由梨 魁生唯 松本麻由美 井内成香 福永祥子 松本桜香 元木裕美子 松尾和美

七月四日  
川原達也 城尾康太 大垣俊喜 中島裕典 小笠原祐輝 東道裕人 檜原健太 馬詰司 岡田涼 泉利昌 藤田雄也 住吉隼斗 田中裕也 西本卓恭 野上修平 蔭山桂太 新開慶太 宇井涉 小出崇 久保薫  
トリアフアン  
オラアファ  
木下功 大西由起 芳田裕美子 吉崎茜 壺内美沙希

安田朱里 横川由佳 今川和美 斎藤礼 塩田有衣加 石丸奈美 岩本汐加 阿部祥子 佐藤聡美 宮本あずさ 高橋真理 近藤葉子 高藤真子

八月二十九日  
中山健人 岸本聖也 木村雄士 神戸一希 伊内泰輔 清部遼一 市原弥一 清川星治 北岡篤 喜馬隆 齋藤翼 中島悠人 松田英幸 森下竜太 大島裕司 柳谷俊樹 鉄野裕太 平井拓也 木内悠太 浅野明平 岩雲祥吾 岡本崇志 竹岡大樹 関口正二郎 華岡龍哉 森實大洋 上田大記

小森洋和 丸岡優也 佐方亮介 沼田昌哉 広瀬未来 中川瑞稀 川田沙織 小林未奈 富浦美帆 延谷美帆 藤田幸希 片山由貴 大節美里 芥川美睦 林川穂奈美 田尾奈都紀 秋田奈那子 瀬川恵美 藤井美樹 坂辺未奈 国岡沙織 大岡山貴実子 国山明日香 森本花菜子 松原有沙 長尾拓真 葛原真也 山下周摩

横山裕平 高島健 尾崎大健 青山健 鳩成亮介 板東亮介 山中拓郎 田中健郎 松下健輔 小林由治人 小林立有 古本光朗 折坂勇希 張祐樹 東真也 白川亮太 錢亀孝 栗飯原将

十月三十一日  
川島唯 梅本有紀子 西澤真世 神田沙織 田中美雪 米田美貴 山下美郁 山野舞乃 小笠真理恵 妹尾桃子 島田実希子 滝下聡子 石山統子

平成十七年  
一月二十三日

藤高拓未  
阿部航太郎  
山下知也  
船木翔太  
青木拓見  
渡木一平  
山下卓也  
森下大貴  
稲井亮介  
福田征大  
福田征大  
徳元吾郎  
山口拓也  
山田拓也  
森田洋介  
上田大輔  
佐方洋之  
坂口仁規  
寒川博文  
中山耕兵  
中藤雅俊  
後藤雅俊  
野村季志  
青山剛士  
林山優行  
住友康治  
高田大輔  
北島大輔  
富田充彦

小林豪  
バーク  
リンコーン  
藤本友里  
森友紀  
小橋奈実  
鈴江友香  
野口翔子  
松原美歩  
武田菜奈  
瀬戸楓子  
宮内悠希  
大川静香  
中原恵麻  
桑本満悠子

六月六日

勝瑞尊夫  
吉村務人  
大塚尚人  
岡部聡之  
蔭山圭太  
桂山正幸  
森井高志  
秋川聖子  
楠原亜子  
池田真理子

居合道

【五段】

十一月十四日

桑原愛奈

【四段】

十一月十四日

木村猛夫

【三段】

十一月十四日

日下智博

【二段】

十一月十四日

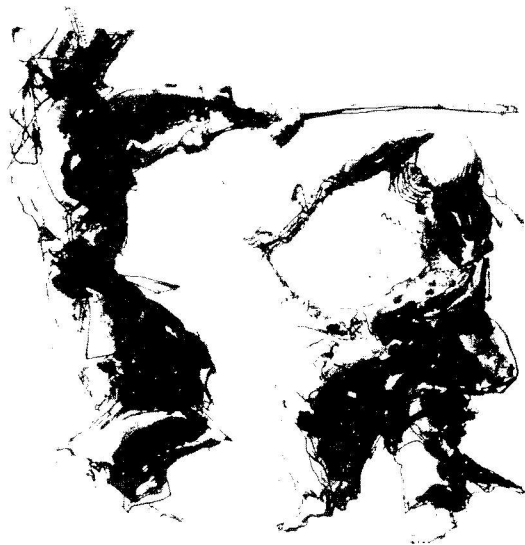
逢坂昭夫

【初段】

十一月十四日

多田照夫

松尾みゆき



# がんばろう徳島

《部活だより》

## 部のモットーとともに

川島高等学校 剣道部

監督 長 井 薫

川島高校は吉野川中流の吉野川市川島町に位置する、全校生徒六五〇名の全日制普通科高校です。大正十四年四月、徳島県立麻植中学校(旧制中学)としてスタートし、本年度で八十周年を迎えました。校訓は「至誠無怠」で、誠を貫き通し、絶え間ない努力を続けることを意味します。平成十七年度から単位制高校となり、十八年度から併設中学校設立による中高一貫教育が実施されます。(中学校にも剣道部はできる予定です)。

学校設置と同時に剣道部も創部、八十周年を迎える伝統のある剣道部です。三〇〇名を超える剣友会会員(卒業生)・翼会(卒業生の保護者会)・保護者会に支えられなが

ら、日々の稽古に励んでいます。また、全国規模の大会・錬成会や合宿等にも数多く参加し、他県の生徒の交流を深めています。

部のモットーその一 「感謝」

ただ剣道が強くなればいいのではなく、正しい剣道を学び、剣の道を通じてどのような人間形成を行っていくのか、また様々な人の支えがあつてこそ剣道が続けることができ、そのありがたみや喜びを感じながら竹刀を振ることを心掛けていきます。

部のモットーその二 「結果は能力の差ではなく意識の差である。」

能力の高いものが必ずしも良い結果を修めるのではない。常日頃の生活から意識を高く持って前向きに取り組む姿勢を貫き通せば、結果もついてくると信じて頑張っています。

部のモットーその三 「真剣だと知恵が出る 中途半端だと愚痴が出る いい加減だと言いつけが出る」

何事においても真剣に考えると良い考えが浮かび、自分で導き出した答えは積

極的に取り組むことができ、なかなか忘れるものではない。中途半端だったりいい加減だと、自分の非や努力不足を認めず人のせいにしてたりして、真実にはたどり着かない。みんなの力を合わせて、よりよい川島高校剣道部を作る事が出来る様になっています。

部のモットーその四 「正しい剣道を身に付けよう」

正しい剣道すなわち基本に忠実な剣道が続けよう。なぜ基本に忠実な剣道が大切なのか、それは剣道が上達するための一番近道であるからだと思われているからです。また、一生続けることができる剣道をし、将来徳島県の剣道界に貢献できる力を身に付けることを目標とし、一日一日を大切に精一杯努力しています。

以上の様なことを中心に生徒・OB・保護者・指導者が一体となって夢に向かって頑張っています。感謝の心を忘れることなく、川島高校剣道部の名に恥じない様、これからも剣の「道」に精進していきたいと思えます。「感謝」。

# 「生活即剣道」をめざして

美馬中学校 剣道部

顧問 武岡 美智



学校の敷地の

北隅、もと栽培

室として使われ

ていたという小

さなプレハブの

平屋が、私たち

の剣道場だ。

夏は、朝陽を浴び、夕方からは西日を受ける。トタン屋根は日に灼かれてジリジリと熱を出し、窓の一方をすぐ外のブロック塀にふさがれて風の通りも悪い。まるでオーブンの中にいるようである。冬は、動かない鉄の扉の隙間から風がピューピュー吹き込み、セメントから十センチばかり浮かして張つてある薄い床が氷のように冷たい。まさに、修行の場としては非常に恵まれた環境である。

部員は現在男子八名、女子三名の計十一

名。素直で気の優しい子ばかりである。本校に赴任し剣道部の顧問になって四年になるが、ずっと生徒に恵まれてきたと思う。その気の優しさが裏目に出て、今ひとつのところで勝負に勝てないこともあるが、学年・男女・剣道の上手下手関係なく仲が良く（男子は互いに面手拭いの匂いを嗅いだだけで、誰のものか分かるらしい……）、互いに助け合いながらも、良きライバルとして競い合っている（遠征帰りに寄つたうど

ん屋で、女子は「カコブ」を競い合っていた……恥ずかしかった）。監督ながら頭が下がるのは、例えば休日、「朝九時から稽古」と言えば、九時にはもう切り返しが始まっていることだ。のんびり来た者は、バツが悪そうにそそくさと道具を着けている。また、学年が上がるにつれて、良く気が付き、先をとって動けるようになる。道場の掃除や、日々の戸締り、道場菜園（夏季は道場の横のわずかな土地にスイカやプチトマトを植えている）の水やり、その他ちょっとした心くばり等、一年生より二年生、二年生より三年生がよく働く。学年や稽古の技

量の向上に比例して、こうしたことが向上するのは私としてはなによりうれしいことである。こうした間柄だからこそ、後輩は心から先輩のことを尊敬できるのだろう。自分の身近にめざしたいお手本がいることは、発展途上の人間としては、とても恵まれていることだと思う。

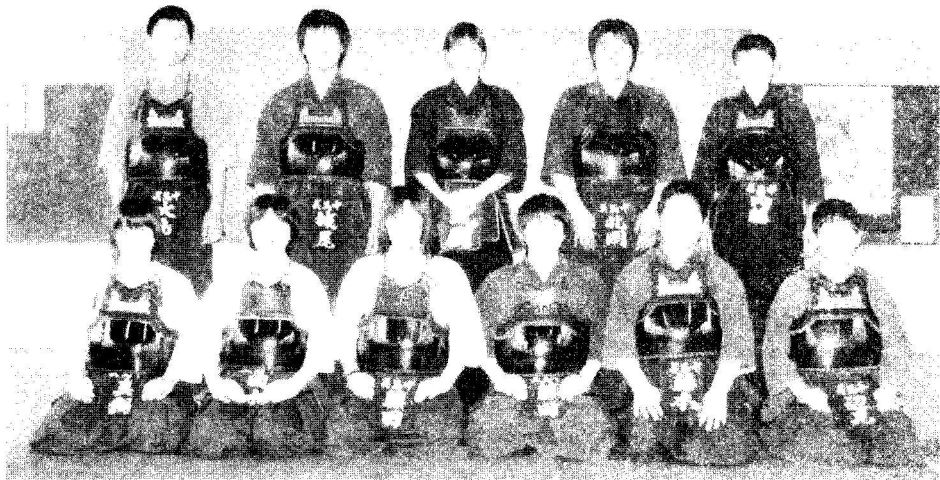
「生活即剣道」。私の師匠から教わった言葉である。私の一番の願いは、この子たちに、剣道で培っているもの―心・気・力をめざすことによる相手との心のつながり―を、生活の中において大切にすることになってほしいということである。小学校から中学校へ上がる時、「この先生に剣道を習いたい」という個人の希望で学校を選ぶことは現状では難しい。学生時代から稽古や試合で研鑽を積んでこられた他の先生方に比べ、剣道経験も浅く未熟な私に、中学三年間の部活動を委ねるしかない部員たちには、いつも本当に申し訳なく思っている。「指導者が私でなければ、この子たちはもっと強くなれるかもしれない。」とよく思う。師匠がたびたび稽古に来て、私の指導の不足を充

分に補ってやることで本当に助けられているが、やはり「私たちが攻め込みが良  
く、上達が早ければ」と思う。

ともかくも、そんな私にできることは、  
自分自身も稽古を重ね、自分が学んでいる  
ことを、すべて伝えていくことだと思う。  
そして、生徒たちに望むのと同じ道を歩む  
ことだと思っている。そんな取り組みで、  
彼らにはこの未熟をゆるしてもらって、こ  
れからも共に磨き合い、成長していきたい  
と思う。



別室写真



# 《道場だより》

## 木頭錬心館

岡田 豊



木頭錬心館道

場の歴史につい

て述べさせてい

ただきます。道

場がある日突然

出来るわけもな

く、物が出来るには大抵の場合、前の段階  
があります。道場が建設されるまでの過程  
に触れてみたいと思います。戦後木頭で剣  
道が始まったのは、和無田八幡神社の舞台  
で始められたそうです。その後、木頭で唯  
一の劇場木頭会館を個人で経営していた西  
岡信太さんより無償で提供していただき、  
道場主西岡さん・指導者大澤先生・愛好者の  
三者一致の元、昭和三十二年一月より本格  
的な剣道が始まりました。入会者も増え、  
大澤先生の二指導のもと、日躰きの稽古  
の時は芋を洗うような盛況振りだったそう  
です。その後、愛好者の大変な努力によつ

て、昭和三十七年六月、戦後県下のトップ  
をきつて、専用道場が建設されました。そ  
の名称を、大澤先生が個人で経営していた  
道場大和塾の大和の二文字を頂き、大和錬  
心館と名付け、大澤先生ご指導により、足  
音高く木頭剣道全盛時代へと向かいました。  
昭和四十一年、村役場建築のため道場移  
転となりその移転した道場も、諸般の事情  
により平成十六年十一月に解体されました。  
閉館式には、多くの関係者・OB等が出席く  
ださり盛大におこなわれました。  
その後は、木頭小学校横にあります柔剣道  
場において行っております。六時迄は中学生、  
小学生は六時より七時三十分迄使用していま  
す。練習日は、月・水・金です。顧問、雄西  
義春・走川輝一・佐々木武夫先生、指導者、  
松本繁嗣館長・早川幸男教育長・小野恭輔・  
福井則夫・小川大造の各先生方です。現在、  
木頭小学校校長として芝原功一先生が赴任さ  
れていきますので、指導いただいております。  
子供達は現在男十一名、女四名です。  
次に、私の事について述べさせていただきます。  
私は小中校五年から剣道を始め、師は志



川輝一先生です。基本をしっかり教えても  
らいました。中学校では、故・株木芳夫先生



に厳しくご指導いただきました。今でも両先生に教わった事が私の財産となっております。

まず、高校では、軟式野球之やり、昭和四十九年出原郵便局に採用され、剣道を再び始める機会を得ました。当時、木頭錬心館は、原田勝先生が指導されておられました。私もごいっしょさせてもらっていましたが、結婚を機に、私に任せられました。私が指導する立場となりましたが、何分にも若く社会経験未

熟な者に、将来有望な子供達を任されることは大変な責任を感じました。当時を思い出すと、ただ無我夢中に若さにまかせて稽古に取り組んだと思います。昔自分が教わった基本を中心に、掛り稽古を毎日毎日H課の如くやりました。仕事と剣道が半々というウエイトを占めていました。当時剣道が厳し

過ぎるとお叱りを受けた事もありました。私も年齢と共に自分の子供が剣道を始める時、少し剣道に変化がうまれてきました。三十一一年間の間には、数々の思い出があります。まず、全国選抜水戸大会で敢闘賞を二回いただいたこと、四国大会、県下大会と活躍してくれたこと。練習の成果が報われた時は感

無量の気持ちで一杯でした。元旦の初稽古から始まり、寒稽古(あの足の冷たさ)、夏休

みの早朝練習と子供達は本当にがんばりました。やはり、その子供達が今も第一線で活躍してくれていること、それが、指導者として大変嬉しい事だと思えます。

この伝統ある木頭錬心館の灯を絶やす事なく引き継いで行くことが、今携わっている者の使命です。

「師は針・弟子は糸」となって、たえず稽古をしなければならぬと書かれています。指導者はよくよく考えて事に当たらなければならぬと思います。

剣道は礼に始まって、礼を持って、礼に終わると言われますように、特に礼節を尊ぶ日本の歴史的文化です。

子供達には、基本を大切に礼儀作法を守り、将来どんな苦難に遭遇しても立ち向かっていく強い精神力を身につけ、人間として社会人として頑張っていってほしいと心より願います。毎年お別れ会の時に言っている「お互い感謝の心で生活を」忘れずに。

最後に、今後共、県剣道連盟の先生・各道場の先生方のご指導よろしくお願い致します。

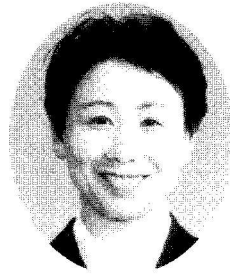
# 女子部合同稽古会

日時 毎月第一日曜日 午後六時〜七時

場所 中央武道館

剣道連盟女子部長

手塚 十三子



うれしい時

——どんな  
小さなこと  
でも誉めら  
れたとき。

悲しい時——「また元の癖に戻ってい  
る」と言われたとき。

午後五時三十分、わずか一時間だけの基  
本錬成を中心にした稽古の時間を無駄にす  
まいと、真剣な眼差しで準備運動が始まり  
ます。

連盟強化部から藤本雅史先生と平野誠司  
先生、お二人の先生の懇切丁寧なご指導に  
目と耳を澄まし、今日も何かを会得したい  
と女性たちは貧欲になります。手の内、腕

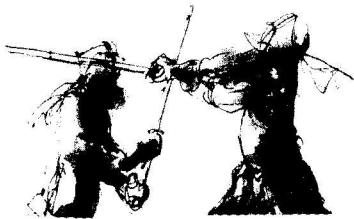
や足の使い方、構えの姿勢の在り方など、  
一つ一つの動作の確認を繰り返しながら、  
素振りを始めとした約束の基本稽古、さら  
には応用稽古へと発展していきます。この  
域に差し掛かると、女性たちの年齢も気分  
も完璧な少女剣士となり、純真そのもの。  
傍目にも愛おしく映ると推測するのは自画  
自賛でしょうか。稽古のアクセントに互角  
稽古を取り入れてお互いの欠点を指摘し合  
い、そしてお二人の先生に稽古をお願いす  
ることによって、次回の稽古までの課題が  
確固たるものとなる本当に有難いお稽古で  
す。

山を越えたご褒美は、誰かれなく皆が持  
ち寄る心配りの一品。お茶にジュースにコー  
ヒーにアイスクリーム。重箱にぎつしりと  
詰められた、すぐ腕のぼた餅まで登場。道  
具袋は土産袋に嬉しい変身を遂げる。この  
束の間の至福の時間こそ、明日からの生活  
の活力と、もっと深く剣道と関わりたいと  
願う前向きな姿勢を育んでいると思われま  
す。

全国的に試合と評されるものが数多く開

催され、また話題を呼ぶ昨今です。「一瞬の  
行」である試合に出場して、自身の実力を  
試すことにも、充分な価値があります。無  
理や無駄を省き、基礎基本を中心とした稽  
古を心掛けることにより、年齢を重ねるこ  
とに妙味の加わる魅力的な剣道を求める姿  
勢も大切な要素の一つです。

県内外の講習会や稽古会を始めとして、  
女性の皆さんが、より高い見識で、今後と  
も剣道に邁進まへんされますことをお祈りいたし  
ます。是非、気軽に稽古会にご参加下さい。  
お二人の先生方、今後とも可愛い女性た  
ちの手取り足取り、どうぞ慈しみのお心で  
ご指導下さいますようお願いいたします。



『祖父との約束』

徳島県鳴門市 鳴門光武館

小学六年生 福 居 壮 太



僕は、三年前に亡くなった祖父との約束を守るために剣道を続けている。

僕が通う光武

館道場は、渦潮逆巻く大鳴門海峡の近くに建っている市立の剣道専用の道場である。

「昔は警察道場を借りて練習していたが君達の先輩が試合で全国一という功績を残した時、市長さんが、間借りではかわいそうと言って作ってくれた道場なんだから、先輩の後を継いで立派な人間にならないと駄目だぞ」と、警察官をしていた館長や先生からよく聞かされている。

その道場に僕が入門したのは小学二年の秋だった。最初は竹刀や防具はなかなか付

けさせてくれず、週三回の練習日は来る日もすり足ばかり、「早くみんなに交じって稽古をしたいな」と思ったが、「このすり足や素振りが一番大事な基本、いわば家を建てる時の土台のようなものだ。土台がしっかりしていないと立派な家は建たない」と先生は熱心に教えてくれた。半年たつて漸く防具を付けることを許された時の感激は今でも忘れることができない。「初心忘るるべからず」僕はたまに剣道がいやでつらくなつたときこの日の感激を思い出し自分を叱っている。

三年生になって初めて試合に出た。いつもあれだけ練習をしているのに、「はじめ」のあと、体が思うように動かずただ構えたまま相手に向かって近付いて行くことだけしかできなかった。

泣きたいほど心細かったのを覚えている。当然試合には負けたが、ただ技を覚えるだけでは駄目だ、もつともつと心身を鍛えなくては絶対勝てないと、悔しさの中で感じとつた。

それから僕は練習に集中して打ち込んで

行った。暑さ寒さにもめげず苦しくても、弱音を吐くこともなく休まず道場に通り、先生のおっしゃることを全部自分の物にするぞと心に決めた。練習日以外は家で素振りを続け、気がついたらよく風邪をひいていたのにひかなくなり、内気な性格だったのに積極的な性格に変わっている自分を発見した。

昨年十一月、館長先生のご功績を称え四国の選手が鳴門で競い合った「四国選抜剣道大会」に千二百人の少年剣士の代表で、中学生の先輩と二人で「選手宣誓」をさせていただいた時も、緊張することもなく堂々と言えたことが、これからの僕の人生に自信となることを信じている。亡くなった僕の祖父は若い頃剣道をしていて、僕が剣道を習っているときいつでも喜んでくれた。夏休みなどに祖父の家へ行くときすぐ僕の足や腕を掴んで「どこも腫れていないな」とたしなめ、「やりかけたことは途中で止めたらあかんぞ」といつも言ってくれた。「いつか選手になって大阪で試合する機会があれば一番に応援に行くよ」と僕の成長を楽し

みに待っていてくれたのに、僕が選手にならないうちになくなってしまった。もう少し長生きして欲しかったら主将となった僕、大きな大会で宣誓をする僕を見てもらえたのにと残念で仕方がない。だが、僕が祖父の気持ちをしっかりと受け継いでいることをきつとどこかで見守っていてくれると思う。

三才年下の弟も入門して来た。弟はいつか僕を追い越してみせると意気込んでいた。だから弟の腕前はめきめき伸びて本當にうっかりしていたら追い越されそうだった。二人で試合の話や技の話をする。こんな時兄弟で同じ目標を持って競い合うことはすばらしいことだと思ふ。弟は剣道の達人になって警察官になる、僕は教師になって生徒に剣道を教えるという希望を持っている。道場の「文武不岐」の額に負けない人間になりたいと思ふ。こんな立派な道場で熱心な先生方に教えて貰う感謝の気持ちは、祖父との約束を守って生涯剣道を続けること以外にはないと信じている。

# 賞状

敢闘賞

小学生の部

四国地区代表  
徳島県

鳴門市光武館

福居 壮太

君は本団の趣旨を理解し  
 剣道を通して修練された  
 自己の体験並びに社会奉仕  
 の実践活動を発表されその  
 成績は極めて優秀であります  
 茲にその努力を讃えます

平成十七年二月二十七日

財団法人全日本剣道場連盟  
 日本剣道連盟  
 年 団

指導者部長

橋本 龍太郎



# 少年強化遠征

## 京都竹友会剣道大会

北井上剣道教室 井上愛理

私は今回強化訓練に参加させてもらい、二月十一日に徳島選抜のメンバーとして、京都竹友会剣道大会に出場させていただきました。

早朝起きてみんなでバスに乗りこみ、京都へむかいました。県外での試合は初めてなので、とてもきん張しました。

一試合日は、京都一龍館の佐尾山さんで、体が寒さで動かず、どうにか面を取り勝つことができました。二試合目では、試合のふんいきにもなれ調子もどおり、二本勝ちをしました。そして三試合目、メンを打つとぬかれて胴

を入れられ、本負けをしてしまいました。

試合の後に、松村先生に手元を引くようにと、腰がのこっているので、注意するようにと、ご指導していただきました。この大会での経験を生かし、悪いくせを直すように心がけ、これからも剣道をがんばって続けていこうと思っています。本当にご指導していただきました。先生方、ありがとうございます。

## 初めての京都竹友会

### 少年剣道大会

五年 山本千尋

二月十一日、徳島県選抜選手として初めて京都竹友会少年剣道大会に出場

させてもらいました。

会場に着くと、あまりの人数の多さと会場の広さにとまどいました。試合が始まるにつれてどんどん緊張してきました。でも一回戦二回戦と戦っていくうちに体が動くようになり、気がつくと決勝までできていました。決勝の相手は、今までの相手と比べてとても早くズビードがありました。二分間の勝負では勝負がつかず延長になりました。始まるとすぐ相手のペースにのってしまいました。そこに引き面をとられ負けてしまいました。

結果は、準優勝に終わりましたが、自分の力を精一杯發揮でき本場によかったです。

こんなチャンスをあたえて下さった先生方に感謝したいと思います。そして、これからも一生懸命練習して、もっと剣道が強くなれるように努力していきたいと思いました。

## 京都竹友大会に行つて。

岡 田 宣 孝

一回戦目はあまり動けなかったのであせりぎみでした。二回戦はじゅんちゆうで二本勝ちでした。それから準準決勝まであがつてきました。次の相手は下段でメンが速いです。ぼくは思いました。コテでいくとぬかれてメンをうたれるので相メンで一本とり、そして二本目相手がメンをうつてきたところをメンかえしドウでいれようと思いましたが。

とてもきんちゆうしてました。みんなが、がんばれといつてくれたけどそれがプレッシャーになり、心がぼくばくしてました。試合がはじまるとあせり、相手のペースになつてしまい、相手がメンをうつてきたののつてメンをうつてしまいました。とうぜん相手のメンがはいりました。もっとあせ

りました。でも、おちついて試合のはじまる前に思ったことを思いだしました。相手にメンをさそいメンかえしドウをうつことにしました。でもまつていたのでメンをうけてもメンぶとんにちよとあたり二本目をいれられました。ぼくはまけてとてもくやしかったです。来年在がラストチャンスなので金メダルがとりたいです。いい思い出になりました。松村先生、京都竹友大会につれていつてくれてありがとうございます。

## 京都竹友会少年剣道大会

入 田 木 下 裕 貴

ぼくは、六年生の四月から強化訓練に参加しました。強化メンバーの中から、京都竹友会少年剣道大会に二十四名が、発表されました。平成十七年二月十一日ぼくたちは、徳島選抜選手と

して京都の大会に出場しました。会場に行き、まわりを見るとたくさんの選手がいました。いよいよぼくの順番がきました。緊張で心臓が、ドキドキしてきました。一回戦目は、平屋剣道少年団の古谷くんという人でした。延長で何とか引き小手が入り勝ちました。二回戦目は、寺内剣友会の大浦くんという人でした。ぼくは、思うように体が動かずわざを出すことができませんでした。面をとられてしまい取り返そうとしたけど気持ちだけが、あせつてしまい時間がきてしまいました。大浦くんは、優勝しました。負けてしまつたけど大きな大会に来て、試合ができてよかったです。帰りのバスの中で、松村先生が選手一人ひとり評価をしてくれました。ぼくは、もっといろんな技を出していくようにと言われました。これからは、先生が言ってくれた事を頭の中に入れて練習をしていきます。

## 感想文

小松島少剣クラブ六年 栗野文那

二月十一日に京都の試合に行つて、最初どんな選手がいて、どんな試合をするのかなとかいろいろ思つていました。そして、やつと昼から自分の試合が始まつて、一回戦目は、きんちようしすぎてあまり動けませんでした。二回戦目からは、だんだん動きだしてきました。そして、準々決勝では、西尾さんと対戦して負けてしまいました。敗因は先生方が言ってくれたようにアピールがたならなかったことだと思いましたが。でも、こんな、遠くの大会でベスト八といういい結果をだすことができたのでいい思い出になりました。ほかに、いろいろな人の足の動きや、うまい人の、すぎがあったら打ちこんでいくタイミングや、わざをいろいろと勉強できてよかったです。

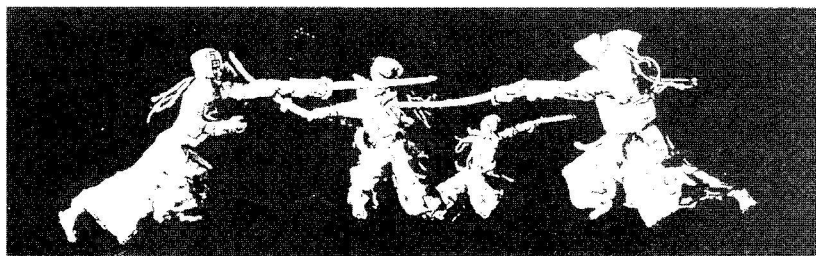
## 初めての遠征

岫雲館 清水洋佑

今回の京都の大会は、ぼくにとつて初めての遠征試合になるので選ばれた時はとてもうれしかったです。だから、試合の時は、自分の力を精いっぱい出して、全力でぶつかつていこうと思えました。

いよいよ試合が近づいてくると、ぼくの対戦相手がとても強そうに見えてきました。試合が始まると、対戦相手は動きがすばやく、打ちも速かったです。ぼくの打ちはなかなかきまらず必死にせめましたが、とうとう返し胴をいれられてしまい、一回戦で負けてしまいました。本当にくやしかったです。勝ちすすんでいく他の選手達の試合を見ていて、ぼくも、もつともつと強くなりたいたい、試合に勝ちたいと思えました。やっぱりそのためには、練習しか

ありません。先生方の言葉を素直に聞いてこれからも練習にはげみたいと思います。



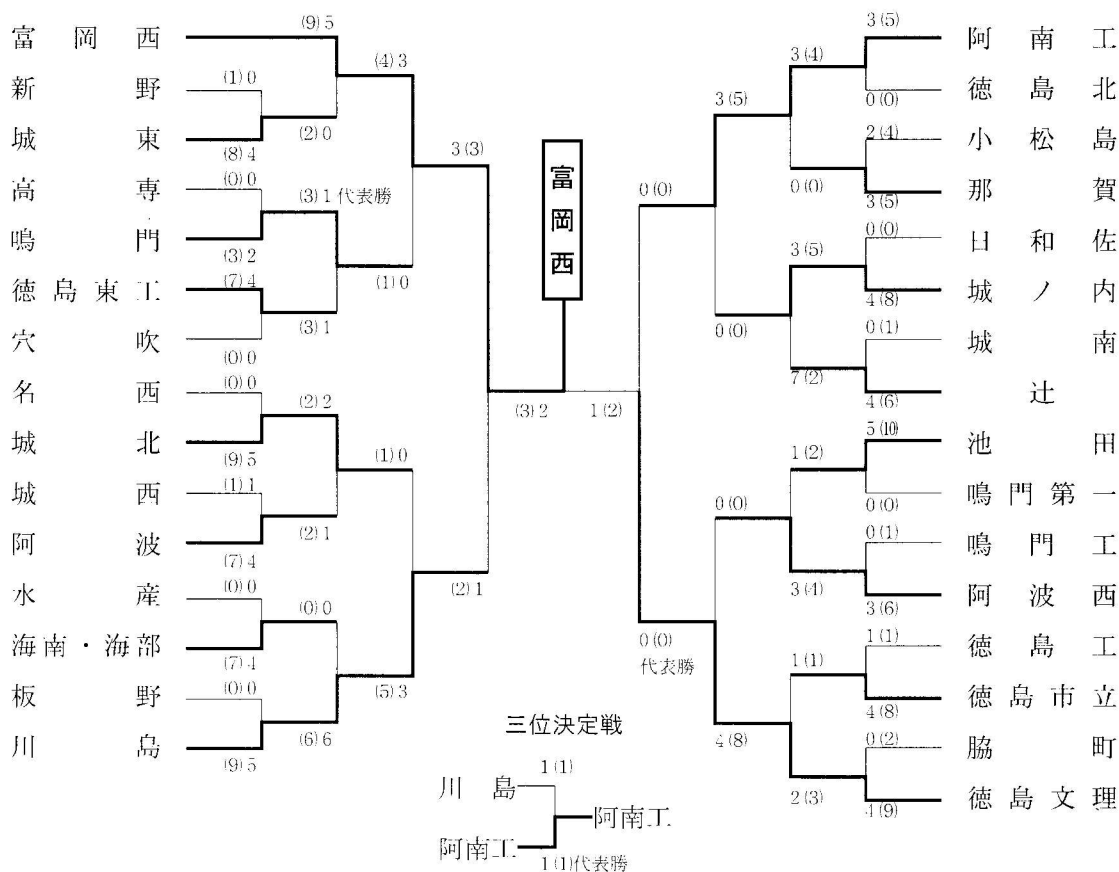
# 平成16年度 大会 記 録

平成16年度 徳島県高等学校総合体育大会 剣道競技

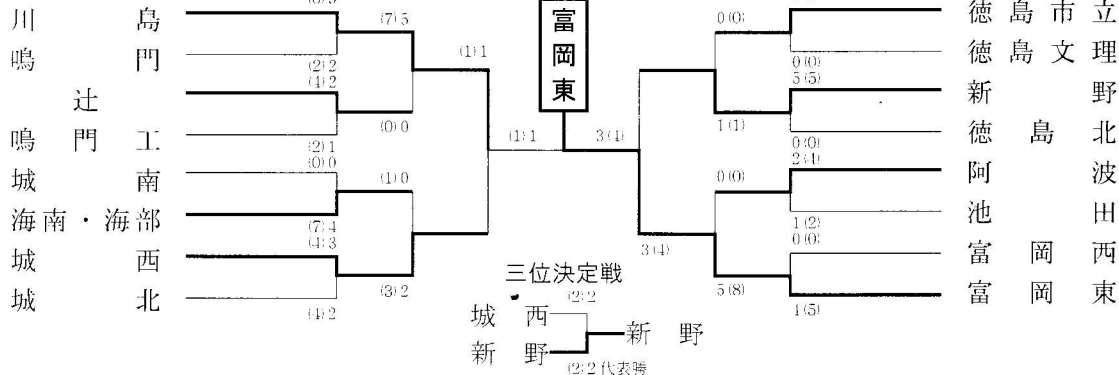
日 時 平成16年 5月29日(土)～31日(日)

会 場 徳島県立城西高等学校体育館

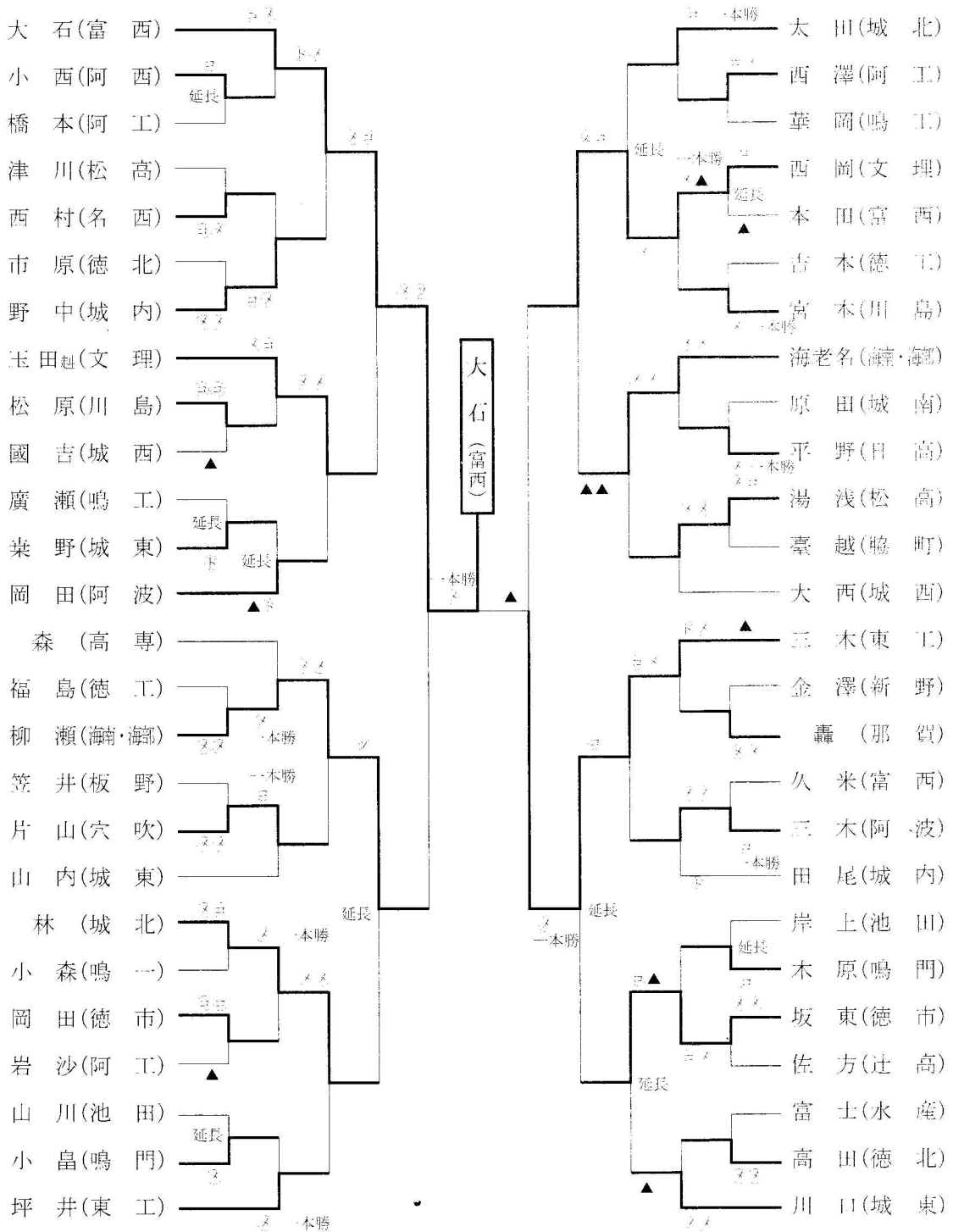
## 〈男子団体戦〉



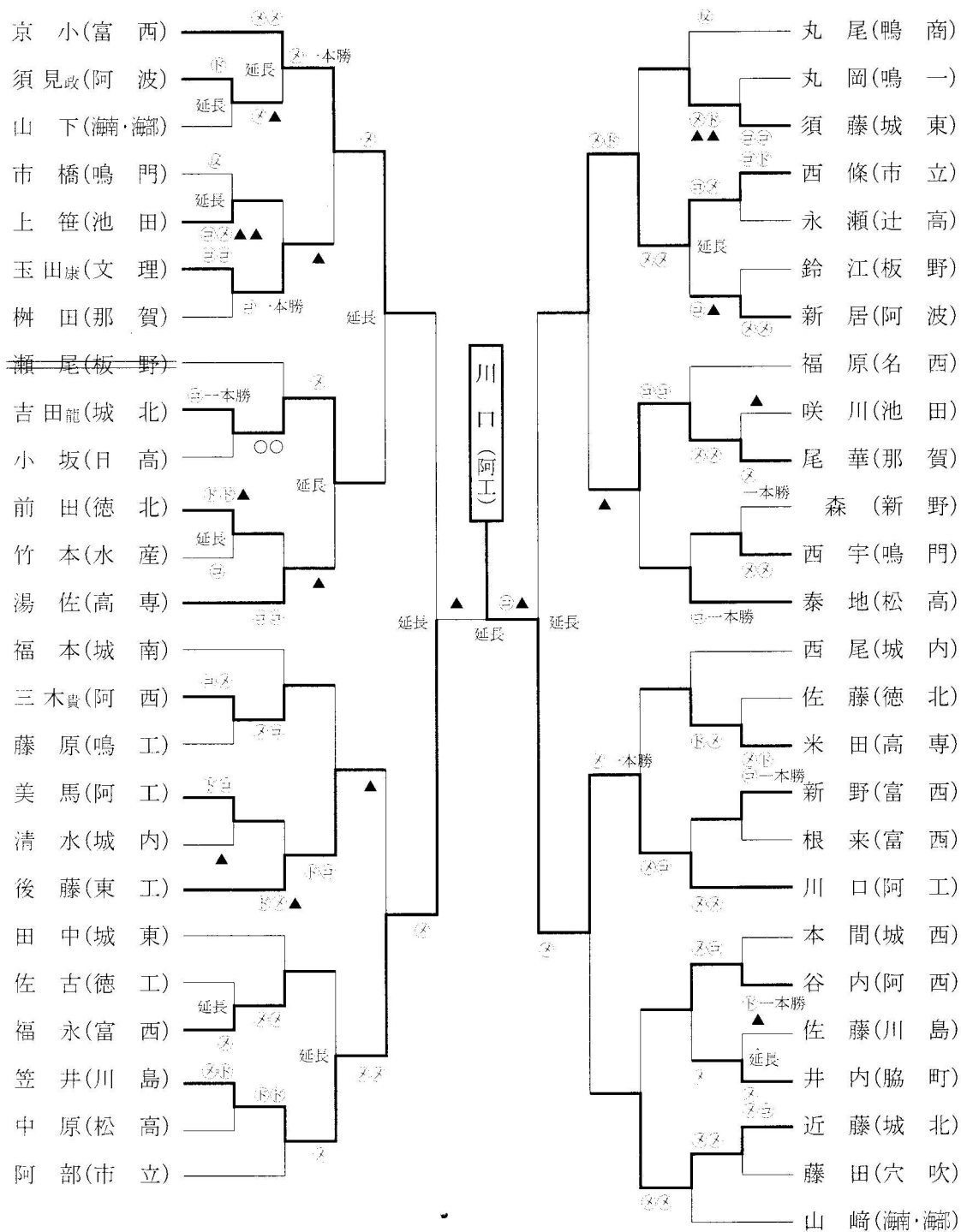
## 〈女子団体戦〉



〈男子個人1組〉

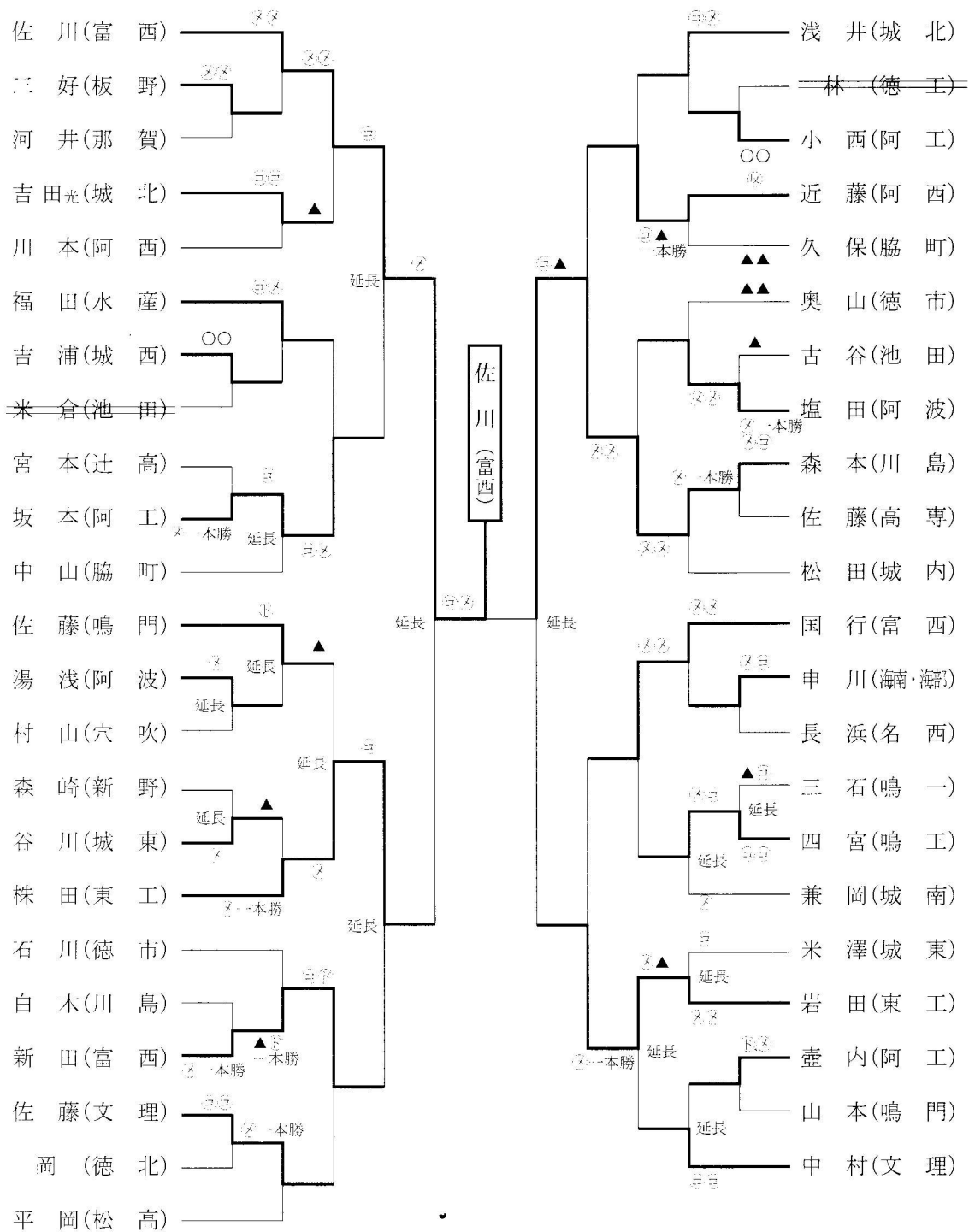


〈男子個人2組〉



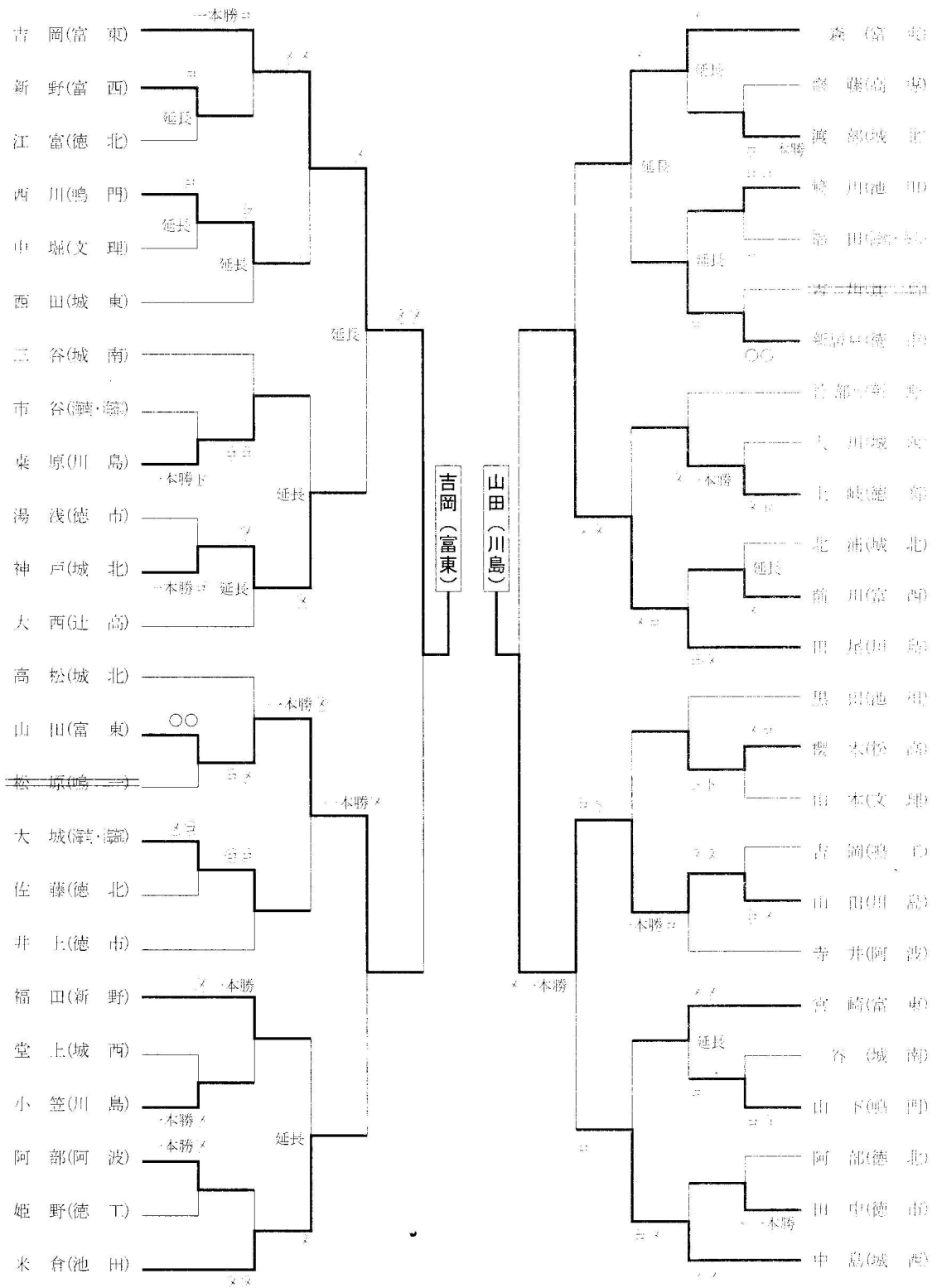


〈男子個人4組〉



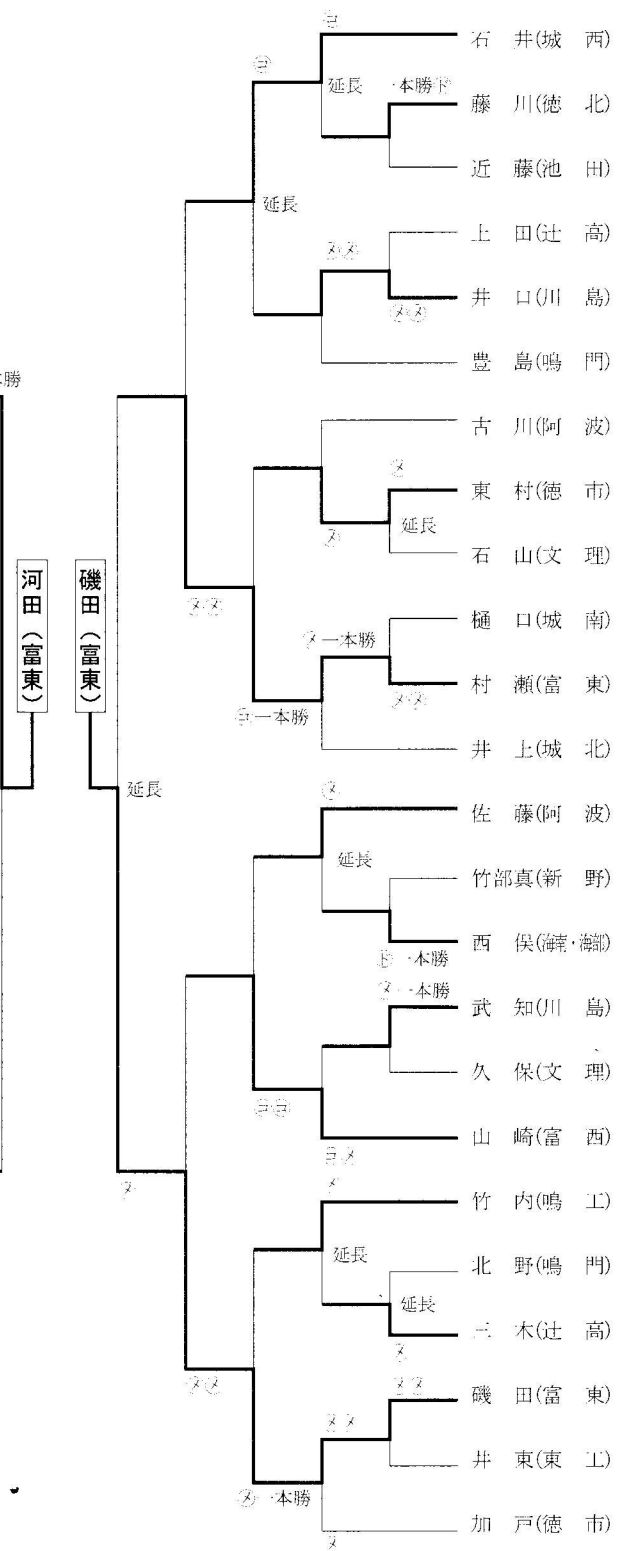
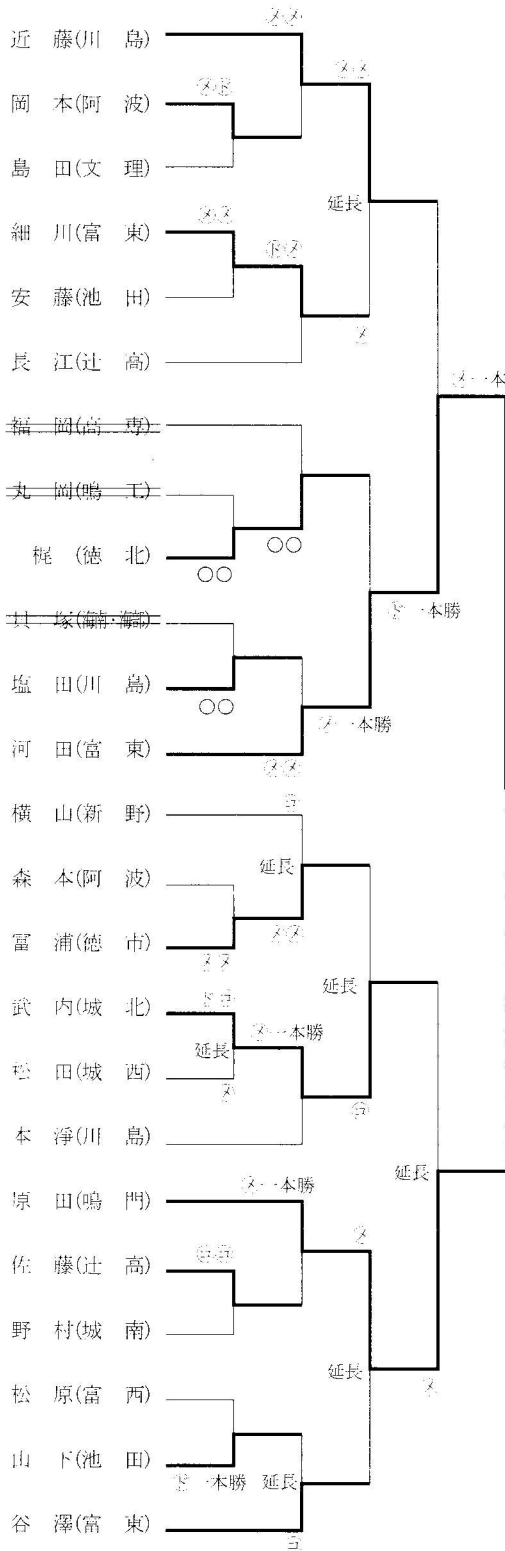
〈女子個人1組〉

〈女子個人2組〉



〈女子個人3組〉

〈女子個人4組〉



# 決勝リーグ

〈男子の部〉

## 準決勝

### 準決勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
富岡	福永	立岩	佐川	新田	大石	3	3	
西		①一本勝	②一本勝	延長	③一本勝			
川	④延長							
島	森本	白木	峰本	久保	笠井	1	2	

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
阿南	坂本	岩沙	石井	樫谷	川口	0	0	川口
工		延長	延長	延長	延長			
文								⑤延長
理	花房	片山	玉田	中村	玉田	0	0	玉田

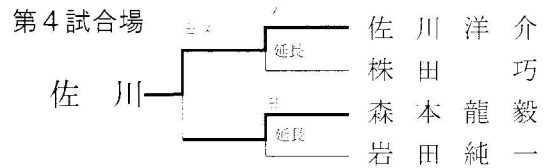
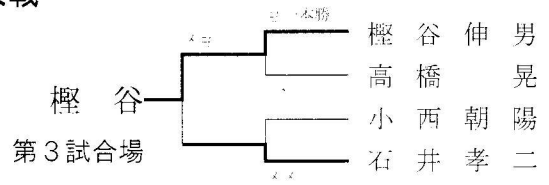
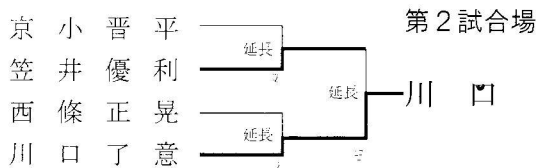
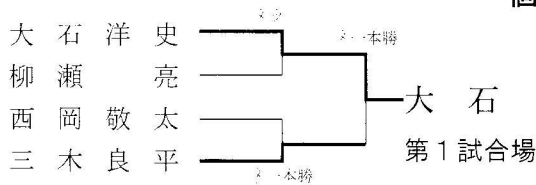
### 決勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
富岡	福永	立岩	佐川	新田	大石	2	3	
西	延長	①一本勝		延長	②延長			
文			③一本勝		④延長			
理	花房	片山	玉田	中村	玉田	1	2	

### 3位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
川	森本	白木	峰本	久保	笠井	1	1	白木
島	①一本勝	延長		延長	延長			
阿南			②延長					石井
工	坂本	岩沙	石井	樫谷	川口	1	1	石井

### 個人戦



〈女子の部〉

団体戦

準 決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
川	白	山	井	田	大	4	8	
島	木	田	口	尾	近			
城						0	1	
西	堂	石	大	中	松			
	上	井	川	島	田			

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
新	竹	清	竹	横	福	0	0	
野	部	楽	部	山	田			
富						2	4	
岡	河	細	磯	森	吉			
東	田	川	田	岡	岡			

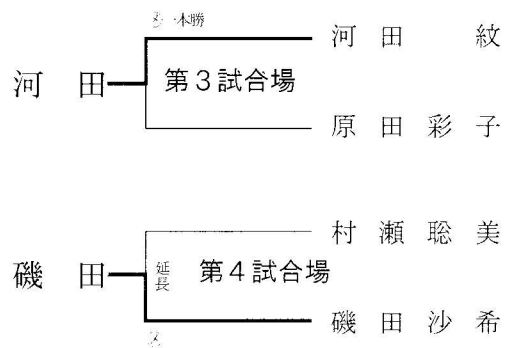
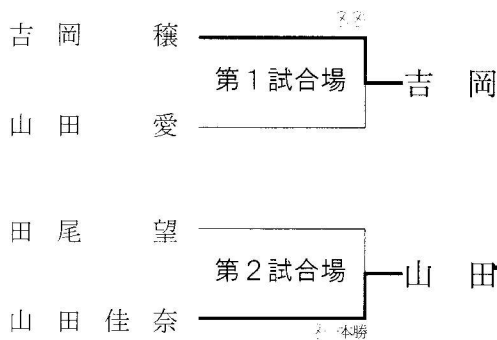
決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
川	白	山	井	田	大	1	1	
島	木	田	口	尾	近			
富	一	一				3	4	
岡	本	本						
東	勝	勝						
	河	細	磯	森	吉			
	田	川	田	岡	岡			

3位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
城	堂	石	大	中	松	2	2	中
西	上	井	川	島	田			
新	一	延	一	延	延	2	2	竹
野	本	長	本	長	長			
	勝		勝					真
	河	清	竹	横	福			
	田	楽	部	山	田			
	真	部	久	田				

個人戦



# 決勝リーグ

## 〈男子個人〉

	大石	川口	樫谷	佐川	勝数	勝本数	得失点	順位
大石		⊗ 一本勝	⊗	⊗ 一本勝	3	3	+3	1
川口	△		⊖	⊖	2	2	1	2
樫谷	△	△		⊗	1	1	-1	3
佐川	△	△	△		0	0	-3	4

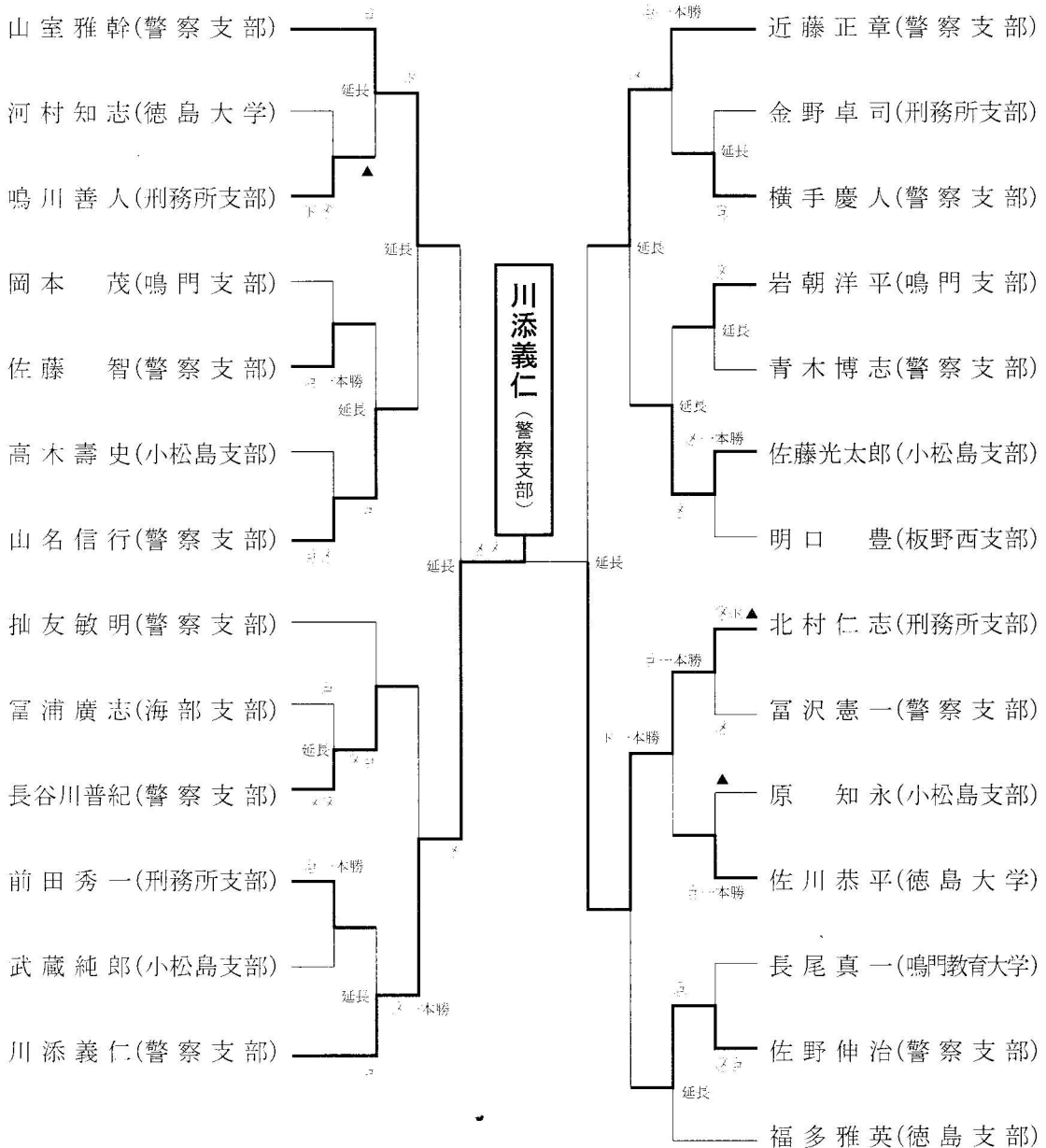
## 〈女子個人〉

	吉岡	山田	河田	磯田	勝数	勝本数	得失点	順位
吉岡		⊗	⊗	△	2	2	0	3
山田	△		△	△	0	0	-4	4
河田	△	⊗ 一本勝		⊗ 一本勝	2	2	1	2
磯田	⊗ ⊗	⊗ ⊗	△		2	4	3	1

## 第16回 徳島県剣道選手権大会

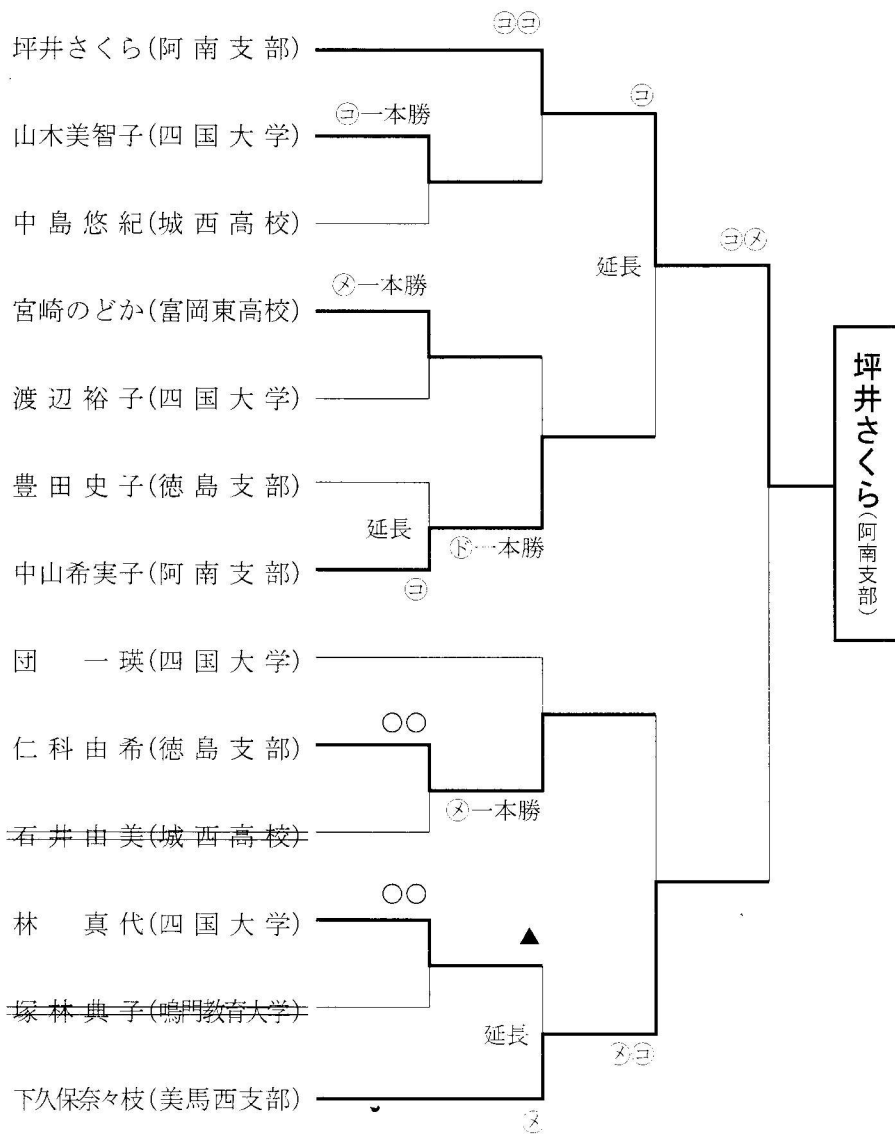
優勝 川添義仁 (警察支部)  
 準優勝 北村仁志 (刑務所支部)  
 第三位 山室雅幹 (警察支部)  
 第三位 近藤正章 (警察支部)

日時 平成16年7月11日(金)午前9時  
 場所 鳴門武道館



## 第7回 徳島県女子選手権大会

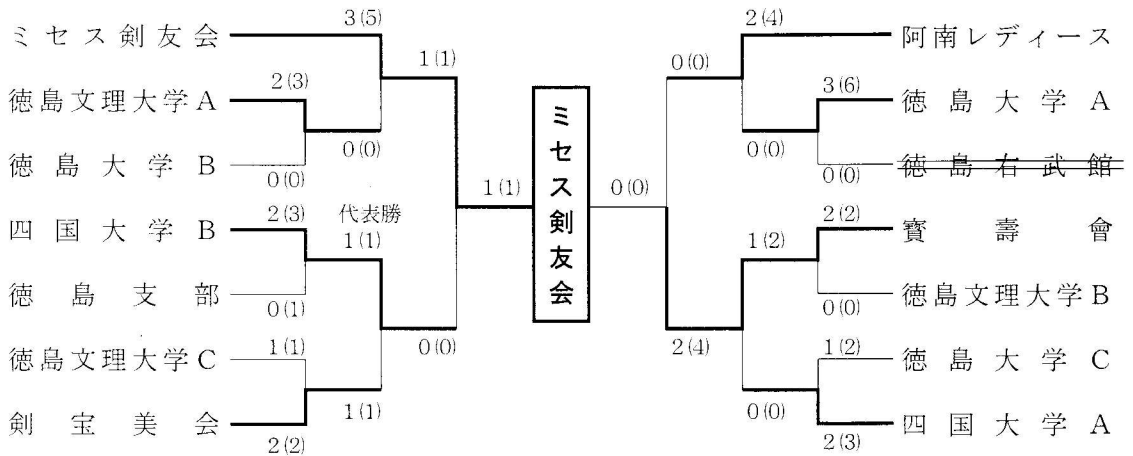
優勝	坪井 さくら	(阿南支部)	日 時	平成 16 年 7 月 11 日(金)午前 9 時
準優勝	下久保 奈々枝	(美馬西支部)	場 所	鳴 門 武 道 館
第三位	中山 希実子	(阿南支部)		
第三位	仁科 由希	(徳島支部)		



## 第 25 回 徳島県女子剣道大会

### 〈団体戦〉

日 時 平成 16 年 6 月 20 日(日)午前 9 時  
場 所 徳 島 県 立 中 央 武 道 館



### 決 勝 戦

	先鋒	中堅	大将	
ミセス剣友会	平野	山田	竹内	$\frac{1}{1}$
	X	◎一本勝	X	
寶 壽 會	豊田	阿井	西村	$\frac{0}{0}$
	X	X	X	

### 準 決 勝

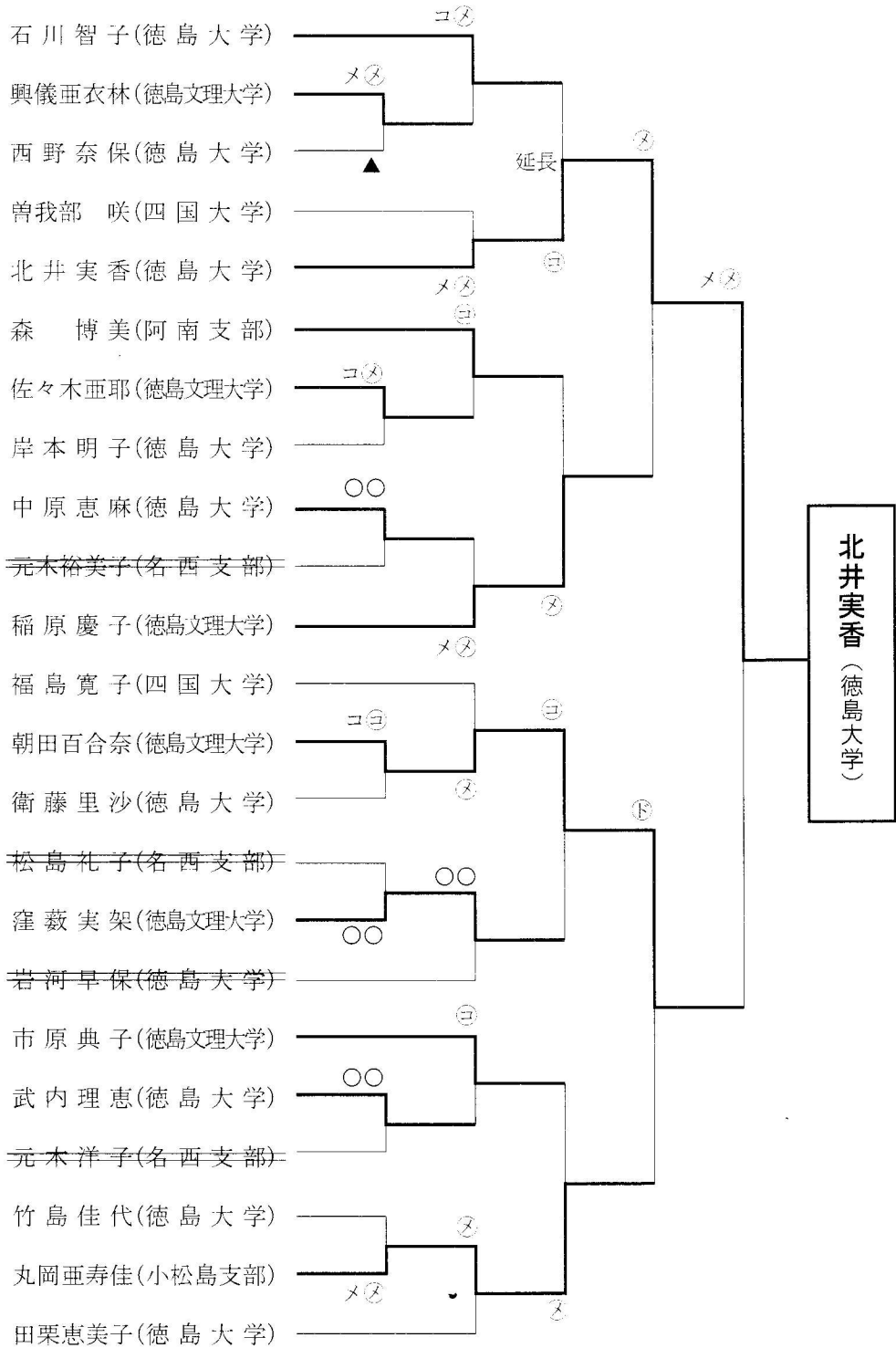
	先鋒	中堅	大将	
ミセス剣友会	平野	山田	竹内	$\frac{1}{1}$
	◎一本勝	X	▲	
四国大学 B	団	渡辺	林	$\frac{0}{0}$
	X	X	▲	

### 準 決 勝

	先鋒	中堅	大将	
寶 壽 會	豊田	阿井	西村	$\frac{4}{2}$
	X	◎	◎	
阿南レディース	森み	森博	加藤	$\frac{0}{0}$
	X	X	X	

〈個人戦〉

〈二段以下の部〉





# 第 58 回 徳島県中学校夏季総合体育大会

日 時 平成 16 年 7 月 19 日(月)午前 9 時  
場 所 鳴 門 武 道 館

## ① 団体戦

	男 子	女 子
優 勝	相 生 中 学 校	那 賀 川 中 学 校
準優勝	徳 島 文 理 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校
第 3 位	坂 野 中 学 校	鳴 門 第 一 中 学 校
第 3 位	阿 南 第 一 中 学 校	牟 岐 中 学 校

### [男子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	代 表	勝 敗
相 生 中	西 田	前 川	福 川	谷 澤	元 木	元木	1 代表勝
	X				☹ 延長	☹	
徳 島 文 理 中	X			☹ 一本勝			1
	庄地 島	川 人	松 本	土 屋	鎌 田	鎌田	

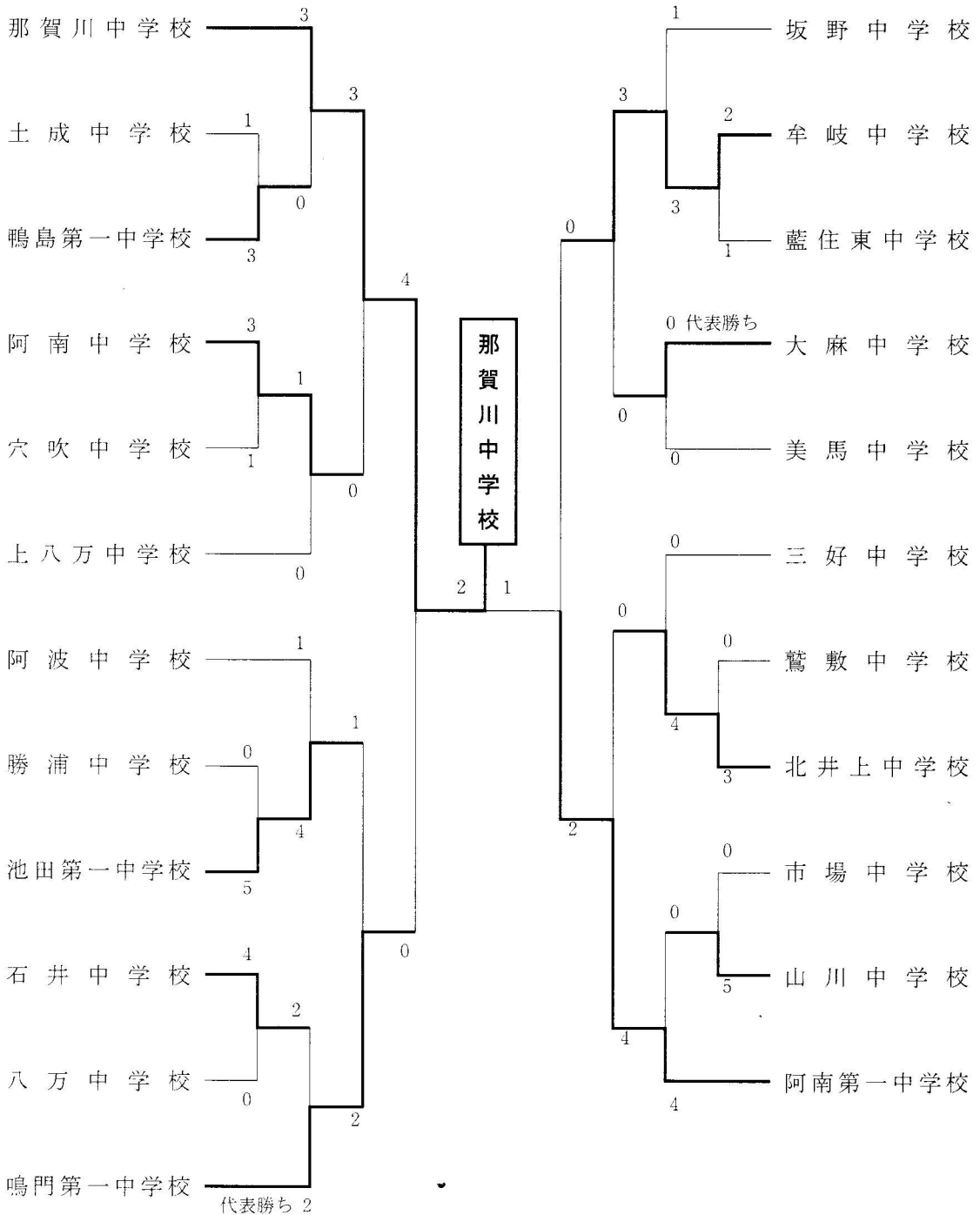
### [女子決勝]

学 校 名	先 鋒	次 員	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
那 賀 川 中	横 山	壺 内	星 野	市 瀬	中 野	2
	☹ 一本勝	延長	X		☹ 延長	
阿 南 第 一 中	X					1
	大 西	細 川	曾 根	笠 井	河 井	

## ② 個人戦

順位	男 子	学 校 名	順位	女 子	学 校 名
優 勝	松 本 明 真	徳 島 文 理	優 勝	平 野 千 尋	鳴 門 第 一
準優勝	西 田 義 玄	相 生	準優勝	河 井 優 里	阿 南 第 一
第 3 位	山 本 敬 太	鳴 門 第 一	第 3 位	藤 井 玲 名	牟 岐
第 3 位	谷 口 真 央	那 賀 川	第 3 位	片 山 由 貴	鴨 島 第 一

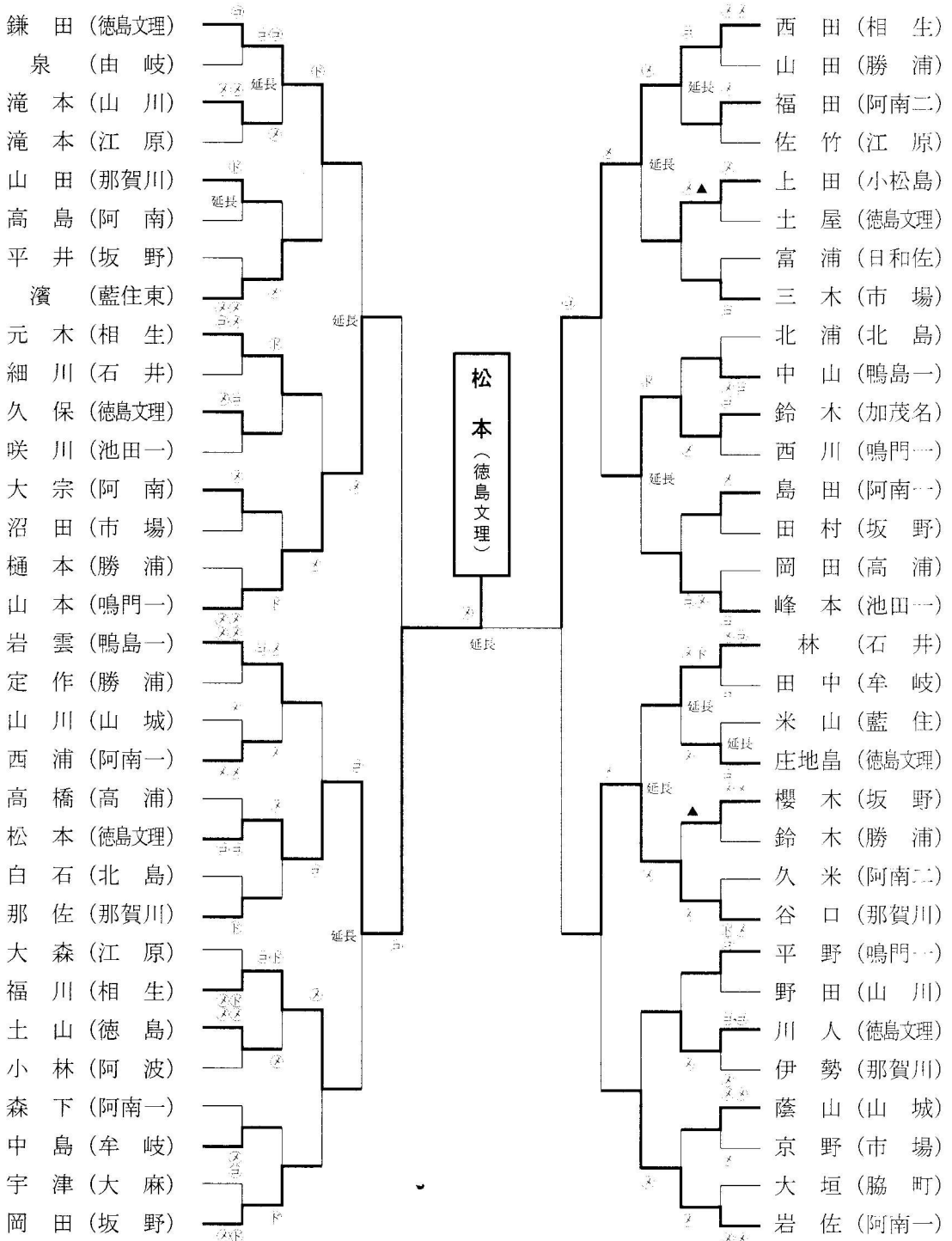
『女子組み合せ』







『男子個人組み合わせ』



## 第33回 徳島県社会人剣道大会

日 時 平成16年10月17日(日)午前9時  
場 所 鳴 門 武 道 館

### 予 選 リ ー グ

A	養武館	阿南大野	海部支部A	美馬東部C	勝者数	勝者数	勝本数	順位
養武館	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	2	6	14	2
阿南大野	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	3	7	11	1
海部支部A	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	6	14	3
美馬東部C	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	2	4	4

B	阿南支部B	徳島支部B	阿波支部B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿南支部B	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	3	9	2
徳島支部B	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	1	5	3
阿波支部B	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	2	4	9	1

C	徳島右武館	小松島(竹)	美馬西支部	勝者数	勝者数	勝本数	順位
徳島右武館	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	4	6	2
小松島(竹)	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	2	7	13	1
美馬西支部	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	3	6	3

D	徳島錬心館	大塚製菓	阿南大野城山	勝者数	勝者数	勝本数	順位
徳島錬心館	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	0	1	3
大塚製菓	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	2	8	15	1
阿南大野城山	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	6	8	2

E	徳大OBチーム	阿南新野	海部支部B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
徳大OBチーム	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	6	12	1
阿南新野	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	2	6	2
海部支部B	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	3	6	3

F	徳島支部A	板野西支部B	美馬東部A	勝者数	勝者数	勝本数	順位
徳島支部A	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	2	7	14	1
板野西支部B	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	1	6	11	2
美馬東部A	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub> △ <sub>0</sub>	0	0	0	3

## 予 選 リ ー グ

G	小松島支部 (松)	阿波支部 C	岫雲館	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
	小松島支部(松)	△ <sub>0</sub>	△ <sub>1</sub>	1	2	4	2
阿波支部 C	○ <sub>3</sub>	△ <sub>0</sub>	2	6	12	1	
岫雲館	△ <sub>1</sub>	△ <sub>1</sub>	0	2	5	3	

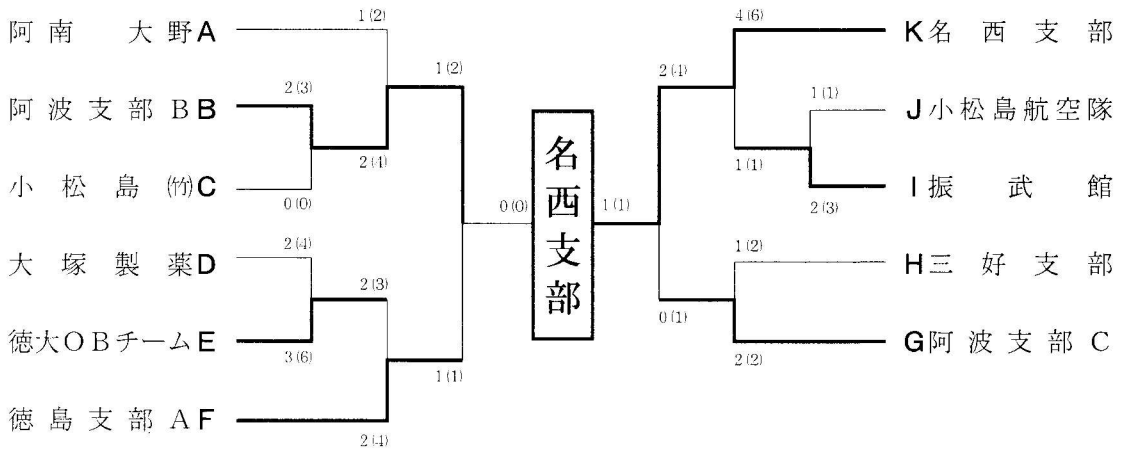
H	徳島支部 C	美馬東部 B	三好支部	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
	徳島支部 C	△ <sub>1</sub>	△ <sub>0</sub>	0	1	1	3
美馬東部 B	○ <sub>1</sub>	△ <sub>0</sub>	1	1	2	2	
三好支部	○ <sub>1</sub>	○ <sub>1</sub>	2	8	14	1	

I	板野西支部 A	振武館	阿波支部 A	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
	板野西支部 A	△ <sub>2</sub>	△ <sub>0</sub>	1	3	9	2
振武館	△ <sub>2</sub>	△ <sub>0</sub>	1	4	8	1	
阿波支部 A	○ <sub>2</sub>	△ <sub>1</sub>	1	3	8	3	

J	小松島航空隊	板野東支部	阿南那賀川	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
	小松島航空隊	△ <sub>2</sub>	○ <sub>2</sub>	2	4	8	1
板野東支部	△ <sub>1</sub>	△ <sub>0</sub>	1	4	7	2	
阿南那賀川	△ <sub>1</sub>	△ <sub>2</sub>	0	3	6	3	

K	名西支部	鳴門支部	阿南支部 A	吉野川	勝 数	勝 者 数	勝 本 数	順 位
	名西支部	△ <sub>0</sub>	○ <sub>3</sub>	○ <sub>3</sub>	○ <sub>1</sub>	3	10	18
鳴門支部	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>1</sub>	○ <sub>2</sub>	1	4	10	3
阿南支部 A	△ <sub>0</sub>	○ <sub>3</sub>	△ <sub>0</sub>	○ <sub>3</sub>	2	8	17	2
吉野川	△ <sub>0</sub>	△ <sub>1</sub>	△ <sub>0</sub>	△ <sub>0</sub>	0	1	3	4

## 決勝トーナメント



## 準決勝戦

第一試合場

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
阿波支部 B	割石	佐藤	長井	桑原	藤井	1 (2)
徳島支部 A	▲佐藤	井村	生田	田辺	忠津	1 (1)

一本勝

第二試合場

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
阿波支部 C	瀬尾	近藤	河野	笠井	佐藤	0 (1)
名西支部	⊗六條	⊗鑄形	⊗白木	⊗久保	⊗大西	2 (4)

## 決勝戦

第一試合場

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
阿波支部 B	割石	佐藤	長井	桑原	藤井	0 (0)
名西支部	⊕一本勝 六條	鑄形	白木	久保	大西	1 (1)

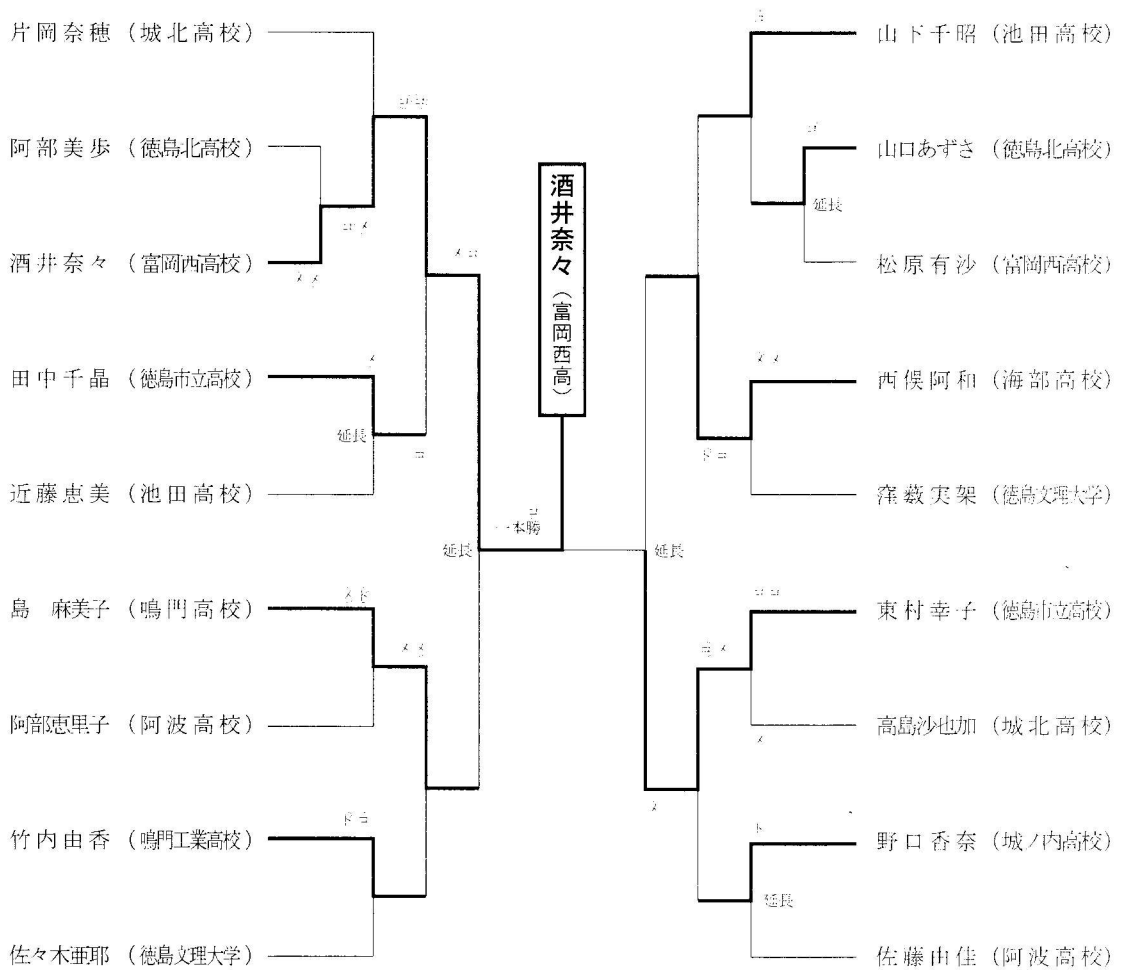
- 優勝 名西支部
- 準優勝 阿波支部 B
- 第3位 徳島支部 A
- 第3位 阿波支部 C

# 第 28 回 徳島県剣道段別選手権大会

日 時 平成 16 年 11 月 21 日(日)午前 9 時  
場 所 鳴 門 武 道 館

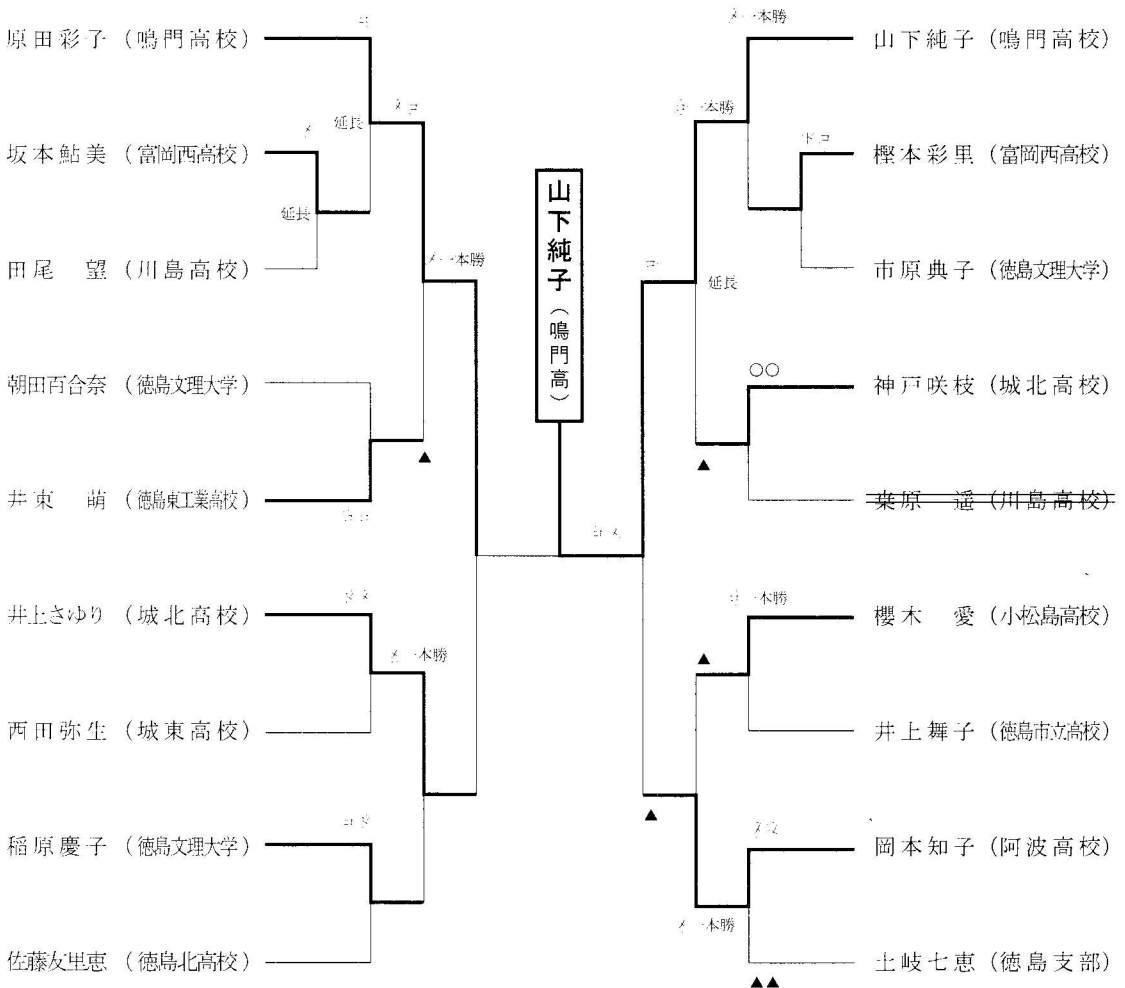
## 初段の部 (女子)

優 勝 酒 井 奈 々 (富岡西高) 三 位 島 麻美子 (鳴 門 高)  
準優勝 東 村 幸 子 (徳島市立高) 三 位 <sup>にし また あい さ</sup> 西 俣 阿 和 (海 部 高)



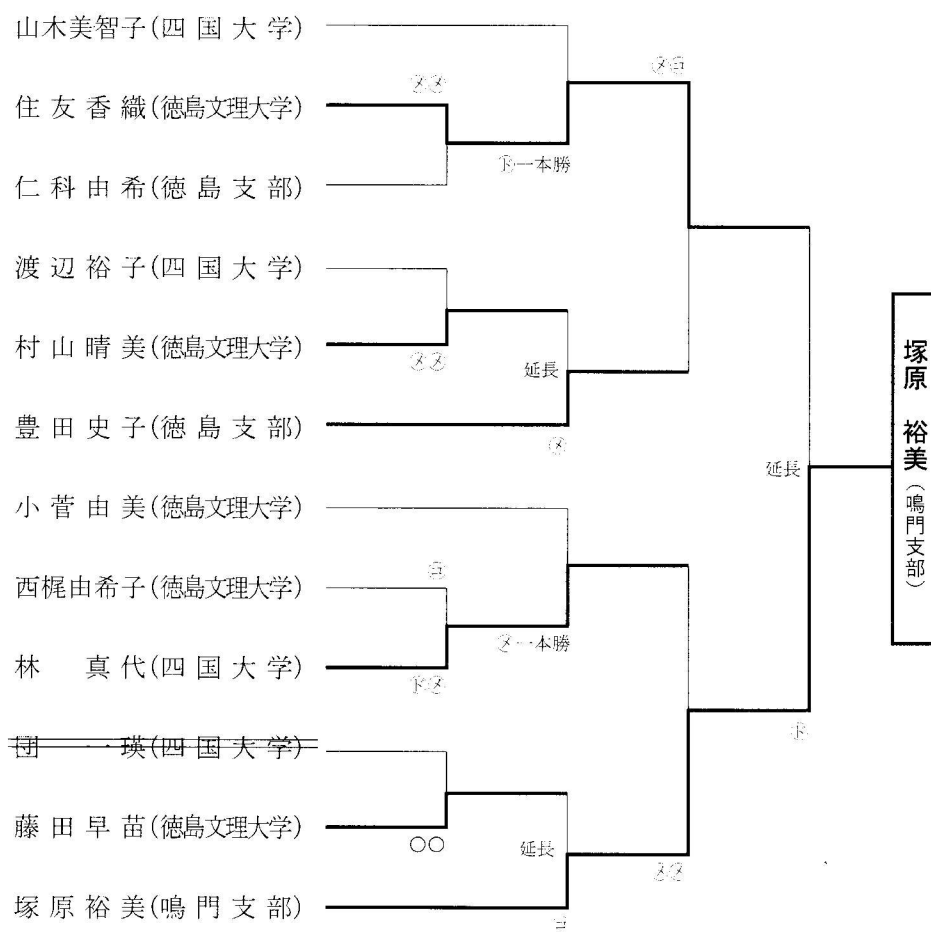
## 二段の部（女子）

優勝 山下純子（鳴門高） 三位 井上さゆり（城北高）  
 準優勝 原田彩子（鳴門高） 三位 岡本知子（阿波高）



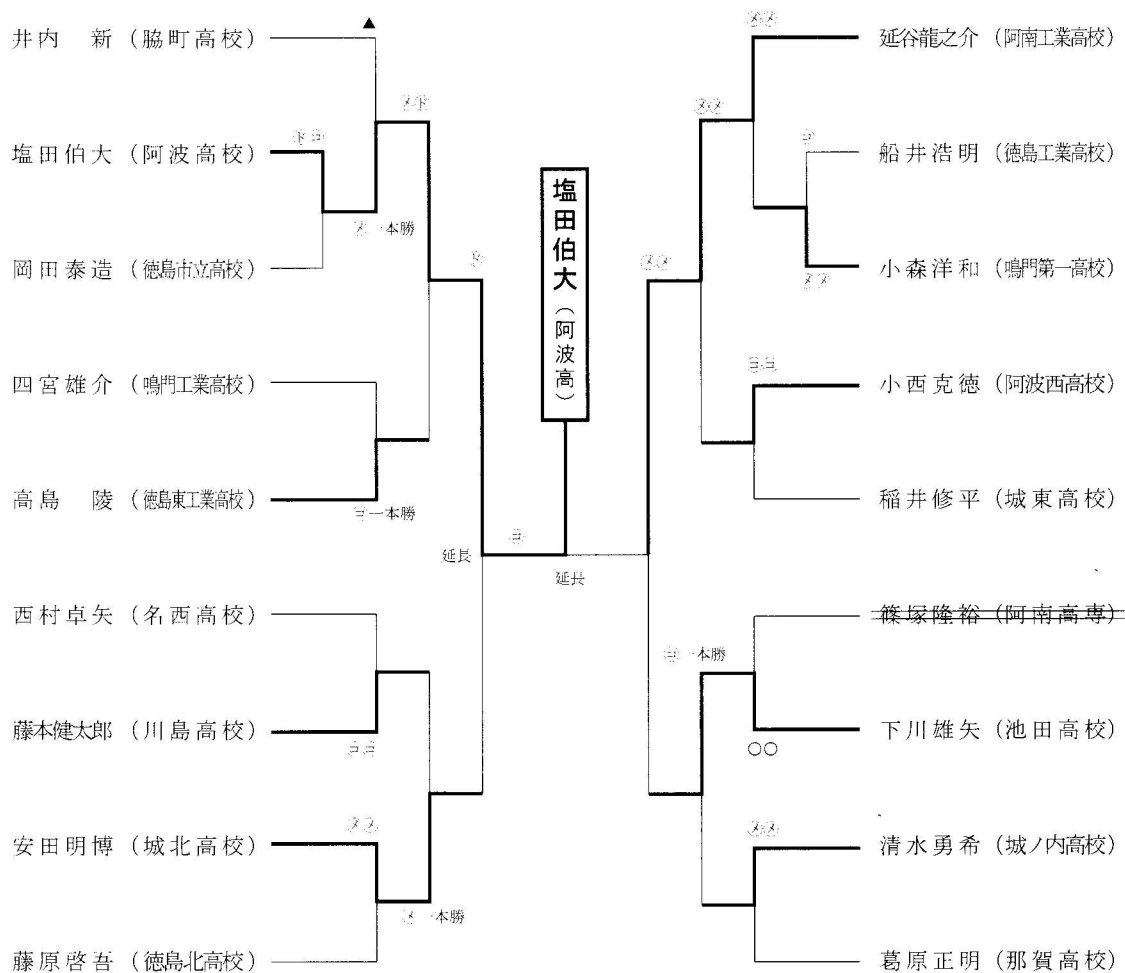
### 三段の部（女子）

優勝 塚原裕美（鳴門支部） 三位 豊田史子（徳島支部）  
 準優勝 住友香織（文理大） 三位 林真代（四国大）



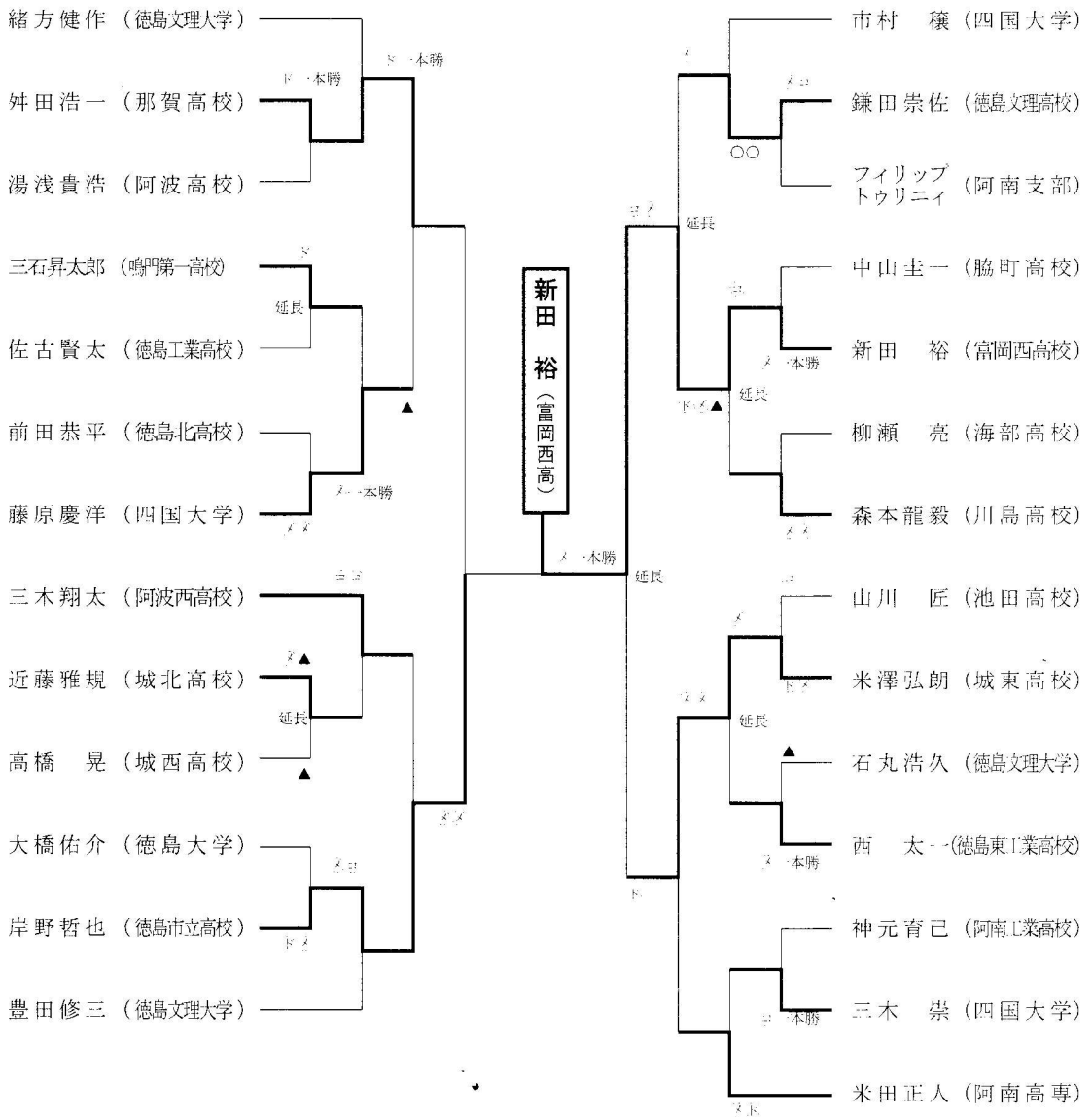
### 初段の部（男子）

優勝 塩田伯大（阿波高） 三位 安田明博（城北高）  
 準優勝 延谷龍之介（阿南工高） 三位 下川雄矢（池田高）



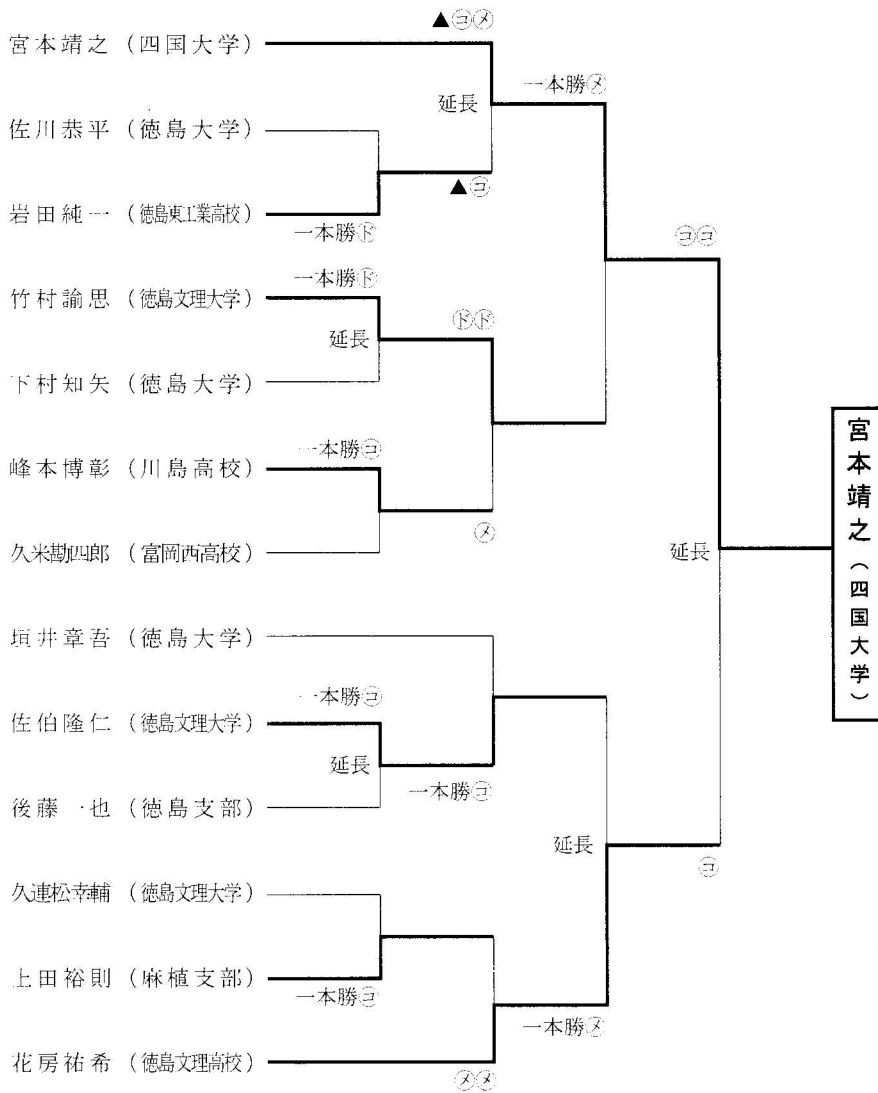
## 二段の部（男子）

優勝 **新田 裕**（富岡西高）      三位 **梶田浩一**（那賀高）  
 準優勝 **岸野哲也**（徳島市立高）      三位 **米澤弘朗**（城東高）



### 三段の部（男子）

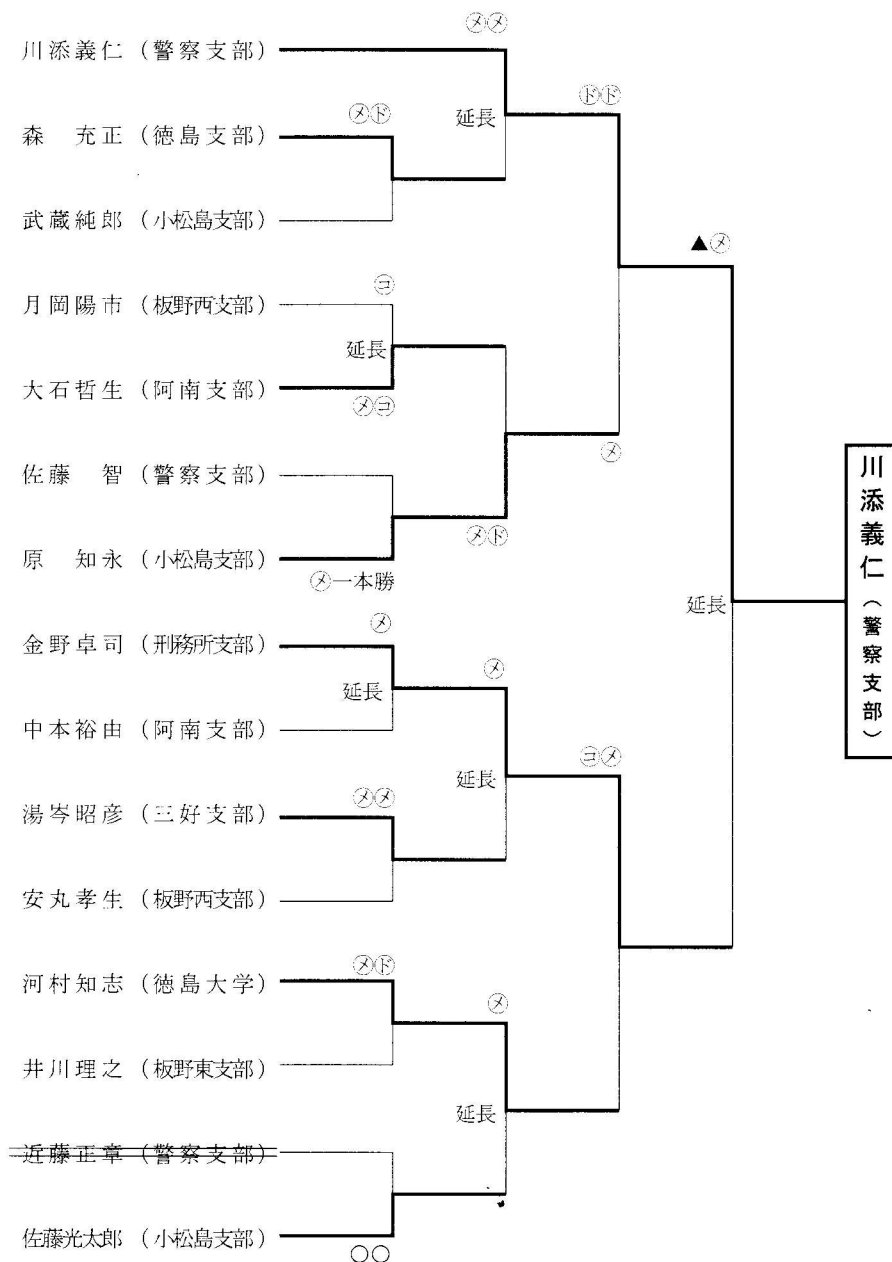
優勝 宮本靖之（四国大） 三位 竹村諭思（文理大）  
準優勝 花房祐希（文理高） 三位 佐伯隆仁（文理大）



## 四段の部（男子）

優勝 **川添義仁**（警察支部）      三位 **原 知永**（小松島支部）

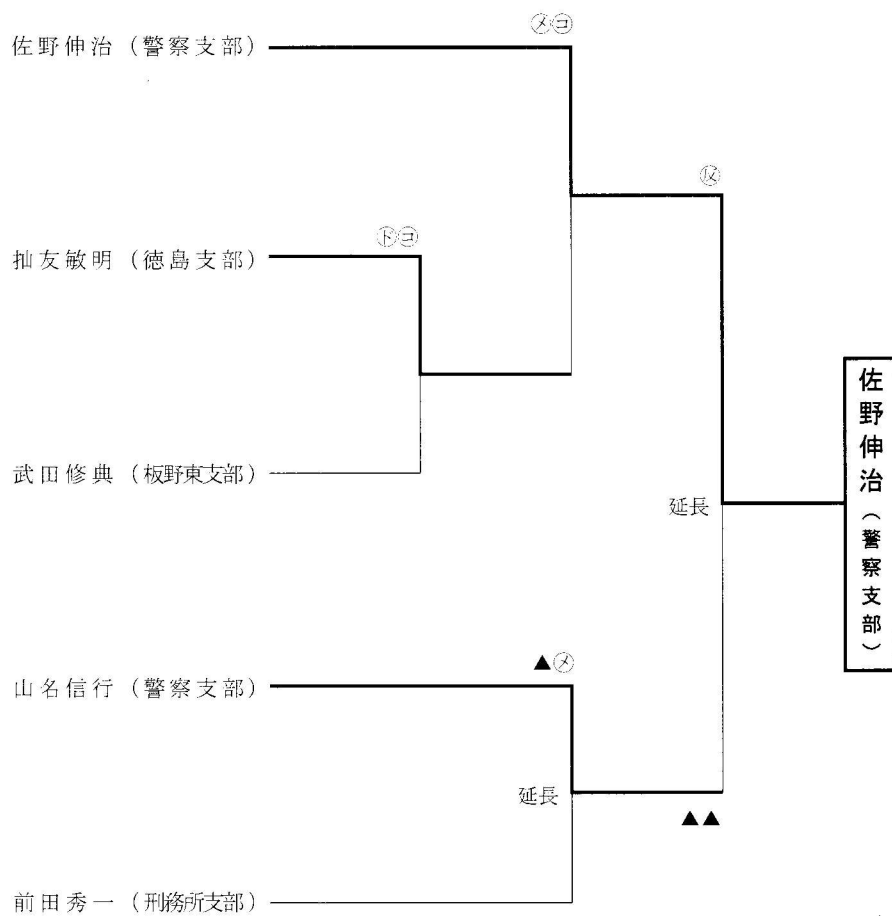
準優勝 **金野卓司**（刑務所支部）      三位 **河村知志**（徳島大学）



### 五段の部（男子）

優勝 佐野伸治（警察支部）

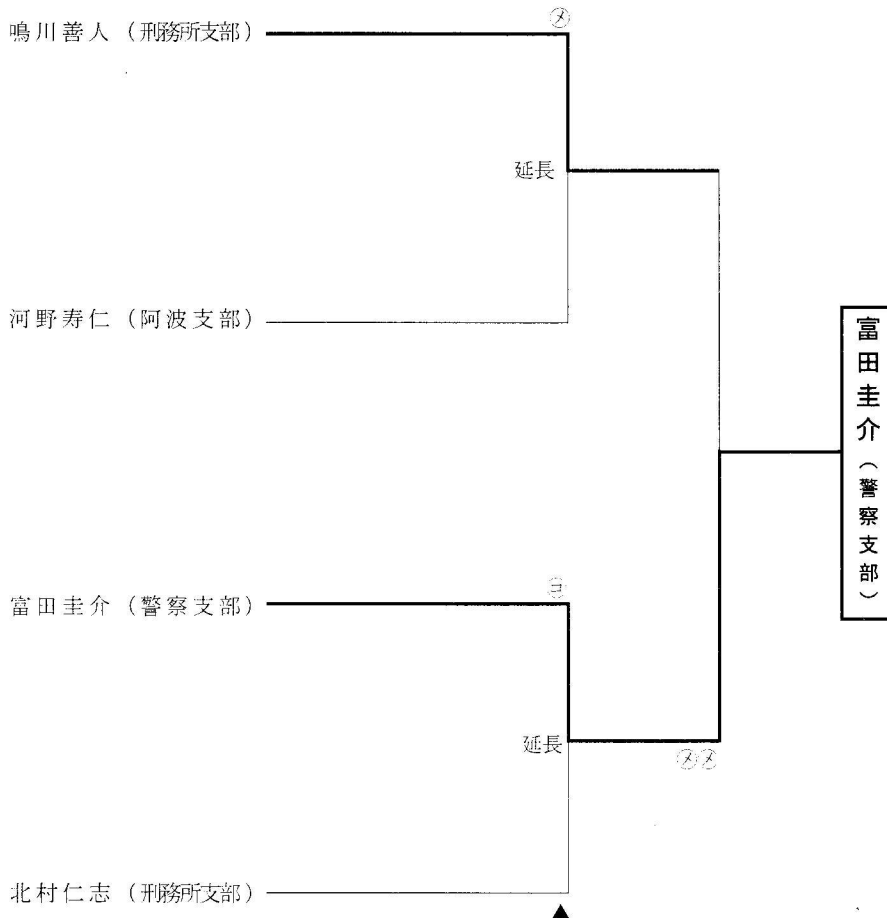
準優勝 山名信行（警察支部）



## 六段の部（男子）

優勝 富田圭介（警察支部）

準優勝 鳴川善人（刑務所支部）

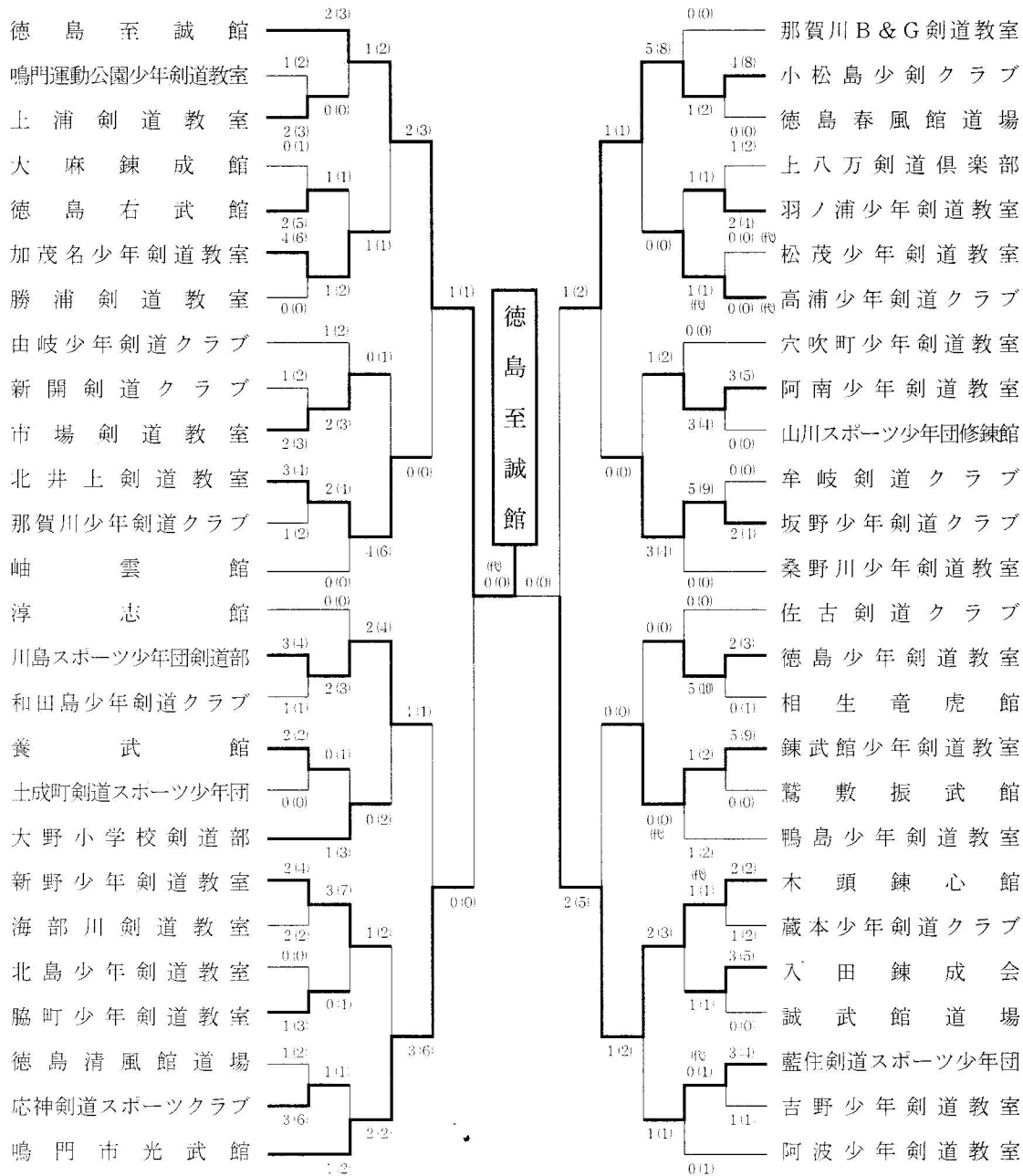


## 第15回 徳島県小・中学校剣道強化練成大会

少年の部 (52 チーム)

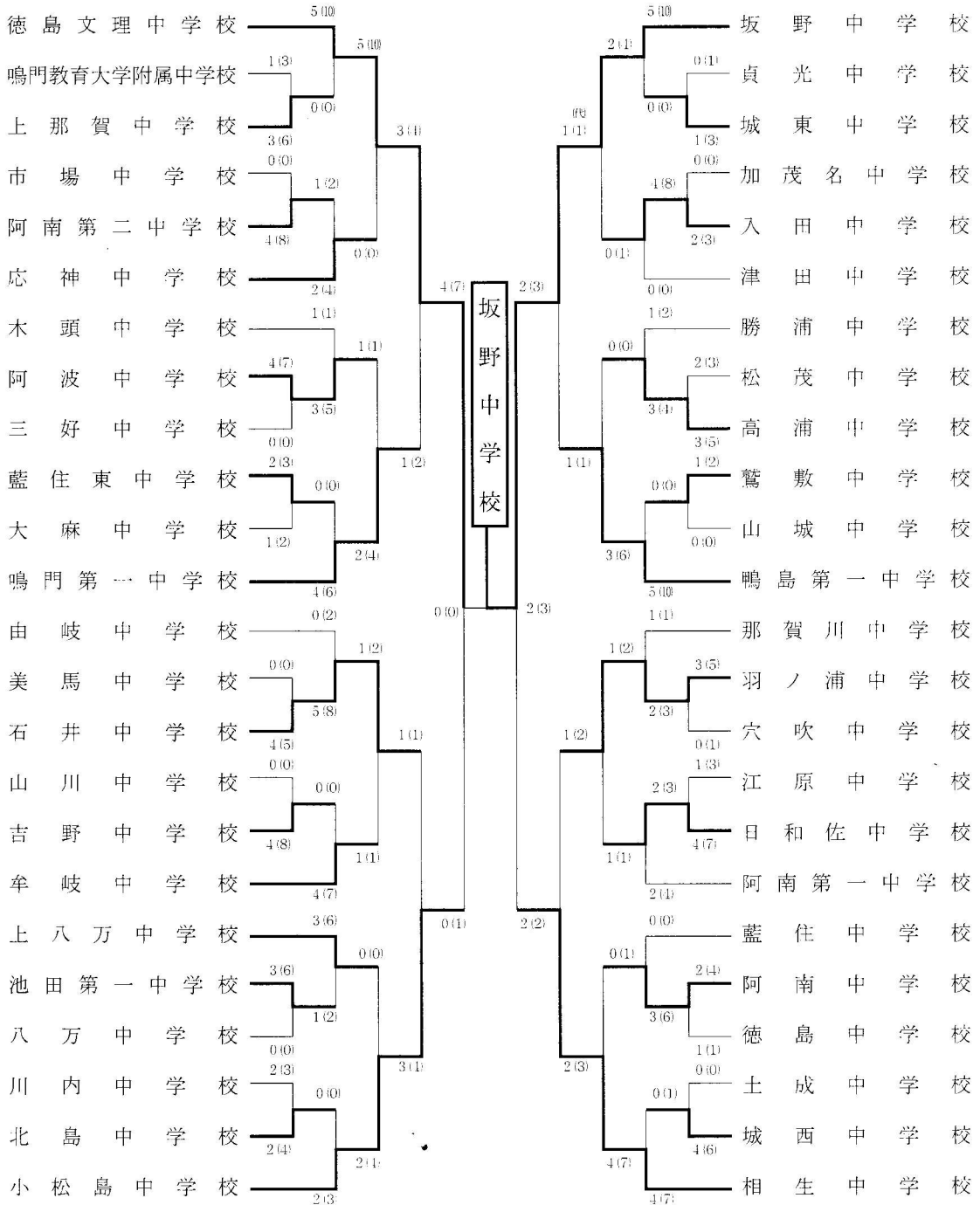
日 時 平成16年1月30日(日)午前9時  
場 所 鳴 門 県 民 体 育 館

優勝 徳島至誠館  
準優勝 徳木頭錬心館  
第3位 鳴門市光武館  
第3位 小松島少剣クラブ



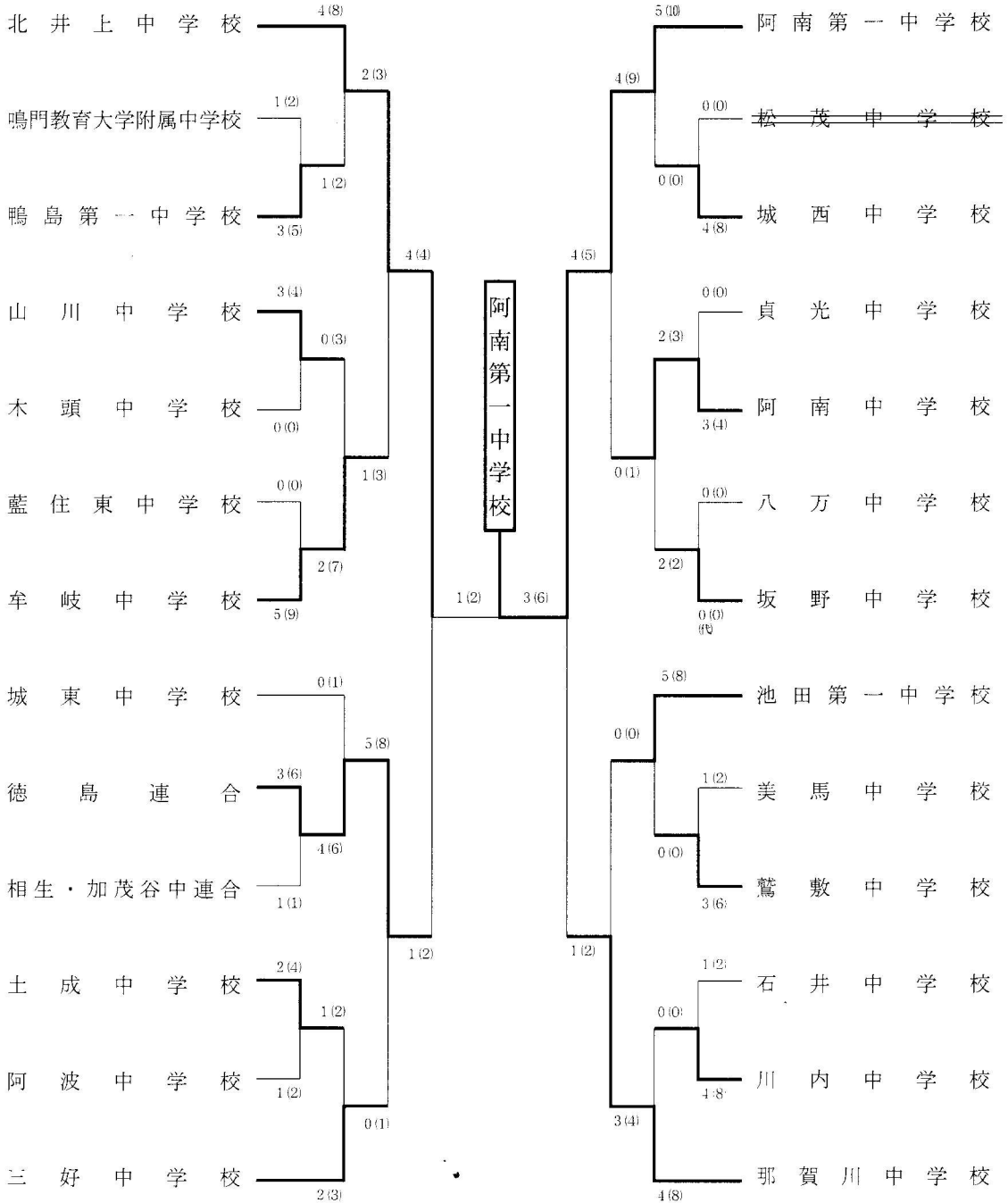
中学校男子(48チーム)

優勝 坂野中学校  
 準優勝 徳島松生中学校  
 第3位 文島中学校  
 第3位 中理中学校  
 第3位 中理中学校



中学校女子(26チーム)

優勝 阿南第一中学校  
 準優勝 北徳那  
 第3位 井上  
 第3位 島川  
 中学校連中  
 中学校校合



## 準決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	上田	住友	岩原	湯浅	松本	
	△	△	△	△	⊗ 一本勝	⊙ $\frac{1}{1}$
鳴門市光武館	宮浦	斎田	山本	宮本	福居	
	△	△	△	△	△	△ $\frac{0}{0}$

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
木頭錬心館	小藪	小野	高石	廣井	福井	
	⊗	⊗		⊗	△	⊙ $\frac{5}{2}$
小松島少剣クラブ	▲		⊕ 一本勝	⊗	△	△ $\frac{2}{1}$
	山川	松本	長谷川	桑野	青木	

## 準決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島文理中	鈴木	岡田	湯浅	原	庄地島	
	⊗	⊕ 一本勝	▲ 一本勝	▲ ⊗	▲ ⊗	⊙ $\frac{7}{4}$
小松島中	⊕		▲	▲		△ $\frac{1}{0}$
	西山	大泉	江口	仁木	正村	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
相生中	藤本	福永	前川	前川航	福川	
		△		⊕ 一本勝	⊗ 一本勝	△ $\frac{2}{2}$
坂野中	⊗		⊕ 一本勝			⊙ $\frac{3}{2}$
	櫻木	田村	平井	岩永	松本	

## 準決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
北井上中	中川	井上	森本	中川	加重	
	⊕ 一本勝	⊕ 一本勝	⊗ 一本勝	⊕ 一本勝		⊙ $\frac{4}{4}$
徳島連合				⊗	⊗	△ $\frac{2}{1}$
	西山	生田	寺西	篠原	磯部	

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
那賀川中	芳田	市瀬	今川和	今川知	壺内	
		⊗				△ $\frac{2}{1}$
阿南第一中	⊗		⊕ 一本勝	⊗ 一本勝	⊕ 一本勝	⊙ $\frac{5}{4}$
	細川	賀上	村田	米田	大西	

### 決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
徳島至誠館	上田	住友	岩原	湯浅	松本	
	X					⊗
木頭錬心館	小薮	小野	高石	廣井	福井	
	X					

### 決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
徳島文理中	鈴木	岡田	湯浅	原	庄地昌
	▲	X			▲
坂野中	一本勝 ①	櫻木	田村	平井	岩永
		X			⊗

### 決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
北井上中	中川	井上	森本	中川	加重
			⊗	⊗ 一本勝	X
阿南第一中	⑤ ②	② ②	③ ③		
	細川	賀上	村田	米田	大西
	X				$\frac{6}{3}$









徳島が香月 コテを決める徳島の松本も  
活躍の場

# 県選抜 4年ぶりのV逃す

**剣道四国四県大会**  
徳島県選抜剣道部は、4年ぶりに四国四県大会で優勝を逃した。香月コテ、松本も活躍の場を演出した。

5月24日

徳島県選抜剣道部は、4年ぶりに四国四県大会で優勝を逃した。香月コテ、松本も活躍の場を演出した。

**たぐい一入の会務**  
徳島県選抜剣道部の会務は、たぐい一入の会務が中心となって行われている。会務は、徳島県選抜剣道部の会務を担っている。会務は、徳島県選抜剣道部の会務を担っている。会務は、徳島県選抜剣道部の会務を担っている。



徳島県選抜剣道部は、4年ぶりに四国四県大会で優勝を逃した。香月コテ、松本も活躍の場を演出した。

5月26日



**6年生の部**  
香月君1位  
2004年度海部郡  
訪犯少年錬成由岐大会



海部郡訪犯少年剣道錬成由岐大会で熱戦を繰り上げた参加者

9日・山形県形と石川洋センター  
【小学生個人】1・2  
5年生の部 17名、6年生の部 15名、7年生の部 12名、8年生の部 10名、9年生の部 8名、10年生の部 6名、11年生の部 4名、12年生の部 2名

【団体】海部郡訪犯少年錬成由岐大会  
徳島県選抜剣道部は、4年ぶりに四国四県大会で優勝を逃した。香月コテ、松本も活躍の場を演出した。

【個人】香月コテ、松本も活躍の場を演出した。





参加者



第4回堀金旗争奪少年剣道大会  
堀金旗争奪少年剣道大会で熱戦を繰り広げる参加者



剣道

年大会(5月23日)・小松島中立体育館  
【団体】①小松島少剣  
夕・岡内、長谷川、松木、紫野、青木、②新野少年教室③徳島市誠館④歳本少年教室  
【個人】小學校1・2年①藤坂真道、那賀川B&G②佐友健人(那賀川B&G)③佐々木南波(全誠館)④敢闘賞(玉田貞子、全誠館、森下陽裕、小松島、瀬川雄也)同、丸岡勇斗、坂野  
▼3年生①高原将平、全誠館、②福田篤二、同  
▼4年生①山田理沙、同、山本大介、光武館、②敢闘賞、福田周平(光武館)、上田雅大(全誠館)、大西司(小松島)、山中光樹(徳島)  
▼4年久保宏結(徳島)②徳島後援会加、全誠館、③上井敦斗、誠武館、④澤田さる友(B&G)⑤住友健人(那賀川G)⑥敢闘賞、安部晋太(明、大野)、大林伸浩(全誠館)、新居航平(小松島)、角尾保孝(徳島)  
▼5年生①山田優大、小松島、②徳田結香、同、③武田和也、同、④生島大空、全誠館、⑤敢闘賞、牧野谷見司(小松島)、中西樹(同)、南谷和希(同)、中西綾華(鴨島)  
▼6年生①真鍋勇輝、坂野、②小栗明彦、新野、③久米直(同)、④山田昂平(歳本)⑤敢闘賞、松崎智佳(小松島)、浜田招弥(徳島)、菊谷眞言(新野)、岡本早代(直心館)

6月2日

徳島文理(男子)那賀川(女子) V

県中学剣道

剣道の第33回徳島県中学校選権大会は12日、鳴門武道館で男子55校、女子30校が出場して団体戦で争った。男子は徳島文理が初優勝、女子是那賀川が2年連続7度目の優勝を飾った。

6月13日

男子 1回戦 山川3-2 府 鷲敷2(本数勝) 2城東 池田2-1木頭、阿南3-0由岐、上六万3-0上板、津田5-0勝浦、入田2-1大吹、鴨島3-0志神、小松島2(本数勝)	2池田1、山城3-1川島、石井2-1日和佐、上那賀2-1八万、阿波2-0高浦、大森4-1吉野、牟岐1(本数勝) 1貞光、加茂名3-0松茂、鳴門3-0美馬、川内3-1土成、2回戦 徳島文理4-0山川、石井3-2上那賀、藍住東1-0市場、江原2(本数勝) 2新野	那賀川4-0鷲敷、阿南4-0池田、上六万2-1津田、相生5-0入田、坂野3-0鴨島、小松島3-1山城、徳島2-1脇町、羽浦2(本数勝) 2北島、阿南2-2阿波、牟岐2-1大森、加茂名1-0鳴門、阿南4-0川内、3回戦 徳島文理5-0石井、藍住東3-1江原、那賀川2-1阿南、相生2-0上六万、坂野3-1小松島、徳島3-2羽浦、牟岐2(本数勝) 2阿南、阿南1-0(代表勝) 0加茂名、準々決勝 徳島文理4-1藍住東、相生3-1那賀川、坂野1-0徳島、阿南1-4(0牟岐)準決勝 徳島文理2-1相生、坂野3-2阿南	○鎌田 1回戦 岡田 1勝、阿南2-1勝浦、阿波3-1津田、川内4-1松茂、鳴門3-1八万、上六万3-2牟岐、石井4-1城西、坂野4-0市場、山川2(本数勝) 2瀬戸、池田1-3(0北島、北井上3-0貞光、美馬1(本数勝) 1城東、鴨島5-0大森、2回戦 那賀川3-0穴吹、阿南2-1阿波、鳴門1-3川内、上六万2-1石井、坂野2-1山川、北井上4-1池田、鴨島2-0美馬、阿南1-3(0土成)準々決勝 那賀川5-0阿南、鳴門1(代表勝) 1上六万、坂野2-0北井上、阿南1-4(1鴨島)準決勝 那賀川5-0鳴門、阿南1-3(0坂野)準決勝	△決勝 那賀川 2-0 阿南 1 横山 大西 壺内 細川 星野 曾根 市瀬 笠井 中野 河井
--	---	--	--	---



# 全国家庭婦人大会県予選

## 県代表チーム決まる

**先鋒** 阿井さん  
**次鋒** 玉田さん  
**中堅** 平野さん

**副将** 坪井さん  
**大将** 竹内さん



剣道

◆第21回全国家庭婦人大会県予選兼第25回県女子大会(6月20日・県立中央武道館)

全大会(8月3日・日本武道館)に出場する県予選の選手を決める予選の結果、先鋒・20代に阿井恵子さん(阿南支部)、次鋒・30代に玉田真理さん(徳島支部)、中堅・同に平野悦子さん(鳴門支部)、副将・40歳以上に坪井

【県女子大会】団体①ミセ又剣友会②青島會③四国入道阿南レディ④個人⑤段以下の部①北井実杏(徳島大)②朝山百合奈(徳島文理大)③橋原摩子(同)④丸岡

竹内さん(徳島支部)、大将(同)に竹内佳代子さん(鳴門支部)が出席することになった。

【全国家庭婦人大会県予選】先鋒の部①阿井恵子(出場1人)②次鋒・中堅の部①玉田真理②平野悦子③丸岡亜寿佳(小松島支部)④副将・大将の部①竹内佳代子②坪井竹子③岩見さゆり(徳島支部)

亜寿佳(小松島支部)▽同三段以上の部①阿井恵子(阿南支部)②藤田早苗(徳島文理大)③山崎恵里子(同)④村山晴美(同)

◆第17回徳島西防犯少年大会(6月26日・徳島西署武道場)

【小学生】①木下裕貴②入田錬成会③山本千尋(歳本少年会)④原麻山香(同)⑤板東武志(中学主)⑥岡田敏平(徳島清風館)⑦原悠介(歳本少年会)⑧坂東剛(入田錬成会)

3位以上が県大会(31日・鳴門武道館)に出場



熱戦を繰り広げる少年剣士たち  
—徳島西署

◆埼玉国体1次予選兼県大会(6月27日・四国セントラル武道場)

【団体】①小松島支部(先鋒編組、中堅中崎、人吉杉本)②徳島支部(佐々木、船城、仁木)③貞光工高A(村上、正木、幸内)

【少年の部】①幸内慎也②貞光工高③村上征史(同)④止木翔太(同)

【成年の部】36歳以下①戸田優樹(徳島県警)②塩田雅人③貞光支部④中崎英雄(海部支部)⑤50歳以下①仁本浩志(徳島工高)②船城明(坂東機工)③佐々木義紀(阿波製紙)④51歳以上①中崎泰宏(海部支部)②乾政博(阿南支部)③杉本輝夫(小松島支部)

【短剣道の部】①船城明②戸田優樹③塩田雅人

【総合】①乾政博②戸田優樹③仁本浩志

7月7日

# 川添(警支)初の栄冠 男子

## 女子は坪井(阿南)が5連覇

剣道の全日本選手権大会の出場権を懸けた2004年度徳島県男女選手権は11日、鳴門武道館に男子27人、女子19人が参加して行われた。男子は川添義仁(警支)が初優勝、女子は坪井さくら(阿南)が5連覇を果たした。

【男子】要法勝(山室)警察支部、山室警察支部、川添(警支)が初優勝、女子は坪井さくら(阿南)が5連覇を果たした。

【女子】要法勝(山室)警察支部、山室警察支部、川添(警支)が初優勝、女子は坪井さくら(阿南)が5連覇を果たした。

得意のメンがさく裂。坪井さくら選手は連覇を成し、初戦をきり、今日は得意なメンがさく裂して、全大会は無敵の臨み、ついに坪井さくら選手が初優勝を挙げた。

【男子】要法勝(山室)警察支部、山室警察支部、川添(警支)が初優勝、女子は坪井さくら(阿南)が5連覇を果たした。

7月12日



植田平太郎(前)杯争奪少年剣道大会小学生高学年の部で敢闘賞を獲得した小松島少剣クラブ



### 剣道

幸・橋本知子 蔵本支部  
表勝ち、2福田道場

◆第36回植田平太郎杯争奪少年大会(6月20日・高松市総合体育館)徳島県関係の記録

【小学生高学年の部】

- 1回戦 小松島少剣クラブ
- 2回戦 松本裕
- 3回戦 松本裕
- 4回戦 松本裕
- 5回戦 松本裕
- 6回戦 松本裕
- 7回戦 松本裕
- 8回戦 松本裕
- 9回戦 松本裕
- 10回戦 松本裕
- 11回戦 松本裕
- 12回戦 松本裕
- 13回戦 松本裕
- 14回戦 松本裕
- 15回戦 松本裕
- 16回戦 松本裕
- 17回戦 松本裕
- 18回戦 松本裕
- 19回戦 松本裕
- 20回戦 松本裕
- 21回戦 松本裕
- 22回戦 松本裕
- 23回戦 松本裕
- 24回戦 松本裕
- 25回戦 松本裕
- 26回戦 松本裕
- 27回戦 松本裕
- 28回戦 松本裕
- 29回戦 松本裕
- 30回戦 松本裕

7月14日

小松島少剣クラブ2代  
表勝ち、2福田道場

▽準々決勝

光龍館 3-1 小松島

伏見 1-1 福内

西岡 2-0 長谷川

森本 1-1 松本

相田 1-1 栗野

安田 1-1 青木

小松島少剣クラブは敢闘賞、ベスト8を獲得。

### 男女3種別で 県勢が出場権

#### 国体四国ブロック選

第59回国民体育大会の四国ブロック予選は18、19の両日、高松市でボウリングと剣道の2種目があった。徳島県勢は、ボウリングで1位通過した成年男子など、男女計3種別で出場権を獲得した。

- 【少年男子】リーグ戦①愛媛3勝②香川2勝③高知1勝④徳島3敗
- 【少年女子】リーグ戦①愛媛3勝②香川2勝③高知1勝④徳島3敗
- 【成年男子】リーグ戦①愛媛3勝②香川2勝③高知1勝④徳島3敗
- 【成年女子】リーグ戦①愛媛3勝②香川2勝③高知1勝④徳島3敗

7月21日





韓国社会人大会



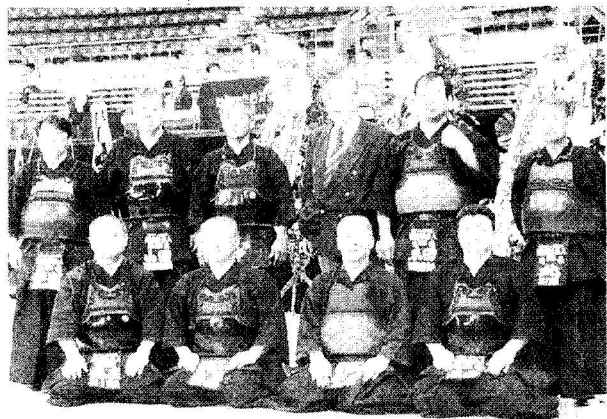
◆第17回韓国社会人大会(7月10、11日・ソウル市オリンピック屋内スタジアム)は徳島県関係の記録。  
国際社会人剣道クラブ日本選手派遣団として、徳島県から松村和宏さん(徳島市、会社社長)が団体50歳以上の部の日本代表Bチームの先鋒。せんぼろし、米倉滋さん(徳島市、養武館館長)が男子個人50歳以上の部などにそれぞれ出場。米倉さんが優勝し、松村さん

米倉さん優勝  
男子個人  
50歳以上

団体50歳以上 松村さん準優勝

んは準優勝する活躍を見せた。  
【団体】50歳以上の部  
決勝  
日本A 1ー1 日本B  
推名 1ーメ 松村  
眞谷 1ーメ 米田  
山田 1ー 伊沢  
▽代表戦  
山田 1ーメ 松村  
【個人】50歳以上の部  
1回戦 米倉滋メメ  
バレンティイ(イタリア) 1  
▽準決勝 米倉3反1  
金(韓国) 1  
▽決勝 米倉

韓国社会人剣道大会の男子個人50歳以上で優勝した米倉滋さん(前列右端)と団体50歳以上で準優勝した松村和宏さん(後列左端)。



メロド 劉(韓国)

◆2004年度全日本少年武道錬成大会(7月24日・日本武道館)は徳島県関係の記録。  
【団体】優良賞(銀メダル)那賀川B&G教室わかあゆ(会先鋒 谷口奨真、次鋒 市瀬薫子、中堅 井上幹大、副将 中村光希、大将 小沼悠通)

8月11日









# 徳島県剣道連盟事務分掌表

平成十七年四月一日現在



## 編集後記

今回の『徳島の剣道第二十一号』は、編集担当者の長期出張と印刷所での作業の遅れが重なり、例年よりも二ヶ月以上遅れた発刊となりました。誠に申し訳ありません。今後はこのようなことがないよう編集委員会として組織改革を進めていくつもりであります。

本連盟の名誉会長で『徳島の剣道』の編集顧問でもありました堀江幸夫先生が、七月五日に御逝去されました。堀江先生からは実に多くの示唆に富む御指導を頂いてまいりました。ここに万般の感謝をしつつ、ご冥福を心よりお祈りします。

堀江先生が亡くなられる数日前に、「今年の『徳島の剣道』はまだできていないのか」との問い合わせが事務局にあったと聞いています。発刊を楽しみにしている人がいることを忘れないでしっかりしてほしいとの叱咤激励をいただきました。堀江先生にこの『徳島の剣道第二十一号』をお見せすることができなかったのは、編集者として痛恨の極みであります。

徳島の剣道

以後、堀江先生の御指導を肝に銘じてがんばってまいります。

## 『徳島の剣道』第二十一号

### 編集委員会

編集顧問

堀江幸夫	木原資裕	三木毅	藤本雅史	手塚十三子	中村稔裕	福多雅英	高尾茂	美馬和義	武岡美智
------	------	-----	------	-------	------	------	-----	------	------

## 『徳島の剣道』第21号

平成17年8月1日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤一美

〒770-0853 徳島市中徳島町2丁目96

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360